

早稲田大学審査学位論文（博士）

## 内田百閒研究

——一九三〇年代から一九五〇年代の作品を中心に——

山本有香

## 目次

目次	2
序論	5
はじめに	5
評価史の検討	6
各章の構成	10
おわりに	14
第一部 ジャンル横断的作品における語りの諸相——一九三〇年代の諸篇——	16
第一章 『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——	17
はじめに	17
一 『百鬼園随筆』の論点	18
二 作品集の構成と「短章二十二篇」	20
三 「貧乏五色揚」——「私」の変装／変奏	22
四 「七草雑炊」——随筆と小説の区別を越えて	25
おわりに	28
第二章 「昇天」論——信仰と福音をめぐって——	32
はじめに	32
一 「昇天」の背景	32
二 「白子」から見た「昇天」読解のかぎ	36
三 「昇天」における回心の過程	39
四 「昇天」の失敗とおれいの神理解	42
おわりに	44
第三章 『居候勿々』論——新聞小説から単行本へ——	48
はじめに	48
一 初出と初刊の比較——小説はどこから始まるか	49
二 連載打ち切りと「作者」の言葉——小説の結末は一つか	52
三 『居候勿々』制作の方針——私小説性の回避	56
おわりに	60
第二部 百間の戦争——一九四〇年代のテーマ性——	63
第四章 「東京日記」論——「東京」を書き留める視角を手がかりとして——	64
はじめに	64

一 先行研究の検討	65
二 〈東京日記〉の特質と「東京日記」の成立	67
三 「東京日記」以前の作品から見た「私」の性質	69
四 百間の執筆活動における「東京日記」諸篇の位置付け	71
おわりに	73
<b>第五章 内田百間の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——</b>	<b>77</b>
はじめに	77
一 台湾旅行の背景	77
二 百間のたどった旅程	78
三 利用路線の性格	80
四 先住民族に会う——「屏東の蕃屋」における「生蕃」	81
五 日本郵船と百間	85
おわりに	87
<b>第六章 「柳検校の小閑」論——背景としての関東大震災——</b>	<b>93</b>
はじめに	93
一 物語全体の素材——池上検校と「女のお弟子」	94
二 女性を教えるということ——長野初と百間	98
三 検校という主人公	102
おわりに	105
<b>第三部 再び語りの方へ——一九五〇年代における執筆再開の周辺——</b>	<b>109</b>
<b>第七章 「新方丈記」論——「東京焼尽」との比較を手がかりとして——</b>	<b>110</b>
はじめに	110
一 「新方丈記」、『東京焼尽』、そして日記	111
二 占領期の執筆再開	112
三 本文の比較（1）空襲とその被害に関する記述の削除と書き換え	114
四 本文の比較（2）八月十五日の周辺をめぐる削除	117
おわりに	119
<b>第八章 「贗作吾輩は猫である」論——会話文の発展と百間の戦争——</b>	<b>123</b>
はじめに	123
一 先行研究の検討	124
二 『漱石物語』における会話文の重視	125
三 一九三〇年代の作品に見る会話の機能	127
四 作中の登場人物と随筆に語られた内容の一致	129

おわりに	132
<b>第九章 『贗作吾輩は猫である』論——上演される言葉への志向——</b>	<b>135</b>
はじめに	135
一 「第三」における引用作品（1）——『吾輩は猫である』と『ファウスト』	136
二 「第三」における引用作品（2）ドイツ文学と日本文芸	138
三 「第三」における歌の機能	141
四 「文章に依らない」語りの試み	143
五 上演される言葉への志向	147
おわりに	150
<b>結論</b>	<b>153</b>
はじめに	153
各章における達成と課題	153
おわりに	160
<b>資料</b>	<b>161</b>
『新方丈記』収録の四篇と『東京焼尽』の異同	162
<b>主要参考文献</b>	<b>208</b>
<b>初出一覧</b>	<b>216</b>

## 序論

はじめに

内田百閒（一八八九―一九七二）は、大正から昭和にかけて活躍した作家である。代表作とされる『冥途』（一九二二年、稲門堂書店）をはじめとした小説は「夢幻的」と称され、また『百鬼園隨筆』（一九三三年、三笠書房）を筆頭に「諧謔的」と評される隨筆でも人気を博してきた。

これらの作品を中心に今日まで幅広い読者をもつ百閒だが、その学術的な研究は必ずしも進んでいるとは言えないのが現状である。こうした状況の背景には、百閒自身が執筆活動の中で作家像を積極的に自己演出していったことと、とりわけ早い時期の先行研究においてそのような作家像を無批判に受け入れた上での議論の構築がなされていたことがあると見られる。詳細は次節で検討するが、ここで概要を述べておきたい。

まず作家本人の自己演出については、主に隨筆として読まれる作品の中で「百鬼園先生」などの登場人物を設定したり、「私」の笑いを誘うような言動を描いたりすることによって、読者に「奇人」の印象を刻みつけていることに読み取れる。周知の通り文学史においては、百閒が特定の同人誌やグループに参加していないことで明確なラベリングがなされず、作品の印象をもとに「孤高」の作家や「奇人」との位置付けが与えられている。しかしそのような評価は後述するように、百閒の執筆戦略の範囲を出たものではない。

たとえば山田桃子は『百鬼園隨筆』をめぐって、百閒自身が「隨筆」と「小説」というジャンルの境界線に挑戦的な姿勢を示していたことを指摘している<sup>1</sup>が、その具体的な表れとは、作中の「私」をすなわち百閒自身と解釈する素朴な「読みのモード」（鈴木登美）の批判であり、ひいては作品中での既発表作品の戦略的な利用であった。言い換えれば「隨筆」的な文章に見える「私」の奇行を作家本人の自画像と考える読者は、こうした「読みのモード」をめぐる戦略のもとで百閒が描き出す作家像のみに依拠しており、百閒の執筆活動を踏まえた作中の語りの意味の考察を放棄しているということになる。

また後述するように、百閒の作品は「幻想小説」と「諧謔的な隨筆」という二項対立のもとで理解されてきた時期が長く、それゆえに個々の篇を長い執筆活動の中にあとづける作業は十分になされてこなかった。近年、複数の論者によって作品の具体的な背景や出典が明らかにされつつあるものの、早い時期の研究においては一篇についてあるテーマを追求する手法がとられることは少なく、数年分の作品をまとめて取り上げ、批評することで、「夢幻的」あるいは「諧謔的」な作品群の輪郭を捉えようとする試みが大勢を占めていた。その結果、作品および作家に対するこうした印象が補強される一方で、そのような二項対立を超えた観点による執筆活動全体の捉え返しは立ち遅れることとなった。

こうした研究状況を踏まえると、今後の百閒研究に必要なことは、従来の二項対立に拠らず、個々の篇を具体的な観点のもとで精読する試みと、半世紀にわたる執筆活動全体をあと

づけるための見通しであると考えられる。そこで本研究ではこれまで具体的に論じられていない作品を積極的に取り上げる。それらについて発表当時の同時代背景を踏まえることで浮かび上がる読みの可能性を探り、百間の執筆活動全体の見取り図を描くことを目的とする。

以上のような問題設定のもと、次節では百間の生涯および執筆活動を概観し、その後これまでの研究状況を把握するために先行研究の検討を行う。

#### 評価史の検討

本節では先行研究の検討を行うことによって、これまでの百間研究における達成と課題を明らかにする。百間がどのように評価されてきたかを確認するために、まずは基本的な評価基準と作家理解の把握として辞典・事典の記述を参照した上で、以降およそ年代順に、媒体および論者の特性も踏まえつつ論考を紹介していく。

#### 《百間の同時代人による評価》

百間は一九二一年一月『新小説』誌上に「冥途」を発表したことで文芸の場に登場した。したがって同作に対する反応が、作家としての百間への最も早い言及といえる。この文壇登場と同時に『読売新聞』誌上では、陸軍士官学校教授内田栄造が実は「冥途」の作者であったという紹介が行われた。

その後は主に百間を知る人々の手で、その「奇人」ぶりを語りつつ作品に人柄の反映を見るという図式で評価がなされた。その中で重要な指摘は、文庫版『昇天』（一九四八年、新潮社）における伊藤整による解説の「幻想的な小説」と「諧謔的な随筆」という二分法である。これはその単純さのゆえに今日では批判の対象となっているが、作品中でなされる自己演出によって「奇人」の「名作家」という作家像が作り出されていた当時においては、比較的分析的な見方をした指摘であったといえる。このほか芥川は百間を高く評価しており、「点心」（『新潮』一九二一年二月）や、自死の直前に書かれた「内田百間氏」（『文芸時報』一九二七年八月四日）が知られる。また、各誌文芸時評における室生犀星の手放しの称賛や三島由紀夫の「東京日記」解説（『日本の文学』34）一九七〇年、中央公論社）など、同時代の作家によってその文章技術に高い評価がなされた。高橋義孝は「気分」としての「フモル」が「百間文学に本質的な関係がある」という指摘を行った（「解説」『昭和文学全集42』一九四九年、角川書店）。百間が晩年に芸術院会員となることを拒んだエピソードは広く知られているが、会員に推される程度にはこの作家が評価を得ていたということがわかる。

#### 《文芸評論の場における百間》

百間に対する文芸評論はとりわけ八〇年代から九〇年代にかけて比較的盛んに行われた。その代表的な論者が川村二郎である。川村は『内田百間論 無意味の涙』（一九八三年、福武書店）において百間の作品を幅広く鑑賞している。本書において川村は作品の示すところの「無意味」さに価値をおいている。これは伊藤整や高橋義孝が早くに述べている「雰囲気」

や語源にさかのぼった「フモル」に該当するものと思われるが、そのためにかえって川村自身の読みにおいて「意味」を読み取ることのできる作品は退けられている。このことは後述する色川武大との対談においても同様であり、川村にとっての内田百閒論とは、確固たる一つの作家像を作り出しながらそれを再生産的になぞっていく営みであることを示している。

またやや早い例として内村剛介「幻想は宿命——妄執の作家たち（10）内田百閒」（『文藝』一九七五年六月）では、『百鬼園日記帖』（一九三五年、三笠書房）を含む初期作品を取り上げて百閒の「異常」性が「資質」によるものであると述べている。ここでは漱石門下の中で百閒と中勘助が近い「資質」をもっているという見方が提出されている点が注目される。

このほか、「内田百閒の復活」（『文学界』一九八五年三月）では川村二郎と色川武大の対談が行われている。ここでは主に「市民性」や「体質の放埒さ」、「数に對するこだわり」等々のキーワードで百閒の人となりや作品から読み取るという作家論的読み込みが展開されている。色川は自身の経験をもとに百閒の作品に「ナルコレプシーの人の気質」を読み取り、川村は「蜻蛉眠る」（初出「相剋記」）のような「私小説に近い形」の作品が百閒の作品の中で「一番つまらなくて、興味の持てない部分」であり、「ユーモアとか諧謔は素質的なものだろうけれども」「妙に真面目になってる」点を批判したり、戦時中の作品について「時局をたいへん苦々しく思ってる」と述べたりすることによって、川村にとっての百閒像を明確に描出している。なお、この対談で川村は「村上春樹さんという若い作家」と百閒が「無意味」という点で類似していると指摘しており、当時百閒が「一種のブームみたい」になっていたという発言とともに、八〇年代の読書状況の一端を示している。

またこの時期を中心とした百閒論の集積が酒井英行（後述）によって行われ、『内田百閒夢と笑い』（一九八六年、有精堂）としてまとめられた。同書では百閒の咫尺に接した同時代人のエッセイから刊行当時の最新の主要論までが収録されている。

現在はフランス文学者の森茂太郎が「百閒漫歩——逢魔が時の文学——」と題して百閒の作品を作家論によって読解し、精神分析的な検討を通じて百閒の「病的」な側面を指摘することによって明らかとなる読みの可能性を断続的に発表している。

このように百閒は在世時から今日に至るまで「特異な」書き手として基本的に評価されている。同時に人間としての百閒の心理状態の「特殊さ」が注目され、「独特な」作家との位置付けが繰り返し補強されてきた。

#### 《文学辞典・事典類》

文学辞典・事典の類における百閒は、基本的に内田道雄によって「幻想的な小説」と「諧謔的な随筆」の書き手として紹介されている。例えば『日本近代文学大事典』（日本近代文学館、小田切進編、一九七七年、講談社）では「奇警な観察眼や吹抜けたユーモア」と「存在自体に発する悲哀感をモチーフとする幻想的小説の系」が「表裏一体」であり、両者は「俳諧精神」によって結びかれていると説明されている。また『明治・大正・昭和作家研究大辞典』（作家研究大辞典編纂会編、一九九二年九月、桜楓社）では「幻想小品の系列と、（中略）随筆集の系列とを並行させつつ独自の文学世界を展開」したと述べられている。内田は『日

本現代文学大事典 人名・事項篇』(三好行雄、竹盛天雄、吉田熙生、浅井清編、一九九四年六月、明治書院)でも内田百間の項を執筆しており、ここでも「幻想的小品の系列と、独特の笑いを醸す随筆文の系列とを並行」させたという見方を示している。これらの比較的影響力の大きい事典の百間の項をいずれも同じ執筆者が担当していることによって、百間の執筆活動の特徴についての「定説」は安定を見ている。

なお、『増補改訂新潮日本文学事典』(新潮社辞典編集部編、一九八八年一月、新潮社)において高橋義孝は、百間を実際に知る立場から詳細な年譜的説明を加える中で、「文学的体験の第一」が「俳諧」にあることを指摘している。その上で「俳諧を通じての文章修行と(中略)心理的諸特性と、徹底的な合理主義と、……すぐれた詩人的アレルギー体質」という複雑な要素の交差により百間を説明しようと試みている。とはいえ代表作に『旅順入城式』と『実説草平記』を挙げ、前者に「虚実皮膚の間に筆を遣る作者の真面目」を、後者に「百鬼園文学の重要な一面、ユーモア」を見ている点からは、やはり前掲のような二系統に分ける見方に立つことが窺われる。

また、児童文学研究の立場からは「意表をつく発想に満ちた「教訓のない」童話集『王様の背中』の書き手として評価されている。こうした「日本近代文学」研究の枠組みが必ずしも捉え切れていない領域にも百間の執筆活動が亘っていることは、今後の研究の方向性を考える上でも重要な視点となると思われる。

さらに近年の特徴的な「事典」としては東雅夫『日本幻想文学事典』(二〇一三年十二月、筑摩書房)があり、ここでは百間作品の「幻想的」な側面を強調しながら、「百間にとって、フィクションとエッセイを隔てる皮膜は、はなはだ薄いものであった」と指摘している点に興味深い。

#### 《学術研究史》

内田百間に対する学術的な研究の歴史は、右に述べてきた評価史の中では必ずしも大きな位置を占めているとはいえない。しかしながら百間を実際に知る人や、同時代の一読者ではないからこそ「客観性」を持った論者による百間評価は、ファン・クリティックの対象とされ勝ちであったこの作家を異なる視点から価値づけるという意味で一定の意義を有した営みであると考えられる。

百間を学術研究の対象とした早い論者には内田道雄がいる。内田は一連の百間論を著し、『内田百間——『冥途』の周辺』(一九九七年、翰林書房)にまとめた。同書は学術書というよりも研究エッセイの側面が強い傾向はあるものの、主に作品論的な立場から百間の作品をそのテキストに即して読み解いた点で重要である。一方でここでは伊藤整以来の「幻想的な小説」と「諧謔的な随筆」の二分法に従って論が進められていた。また作品の内部に向かって読みの精度を上げていくという論者の立場もあいまって、これまでの作家像としての内田百間を批判的に眺め、作家の生きた同時代との関わりを通してその執筆活動を跡付けていくという性質はこの時点では見られなかった。

また、真杉秀樹は『内田百間の世界』(一九九三年、教育出版センター)において、これ



まで取り上げられることの少なかつた作品も射程に収めつつ作品論を試みた。ここでは百間の作品におけるインターテクスチュアリティを指摘していることや、先行研究の見られない「遊就館」論の展開などが重要である。前者は同じテーマの焼き直しが多い百間の作品を関連付けるには必須の視点であり、後者は従来の論者が対象としてこなかった作品にも多くの読みの可能性があることを示した。こうした姿勢は今日の百間研究において一つの前提となっている。

これらの論に続く主な論者は酒井英行である。酒井は内田の内在批評的な性質に対して、資料を調査することで明らかにする読みの可能性を示した。一連の論は『内田百間 〈百鬼〉の愉楽』(二〇〇三年、沖積舎)と『百間 愛・文学の歩み』(二〇〇三年、沖積舎)にまとめられている。また新発見資料をまとめたものに『恋文・恋日記』(一九八九年、福武書店)がある。前二書では、百間の中学時代から法政大学辞職までの作品と、堀野清子との結婚の前後および法政大学辞職後の作品や書簡、日記をそれぞれおおよそ時系列に取り上げ、周辺資料を調査している。これまで評論を含め論者が個々の百間像に対して評価を試みる形式が多く行われていたことから、酒井論は資料調査を行った点で重要である。一方で「幻想的な小説」と「諧謔的な随筆」という読み分けはここでも継承されており、調査資料の重要性に比して議論の新規性は必ずしも大きくなかった。

こうした一九九〇年代から二〇〇〇年代の論に続くのは、作中の「私」と百間を切り離す試みである。こうした見方がようやく百間研究においても浸透した結果、ジャンルを問わない「私」の虚構性や演技性が重要なテーマとして打ち出されることとなった。その代表的な例がレイチェル・ディニット (Rachel DiNitto) と大谷哲の論である。

前者は“Uchida Hyakken: A Critique of Modernity and Militarism in Prewar Japan” (Harvard University Asia Center, 2008, Cambridge) において『百鬼園随筆』を取り上げ、各篇の主人公は意図的に作者・内田百間を読者に想起させる造形がなされていることを指摘している。これは最近の百間におけるジャンル論的意識の所在をめぐる論考につながっていく問題であり、単純に作家の生活上の事実として随筆の内容を受け止める読みとは一線を画す解釈である。一般に随筆に分類される作品群に対する虚構論的な視点からの読解は同書をもって嚆矢とするといっている。

後者は『内田百間論 他者と認識の原画』(二〇一二年、新典社)において、一九二〇年代から一九三〇年代の作品をさまざまな視点で読み解こうと試みている。ただ、その試みは大杉重男が指摘する通り「牛刀をもって鶏を割く」の感が否めないものであり、作品の読みよりも文学理論の披瀝が先行しているくらいはある。とはいえ、同書は従来の論者が無批判に受け入れていた「幻想的な小説」と「諧謔的な随筆」の二分法を採用せずに解釈を試みた点で注目される。とりわけ随筆にカテゴライズされる作品のうち、作家に似ていながらもフィクションとして規定される「私」が登場するものを一連のまとまりとして評価した点は重要である。

近年では手法はさらに多様化し、作品の同時代背景の調査や植民地主義・天皇制からの問

いかけもなされるようになっていく。

たとえば吉川望ははじめ作品論から百間の作品に取り組んでいたが、近年はこれまで百間の同時代人や俳人によって印象批評的にのみ語られてきた「俳味」の淵源を探るべく、学生時代の百間の論文を読み解くなど新たな角度から作品の特色を明らかにしようとしている。作品論としては「内田百間『東京日記』論——日常的怪異空間としての東京」(『阪神近代文学研究』二〇〇八年六月)や「内田百間『白子』論——信仰をめぐる〈内心の反駁〉——」(『日本文芸研究』二〇一七年三月)などがある。近年の論文には「習作期における内田百間の文学意識——「俳諧派文学研究」検討(一)」(『日本文芸研究』二〇二二年三月)があり、作品の内在的な分析を深めている。

また、山田桃子は百間の作品における同時代の新しいメディアとの関係を中心として論文を発表してきた。具体的には映画の登場をしばしば手がかりにしており、「内田百間作品と知覚の変容——「大尉殺し」(一九二七)」(『層——映像と表現』二〇一一年三月)や「知覚の変容と映画——内田百間『旅順入城式』(一九二五)」(『Juncture 超域的日本文化研究』二〇一一年三月)などがある。近年は「戦前期『随筆』の流行と内田百間——「百鬼園随筆」刊行前後の問題を中心に——」(『日本近代文学』二〇一九年十一月)において、百間の随筆を一九二〇年代の随筆流行という背景のもとで再評価する試みも行っている。

このほか、西井弥生子、松原大介などが初期作品について論考を発表している。西井には「『旅順入城式』論——内田百間の虚構意識」(『青山語文』二〇〇八年三月)、「内田百間の『漱石物語』——『吾輩は猫である』は要約可能か——」(『青山語文』二〇二三年三月)などの論文がある。後者ではこれまで漱石全集編集のエピソードから語られることの多かった漱石受容について、百間の著作『漱石物語』を手がかりに新たな観点を提出している。また、松原は「内田百間『山東京伝』における典拠——「京伝」・「小さい人」・「山蟻」をつなぐもの——」(『日本文学』二〇二一年十二月)や「内田百間『短夜』論——典拠と『神秘的な恐怖』を手掛かりに——」(『日本近代文学』二〇二二年五月)などにおいて典拠を明らかにすることを試みている。

以上のような研究状況からは、作品の印象と作家本人が伝える「奇人」の生活風景をもとに長年保持されてきた作家像が更新されつつある様子がうかがわれる。しかし百間を取り上げて論考を発表する研究者は多くなく、とりわけ執筆活動全体の把握を目的とした議論は十分になされてこなかった。そこで本研究は、一九三〇年代から一九五〇年代を主な範囲に、執筆活動の跡づけを目的として各年代に発表された作品の分析を行う。おのおの作品の性格づけに加えて、前後の作品との接続性の様態を明らかにすることによって、百間の執筆活動を評価する試みの第一歩としたい。

## 各章の構成

本研究は序論および結論と九章の論考から構成される。本章の最後に、各章の目的や手法について概要を述べたい。

「序論」では本研究の目的と背景、各章の概要を述べる。本研究の目的は、発表当時の同時代背景を踏まえることで浮かび上がる読みの可能性を探り、百間の執筆活動全体の見取り図を描くことである。その背景には作中における「百鬼園先生」をはじめとした作家の自己演出を無批判に受け止める読みによって作家像が形成されてきたこと、そしてその結果、内田百間という作家が文学史の中に明確に位置付けられないことにより、学術研究が遅れてきた歴史がある。先行研究の検討により以上の傾向を確認した上で、本研究の各章の概要を述べる。

第一部「ジャンル横断的作品における語りの諸相——一九三〇年代の諸篇——」では、一九二〇年代から三〇年代にかけて執筆された作品を取り上げる。ここでは百間の、随筆または小説を書くことおよびそれを発表することならびに読まれることに対する作中での言及を中心に取り上げる。またこうした試みの中でも若干のテーマ性が作品に生まれていることも合わせて見ていく。

第一章『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——では、『百鬼園随筆』の作品集としての性格を、ジャンル論的な観点から明らかにすることを試みる。作品集全体の構成を検討することにより、『冥途』をもって本格的に活動を開始した一九二〇年代から一九三〇年代前半の百間の作品がどのような問題系を背景としているのかを探る。どう作品集が「随筆」の語を冠した作品集でありながら、各篇における「ごっこ遊び」を通じその分類概念の名称について回る「日本文学」的価値判断を相対化しようとしてもいたことを指摘する。これ以降「読みのモード」操作を通じた分類概念の問い返しが十年ほどかけて発展し、随筆と小説を分ける規範意識への批評が試みられていったという見通しを示す。

第二章「昇天」論——信仰と福音をめぐる——では、「昇天」（『中央公論』一九三三年二月）におけるキリスト教の信仰の主題について、物語の背景となった実在のキリスト教会・キリスト者、同様の主題を取り上げた点で先行する「白子」、そして両者を踏まえた上でのテキストの読解を通じて検討を行う。物語の背景については、物語の主な舞台である「耶蘇の病院」は当時結核の専門院であった救世軍杉並療養所をモデルとしているであろうこと、そして「院長さん」も同じくその初代所長である松田三弥を参考とした登場人物と見られることなどから、二〇世紀にプロテスタントの間で提唱された社会的福音の実践としてのキリスト教会やキリスト者の事業が書き込まれていることを指摘する。その上で舞台背景の似通う「白子」を取り上げ、先行研究を踏まえた主題の検討を行ない、神の存在については「白子」も「昇天」も神の恵みとは無関係に見える超自然的な現象が根拠に挙げられていたものの、後者では教義に対する評価が述べられ、キリスト教の福音によって救いをもたらされる可能性にも言及されていることを指摘する。こうした手続きを通じて、「昇天」をキリスト教の信仰の入り口である福音を信じるか否かという選択がどのようになされるかを描いた小説として読むことを試みる。

第三章『居候匆々』論——新聞小説から単行本へ——では、『居候匆々』（一九三七年、

小山書店)を取り上げ、新聞小説としての連載時にはなかった加筆部分に着目することで一篇の特質を探り、それがどのように獲得されていたのか、その背景を明らかにすることを試みる。『居候勿々』は、未完に終わった新聞小説「居候勿々」を、加筆した「作者」の語りで囲い込むことで小説内小説の形で甦らせており、全体としては額縁小説として完結しているという構造をもつ。本章では、まず新聞小説と単行本の本文を比較することによって、小説の冒頭が後者では加筆された「作者の言葉」に移動していること、結末については、前者が物語の途中で打ち切られた状態であるのに対し、後者では「再び作者の言葉」が該当しており、続く「登場人物の其後」が後日譚として付け加えられていることを確認する。次にこうした比較を踏まえ、「作者の言葉」以下の加筆部分が加わることによって、『居候勿々』に新聞小説とはどのように異なる性格が付与されているのかを考察する。以上によって『居候勿々』の成立と性格を具体化し、最後に私小説の流行という同時代背景のもとで、一篇の全体的な性格付けを試みる。

第二部「百間の戦争——一九四〇年代のテーマ性——」では、一九三〇年代後半から一九四〇年代の執筆活動に照明を当ててみることを試みる。とりわけ日本郵船への就職に注目して、時代の風潮を受け止め、さらに再生産することで展開されていく執筆活動の様相を明らかにする。

第四章「東京日記」論——「東京」を書き留める視角を手がかりとして——」では、〈東京日記〉という題名の作品は幕末から現代まで数多く作り出されてきたことと、それらの〈東京日記〉と百間の「東京日記」の差異を確認した上で、題名から浮かび上がる読みの地平を踏まえたテキストの読解を試みる。とりわけ「東京日記」以前の〈東京日記〉群がどのような立場から書かれているのか、すなわち百間の「東京日記」を読むにあたり機能しうる読解の前提とは何なのかを整理し、その前提が作品内容に照らしてどの程度機能しているのかを百間のこれまでの執筆活動の特質を踏まえつつ考察する。こうした題名の分析を通じて「東京日記」の問題点を抽出し、その視点からこれまで先行研究において取り上げられてこなかった章を中心にテキストの読解を行う。さらにそれらのテキストが「東京日記」の内部で完結することなく前後の作品と強力なつながりを有していることを指摘する。以上の手続きを通じて、「東京日記」が百間の執筆活動においてどのように位置づけられるのかを明らかにすることを試みる。

第五章「内田百間の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」では、日本文学報国会への入会を拒んだ数少ない作家の一人として知られる百間が、にもかかわらず戦時下の一九四〇年代前半に旺盛な執筆活動を展開していたことに注目して、その執筆活動の一端を敗戦までを通じて一度も従軍することのなかった百間が、その間も広範囲にわたる雑誌・新聞で活動を継続できた理由の一つは、この作家が一九三九年四月、日本郵船株式会社に嘱託社員として入社したことにある。この日本郵船在職中に百間は、日本が植民地としていた台湾へ赴き、当地の印象を旅行記として発表した。本章では、この旅行を中心とした百間の日

本郵船時代の活動について、その特質を考察する。まず、次節で百間の旅行をめぐる当時の状況を確認し、旅行記の記述をもとに、利用した航路・鉄路や観光した場所を日程順に整理する。次に旅程の特徴と旅行記の性格を検討したうえで、この時期の日本郵船嘱託社員としての他の活動を取り上げて、その特質を明らかにすることを試みる。また、これをもとに台湾旅行記を含む百間の執筆活動が、当時の旅行ブームの背景にある植民地主義の浸透において果たした役割についても一考を加えたい。

第六章「柳検校の小閑」論——背景としての関東大震災——では、百間作品の中で比較的議論の対象となってきた本作において、先行論が表現と内容のいずれかを取り上げ、両者の関わりを論じる方向性を欠いてきたことを踏まえて、小説の内容に注目し、その素材と思われるエピソードが扱われた百間の随筆を検討することで、見えない人を主人公兼語り手とした「柳検校の小閑」の物語背景を遡る。物語の基本的構図を確認した上で、対応する第一のエピソード「千鳥の曲」を紹介する。次にそれを踏まえ、主人公と女性の弟子の関係という物語の中核に具体的な形を与えたと考えられる第二のエピソード「長春香」を取り上げる。最後に、見えない主人公兼語り手による物語言説が、こうした物語内容とどのように関わっているのかを、小説の背景を踏まえて考察する。以上のような手続きによって「柳検校の小閑」を表現と内容の両面からより包括的に捉え直すことを試みる。

第三部「再び語りの方へ——一九五〇年代における執筆再開の周辺——」では、第二部で紹介した戦時下の執筆活動の後、日本の敗戦を経験した百間がどのように執筆を再開していったかを考察する。とりわけ敗戦直後の一九四〇年代後半から一九五〇年代前半の作品に焦点を当てることによって、これまでの書くことをめぐる多様な試行が、敗戦の経験を語ることにいかにかに統合されているかを明らかにする。

第七章「『新方丈記』論——『東京焼尽』との比較を手がかりとして——」では、百間の著作の中でこれまでほとんど取り上げられてこなかった『新方丈記』の再評価を目的として、作家がどのように占領期の検閲に対処したかを『東京焼尽』との異同を確認することで明らかにしていきたい。『新方丈記』は百間にとって一九四五年の日本の敗戦以後初めての著作であり、個人全集の編集を担った平山三郎によって『東京焼尽』と同一期間の日記に基づいていることが明らかにされている作品集である。ここでの検閲への対処とは、単に自己検閲による記録内容の矮小化のみを意味するのではなく、削除変更箇所の前後からこそ本来書かれていた内容を浮かび上がらせようとする試みをも含めている。本章では各書の構成を概観しつつ、『東京焼尽』の照明による『新方丈記』の性格付けを行う。あわせて『東京焼尽』を論じる射程を新たに提出することも目指す。

第八章「『贗作吾輩は猫である』論——会話文の発展と百間の戦争——」では、作品の大半を覆うかと見える会話文に着目し、それが一九三〇年代以来の語りをめぐる試みの文脈においてどのように位置づけられるのかを考察する。「七体百鬼園」を中心とした一九三〇年代における百間の執筆活動とその主題、ならびに一九四五年から「贗猫」執筆当時にかけての随筆類における記述を踏まえたいうで、「贗猫」の会話文の構造と内容の性格づけを試

みる。こうした手続きを通じて、本作が形式においては一九三〇年代以来の「方法としての一人称」の追究で得られた効果から、会話文の手法を引き継いでいると考えられること、また内容においては作家・内田百閒の一九四五年をまたいだ思想的なゆらぎが書き込まれており、前者の構造がこうした物語内容を成り立たせていることを指摘する。その上で「読みモード」の作者側での操作が『贗作吾輩は猫である』にも見られ、テキストを本家『猫』から独立させて再評価する鍵となっているという観点を示す。

第九章「『贗作吾輩は猫である』論——上演される言葉への志向——」では、前章での考察を踏まえてとりわけ全篇が会話文からなる「第三」を取り上げ、本作の手法と百閒の執筆活動における位置付けの一端を明らかにする。前章で検討したように『贗作吾輩は猫である』（『小説新潮』一九四九年一月〜十一月）には会話文が多用され、一九三〇年代以来の一人称語りをめぐる主題を敗戦後という社会情勢の変化のもとで発展させた形式が見られた。同時にこうした会話形式はテキストに演劇的な性格を付与しており、登場人物に異なる思想の代表という立場だけでなく、互いに言葉を交わすことで話頭を次々と転じ場面の進行を行う原動力の役割をも演じさせている。一方で会話の内容にも舞踊の詞章や演劇のせりふのような「上演される言葉」の引用が見られる。本章ではそのような言葉の出典を確認しながら、複数の出典を繙いませることでテキスト自体と典拠の両方に新たな読みの地平を開いていく機能をせりふが担っていることを指摘する。

「結論」では、以上の検討による成果を振り返りながら、今後の研究に向けた課題を述べる。

おわりに

以上、本章では内田百閒研究の現状と、それを踏まえた本研究の立場と目論見を述べた。まず、従来の百閒研究の全体的な傾向から問題提起を行い、本研究の問題意識を示した。具体的には百閒の同時代から現在に至るまでの先行研究・評論をたどり、作家論的読み込みや作品群に対する二分法的な見方が長年続いてきたことを指摘した。その上で近年の学術研究においてこうした立場がようやく見直され、多面的に百閒の作品が読み解かれるようになって示した。

次に本研究の構成を示した。全体は一九三〇年代から一九五〇年代までの作品を幅広く取り上げること意識し、これまでほとんど顧みられなかった作品についても執筆活動の特徴づけると考えられるものを検討の対象としている。また、個別の作品に対する読解だけでなく、百閒が作品執筆以外に作家として行った活動についても取り上げている。これにより、作品ごとの読みの可能性だけでなく時系列的に見た場合の作品の変容の背景をも射程に収めることを目指す。そのため全体を三部構成とし、第一部では一九三〇年代における「語り」へのこだわりと多彩な叙述の手法をテーマに据えた。第二部では一九四〇年代におけるテーマ性の明確さの背景や、実生活における変化が生み出した作品を中心に取り上げる。第三部では敗戦後の百閒がどのように執筆を再開し、再び「語り」へのこだわりを深め

ていったかを検討する。こうした手続きを通じて、百間の一九三〇年代から一九五〇年代の執筆活動をあとづけることが本研究の目標である。

百間についての評論、評言は決して少なくないものの、それらの多くが百間の作品中でなされた自己演出の枠組みを免れているとはいえない。たしかに作家の「特異な資質」をなぞっていくことで明らかになる文芸評論的問題点はあるだろう。しかし作家の戦略のありようから汲み出せる論点もまた数多いと思われる。そのような論点が作家の執筆活動においてどのような位置づけをもつのかを本研究では明らかにしたい。

注

<sup>1</sup> 山田桃子「戦前期「随筆」の流行と内田百間——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」『日本近代文学』、二〇一九年十一月、日本近代文学会。

<sup>2</sup> 大杉重男「大谷哲著『内田百間論——他者と認識の原画』」『日本文学』二〇一二年九月。

第一部 ジャンル横断的作品における語りの諸相

——一九三〇年代の諸篇——



## 第一章 『百鬼園随筆』論

——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——

はじめに

『百鬼園随筆』（一九三三年、三笠書房）は、内田百閒の初期を代表する随筆集である。周知の通り、同作のヒットによって、百閒は一挙に「随筆家」としての名声を確立した。一九二三年一月の『文藝春秋』創刊を一つの契機として、文学者に限らない幅広い書き手による「気軽に読める「雑文」類」が歓迎され、随筆という形式がこれまでになく存在感を強めていた時期のことである<sup>2</sup>。

その波に乗った『百鬼園随筆』に対する文壇の反響から、理詰めの諧謔を平明な文章で読ませる「名文家」という作家イメージが生まれたといってもいい。そのような反響の一つである『百鬼園随筆』（『東京朝日新聞』一九三三年十一月二十四日夕刊）の中で室生犀星は、「どのページにも内田百閒がポカンとした顔付でたゞづんでゐる。ポカンとしてゐるのかと思ふとそのポカンとしてゐる間に何も彼も見えてしまつてゐる」と文章の印象を記述している。

こうした同時代評から窺われるのは、『百鬼園随筆』への評価が内田百閒という作家のイメージを現在まで規定しているということである。しかし、その内容の具体的検討および作品集としての性格づけは、これまで必ずしも十分に行われてはいない。それはおそらく、この作品集が少年時代の回想記である「琥珀」から始まり『旅順入城式』（一九三四年、岩波書店）の諸篇を思わせる「梟林記」で終わるといふ構成からも窺われるように、幅広い性格の作品を収めている点にある。そこには、十年の歳月をかけて完成したという作品集の成立も関わっている。収録された全三十四篇の内、三十二篇の初出が現在までに判明している<sup>3</sup>が、その中で初出が最も早いものは一九二三年（「梟林記」）であり、最も遅いものは作品集刊行の前月（「地獄の門」「二等車」「虎列刺」「晩餐会」）にまで食い込んでいた点で、『百鬼園随筆』の包括的な評価を難しくしていることは否定できない。

以上のような特徴を踏まえた上で、本稿では『百鬼園随筆』の作品集としての性格を、ジャンル論的な観点から明らかにすることを試みる。個別の作品に詳細な検討が求められることはもちろんだが、ここでは作品集全体の構成を検討することにより、『冥途』（一九二二年、稲門堂書店）を経て本格的に活動を開始した一九二〇年代から一九三〇年代前半の百閒の作品がどのような問題系を背景としていたのかを探ってみたい。

そのためにまず次節では、先行研究の検討と本稿における論点の具体化を行う。その上で『百鬼園随筆』が三部構成になっていることを確認し、そこから見える作品集全体の問題意識を射程に収める。それを踏まえて作品およびその配列により各部の特色を順次検討していく。最後に全三部からなる『百鬼園随筆』を再び俯瞰することによって、「随筆」の語を

冠したこの作品集が、全体としてどのようなテーマを扱っているのかを考察する。

以上のような手続きを通して『百鬼園随筆』の全体像を提出することが、本稿の目的である。次節では、先行研究に検討を加えることによって、この作品集を論じるために必要な観点を確認し、論考の入り口として具体的な問題設定を行う。

#### 一 『百鬼園随筆』の論点

冒頭に触れた通り『百鬼園随筆』は、作家の身辺雑記という「随筆」のイメージに完全に当てはまる文章と、必ずしもそうではないものの両方を収めている。従って『百鬼園随筆』の制作とは、こうした趣の異なる文章群を「随筆」のタイトルの下で一つのまとまりへと編み直す作業にほかならないわけだが、その過程を作家の問題意識と結びつけて理解するためには、どのような観点が求められるのだろうか。

一つは、作品集の成立における『旅順入城式』との関係である。『百鬼園随筆』は『旅順入城式』と並行して制作されたため、同時期の作品を二つの作品集に割り振る基準が何であるかは、各作品集の輪郭を捉えるために明らかにすべき点といえる。たとえば酒井英行はその基準が初出の掲載欄にあると述べた上で、『百鬼園随筆』の「債鬼」、「旅順入城式」の「狭筵」・「秋陽炎」をその例外として取り上げ、『百鬼園日記帖』（一九三五年、三笠書房）の記述をもとに当時の百閒の方針を推測している。それは、「人間性の記録を涙をつらねて書く作品」と「社会生活の記録を嘲笑と嘲笑で書く作品」を『百鬼園随筆』収録作として選定し、「心の中の神秘を恐ろしい心で書く作品」は『旅順入城式』に収めたというものである<sup>4</sup>。『百鬼園随筆』と『旅順入城式』の諸篇が並行して発表されたことは事実であり、両者が異なる方向性を示した作品集であることもうなずかれる。しかし、こうした作家本人の言による曖昧な区分が、各作品集の性格づけにどれほど資するのかは疑問である。たとえば『百鬼園随筆』所収の「梟林記」における、子供が毛糸の塊を「殺された人の魂」に見立てて投げさせる結末の場面は、「神秘的」とはいえないだろうか。

一方、『旅順入城式』にも「人間性の記録を涙をつらねて書く作品」や「社会生活の記録を嘲笑と嘲笑で書く作品」が収められている。前者は「私」が少年時代、突然暴力的になつてしまう自分の気持ちを理解できずに涙を流した経験をえがく「春心」であり、後者は「私」の酒癖を皮肉な目で眺める「蘭陵王入陣曲」である。また酒井論文では「秋陽炎」を「白日夢（幻覚）」といった「神秘」を主題とした作品」として位置づけているが、この作品は結末において青年との出会いを「私の間違ひ」として合理化してしまう物語であるため、「神秘を恐ろしい心で書く作品」とはいえない。このように、二つの作品集について酒井論文の提出した区別の方法は必ずしも有効ではない。

さらにこうした見立てには、作品の具体的内容との不一致に加えて、典拠にも問題がある。百閒の編集方針として引用された『日記帖』の記述は、『百鬼園随筆』刊行の十七年前（一九一六年）に書かれている。つまり日記に文学的展望を書きつけた当時の百閒は、また作家として文壇に登場すらしていない。たしかに『日記帖』の記述は、ある程度偽らざる決意表

明である可能性が高いが、四十代を迎えて『百鬼園随筆』を編む百間の脳裏に、二十代後半の文学的希望がなお生きていたといえるだろうか。

酒井論文では、「人間性の記録を涙をつらねて書く作品」と「社会生活の記録を憫笑と嘲笑で書く作品」からなるという結論で『百鬼園随筆』への全体的な見渡しは切り上げられている。その後は「いわゆる随筆ではない、百間独特の小説的随筆」という新たな枠組みを用意して個別作品の成立分析に移っているが、こうした二重基準の適用こそ、『日記帖』を参照した編集方針の推測が、「いわゆる随筆」と「百間独特の小説的随筆」の落差を埋めるには不十分であったことを物語っている。

つまりこのような観点による分析では、二つの枠組みの正当性を裏付ける個別作品の検討が不足しているだけでなく、両者の関係も不問に付されているため、『百鬼園随筆』の全体像は依然として見えてこない。『百鬼園随筆』の全体的な把握のためにはむしろ、そのような一見して同一の平面を見出せない性質の作品群が、「随筆」の名称のもとに括られているという点に注目すべきなのではないだろうか。

ところで先ほど触れたように、『百鬼園随筆』の諸篇には、随筆という分類にこんにち漠然とではあるが規定されている要件からの逸脱が少なくない。このジャンル名に関わる混乱については、鈴木貞美が指摘するように明治期の「日本文学史」制作事業の中で前近代の日記・考証等、原則として非虚構的とされる書物のグループと近代の身辺雑記類を結びつけたことと、素材の即生活性と事実性を重視した池田亀鑑により「自照の文学」というカテゴリが案出されたことが影を落としている<sup>5)</sup>。

鈴木によれば「自照の文学」案出は、心境小説を含む私小説の盛行を背景としていた。虚構物語の創作ではなく実体験の文章化を評価したこの取り組みは、たしかに前近代から近代にわたる一人称作品の再発見だったといえよう。しかしそれは同時に、「原則的に」非虚構的であるという枠組みの外部にはみ出した「例外部分」に何が書き込まれているのかを覆い隠してしまっただけではないだろうか。

いわゆる私小説の流行がジャンルの境界変動状況下で始まったことから容易に推測されるように、隣接する分類概念である随筆においても当時、小説への接近が容認され始めていた。下位概念としてのアフオリズムはひとまず措くとしても、紀行文や身辺雑記が基本的に前提としてきた内容の事実性は、随筆の必須要件から外れつつあったのである。

たとえばこのころ相馬御風は、随筆とは特定の形式をもたず「誰でも書いてある文章の中に、おのづから見出される」ものだという見解を示している。御風は書簡と日記を重視してはいるが、その理由に挙げられるのは作家の実生活を伝える内容ではなく、読者を「冥想の世界」や「思索の道程」に誘う文章表現である。やや遅れて室生犀星も「小説以外の文章」を「凡て随筆であり随筆的な文章である」<sup>7)</sup>としつつ、「小説家の随筆がどうかすると甚だ小説的であるといふことは、争へない事実なのだ」と両者の区別が難しいことを認めている。

また詳述は避けるが、萩原朔太郎は随筆を「広い意味の「散文詩」と理解していたという経験を二人に先駆けて披露している<sup>8)</sup>。このように『百鬼園随筆』刊行当時、随筆という

分類概念をめぐってはその小説ないし散文詩への接近が一つのトピックとなっていた。

幅広い性格の文章群を収める『百鬼園随筆』を包括的に理解するためには、こうした随筆の分類概念をめぐると同時代状況を踏まえた議論が必要だろう。このため本稿では、以下の二つの問題設定によって『百鬼園随筆』の特質を明らかにしていく。

第一の問題設定は、『百鬼園随筆』とはどのような構成の作品集なのかという点である。これは以下で見られるように、小説と随筆の偏差というジャンル論的な議論に関わる。『百鬼園随筆』の構成の特徴は、全体を三分割してそれぞれの集合に名前を付けている点にある。その三つのパートについて、それぞれが文芸ジャンルとしてはどのような性格をもったまともまりなものを作品の特徴から明らかにした上で、どのように関わり合っているのかを考察する。これにより、作品集の構成に即して全体を俯瞰する視点の有効性を確認し、それに基づいた『百鬼園随筆』の全体像の提出を図る。

第二の問題設定は、作品集の中で繰り返される「随筆」への言及が、具体的に何を問題視しているのかということである。第一の問題設定にもとづく見取り図で十全に位置づけることのできないいくつかの作品を個別的に取り上げ、そこでの随筆という枠組みへの言及に注目する。やや先回りして述べれば、この第二の問題設定では随筆における虚構性の問題を扱うことになる。第一の問題設定が小説と随筆を分ける弁別意識への『百鬼園随筆』の立場を探ることを目指しているのに対し、ここでは作品集の題名にも含まれている随筆という分類概念についてなされる自己言及が、具体的にどのような問題意識に発しているのかを明らかにすることを試みる。

このような二つの問題設定によって、以下では『百鬼園随筆』の特質を考察することにした。まずは第一の問題について、作品集全体の構成と個別作品の本文を検討していく。

## 二 作品集の構成と「短章二十二篇」

前述の通り『百鬼園随筆』では、その目次において収録作品全三十四篇を三つに分割し、それぞれのまとまりに名前を与えている。三つのまとまりとは、作家と同一視される「私」の周辺雑記を中心とした「短章二十二篇」、「百鬼園先生」や「青地豊二郎」ら、第一部の「私」つまり署名者である作家と性格が部分的に重なるが、名前の異なる語り手による「貧乏五色揚」、そしてこれら二つと部分的に性格を共有する「七草雑炊」（掲載順）である。

各パートの性格づけは以下で順次行うが、こうした概観によっても、最初に周辺雑記という一般的な分類概念に従い、次いでそのような作家⇨作者⇨語り手の読解モードを否定して「自照」の変造に取り組み、最後に両者ともを作品集のタイトル『百鬼園随筆』のもとに受け止めることで、随筆概念の拡張を通じた相対化を図っていることが窺われるだろう。

従ってあらかじめ要約すれば、この作品集でなされているのは「随筆」を語りの人称や内容による制約から解放した上で、より広い「小説以外」——もちろんそこには私小説への接近も認められるわけだが——の枠組みとして再編成する試みであり、日比嘉高の述べる「自己表象作品」<sup>10</sup>の一角を占めるような文章形式の模索といえる。随筆という分類概念に対

する固定的な見方へのこうした意見表明が作品集全体でどのように可視化されているのかを、以下三つの節にわたって作品の内容および配列に見ていく。

なお、書物の形式としてはこれら三つのパートは、それぞれの始点が各タイトルを記した中扉で区切られている。各部の作品数ではとくに「短章二十二篇」が突出しているが、一篇ごとの長さとのバランスから、いずれのまとまりも百ページ前後（一九三四年刊の初版による）で均されており、作品群の三分割は同時に書物としては三分分であるといっている。「随筆」という分類概念に対して更新を試みる三つのまとまりの間に、ページ数の多寡で示される均衡が保たれてもいることは注目される。

というのも、続く『続百鬼園随筆』（一九三四年、三笠書房）が同様に三分割の構成によりながら各部のページ数に不均衡が生じ、次の『無絃琴』（一九三四年、中央公論社）以降ではこうした部立てそのものが消滅するという変遷を考えた場合、『百鬼園随筆』は目立つて均整の取れた構成をもつといえるからである。つまりこうしたハード・ソフト両面における三分分は、「随筆らしいもの」とその否定、そしてそれらを統合して提案する止揚の段階という弁証法的手続きを文字どおり可視化する機能を果たしている。第二部までを「随筆らしい／らしくない」という棲み分けの意識がどのようなものを具体化するための「腑分け」に費やす手法は、ページをめくって読み進めていく読者に問題提起の過程を了解させ、随筆という分類概念のありかたに目を向けさせる工夫だといえよう。

こうした『百鬼園随筆』の構成上の特徴を確認した上で、次に各部の特徴を作品の本文を追うことで明らかにしていきたい。その入口は「短章二十二篇」である。この第一部は、「琥珀」から「明石の漱石先生」までの作品二十二篇からなる。このうち「百鬼園先生幻想録」（後述）を除く二十一篇は、すべて「私」によって語られる。一言でいえば「短章二十二篇」は、回想録と身辺雑記のパートである。

たとえば「見送り」では「漱石先生のお子さんの純一君が、欧羅巴に発つたので、見送りに出かけた」経験が述べられている。また「明石の漱石先生」には「明治四十四年の夏、私は暑中休暇で郷里の岡山に帰って居りました」とあり、ここでの「私」が岡山出身で、早稲田南町の漱石宅に出入りしていたいわゆる門下生の一人でもあったことが知られる。

一方「私」の出ている学校で、学生の羅馬飛行を実施した時、私は飛行機の会長なので、各国の大使館や公使館に交渉する用事があった」（「風呂敷包」）という記述からは、これが当時学生の飛行機操縦として話題となった「青年日本号」の日本―ヨーロッパ間飛行を成功させた法政大学航空研究会の活動を指していることもわかる。

こうした「私」の提供する情報は、『百鬼園随筆』以前に各種紙誌で「内田百閒」なる書き手の「随筆」として発表されているだけでなく、記者や知人の文学者などによって報じられた内容とも符合する。こうした特徴は、一人称の身辺雑記という随筆の定式に見事に合致する。

このように、「短章二十二篇」の特徴は回想録・身辺雑記といった「自照の文学」式の随筆概念に従順であることだといえる。従ってこの段階では、『百鬼園随筆』という作品集の

名前は、近松秋江『秋江随筆』（一九二三年、金港堂）や谷崎潤一郎『倚松庵随筆』（一九三二年、創元社）などの場合と同様に、作品内で作家⇨語り手（私）が実体験をありのままに語っているという読みのガイドライン⇨それをここでは「随筆モード」と呼んでおきたい——を産出する既存の随筆概念を補強する枠組みにとどまることになる。

「短章二十二篇」は、文章の妙といわれる技巧と漱石に関する記述を除いては、取り立てて感動的な場面があるわけでも強烈な登場人物が目を引きわけでもなく、いうまでもないことだが随筆という準坳粹への言及も見られない。従って「短章二十二篇」は、ジャンル論的には『百鬼園随筆』の中で最も面白みに欠けるパートでもあるわけだが、それは第二部以降の存在を前提とした戦略として捉えるべき特徴と考えられる。というのも、前述の通り第一部と第二部は、徹底して「随筆らしさ」の肯定と否定に費やされる。言い換えれば、「短章二十二篇」の語り手の「随筆モード」へのこだわりは、第二部で否定されることを期した姿勢であるということになる。

この一連の「随筆らしさ」の肯定と否定を読者側から見れば、それは随筆の読みにおける事実性の前提を破壊される過程にほかならない。つまり「短章二十二篇」は、続く「貧乏五色揚」で段階的に現実との対応が失われ、「七草雑炊」ではさらに荒唐無稽なキャラクターに置き換えられていく著者・内田百間の像を、やがて相対化されることを一つの目的として組み立てるパートであるといえる。

従って、「短章二十二篇」が巻頭で「随筆モード」の産出に徹している理由は、第二部のさまざまな登場人物が著者の自己戯画化であることを読者に理解させるためであり、「読者受け」を確実にするためであると考えられる。百間の同時代人でも研究者でもない読者が、げんに「貧乏五色揚」の諸篇に笑いを誘われるという状況は、「短章二十二篇」の役割を如実に示しているといえるだろう。

このように、「短章二十二篇」は回想録と身边雑記のパートだが、それは「随筆モード」が第二部以降で変造されていくことを念頭に置いた、作家イメージの提出を主目的としている。すなわちこうした回想録の集まりから読み始めることで、以降で述べるように、作品集読了までに題名の「随筆」という語の意味が変容していくという読書体験が可能になるのである。その先鞭をつけるためにも、「短章二十二篇」は第一部にふさわしいといえよう。

### 三 「貧乏五色揚」——「私」の変装／変奏

次の「貧乏五色揚」は、「大人片伝」、「無恒債者無恒心」、「百鬼園新装」、「地獄の門」、「債鬼」（収録順）の五篇からなる。いずれも先ほどの「二十二篇」より長尺で、語り手も「債鬼」を除き「私」や「小生」という一人称ではあるものの、作品集の著者との単純な同一視を妨げるかのようにそれぞれが名前をもっている。ここでは各作品について、語り手と著者がどのように対応付けられているのかに注目して検討することにした。

まず、「大人片伝」、「無恒債者無恒心」および「百鬼園新装」の主人公は「鳳生大学」に勤務する百鬼園である。もちろん作品集の題名が『百鬼園随筆』である以上この主人公は、

いきおい戯画化された作者と見られることになる。しかし一方で、作中に登場する「森田草平」、「堺枯川」、「出隆」はいずれも実在する人物の名前を名乗っている。こうした現実となかば対応させた世界が展開するこれら三篇によって、第二部は第一部と明らかに異なるパートとして読者の前に現れる。

このようにこれら三篇においては、主人公兼語り手<sup>ユー</sup>が第一部「短章二十二篇」とは対照的に、「随筆モード」を部分的に攪乱して見せている。ここでの語り手は「短章二十二篇」において作家<sup>II</sup>作者<sup>II</sup>語り手の読解を産出していた「私」とは異なり、随筆では通常名指されないか、署名者と一致するという名前への暗黙のルールを反語的に前景化し否定しようとする存在である。言い換えれば百鬼園とは、随筆の語り手であると同時に虚構内存在であろうとする主人公だといえる。こうした試みは、メディア的な枠組みが強固に規定する「随筆モード」において、単純に等号で結ばれがちな語り手(私)／作家／作者の関係を見直そうとする、一人称語りとジャンルの問題系の交差点を示しているように。

語り手がこうした特色をもつ一方で、物語の内容にも「随筆モード」をめぐる問題意識が見え隠れする。たとえば二篇の内「大人片伝」は、森田草平「のんびりした話」(『中央公論』一九三二年十一月)への応答として「続のんびりした話」(同十二月)の題名で発表されたという経緯をもつが、作中ではそれを踏まえた百鬼園と「森田草平」との会話が展開する。

「何を書くつて、自分の書かれた事を後から弁解しても始まらないし、第一、一度雑誌や新聞で公表せられた事は、実相と違つてゐるも、ゐないもありませんや」

「さうだよ。あれでいいんだよ」

「よくはないけれど、まあ貧乏話なんかは構はないとしても、僕が漱石先生の Panama 帽を貰つたと云ふのは本当ですか」

「本当だらう」

「さうか知ら。しかし漱石先生の帽子が僕の頭に這入るわけがないと思ふんだけれど」

「そりや君、洗濯屋で鉢をひろげさして被つたと、ちゃんと中央公論に書いてあるぢやないか」

「書いてあるのは、大人<sup>あな</sup>が好い加減な事を書いて、それが雑誌に出たのを読んだら、今度は御自分の方でさうか知らと思つてるだけです。洗濯屋で大きくなるものなら、昔から僕は帽子の苦労しやしない」

これはもちろん、「大人片伝」が森田草平「のんびりした話」への反撃であることを当の作品内で示しているという楽屋落ちである。こうした場面からは、百鬼園という「変名」が、いわゆる初期の私小説のような内容の事実性如何への釈明や作家の保身ないし周囲への配慮とは無関係であることがはつきりとわかる。むしろ「一度雑誌や新聞で公表せられた事は、実相と違つてゐるも、ゐないもありませんや」という百鬼園の言葉は、「書かれた事」と「実相」の間にある懸隔に目を向けようとしなない、「素直な」随筆の読者に向けられたものでは

なかっただろうか。

続く「地獄の門」の主人公兼語り手は、「青地」という名前の「官立学校の教授」である。これもやはり借金をめぐる物語であり、「三百円という金を、観念として所有することになった」青地がここまでに見た百鬼園と酷似する貨幣観と職業の持ち主であることは見逃しようもない。しかし、ここまで作家の本名とも筆名ともかけ離れた名前の主人公は、前三篇のような戯画的キャラクターの創出による「随筆モード」の否定を越えて、暗い主調の筋書きとともに私小説風の陰惨な世界観を引き出している。

なお、この主人公・青地が、百閒としては私小説的色合いの濃い「山高帽子」（『中央公論』一九二九年六月、のち『旅順入城式』収録）にも登場している。この点を踏まえても、「地獄の門」は『百鬼園随筆』の中で私小説への接近を最もよく示した作品であると考えられる。物語が暗い色調で進むばかりでなく、語り手兼主人公が、一見して著者とのつながりが見出せない名前と、一方では当時の知人が身辺雑記の素材としてたびたび取り上げていたことで広く知られていた、百閒の経済観念（の欠落）と明確に一致する思考を持ち合わせているからである。

最後の「債鬼」は同じく三人称だが、より徹底して焦点の移動が少なく、作家と同一視されうる人物への感情移入は全くない。この作品では、はじめから踏み倒すつもりで高利貸を訪れる技師——「古びたモーニングコート」を著て、青膨れのした大きな顔に金縁眼鏡をかけた男——が、「勤め先の役所もいいし、俸給額も思つたよりは多かつた上に、別に兼務で学校にも出ている」という特徴から読み取れるように、実際の属性から若干変更されているものの、作家に重ね合わせられる登場人物といえる。しかしすでにこの段階における作中人物と著者との対応関係は私小説的でさえなく、作家の顔は物語世界から遠ざかりつつある。

このように、五つの作品からなる第二部「貧乏五色揚」は、登場人物の名前や「二十二篇」の内容をベースに、作家を透き写しにした架空の主人公により「随筆モード」を否定するところから始まって、最後には「随筆」を冠した作品集に属していながら、作中に著者と対応する人物がほぼ登場しない小説の提示に至っている。従って、この第二部は戯画化された身辺雑記からより虚構性の高い物語へという配列になっており、見方を変えれば作家の実体験が作中でどの程度作り変えられて使用されるかの階調を示したものであるといえよう。つまりこの第二部が否定しているものとは、「随筆モード」以上に、随筆と小説を事実性の点で読み分ける・書き分けるといふ分類概念のあり方そのものではないだろうか。こうした批評性を「随筆集」に付与している理由については後ほど考察するとして、ここでは第二部「貧乏五色揚」がメディア的に規定される随筆の概念を乗り越えようとしているといふことを確認しておきたい。

このような第二部「貧乏五色揚」の特質を端的に表せば、随筆概念の急進化ということになるだろう。この動きは、次の「七草雑炊」に至って「二十二篇」の作品群とともに改めて主題化され、一つの結論を見る。それがどのようなものかを、次に第三部「七草雑炊」を検討することで明らかにしていきたい。



#### 四 「七草雑炊」——随筆と小説の区別を越えて

最後の「七草雑炊」は「フロックコート」、「素琴先生」、「蜻蛉玉」、「間抜けの實在に関する文献」、「百鬼園先生言行録」、「百鬼園先生言行余録」、「梟林記」（収録順）の七篇で構成される。この第三部はまさに「雑炊」であり、一見ひどく混沌としたパートである。それは「大正五年十二月八日の夜」に看病のため漱石宅に泊まり込んでいたと語りだされる「フロックコート」と、「私と云ふのは、文章上の私です。筆者自身の事ではありません」という「蜻蛉玉」の二篇の冒頭を並べて見れば明らかだろう。前者は第一部に配せられても不自然ではない回想録である。それに対し、後者は第二部前半に見られたような主人公を設定する背景について、「随筆モード」を否定する形で言及している。このようないわば「雑」部である第三部に対しては、どのような性格づけが可能なのだろうか。再び各作品の特徴を整理することで検討していく。

まず「フロックコート」は、軍士官養成機関での教師時代周辺をめぐる「私」の回想録である。百閒は一九一六年に陸軍教授の職に就き、一九一八年からは海軍機関学校嘱託としても教鞭を執った。「私」の一人称で進行するここでの語り口は、教師時代を振り返る第一部の諸篇と酷似している。実際に、「フロックコート」の語り手兼主人公の「私」についてレイチェル・ディニット (Rachel DiNitto) は、読者が内田百閒その人と解釈するよう造形されていることを指摘している<sup>12)</sup>。むしろその要因は「二十二篇」にあるうが、こうした記述が第一部ではなく第三部に現れることの意味は、作品に虚構要素を積極的に取り込んでいた「五色揚」からの揺り戻しにあるといえよう。続く「素琴先生」も同様で、冒頭における「明治四十年年」という時間設定から、以下の内容を作家の少年時代の回想として読ませる「随筆モード」に回帰して見せる作品だといえる。

ところがその次の「蜻蛉玉」に至って状況は一変してしまふ。前掲の通り語り手が「私と云ふのは、文章上の私です。筆者自身の事ではありません」と主張するからである。この「私」は「物の曲がつている事」が嫌いなだけでなく「あらゆる物の裏表が揃はなければいけない」という。そのこだわりは最終的に、日本銀行に押し入り金庫内の紙幣の向きをそろえる空想へとつながる。こうした「私」は、荒唐無稽な空想に走る過剰さの点で明らかに「五色揚」で見た百鬼園や青地に通じる。

一方「文章上の」という但し書きに注目すれば、作家と物語内容のつながりが断ち切れた「債鬼」との接点も見出せる。つまり「文章上の私」とは、「一度雑誌や新聞で公表せられた事は、実相と違つてゐるも、あなにもありませんや」という「大人片伝」の記述と、現実の指示対象をもたない作品も随筆と呼ぶという「債鬼」の提案を結びつけているのである。このように「文章上の私」とは、メディア的に構築された随筆概念を相対化するための表現だと考えられる。

こうした試みを当時の文芸思潮に関連付けてみると、たとえば宇野浩二や牧野信一の小説における自己韜晦が浮かび上がってくるが、分類概念の問い返しとしてより近いのは私小説論争の問題意識だろう。論争の発端が『百鬼園随筆』所収の判明している限りでは最も

古い「梟林記」（後述）の初出に重なる点でも、一九二〇年代のモダニズム作家間の私小説をめぐる言説は『百鬼園隨筆』の成立と並走している。両者の対象とする領域はそれぞれ異なるわけだが、ともに分類概念の保守あるいは刷新を念頭に置いたものである。

私小説論争の論点は、作家の実生活を書く一人称小説が芸術の一分野として確固たる地位を占めることができるのかということにあった。言い換えれば擁護派と排斥派の間で、「私」が小説の芸術的地位に変更を加えようという前提は一致していたわけである。論者の立場によって一人称小説の文学的ヒエラルキーに占める階層の位置は逆転するとしても、一連のやり通りは、分類概念の細分化を通じて芸術としての小説の価値基準を明確化することに重点をおいていた。

こうした時代背景のもとで当時の私小説作家が直面した問題こそ、随筆との差別化ではなかっただろうか。たとえば宇野浩二は実作の中で「私」と書いたらその小説の署名人を指すことになるのである、といふ不思議な現象<sup>13</sup>に触れて見せているが、その「不思議」さは、小説の読みに「随筆モード」が適用されることでもたらされるのである。鈴木登美が私小説を「読みのモード」として定義づけた一方、随筆との区別には消極的であった<sup>14</sup>理由もおそらくここにある。一人称小説と随筆を分ける根拠は明確でないにもかかわらず、近代文学の主役に小説を据える限り、「日本文学」制作事業において前近代の諸作品と結びつけられた随筆は、その下に置かれることになる。つまり「随筆モード」に依拠する小説は、それが芸術としての文学において随筆同様のいわば「二級市民」となる可能性に常にさらされていたわけである。

これに対して「文章上の私」とは、「随筆モード」という一種の「読みのモード」を読者ではなく作家に帰属させることで、こうした「低い」随筆という分類概念の妥当性を問うものといえる。私小説の書き手が「不思議な現象」を受け入れた上で読者との「綱引き」（安藤宏）に取り組む<sup>15</sup>一方、「蜻蛉玉」ではあらかじめ「文章上の私」を設定することで「随筆モード」の適用を防いでいる。

続く「間抜けの實在に関する文献」も、この問い返しの流れにある。これは第二部に登場した青地を再び主人公とした物語である。冒頭の一部を左に掲げる。

電話がちりと切れてしまった。何を云つてゐるんだか、ちつとも解らない。どうせ瀬川さんの事だから、とは思つても、あんまり馬鹿馬鹿しくて、少少癪に触つて来た。心配で堪らないから、今朝も瀬川さんの役所宛に速達を出しておいたんだ。その手紙を読んで、電話を拝見したなんてうろたへた事を云つてるんだが、いい年をして、少しは落ちついたがいい。

「間抜けの實在に関する文献」の特徴は、この部分に明確に表れている。特徴的なのは、「私」を主語とせず心内語を直接話法の形式で提示していることである。この作品では、全篇にわたって「私はくした」という『百鬼園隨筆』におけるこれまでの文体が切り詰められている。そして「癪に触つて来た」・「速達を出しておいたんだ」・「少しは落ちついたがいい」

のように、過去の回想としてではなく現在体験しつつあることとして各場面が示され、なおかつ状況の描写よりは感想や評価などの叙述に比重が置かれている。

こうした語りの特徴は、内容面で私小説的といえる「地獄の門」(第二部)と対をなす、随筆概念の拡張・小説との接続であると考えられる。「私」という主語を可能な限り省略し、心内語を中心に据えて進めていく手法は、実体験を後から回想して書くという随筆の原則のもとでは使用できない。げんに第一部「短章二十二篇」では「私はくした」型の文が圧倒的に多く、冗長さを緩和するために「くのである」「くはない」などの文末表現がまれに挿入される程度である。

むろん私小説を含む小説でも後置的語りはメインであることが多いが、虚構物語における語りの時間操作は身辺雑記のそれよりもはるかに自由だといえる。言い換えれば、「間抜けの實在に関する文献」は身辺雑記的な文体をできるだけ避けることによって、随筆と一人称使用の切り離し、そして随筆概念の拡張を、「随筆」の語を冠した作品集の中的一篇として試みた作品であるということになる。

次の「百鬼園先生言行録」および「百鬼園先生言行余録」は「百鬼園新装」と同じく「百鬼園先生もの」で、三人称語りであることに加えて会話場面が多いのが特徴である。地の文が中心となる身辺雑記に対し、これら二篇では百鬼園の菊山勾当との会話や、猿とのテレパシーめいた意思疎通、結婚披露宴でのスピーチなどが省略なく引用される。百鬼園の再登場もあり、第二部の「百鬼園新装」同様に諧謔小説の色合いが濃い。

こうした作品が巻末近くに配置されていることには、「文章上の私」を経てあらためて百鬼園というキャラクターを作品集の中に位置づける意味があると考えられる。すなわち作品集の題名にも含まれる「百鬼園」が単なる戯画化された作家ではなく、同じく題名の一部である「随筆」を問い直す虚構内存在であることが、第三部におけるこの二篇の配置を通して確認されるのである。

最後の「梟林記」は、『女性』創作欄(一九二三年四月)という初出からも窺われる通り第三部の中で通りわけ「小説らしい」作品である。作家の自己戯画化はなく、以下に述べるように象徴・暗示といった小説の技法が随所に見られるため単なる身辺雑記とも一線を画している。「梟林記」の内容自体は片上伸の実弟・竹内仁の引き起こした事件を隣人の目から眺めた物語であり、その意味では一種の実録小説である。そのことは「十一月十日」の日付と、「養父母となる筈だったこの平和な老夫婦を殺害して、その場に自殺した大学生」との要約的説明によって当時の読者にはただちに了解されたと思われる。語り手兼主人公の「私」については「毎週横須賀の学校に行く」という記述から、作家との同一視が可能になっている。

こうした現実世界とのつながりが明らかな作品が、どのようにして第三部において「小説」としての位置を占めているのだろうか。その理由を結末部分から考えてみたい。

ひる前、私は二階に上がった。美しい日が庭一面に照り輝いてみた。隣りの二階には、

雨戸と雨戸との間が細く開けてあった。その隙間から見える内側は暗かった。

ひる過ぎに、日のあたつてゐる茶の間の縁側で、小学校から帰った女の子が、大きな鍔を持つて、毛糸の切れ端の様なものを頻りに摘み剪つてゐた。そうして、ふはふはした、毛むくじやらの球の様なものを、幾つも拵へてゐた。

「何だい」と私がきいて見た。

「これは殺された人の魂よ」と彼女が云つた。そうしてその中の一つを手にとつて、ふはりと投げて見せた。

ここには、事件の翌日に「私」が早くも日常を回復しつつある様子が語られている。文体面では前述の「間抜けの實在に関する文献」とは対照的に「くした」型が多用されるが、事件をめぐる象徴的・暗示的な場面展開によって、身辺雑記への逆行は避けられている。たとえば雨戸の暗い隙間は、家族を殺し自殺した青年の心理の暗喩といえる。また子供が軽い毛糸の塊を「殺された人の魂」に見立てて投げて見せる末尾の一文には、偶然性に操られる人の生死が露骨なまでに重ね合わせられている。このように多義性をちりばめることで、「梟林記」は第三部の中で通りわけ虚構の物語としての「小説らしさ」を獲得していると考えられる。

従つて第三部における「梟林記」の位置づけとは、身辺雑記を経て「文章上の私」が随筆における虚構の介在を肯定し、小説へ接近していくという階調的配列の終着点であるといふことになる。さらに『百鬼園随筆』の締めくくりでもあることから、巻頭の回想録「琥珀」とも呼応して、随筆の射程を広げ小説との垣根を取り払うという作品集全体の試みを端的に示した作品でもあるといえよう。

以上七篇を収める「七草雑炊」は、随筆についてその枠組みの中身はより多様であるべきだという微温的な結論に終わることなく、分類概念に伴う価値判断を問い返す文章のグループとして位置づけようとしたパートだといえる。ここまでに『百鬼園随筆』という作品集の題名の意味づけが、「短章二十二篇」から大きく変わっていることはたしかだろう。

おわりに

以上、『百鬼園随筆』を構成する三つの部立について、それぞれの作品を取り上げながら性格を検討してきた。あらためて各部の特徴を確認すると、次のようである。

まず、「短章二十二篇」は身辺雑記・回想録のパートであり、作家⇨語り手（私）という「随筆モード」を誘発していた。次に、「貧乏五色揚」は戯画化された作家本人と捉えられる主人公および登場人物の登場によって特徴づけられ、随筆という枠組みを拡張すべくいわゆる私小説に接近していくという性格が見られた。この第二部までで、随筆の一般的な分類概念の確認と、その否定がなされている様子が観察できる。

最後の「七草雑炊」はそれを受けて「読みのモード」を読者ではなく作家に帰属させた上で、随筆と小説をめぐる価値判断を伴った分類概念を相対化しようとしていた。こうした三

段階を経て、随筆概念の拡張を経た小説との接続可能性を示すことによって、随筆概念、ひいては文学ジャンルを編み直す取り組みが、『百鬼園随筆』の全体的なテーマだといえる。このように『百鬼園随筆』は、一見雅号を冠することで「芸術家」の鎧をぬいだ書き手の姿勢を示す<sup>16</sup>。随筆集のようだが、実際には全体の構成を通じてみずからの準拠枠に言及した作品集だといえる。その取り組みは、「日本文学」的ヒエラルキーに対する疑義の提出でもあった。

こうしたジャンル論をめぐる問題意識が一篇の中で寓意的に展開する作品として最後に、「短章二十二篇」の中の「百鬼園先生幻想録」に触れておきたい。この作品は身辺雑記ではなく、「随筆モード」の核心ともいうべき「ごっこ遊び」に触れた百鬼園の「幻想」によって展開する。

篇中の百鬼園は、ラジオの中継放送について「アナウンサーが一通りの修行さへ積みあげ、後は晴雨に拘らず又季節に構はず、野球や相撲の放送をする事が出来る。「あ、打ちました」アナウンサーが尤もらしい声をしてさう云へばいい」のであり、その技術をもって聴取者を欺くことができたならば「ラジオの放送は忽ちにして、芸術の一部門たるの認識を獲るであろう」と考える。

あるいは物と名の関係をめぐっては、「初に物ありて、次にその名を定めればいい。犬を飼つてその名を猫と名づけ、「猫や、猫や」と呼べば、犬が尾を振つて飛んで来る事を試して見よう」と述べる。いうまでもなく旧約聖書における神とアダムによる世界の創造と名づけを踏まえているのであり、ここで百鬼園は世界の「名づけ親」になることを夢見つつ、「物と名」の対応の任意性に言及している。

こうした「幻想」の特徴は、「ごっこ遊び」の有効性に諧謔を交えて言及していることである。百鬼園はもちろん身の回りの現実と表象の関係を幻想しているわけだが、その視座は実のところ、「読みのモード」の操作という『百鬼園随筆』全体の方法論に通じている。言い換えればここでは、随筆という分類概念において通用している事実性の前提もまた、読者と作家の間の「ごっこ遊び」に基づいていることを暗黙裡に語っているのではないだろうか。身辺雑記のパートに紛れ込ませた作品中の配置も、「随筆モード」に鋭い疑問を投げかけるのに一役買っている。つまり「百鬼園先生幻想録」は、随筆における表象の虚構性という一人称語りを巻き込んだジャンル論的な問題意識の表れとして読めるのである。

このように『百鬼園随筆』とは、「随筆」の語を冠した作品集でありながら、実のところその分類概念の名称について回る「日本文学」的価値判断を相対化しようとしてもいた。同作品集の制作を通じて耕された議論の土壌は、ここでの弁証法をはみ出して、『有頂天』（一九三六年七月、中央公論社）から『菊の雨』（一九三九年十月、新潮社）に至る数年間の執筆活動の中で発展させられていく。

その『百鬼園随筆』以後の具体的な内容は個別の作品集および作品の検討によって明らかにされなければならないが、本稿の論旨に基づく見通しをここで述べれば、「読みのモード」操作を通じた分類概念の問い返しが十年ほどかけて発展していったということになる。た

たとえば本稿でも触れた「青地豊二郎」は、「百鬼園先生言行録」において説明されることになかった旅館住まいの生活風景について、そこに至るまでの夫婦の相克をみずからの経験として語って見せている（「相剋記」『中央公論』一九三六年六月）。また「志道山人」や「吟道人」など、『百鬼園隨筆』には登場しない「読みのモード」を操作する複数のキャラクターが新たに創出されて語り手の役割を担う。そして最終的に作家に似た七人の「私」たちが一堂に会する「七体百鬼園」（『新青年』一九三九年九月）まで、こうした隨筆と小説を分ける規範意識への批評が試みられることになる。

『百鬼園隨筆』で種を時かれた問題提起の変遷は、これらに対する検討を通して明らかになるはずである。今後の課題としたい。

注

1 鈴木貞美『「日記」と「隨筆」』ジャンル概念の日本史』二〇一六年、臨川書店、二四六ページ。

2 和田利夫は『文藝春秋』のほか、一九二三年十一月の『隨筆』創刊や『新小説』の『黒潮』への「衣替え」等、既存の雑誌を含めこの時期の誌面が「一様に隨筆的になっていた」ことを指摘している（『近代の隨筆と隨筆の「近代」』転換期における隨筆流行現象と批評への希求』日本文学協会編『日本文学講座7 日記・隨筆・記録』一九八九年、大修館書店）。

3 現行の全集等で初出不明となっている三篇の内、「清潭先生の飛行」については、『旅順入城式』（一九三四年、岩波書店）所収の「木蓮」とともに「百鬼園春懐」の総題で一九三三年四月の『オール読物』に掲載されていることを執筆者が確認した。

4 酒井英行『「百鬼園隨筆」の方法』『内田百閒——「百鬼」の愉快——』二〇〇三年、沖積舎。

5 注1鈴木論文、二四一〜二六〇ページを参照。

6 相馬御風「現代隨筆家の文章」前本一男編、『日本現代文章講座』鑑賞篇、一九三四年、厚生閣。

7 室生犀星「わが隨筆観」近藤一郎編『現代文章講座』第六卷、一九四〇年、三笠書房。

8 萩原朔太郎「雑誌記事的命題」の内「隨筆とは何ぞや」『新潮』一九二八年十一月。

9 こうした分類概念の境界変動に際して、私小説論争同様に隨筆の小説化を問題視する書き手もいた。たとえば久野豊彦は「隨筆が小説と近似することが隨筆の進化であるか、どうかは大いに疑問である」と述べて、変動した境界の押し戻しを図ろうとしている（『隨筆の構成と技術』前本一男編、『日本現代文章講座』技術篇、一九三四年、厚生閣）。

10 日比嘉高『自己表象』の文学史 自分を書く小説の登場』二〇〇二年、翰林書房。

11 「百鬼園新装」は三人称語りだが、語り手の主人公への内的焦点化が頻繁に行われるため、作品中における両者の区別は曖昧である。

12 DiNitto, Rachel Uchida Hyakken: a critique of modernity and militarism in prewar Japan, Harvard University Asia Center, Cambridge (Massachusetts) and London, 200

8, p90.

<sup>13</sup> 宇野浩二「甘き世の話——新浦島太郎物語——」『中央公論』一九二〇年九月。

<sup>14</sup> 鈴木登美『語られた自己』大内和子・雲和子訳、二〇〇〇年、岩波書店。なおイルメラ・日地谷『キルシュネライトも私小説と随筆の区別は困難だと述べている（『私小説自己』暴露の儀式』三島憲一ほか訳、一九九二年、平凡社）。

<sup>15</sup> 安藤宏「私小説表現の仕組み」『私小説ハンドブック』私小説研究会編、二〇一四年。

<sup>16</sup> 近代の作家における雅号の役割については、岩佐壮四郎「〈雅号〉の終焉」（『日本文学』一九九六年十一月）を参照。

## 第二章 「昇天」論

——信仰と福音をめぐる——

はじめに

「昇天」は、一九三三年二月号の『中央公論』に発表された。語り手「私」が、以前同居していた女性が肺結核に罹患したことを知って入院先を訪ね、そこでキリスト教の信仰を育む彼女を恐れつつ一方では過去の愛情に引き寄せられながら、その死までを見届けるという物語である。

こうしたあらずじや小説の題名からわかるように、「昇天」はキリスト教の信仰を主題としている。小説の発表時、百閒と同じ岡山県の出身で自ら信徒である正宗白鳥は、岡山孤児院のエピソードを含む多くの印象的な場面が用意されているが、全体として「無理がなく」運ばれる物語の筋書きを高く評価した<sup>1)</sup>。

しかしながらこうした同時代評が残る一方で、「昇天」への言及は必ずしも多くない。そのようなケースは百閒の著作においては実にしばしばあるものの、作家の生前から現在に至るまで多くのアンソロジーに加えられて知名度の高い作品である「昇天」が分析の対象とされてこなかった経緯ははつきりしない。ただ、特定の宗教が取り上げられ、なおかつそれが単に肯定または否定されるだけではない「昇天」の展開が、夢幻的な作風という従来の百閒の小説作品への評価では読み切れない側面を多く持っていることは確かである。

とはいえ百閒は「昇天」の十年以上前にも「白子」(『冥途』一九二二年、稲門堂書店)においてキリスト教の信仰に対する抵抗と神の「実在」を説明することの困難を取り上げ、また「昇天」の後に「補遺」として随筆風の短文「笑顔」(『東京朝日新聞』一九三六年八月五日朝刊)を発表している。つまり少なくとも『冥途』から『旅順入城式』(一九三四年、岩波書店)に至る一九二〇年代前半から一九三〇年代半ばまでの十余年の期間の作品には、ノンクリスチャンの目でのようにキリスト教の信仰に向き合えるかというテーマへのこだわりが垣間見えるといえよう<sup>2)</sup>。

本稿ではこれら三作品のうち、最も長尺で複数の場面にわたる筋書きをもち、百閒自らも「物語ノ体」のある一篇として『旅順入城式』の巻頭に掲げた「昇天」を取り上げる。キリスト教に言及される点で共通する「白子」の記述も手がかりとしつつ、「昇天」においてその信仰の何が主題とされ、どのような解釈が試みられたのかを考察してみたい。

### 一 「昇天」の背景

「昇天」は肺結核にかかった元芸妓のおれい、が「耶蘇の病院」と呼ぶ施設を主な舞台として展開する。この作品に対しては百閒が自らの実体験を書いたものだという解釈があるが、



作中には実際に「耶蘇の病院」をはじめとして実在の団体・施設・人物が数多く登場する<sup>3</sup>。小説の奥行きをよりの確に把握するために、内容の読解に入る前にこれらのモデルを確認しておきたい。

まず、おれいの入院する「耶蘇の病院」は、当時の救世軍杉並療養所と考えられる。救世軍杉並療養所は、一九一六年に豊多摩郡和田堀内村（現杉並区和田）に開設された。当時、救世軍の運営する病院はすでに下谷にあり、この療養所は結核患者を対象に、通常の治療に加え退院後の患者にも「コロニー」で身体的負担の軽い生活を送らせるという方針をとる施設として開所した。ある疾患の患者のみを集住させるタイプの施設の例にもれず、当時の療養所の周囲は畑地の広がる人家のない地域であった<sup>4</sup>。

こうした療養所の特徴は、小説冒頭の「郊外の電車を降りて」人気がない地区まで歩くとやっと着くという「耶蘇の病院」の立地に一致する。なお救世軍の名前は「私」が初めて面会に行った日におれいが口にしてている。

「本当はね、ここは耶蘇の病院なの」  
「知つてるよ」

「私どうしようかと思ひましたわ。初めは何でも市の病院に這入れるやうな話だったのですけれど、病人が一ぱいで、空かないんですつて。それから、おかあさんがお医者様と相談して、耶蘇の病院に入れると云ふんでせう。私、子供の時から、耶蘇は好きないんですもの。竹町の横町に救世軍があつて、太鼓をたたいてゐるから、うっかり聞きに行くと、中に這入つたら最後、戸を閉めて帰さないんです」

このように「耶蘇」と呼んでキリスト教を忌み嫌うおれいにとって、「市の病院」に入院できず身を置くことになった病院は「気味がわるい場所だった。入院する前に住んでいたであろう花街の地域とも、住宅街とも隔絶した「耶蘇の病院」がおれいに不安を与えたことは容易に想像される。境界の地で自分とは異質な人々に出会う『冥途』以来の話型<sup>5</sup>を踏襲しながら、その異質さをより現実的かつ直感的に理解しやすく形象化していることが伺われる。この点については次節で「白子」との比較においてより詳しく述べたい。

この「耶蘇の病院」を統括し、患者の治療にあたっているのが「院長先生」であるが、この人物のふるまいは前述の救世軍杉並療養所の初代所長・松田三弥に重ね合わせられる。室田保夫によれば、キリスト教信徒で医師でもあつた松田は、キリスト教の教えを説いて患者に慰安を見出させることを治療に取り入れていたという。

松田は遅々として進まぬ〔筆者注・結核〕治療の現状は当分続くとして、患者の精神状態を如何に安定させていくかが重要な課題だと述べている。「宗教上の最高理想を説き、精神療法をも加ふる」〔筆者注・「信仰と療病」〔『済生』一九二七年四月〕の引用〕と。救世軍療養所においては……精神療法として、一週二回患者職員一同に対してキリストの教を説き、宗教上の信仰を持つように努めている。（中略）松田の方針は科学的

治療に加えて、精神教育・療法を重視するものであった。<sup>6</sup>

こうした患者への接し方は、信仰を勧める口調が「怖い」と同時に、不安を取り除こうと「やさしい事を云ふ」点で「やつぱり耶穌」とおれいの説明する「院長さん」の言動を思わせる。その「院長さん」も松田同様、おそらく治療の一環として行っている「お祈り」の前の「演説」つまり説教の内容だが、これは前掲の正宗白鳥による時評の中で述べられているように、岡山孤児院の創立者・石井十次（一八六五—一九一四）と入所児童の姿を写したものと見られる。

それから、また院長さんが起ち上がった。力のない声の響が、その廊下の角になつた所に立つてゐる私にも聞こえて来た。

「それで皆さんはどう思ふ。お金はないのだ。有つただけは、みんなお米に代へて、みなし児に食はしてしまつた。もうお米もない。一粒もない。明日は、明日となれば、もう、いよいよだ。十人の孤児に食はせる物がないのだ。餓ゑ死だ。石井さんは十人の孤児を連れて、操山と云ふ山に登つて行つた。山は天に近いのである。自分達のお祈りの声が、少しでも神様に近く聞こえるやうに、と石井さんは思つたのである。操山の頂で、孤児達と共に、声を合はせて、一心不乱にお祈りをする。最早神様におすがりするより外に道はないのである。しかしまだ奇蹟は現はれない」

石井十次は岡山で受洗しクリスチャンとして社会福祉活動を行つた。一八八七年に岡山孤児院の前身である孤児教育会を立ち上げ、入所児童に養育、職業訓練、そしてキリスト教教育を施した。岡山孤児院は後年宮崎へ移転するが、二十年余りの岡山での活動によってその名が知られている。

またこの説教の中で「石井さん」が子供たちとともに神に祈る「操山と云ふ山」は、百間の生家と同じ岡山市中心部（現岡山市中区）にあり、ふもとに多数ある寺社のうちの一つは百間が療養中の父をみとつた場所でもある<sup>7</sup>。つまり岡山出身の百間にとって石井十次と岡山孤児院は、日常生活の中で見聞きする郷土史の一部として当然知っていた可能性が高いといえるだろう。

さらにこの説教の中の操山におけるエピソードは、そこで石井が祈つたという実話に基づくとみられる。山室軍平は、ある学生が岡山孤児院訪問に際して目にした場面として、操山での石井の祈りを『救世軍士官雑誌』上で紹介している。

行つて見ると、石井君は丁度その時、操山へ祈に行つて居らるとのこと故、彼はその足で同じく操山に行つて見た。（中略）耳を澄してその言ふ所を聞けば、「神様、三百人の子供が、今や食なき為に苦しうとしてゐます。何卒直ちに然るべき道を開き給へ」と、祈つて居るのであつた。さうするうちに祈が済んで立ち上つたのを見て、青年は彼に近づき、之に挨拶して、ともに打連れて孤児院に帰ると、入口のところで石井夫人が、

「只今これが参りました」というて、一通の書留郵便を彼に渡した。彼はすぐその封を  
押切つて見ると、中から金三拾円の為替が出た。<sup>8</sup>

一読して明らかかなように、山室の記す内容は「院長さん」の説教と大まかな筋書きが重なる。しかしこの記述を前掲の「昇天」における説教の場面と比較すると、両者にはいくつかの違いがあることがわかる。まず操山で祈る人数が、前者では石井のみだが後者では石井が「十人の孤児」を連れた十一人となっている。

次に神の助けを求める理由が前者では「三百人の子供」が飢えているというものであるのに対し、後者では「十人の孤児に食はせる物が無い」と述べられている。最後に祈りの結果、前者では「金三拾円の為替」という形をとって神が応えたとされる一方、後者では「まだ奇蹟は現はれない」というところで説教の場面が切れ、神の応答が得られたかどうかは明らかにされていない。

このように「昇天」中の説教と、石井十次の人となりを示すエピソードとして山室が挙げた内容は、孤児院の入所児童に与える食べ物求めて操山で神に祈ったという点では一致しながらも、祈る主体や祈りの内容、そしてその結果が異なっていることがわかる。これらの違いからは、例えば郷土に伝わる逸話の一つとして自然に聞き覚えたなど、かりに山室の紹介するエピソードそのものを百間が見聞きしたのではないとしても、「昇天」のストーリーすなわちおれいをめぐる物語の効果を高めるためにその内容をいくらか改変したと考えることができるだろう。

こうして石井十次のエピソードを下敷きにしつつ、「金三拾円の為替」のような実際の救いは望めないこと明らかなおれいに対して「院長さん」は「まだ奇蹟は現はれない」（傍点筆者）という表現で「主を待ち望」むよう励ましを与え、神の恵みがいずれはもたらされるであろうことを示唆する。言い換えれば「院長さん」は祈りが聞き届けられて為替を手にするのではなく、「奇蹟」を待って子供たちと祈り続ける「石井さん」の物語を示すことで、おれいを含む患者たちに待ち望む精神の重要性<sup>10</sup>を説いていると考えられる。

「昇天」には以上のようなモデルや材料があるわけだが、こうした実在のキリスト者・教会の行いに共通するのが、社会的困窮者への伝道と支援を重視する「社会的福音」の発想である。社会的福音とは、近代資本主義社会の成立に伴って表面化した貧困などの諸問題に対して、キリスト教の福音すなわち「神は一人ひとりの人間に無条件の愛を注いでいる」という教えを根拠として解決に取り組もうとする運動の名称である。

この社会的福音については日本でも受容されており、「A Theology for the Social Gospel」(Walter Rauschenbusch, 1917, Macmillan, New York)の和訳が一九二五年に刊行されている。同書において社会的福音の対象は「地上、即ち現在の社会生活」にあり「此の世界から罪悪を根絶し、救済の使命を完成する事を以て其の本務として居る」ことが力説されている<sup>11</sup>。また前述の山室軍平も『社会的福音の神学』和訳刊行の六年後、言い換えれば「昇天」発表の二年前、救世軍士官の立場から「救霊事業」と「社会事業」を二つながら実践することの

重要性を説いている。

創立者が曾て言はれたやうに、「救世軍に於ては、救霊事業にあらざる社会事業なく、社会事業にあらざる救霊事業がない。(中略) 私共は口で説教すると共に、手足で奉仕せねばならぬ。私共は放蕩息子が父に帰る所の救霊の運動をすると共に、必要ならばいつでも、亦善きサマリア人が、路傍の怪我人の為に尽したと同じやうな、社会奉仕を忘れてはならない。<sup>12</sup>

ここで引用されている「放蕩息子」や「善きサマリア人」のたとえからもわかるように、山室はキリスト教において罪悪とされる状態に身を置く者をすくいあげてくれることを重視し、なおかつその働きは同じ信仰をもつ者同士の間に限られてはならないと述べている。つまり社会的に困窮しており、キリスト教の教えをまだ受け入れていない者が「救霊事業」と「社会事業」が一体となった救世軍の伝道の対象であったといえる。それが作中ではおれいに当てることは明らかだろう。

このように「昇天」からたどれる複数のモデルは、いずれも社会的福音の理念に発した社会福祉事業に取り組むキリスト者・教会による社会福祉施設である。したがって「昇天」は社会的福音を背景とする小説であるといえるわけだが、語り手「私」の病院やおれいの信仰心に対する印象からは、そのような実際の社会的機能という枠組みを認めざるを得ないながらも、神への信仰を不気味に思い退けようとする感情の交錯が読み取れる。次節ではこうした信仰との向き合い方を把握するために有効な比較材料となると思われる「白子」の内容と主題を概観する。

## 二 「白子」から見た「昇天」読解のかぎ

「白子」は「昇天」の発表をさかのぼること十年余、同じく『冥途』(一九二二年、稲門堂書店)に収められた掌篇五作とともに『新小説』一九二一年四月号に掲載された。タイトルの「白子」は後述するように、かつて体の色素が少ない人を差別的に指した語と、魚の精巢の両方の意味が含まれている。「私」が神の存在を認めるよう迫られる集会所で足元にうごめいているのが「西洋人の様な顔をして」「ぷりぷり」した体を持つ生物、すなわち「白子」である。この「白子」に出会う前、物語の冒頭における「私」の心の中では次のような議論が繰り返されている。

神があると云ふ者と、ゐないと云ふ者の間には、そのゐるとかゐないと云ふ言葉が、食い違つてゐるんだ。自分が神はゐないと云つたからつて、それは神があると云ふ者のつかつたゐると云ふ言葉を、否定にしたのではない。(中略) 神がゐないと云ふ者も、その否定する前に、一先づ自分の神を認めた事になつてしまふ。彼は否定する為の神を祀つてゐるぢやないか、どうだと私は独で駄目を押しして、益むしやくしやして来た。

神の存在について論じる際に、それを否定するにも「神」という言葉を口にせざるを得ないことに「私」は腹を立て、「兎に角神はゐない」と思おうとする。しかしその途端見知らぬ女から「それは貴方いけません。神様はゐらっしゃいます」と言われ「耶蘇教」への改宗を迫られる。やがて女の子供と思しき「白子」を踏み潰した「私」は「お験し」を見たのだから神の存在を信じよと追い詰められ、なぜかこみあげる笑いの中で「あます、あます」と神の存在を認める言葉を口にす。これが「白子」の筋書きだが、物語の中心には「昇天」同様、神を認めること、信仰を持つことが据えられている。そしてやはり「昇天」の場合と同じく「私」と神や信仰の間には深い溝がある。

従来「白子」に対する読解では結末における「私」の笑いに焦点が当てられ、それまでの神学的思惟やキリスト教の信者との衝突を「無効化」したり<sup>13</sup>、問題の焦点を「より実在的なものの側にずりおち」させたりする<sup>14</sup>機能が見出されてきた。こうした「落ち」のある物語という比較的単純な評価に対して、複数の百聞論がありキリスト教文学の研究にも取り組む吉川望はより具体的な読解を試みている。吉川は『冥途』の多くの作品同様に一見不合理で不可解な「白子」の物語を、キリスト教的「回心」の文脈に沿って細部を読み直すことで「信仰をめぐる〈内心の反駁〉」と再定位した。

この主題を析出するにあたり、吉川はキリスト教の信仰をめぐる「私」と信徒の衝突という物語の筋書きに二点の作家論的背景を指摘している。一つは「白子」に着手した時期の百聞が漱石全集から、どのような宗教であれ理屈ではなく信者の信仰が救済をもたらすと述べた「日記及断片」の箇所<sup>15</sup>を読んだであろうこと、もう一つはそれ以前の岡山時代にクリスチャンの友人から影響を受けた可能性があるということである。そして同作における百聞の試みを次のようにまとめる。

「白子」は、キリスト教の教義を作品に取り入れつつ、神なるものが存在することへの漠たる恐れを抱えながらそれに向き合うことのできない感覚を描き、信じるということと自体どういふことなのかを、すなわち、実感なき信仰などあり得ないのではないかと、いうことを主たる問題としたのだ。ここに、漱石の「日記及断片」の記述を受容し、真摯な信仰者の心に触れた百聞による、「筆者注・夢十夜」の「第三夜」「第七夜」とは別個の課題と表現が成立していると述べることができるだろう。<sup>16</sup>

このように吉川は「白子」を「神なるものが存在することへの漠たる恐れ」と「実感なき信仰などあり得ないのではないか」という投げかけの二点を描いた作品として性格づけている。ここで信仰の根拠に挙げている「実感」とは「白子」を殺したという「自身の罪」を意識することで神に立ち返るといふ精神的な変化をさす。「私」の場合は「理屈と感覚との懸隔」のために、回心の過程を理解しながら「恐れ」がそれを妨げるといふのである。

「私」の独り相撲の議論を吹き飛ばしてしまう点で、たしかに作中において殺しの罪の自覚は大きな「実感」の役割を果たしている。しかしそのような「実感」によって回心のきっかけが与えられた「私」とキリスト教を隔てるのは神への「恐れ」ばかりでなく、これを「耶

蘇」と呼ぶような前近代以来の差別意識であり、「耶蘇教」に「なるものか」という忌避の態度でもある。また作中では「私」を勧誘する男女も、未信者に神を受け入れさせるためには実力行使も厭わない狂信的な姿で描かれる。こうした作中の表現を踏まえると、「白子」は神の存在を認めることへの「恐れ」よりも、神の不在にこだわるノンクリスチャンの「邪宗」に対する否定的感情が前面に見られ、キリスト教蔑視の色合いも強い作品のように思われる。

むしろ吉川の述べる神への根源的な「恐れ」が信仰への道を妨げるといふ見方は、「昇天」にこそふさわしいのではないだろうか。また吉川が「白子」が扱っていないと指摘した「罪の自覚と悔い改め」や「恵みや喜び」としての信仰という「より本質的な部分」も、「昇天」には容易に見出せる。このように信仰や神という主題を共有する二作品を比較することで、「白子」から「昇天」に向けて主題の変容もしくは拡張・厳密化の様態が明確化されると考えられる。つまり「白子」は、キリスト教的文脈で「昇天」を理解する際の有効な比較材料になるのである。そこで本節の最後に「白子」における信仰の主題とはどのような性格のものかを、作品の題名でもある「白子」を手がかりとして考察する。

「白子」はいうまでもなく作中で重要な役割を果たす。それは信徒の女の子供として「私」の否認の意思を攪乱し、踏み潰されてなお「私」に対する女の強迫行為をエスカレートさせる動機としてはたらくというものである。

ちつとしてみると、著物の裾の中に這入って、白子の顔や手足が私の肌に触れさうに思はれた。私は地団太を踏んで、白子を足許から振り払はうとしてゐる内に、冷たい柔らかないものが私の足に触れたので、到頭私は夢になつて馳け出した。するとまだ三足か四足しか歩かない内に、私は一人の白子を踏み潰した。何だかぶりぶりした様なものを踏んだと思ふ途端に、もうその白子は死んでゐた。(中略)

「貴方はこんなお駈しに遭つても、まだ神様のいらつしやる事を信じませんか」と云つた。私は可笑しくて堪らないから、夢中になつて、「あるよ、あるよ」と云ひながら笑ひつづけた。

ここで女が「お駈し」と呼んでいるのは前述の「白子」で、「私」によれば女の子供である<sup>17</sup>。「西洋人の様な顔」をした、「白い毛」のある「ぶりぶりした」「薄白い塊」で「鶏の鳴く様な声をたてる」<sup>18</sup>。様子から分かるようにこの「白子」とは、半分は魚の精巢の白子、半分は侮蔑的な表現で体の色素が少ないことを指している。前者の意味は内田道雄が「生命の原型質的な形としての白子なるもの」と述べている<sup>19</sup>。ように、意識としての自己を持つ以前の生命そのもの、もしくはさらにそれをさかのぼる存在の核のようなものを示していると思われる。

一方後者は、古来からまれにしか現れないとして白い動物に見出されてきた瑞兆・凶兆すなわち「お駈し」としての側面を表している<sup>20</sup>と考えられる。女は「白子」という「お駈し」が神の存在を認める根拠になるはずだと「私」に迫っており、作中においても「白子」

が非現実的な存在と捉えられていることがわかる。

ところで作中の「白子」はやや唐突ながら、『遠野物語』に記されている話の登場人物といくつかの点で一致を見る。またこの「白子」の話の前段には幕末の頃「西洋人あまた来住していた」地域で密かに行われた「耶蘇教」について記されている。

八四 (前略) 耶蘇教は密々に行はれ、遠野郷にても之を奉じて磔になりたる者あり。

浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合ひては嘗め合ふ者なりなど云ふことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合の子中々多かりしと云ふことなり。

八五 土淵村の柏崎にては両親とも正しく日本人にして白子二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七位なるべし。家にて農業を営む。語音も土地の人とは同じからず、声細くして鋭し。<sup>21</sup>

一読してこれら二つの話は〈耶蘇教―西洋人―白い体〉という連想で並べられていることが推測できる。そしてこの連想における三要素はすなわち、「私」が遭遇した「白子」という存在の要約的説明になっている。もちろん百間が日常生活の中で例えば「耶蘇教」を信じる「西洋人」と出会い、さらに当時「白子」と差別的なニュアンスで呼ばれたような身体的特徴をもった人々を目にしてそこに類似を見た可能性もないわけではない。しかしかりに『遠野物語』のこれらのくだりが「白子」執筆のヒントになったと考えれば、なぜ神の存在を証拠立てるのがこのような「白子」なのか、前述の魚の精巣つまり命や存在の核という側面を考え合わせることである程度合理的な説明がつくだろう。

このように「白子」の物語における「お験し」には多分に民俗的な伝承の色合いが濃く、日本列島の多くの場所での顔かたちから「異人」と呼ばれた人々の身体的特徴をもつ架空の生き物が前面に出ている。言いかえれば「白子」が「お験し」とされるのは「西洋人の通り」にからだ全体が白いからにはかならない。こうしたモチーフの扱いはキリスト教に関わる伝承や聖書の物語というよりも、むしろ東アジアの民間伝承を思わせる。

「耶蘇」の女がそのようなキリスト教と無関係な「お験し」によって「私」に回心を迫るのが「白子」の物語だとすると、この一篇は宗教的に目立ったところのない作家である百間の作品にも信仰という主題が認められることを示す一方、ある一つの宗教を想定して内容を評価できる性質のものではないと思われる。前述の吉川論では「白子」の内容にはキリスト教の教義への理解が不十分な点が見られることが指摘されていたが、実際に執筆時点での百間の理解が浅かった可能性を認めると同時に、信仰を物語においてどのように形象化すべきか掴みかねていたと考えることも可能だろう。

### 三 「昇天」における回心の過程

「白子」ではキリスト教の信徒の性質が一面的に描かれているだけでなく、主題としての信仰の範囲も特定の宗教を対象としたものではなかった。一方「昇天」ではすでに見たとおり、実在のキリスト教会やキリスト者、関連の社会福祉施設・医療施設がモデルとして物語

中に取り込まれており、「私」がキリスト教を不気味に思い否定的な感情を抱いていることと、孤児や結核患者の受け入れなど社会的福音の立場から福祉の役目を果たしていることの両面が描かれている。

またそのような実在の事物を作中に取り入れたことで、「昇天」においては「私」とキリスト教との出会いも「白子」とは異なっている。前述のように「白子」では「兎に角神はない」と断定する「私」の心を読んだように信徒の女が突如現れ、回心を迫っていた。しかし「昇天」では冒頭の一文にあるとおり、以前に同棲した相手を見舞った先が実は「耶蘇の病院」であるという経緯でまずは舞台設定にキリスト教の影が現れ、物語が進むにつれてここで実際にどのような宗教行為がなされているかを「私」は徐々に見聞きし理解していくことになる。

こうした両作品でのキリスト教の扱われ方をそれぞれまとめれば、「白子」でのキリスト教とは信徒の不気味さや強引さを示唆する属性に過ぎず、スラップスティックな展開を補強する材料であるのに対し、「昇天」の場合は主にプロテスタントによる社会的福音が一篇の不可欠な背景として置かれているということができよう。その違いだけでも、「昇天」ではすでに述べたような「白子」に見られる信仰の主題が深められているであろうことが推測される。

本節と次節ではテキストの読解を通して、こうした主題について「昇天」においては信仰の中でもとりわけ福音を信じるか否かといういざずれかの選択に至るまでの過程が物語を形成していること、同時に福音を信じる過程で自らが置かれた状況によって独自の神理解が生まれ得ること、そしてそのような理解の一つとしてカトリック教会の伝承を引用したおれいの二度の「昇天」が描かれ、一篇の主題を形象化した場面となっていることを指摘する。

「昇天」の中で直接には言及されないながら、神から全ての人に注がれる愛である福音は大きな役割を果たしている。それはすでに示したような社会的福音に基づいて運営されるキリスト教会の施設を物語の舞台とするという点だけではない。信仰に入るといふ観点で見れば、そのような福祉によって医療を受けられるなど実際のな面で救われているながらキリスト教を拒絶していたおれいが、主に「院長さん」の言動を通じて、やがて福音を受け入れていくというのが物語の筋書きだからである。

ここで語り手の「私」はおれいの急速に育っていく信仰心を追跡する役割を担っている。超自然的な体験を神の起こす「奇蹟」などと受け止めるおれいの姿を「私」は恐れをもって語るものの、強いて彼女を止めることはなく過去の愛を思い出しながら繰り返し見舞いに訪れる。また登場人物としての「私」自身はおれいのように強く神に引きつけられることはないが、信仰に入っていく彼女には後述するように恐ろしさと美しさを同時に感じている。

以上のようなおれいと「私」の関係を踏まえた上で、おれいが「私」に見せる変化を順に確認していきたい。作中で「私」はおれいを四度訪問する。その最初の訪問では、おれいは「私」に自分のいるこの場所が実は「耶蘇の病院」であることを伝え、救世軍の宣教を回想して「子供の頃から耶蘇は好かない」と述べている。しかし二度目に見舞ったときには入院



生活を送る中で「耶蘇」の教義に興味を持ち始め、それに応じてか「不思議な事」を体験していると言っている。

「そのお話を聞いて、後でお祈りなさるのよ。ですから、この病室の人は大概みんな信者ですわ。そのお話し、私にはよく解らないんですけど、それでも、伺ってるうちに、段段有りがたくなつて来るらしいわ。この部屋の人が、あとでみんな声をそろへて、お祈りの事を云ふんでせう。アーメンと云ふのは私だつて云へるけれど、でも、その後で咳き入る人が随分ありますのよ」

「そんなに、話しつづけると後でつかれやしないか」と私が心配して云つた。

「ええ、でも何だか不思議なんですもの、それ以来、私、かう目をつぶつてゐても、いろいろの物が見えるらしいのよ。指を幾本か出して、目蓋の上に持つて行くと、ちゃんと、その数だけ、指の形が見えるんです。奇蹟と云ふのでせうか」

おれいは千里眼<sup>22</sup>のような能力を得た（と感じている）ことを信仰によるものと考えている。しかしそれが病気の治癒や心の平安をもたらすわけではない。つまりおれいのいう「奇蹟」とは必ずしも神の恵みによる事態の好転を指しているわけではなく、それが人間の考えや力を超えたレベルでもたらされるといふ超自然的側面だけを取り出している言ひ回しであることが窺われる。科学的に説明のつかない現象を神の存在の証拠と考える発想は、前述の「白子」における「お験し」に近いともいえよう。

ただ同時にこの段階でおれいが「耶蘇」は「だんだん有りがたくなつてくるらしい」と述べていることも無視できない。おれいがそう感じたのは、おそらく教義の根幹である福音に對してであろう。おれいの口から語られているように、彼女は両親を亡くしており置屋の主人が今は「おかあさん」であり「おあいちゃん」という同輩がいる。また「私」の回想によれば落籍させて共に暮らしたこともあったようだが、破局の末再び芸妓に復帰したという。

こうした登場人物の言葉から読み取れるおれいの人間関係は、金錢を中心にして結びついていたものといえる。「おかあさん」は雇用主であり、「おあいちゃん」も同僚にすぎない。共同生活を通して「家族同然」のような感情が互いの間に育まれていたかもしれないが、結核にかかり勤務も共同生活もできなくなればその関わりは急激に弱まってしまふ。

一方「私」にとつておれいは過去に「涸れ尽くすほど愛した」相手とはいへ、彼女を引き取るにあたつて「おかあさん」に少なくとも額の金錢を支払つたことは明らかである。また詳しくは語られないものの、おれいが再び芸の道に戻る際にも二者の間にさまざまなものがあつただろうことは想像にかたくない。「私」と彼女の関係は、いわゆる「素人」同士が共に生活を始め、終える場合とは大きな差があるといえる。

対照的に、神から全てのの人に注がれる愛である福音は金錢とは無関係である。むしろ現実的には、教会が社会的福音を事業として実践しようとする場合、実業家に経済面の支援を依頼することはある<sup>23</sup>。しかしいわばその受益者で、なおかつ入門中の一信者でもあるおれいにとつて、福音という教義によつて結ばれる神との関係は芸妓と抱え主のそれとはまっ

たく異なり、金銭によって自分の立場が左右されることはほぼないと考えられる。また元芸妓という経歴も、回心すべき「悪」としてみなされることはあっても信仰に入る以上はむしろ「大きな喜びが天にある」<sup>24</sup>とされる要素になる。

こうして芽生えたおれいの信仰心は、おそらくはキリスト者である「院長さん」の日々の励ましを受けて教義や聖書の物語に関する知識が蓄えられることでさらに強められていく。おれいの変化は「私」が見ない間にも進行しており、「私」は「基督様を拝むのだとおつしやつて」おれいが夜間に徘徊しようとしたことを病院の職員から聞かされる。

先ほど述べたようにおれいはいは「子供の頃から耶蘇は好かない」のであり、入院してからも「耶蘇」と呼ぶ蔑視の態度は変わらなかった。それが職員の話によれば「基督様を拝む」ために止める相手を驚くほどの力で押しつけるようになったという。職員からの伝聞であるとはいえ、「拝む」以上は「基督様」という言葉もおれいのものだろう。おれいのキリスト教への関わりは、ほかの患者の祈りを見て「難有い御宗旨のやう」だと印象をもつ段階から、ここでは明確にキリストすなわち救い主イエスの信仰へと大きく踏み出していることが読み取れるのである。

#### 四 「昇天」の失敗とおれいの神理解

このように「耶蘇の病院」で療養する間におれいは信仰を深めていくが、やがて周囲から「エス様のお話を聞き違へていらつしやる」と言われるような独自の理解をも展開するようになる。それを表すのが小説の題名でもある「昇天」の試みであり、「院長さん」を「エス様の仮りのお姿」とする解釈である。まず「昇天」は、再び「私」が同じ病院職員から教えられた話として示される。

はい一昨晚の、また宵の口で御座います。いきなり御自分のベッドの上に起き直つて、それから、そろそろとお立ちになつたさうですが、同室の人が見て居りますと、妙な手つきで、胸に十字を切つて、さうして、ふらふらとベッドの上を歩き出されたと思つたら、もう床板の上に落ちて、気を失つて居られたさうで御座います。(中略) どうも何か、エス様のお話しを聞き違へていらつしやるらしいとか、先生方の御話で御座いました。昇天でもなさるおつもりではなかつたか知らと云ふ様な事を、皆様で御話になつていらつしやいました。

おれいの容体は悪化しており、高熱によってこうした奇行に出たとみなされるが、同時に自分の死を予感しての行動、すなわち聖母の姿を模倣してイエス・キリストのもとを目指したとも考えられる。というのもここでおれいの様子は、キリスト教の歴史の中で長年伝承され、繰り返し宗教画の一テーマとされてきた聖母被昇天の代表的な画像の再現となっているからである。

聖母被昇天は聖書に記述のないカトリック教会内の伝承で、聖母マリアが地上での生涯を終えたのちその肉体と魂が共に天に上げられたというものである。ティツィアーノ、ルー

ベンス、エル・グレコらに代表される聖母被昇天を題材とした絵画はしばしば、生前の姿のまま雲の上へと昇っていくマリアを天使が取り囲み、地上の人々がその様子を仰いでいるという構図で描かれる<sup>25</sup>。

天使こそいないが、右の場面がベッドの上を歩き出すおれいとそれを周りの病床から自然と見上げる患者や職員たちによる聖母被昇天の構図を見せていることは「昇天でもなさるおつもりではなかつたか」という一言からも明らかだろう。しかしもちろん、聖母ではないおれいは「昇天」に失敗しベッドから転落してしまう。以前、透視を「奇蹟」と呼んでいた彼女は「昇天」が自分の身の上にも起こりうると考えたのかもしれない。そのような神秘的な現象を通じて神の存在を認めつつあったおれいの信仰は、ここでの失敗によって次のような解釈へと変容する。

「それが、何つてはつきりわからないんですけど。でも私、今まで間違つてゐたと思ひますわ。院長先生は、エス様の仮りのお姿なのよ、きつと。私がエス様の事を思つてると、いつでも、きつとなのよ、院長先生が、窓からお覗きになるんですもの」

「さうかも知れないけれど、おれいさんは昔からよく信心してたんだから、エス様も外の神様もおんなじ事なんだから、あんまり考へ過ぎて、迷つてしまつてはいけないんですよ」

おれいが辿り着いたのは、空を昇っていった先に「天国」があり「エス様」がいるのではなく、自分が心の平安を得て今いる場所が「天国」であり常に見守ってくれる「院長さん」こそが「エス様」なのだという理解だった。おれいは入院当初「院長さん」の「怖い顔」を磔刑のキリストに似ていると述べていたが、ここではむしろその凶像の聖書的な意味である愛の行為を行なった救い主という性質を「院長さん」に見出していることがわかる。

こうしておれいは「神は存在するか」という問いと「神は何者か」という問いへの答えを同時に見出した。すなわち社会的福音の受け手として自分が生活する病院という場に神は存在し、その病院全体を動かしながらおれいに希望を与え続ける「院長さん」が神という理解である。

もちろんこうしたおれいの理解は「世界」を自らの生活の場だけに狭めることで成り立っており、「院長さん」もまたあくまで一人の人間に過ぎず病院外での働きは限られていることを考えても、一般的なキリスト教の信仰のあり方を逸脱した部分があることは確かである。さらに「仮りの姿」という発想も、キリスト教というよりはやはりアジア圏の神話・伝説にしばしば見られる「やつし」に近い。

とはいえ前述のようなおれいの来歴を踏まえれば、全ての人に無条件で愛を注いでいるとされる神との個人的な結びつきを感じるためには、寺社に祀られた神仏と衆生という既知の関係の参照は必要なことであつたと考えられる。その結果として、前述の「白子」では「私」の神をめぐる概念的なつまづきの中で問うことすらできなかったこれらの問いに、「昇天」においてはそれなりに完結した答えが示されたといえる。こうしておれいは自分の

置かれた状況のなかで神を「理解」し、福音を受け入れたのである。

このように「昇天」はおれいの信仰の目覚めと発展を描くことで一篇が成り立っているが、結末にはその後日譚として「私」によって彼女の死がごく簡潔に語られる。

十二月二十五日、小春のやうなクリスマスのお午におれいは死んだ。付添の看護婦に蜜柑の皮をむいて貰つて、半分食べた儘、死んださうである。

急変の知らせを受けて、馳けつけた時は、間に合はなかつた。おれいは奉安室に移されてゐた。

先ほどのおれい本人による「昇天」は失敗に終わったものの、そのような試みをせずとも結果的に彼女は天に召されることになった。それが「小春のやうなクリスマスのお午」という穏やかで祝福された日付である点からも、今度の「昇天」が信徒のいわば一方的な神への接近ではなく、神から「時宜になつて」<sup>2</sup>もたらされた出来事として位置付けられていることが読み取れる。

また最後の一文に登場する「奉安室」とは、生前のおれいが「私」にその意味を尋ねた言葉である。「廊下を一つ間違へ」て出くわした部屋の看板の漢字をおれいは一つひとつ説明し、「中に灯りがついて、綺麗に飾つてあるから、何かしらと思つた」と語る。文字通り一つ間違えればいつ死を迎えるかわからないおれいに対して説明することはできないものの、それが「屍体収容室の事を云つて居るに違ひな」いことを「私」はすぐに理解した。

この場面では、「奉安室」と「屍体収容室」の違いは、おれいと「私」の宗教的な立場の違いが明瞭に浮かび上がっていた。言葉の意味を知らないおれいは病院の用いる呼称をそのまま記憶するほかになく、部屋の名前として受け入れるが、「私」にとってそこは天の国とも神とも関係のない「屍体」が「収容」される場所だった。

しかし結末では、この時の「奉安室」という呼び方が「私」によって用いられる。おれいの死を語る「私」にとって、息を引き取つて間もないおれいは「屍体」ではなく、魂が天へと昇りつつある「安んじ奉る」べき一人の人間であったことがわかる。このように結末の後日譚からは、一度は失敗したおれいの「昇天」が神の手で改めてなされたと同時に、「私」にとつてもおれいの死が「昇天」と見えたこと、つまりおれいのように作中で回心するまでには至らないながらも「私」にも神の存在が感じられたことが窺われる。おれいによる試みとしてのそれと、「私」の変化をも暗示する結末の二度にわたつてなされた「昇天」は、進歩と福音をめぐる一篇の主題を形象化した場面といえるだろう。

おわりに

以上、本稿では「昇天」におけるキリスト教の信仰の主題について、物語の背景となつた実在のキリスト教会・キリスト者、同様の主題を取り上げた点で先行する「白子」、そして両者を踏まえた上でのテキストの読解を通じて検討してきた。以下では本稿の試みを振り返りながら今後の展望を述べたい。

まず物語の背景について、物語の主な舞台である「耶蘇の病院」は当時結核の専門院であった救世軍杉並療養所をモデルとしているであろうこと、そして「院長さん」も同じくその初代所長である松田三弥を参考とした登場人物と見られることを確認した。また「院長さん」の説教の内容として言及される「石井さん」のエピソードは、岡山孤児院の創立者・石井十次にまつわる逸話を一部改変したものであることを指摘した。こうしたキリスト教会やクリスト者の事業が、二〇世紀にプロテスタントの間で提唱された社会的福音の実践である。以上のモデル論的検討から、物語の舞台が社会的に周縁化された存在としてのおれいに神の福音を知らせる場の役割を果たすことが明らかとなった。

次にキリスト教の信仰を物語の中心に据えている点で「昇天」に先行すると位置付けられる「白子」を取り上げ、先行研究を踏まえた主題の検討を行なった。そして同作においては信仰や神という言葉の意味するところが「昇天」ほどには具体化されていないこと、言い換えれば「白子」で扱われなかった信仰をめぐる主題が「昇天」では取り上げられ、発展しているのではないかという仮説のもと、「白子」を比較材料とした「昇天」の読解を試みた。その結果、神の存在については「白子」も「昇天」も神の恵みとは無関係に見える超自然的な現象が根拠に挙げられていたものの、後者では教義に対する評価が述べられ、キリスト教の福音によって救いをもたらされる可能性にも言及されていることがわかった。

以上のような「昇天」の物語の背景と先行テキストの参照から、同作では信仰の入り口である福音を受け入れるか否かという主題が扱われていることが明らかとなった。これを踏まえて「昇天」テキストの読解を行い、福音を信じるか否かといういずれかの選択に至るまでの過程が物語を形成していること、同時に福音を信じる過程で自らが置かれた状況によって独自の神理解が生まれ得ること、そしてそのような理解の一つとしてカトリック教会の伝承を引用したおれいの二度の「昇天」が描かれ、一篇の主題を形象化した場面となっていることを指摘した。

おれいの物語から浮かび上がるのは、信じる者の身近に神の存在を見出させ安息をもたらす福音を受け入れるにあたっての、その信仰が各人の置かれた状況によって極端な神理解に基づくものとなる危うさと同時に、自らと神を結びつける個人的な物語が介在することの必然性である。このように「昇天」はキリスト教を対象として、その信仰の入り口である福音を信じるか否かという選択がどのようになされ得るかを描いた小説といえる。さらにこうした信仰と福音をめぐるテーマは、「昇天」補遺」と副題のつけられた「笑顔」において「私」の郷里の思い出とおれいの死の前後の様相という二つの記憶の交錯を通じて再び触れられており、百閒が少なからず関心を払っていたことが窺われる。

なお今回の考察では、「昇天」の「私」における信仰のあり方を取り上げることができなかった。「白子」においては不完全ながら信仰に接近した一人称の語り手「私」に「昇天」の「私」との連続性を見るならば、主題のより適切な把握のためにはおれいだけでなく「私」にとって信仰とは何であるかを考察する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

- 1 正宗白鳥「昇天」並に「東は東」は可』『読売新聞』一九三三年一月二十九日。
- 2 百間とキリスト教の接触の早い例としては、「たちをの記」(『全編百間隨筆』第五卷、一九三七年、版画荘)に、八、九歳ごろ安部磯雄が自宅を訪問して「私の父に神の愛を説いて聞かされ」、その際に「べんがら色の表紙をした「馬太伝」と云ふ薄つべらな本」を目にしたとの記述がある。
- 3 後年の隨筆には「おれい」にあたると思しき天折した女性に触れている個所があるため、必ずしも「昇天」の物語が百間の実体験ではないとは言いい切れない。
- 4 「救世軍療養所一斑療養所と附属保養者コロニーの実況」(一九三四年、救世軍療養所)『近代都市の衛生環境 東京編17 (病院8)』二〇〇九年、近現代資料刊行会。
- 5 真杉秀樹『内田百間の世界』(一九九三年、教育出版センター)など、『冥途』の諸篇に怪奇に出会う場所として「土手」が頻出することは、百間の作品を「幽明の境」や「中有」という言葉で性格づける際にしばしば指摘される。このほかにも「橋」、「辻」、「坂」など古典的な境界のモチーフが繰り返し現れるほか、『旅順入城式』では「廊下」「舞台」が同様の役割を負っていると考えられる。
- 6 室田保夫「松田三弥——救世軍医師の足跡」『キリスト教社会福祉思想史の研究 一 一 国の良心』に生きた人々』一九九四年、不二出版。
- 7 瑞光山仏心寺。『百鬼園日記帖』をはじめとして、百間は早くに亡くした父について繰り返し日記や隨筆で言及している。
- 8 山室軍平「一基督者としての石井十次君(一)」『救世軍士官雜誌』一九三三年五月。ただし同誌は非売品で「救世軍士官の為に発行する雑誌にして士官以外の手に入るを許さず」と毎号の表紙に書かれている。山室が同内容の文章をより一般向けの雑誌に寄せた可能性もあり、百間が実際にこの記事を参照したかどうかは不明である。
- 9 あるいは「作者の意図」にこだわらずとも説教中の「石井さん」が岡山孤児院の創立者・石井十次だと読める以上、その内容が“原作”との相違を含めて「昇天」全体の物語に関わりをもつと考えることは自然だといえる。
- 10 苦しみの中にあつて神への信頼を保つことの大切さは「主を待ち望め」(詩編二七：一四、新共同訳)をはじめとして聖書の随所で繰り返される。説教における「石井さん」のエピソードの趣旨を踏まえれば、「私」の聞いた部分の後にはそれを示す聖書箇所が朗読されたのではないかと推測される。
- 11 『社会的福音の神学』友井禎訳、日本基督教興文協会、一九二五年、四五ページ。
- 12 山室軍平「各小隊は貧民伝道に参加せよ」『救世軍士官雜誌』一九三二年五月。
- 13 山口徹『冥途』にさすらうことば』『日本近代文学』二〇〇〇年五月、日本近代文学会。
- 14 内田道雄「冥途」から「山高帽子」へ』『内田百間——冥途』の周辺』翰林書房、一九九七年。

- 15 「断片四A」『漱石全集』第十九卷、一九九五年、岩波書店。和訳は同書収録の岡三郎・石崎等「注解」を参照。
- 16 吉川望「白子」論——信仰をめぐる〈内心の反駁〉『日本文芸研究』二〇一七年三月、関西学院大学日本文学会。
- 17 吉川望は注17に挙げた論文で「お験し」は「白子殺し」だとしているが、その場合この言葉は「おしるし」ではなく神に与えられた試練という意味で「おためし」と読まれるものと思われる。本稿では「おしるし」と読んで「私」の「白子」との遭遇を指すという読解をとる。
- 18 百間は幼少時に飼育していた鶏が近親交配を繰り返すうち性質が変わって奇形のある個体も現れ、やがて牝鶏が閉をつくるようになったのを聞いて恐怖を覚えたと記している（「牝鶏之晨」『文学』一九三五年一月）。「白子」の声の特徴は『遠野物語』八五の記述との一致に加え、生命の禁忌にふれることへの罪悪感を示唆すると思われる。
- 19 注15文献に同じ。
- 20 こうした見方を人間に適用することが差別の原因となってきたことはいままでもない。百間も柳田も、民間伝承の中のそのような問題点を必ずしも乗り越えているとは言えない点には注意が必要である。
- 21 柳田國男『遠野物語』一九一〇年。
- 22 千里眼は一九一〇年前後に千里眼をもつと称する人々が論争の対象になるなど、人心を乱すオカルトとして受け止められた（「柳廣孝「千里眼と科学」『へこっくりさん』と〈千里眼〉・増補版』二〇二二年、青弓社）が、このころ青年期の百間はメーテルリンクの翻訳を試みるなど同世代の作家たちと同じく神秘主義に傾倒していた。「昇天」の随所に見られるキリスト教への不気味な印象は、宗教における秘儀の神秘性になお関心を抱いていたことを窺わせる。
- 23 現に前述の救世軍杉並療養所の創設にあたっては、渋沢栄一や大隈重信が協力した。
- 24 ルカによる福音書十五・七（新共同訳）。注13文献の山室軍平もこの「放蕩息子のたえ」を引用している。
- 25 日本においてはルーベンスの作品が『白樺』に部分的ながら掲載されたほか、遅くとも一九一〇年代には小説の翻訳や随筆にも聖母被昇天への言及が見られる。
- 26 ヘブライ人への手紙四・十六、コヘレトの言葉三・十一（新共同訳）など、出来事にはそれぞれ起こるべき時があり神の支配下で実現するという発想は聖書の随所に見られる。

## 第三章 『居候勿々』論

——新聞小説から単行本へ——

はじめに

『居候勿々』は、一九三七年六月に小山書店より刊行された中篇小説であり、百閒が長い執筆活動の中でただ一度取り組んだ新聞小説の題名でもある。新聞小説「居候勿々」は、一九三六年十一月十日の『時事新報』夕刊にて連載が開始されたが、連載中に時事新報社が解散したため、同紙の終刊号である十二月二十五日分をもって未完のまま打ち切られた。翌年の単行本『居候勿々』では、この「居候勿々」を中核として、巻頭に「作者の言葉」を、巻末に「再び作者の言葉」および「登場人物の其後」をそれぞれ配置することで未完の物語を閉じている。

後述する理由によって、単行本化する際の加筆部分は巻末の二章だと考えられるが、そこでは、初出段階での掲載紙廃刊という不意の出来事が小説におよぼした影響が具体的に言及される。「再び作者の言葉」は、物語の世界から放り出された登場人物たちとともに、「私」すなわち「作者」が行き場を失って困惑していた掲載打ち切り当時の様子の説明で、「登場人物の其後」は中断された小説の後日譚である。

こうした『居候勿々』の成立過程を一言でいえば、頓挫した新聞小説を新たに額縁で囲い込むことで、一種の小説内小説として甦らせたということになるだろう。つまり単行本の中篇小説『居候勿々』は、新聞小説「居候勿々」に、全体を構成する材料の一部という機能を新たに担わせているといえる。従って現行の『居候勿々』は、同名の新聞小説をベースとしながら、さらに一歩踏み込んだ性格を獲得しているのではないかと考えられる。本稿では、『居候勿々』における加筆部分に着目することで、新聞小説「居候勿々」とは異なるその性格とはどのようなものであり、いかにして獲得されていったのか、背景を遡ることを試みる。

あらかじめ結論を述べれば『居候勿々』の特質とは、小説の芸術的側面よりは活字メディアを通して流通する商品としての属性に光を当て、それが物語および小説家に与える影響を、小説そのものの中で形象化している点に求められる。そしてそのような性格は、未完に終わった新聞小説の物語を書き足して完結させるのではなく、その周囲に「作者」を名乗る登場人物の語りを配置することで全体を額縁小説の構造に組み直すという、特徴的な加筆作業によって獲得された。リアリズムであれ幻想文学であれ、物語世界が現実と切り離されて、独自のルールと人間関係で完結している没入的なフィクションのありかたとは距離をおいた問題意識が、『居候勿々』には見出されるといえよう。とはいえこの中篇小説の手法は、その特殊な成り立ちのゆえに、現実世界とより直線的な回路でつながりたいわゆる私小説とも異なっている。

ところで未完の小説部分の内容が、百閒の経験したいわゆる法政騒動の発端に当たり、私



小説的ともいえることは、一九三四年前後の新聞・雑誌におけるいわゆる法政騒動を扱った記事のわずかずや、百閒本人による「学校騒動余殃」(『続百鬼園隨筆』一九三四年五月、三笠書房)等の記述からも知られる(後述)。こうしたことから酒井英行は、『居候勿々』を「騒動の縮図を描き、草平を頭目とする学校改革派に対する強烈な反感を表明した作品」と説明している<sup>1)</sup>。しかしながらこの性格づけは、本稿の立場からすれば、中篇小説『居候勿々』を構成する一材料に部分的に触れたにすぎず、一篇の評価としてはあまりにも限定的な見方だといわざるをえない。氏の論がいまや半ば埋もれた同作の時代背景を明らかにしたことはたしかだが、それだけでは同名の新聞小説を糧に育まれた『居候勿々』の問題意識を見落とすことになるのではないだろうか。

以上のような見通しによって本稿では、以下のようにテキストの検討を進めていく。まず次節では、新聞小説と単行本の本文がどのように異なるか、その概要を確認する。次にそれを踏まえ、「作者の言葉」以下の加筆部分が加わることによって、『居候勿々』が新聞小説とどのように異なる性格を獲得しているのかを検討する。以上によって『居候勿々』の成立と性格を具体化し、最後に私小説という同時代的な背景のもとで、同作の全体的な性格づけを試みる。なお、以下の議論では初出テキストを「新聞小説『居候勿々』」、初刊の中篇小説を『居候勿々』、同書の「作者の言葉」等に囲まれた中心部分を「小説『居候勿々』」と呼び分けることにする。

#### 一 初出と初刊の比較——小説はどこから始まるか

前述のように新聞小説「居候勿々」は、掲載紙の廃刊という理由で未完に終わり、翌年の『居候勿々』ではその際の混乱を物語世界内外から語るパートが追加されている。以下では両者の最も大きな相違点である、小説の冒頭と末尾について、本文をそれぞれ確認していきたい。まず、新聞小説「居候勿々」の冒頭は次のようである。

或る雑誌に、一人の高利貸を主人公にして小説を書いたところが、あれは自分の事を書いたに違ひない、怪しからん、と云つて腹を立てた高利貸が幾人も出て来た。(中略) 今度の小説は、学校の先生を書くつもりであるから、つい二三年前まで同業に従事してゐた私に取つては、いろいろの差しさはある。気をつかふ事は高利貸以上である。書いて行く内に、何人に似て、どの方面に差しさは起こるか、私にもあらかじめ解らないが、読者諸彦に取つては、そんな事は無関係である。ただ私がさう云ふ点で窮屈になる程、小説は面白くなるのではないかと云ふ様な事を想像する。

一読して明らかかな通り、この新聞小説は、「私」と名乗る小説の書き手がこれから連載していく小説について、若干の内容説明と予想される反響に思いをめぐらせる場面から始まる。先ほど、『居候勿々』は小説内小説の構造をもっている」と述べたが、初出の冒頭にも作者とおぼしき人物が登場しているため、実は初出段階でもすでに類似の構想があったことがわかる。ただ新聞小説では版面の制約もあり、右の部分に続いて「一体、私が自分の面



と、赤黒二色刷りの口絵、そして目次の順に、三枚の片面印刷のページが続いた先に現れる。その文章は次のようなものである。

時事新報社の需めに応じて、本紙の夕刊に連載小説を執筆する事になったが、新聞小説は私に取って初めての経験である。様子が解らないので、これから先の出来栄えをあらかじめお請合する事は六づかしい。毎日書いて行く内に、作中の人物が勝手にあばれ出して、作者の云ふ事を聴かなくなつたら困ると、今から心配してゐる。どうにも手をへなくなれば登場人物を塵殺にして、結末をつける外はなからうと考へてゐる。

この冒頭は、次ページから始まる、物語への導入部の役割を果たしている。すでに新聞小説の冒頭で見たように、加筆部分を除く小説「居候匆匆」でも、書き込まれた「作者」がこれから連載していく予定の小説について説明していた。登場人物と「作者」が対等な関係に置かれることを心配して見せる右の文章はそのような「作者」の特質を早くも示唆しているといえよう。また、このような導入部につけられた「作者の言葉」という見出しは、一見ありふれているようで、実際のところ、続く物語の中で「書生に化け」るのがあたかも『居候匆匆』の署名者・内田百閒(間)その人であるかのような演出装置としても機能している。新聞小説の段階では残されていた「私」の身元に関する若干のあいまいさも、『居候匆匆』においては「作者の言葉」を通して取り除かれる。このことよって、以降の物語の小説内小説としての輪郭がより明確になるのである。このように、「作者の言葉」は書物の意匠と文章の内容の両面で、小説「居候匆匆」のプロローグとして位置付けられるといえる。

むろん、「作者の言葉」を小説「居候匆匆」より高次に位置付けて、小説は「作者の言葉」ではなくその次のページから始まるのだと常識的に見ることもできるだろう。しかしすでに述べたように、そのような観点は『居候匆匆』を論じる際の射程を狭めてしまう。また、小説の冒頭をかりに新聞連載のそれと同一と考えた場合、小説冒頭にもまだ「作者」は居残っているのだから、「作者の言葉」と物語の切り離せない関係が、かえって見通しの悪いものとなりかねない。こうしたことから、『居候匆匆』においては、物語への導入部である「作者の言葉」が一篇の冒頭だと捉えるのが妥当だろう。

印刷物としての直感性に話題を戻すと、ここでの挿画は、文章を囲む額縁とそれを担ぐ鬼という意匠(図2)である。こうした「作者の言葉」の配置が、「作者」を作品の作り手というよりもむしろ、額に入れられて展示されるような表象内存在の一つに変換しているといえないだろうか。すでに述べた通り、新聞小説の版面という制約もあり、初出では「作者」の虚構内世界への越境は物語構造上の工夫に限定されたものだった。それに対してこの「作者の言葉」は、ページをめくると物語が進むという書籍特有の物理的な特徴に加えて、活字と挿画のより直接的な共同作業を見せることで、『居候匆匆』という小説が文字どおり「額縁」に入れられており、作者もその例外ではないという全体の構想を冒頭で明確に示したものだといえよう。

しかしながらここには一つの問題が残る。それは、『居候匆匆』が一冊の書物であって『時事新報』夕刊の「連載小説」などではないという点である。このことは、巻末に再び登場す

る「作者」にはもちろん、この本を手に取り「作者の言葉」を目にしている読者にも明白である。従って右の「作者の言葉」は、単行本の前書きとしてはすぐわかない文章といわざるをえない。



図2 作者の言葉「居候勿々」一九三七年六月、小山書店。

たどった可能性がある。だとすれば、単行本に初めて見える「作者の言葉」は、ひねりをきかせた予告が未掲載のままだったことを、百間が惜しんだ結果なのだろうか。とはいえ、「本紙の夕刊に連載小説を執筆する事になった」などという表現は、単行本の中では読者を混乱させるものでしかない。ならばこうした「作者の言葉」は、単に改稿作業上の手落ちにすぎないのだろうか。

この疑問を考えるためには、巻末の「再び作者の言葉」を見る必要がある。小説「居候勿々」を囲む額縁は「作者の言葉」だけでは不完全であり、その出口に設けられている「再び作者の言葉」を待つてはじめて、構造上、完結した額縁小説となるからである。これは『居候勿々』一篇の結末に当たるため、次節で新聞小説における末尾と比較することにより、疑問の答えを探りつつ、加筆の意義を明らかにしていきたい。

## 二 連載打ち切りと「作者」の言葉——小説の結末は一つか

新聞小説「居候勿々」は、すでに述べた通り、『時事新報』の終刊号における掲載をもつて打ち切られた。これまで他人のペースに合わせて書くという経験をもたなかったことも災いして、百間の初めての新聞小説は、「手許にはただの一回分の書溜めもない儘にぶつりと切れてしまった」(「再び作者の言葉」)のだった。その最終回は次のように閉じられている。

ネコラツ先生は逃げる様にして書齋に這入ってしまった。

奥さんは、すました顔をしてゐる。御飯はおすみになつたかとも聞かないし、御自分が先生の留守に出かけた事も、その又留守に先生が帰つて来たさうだと云ふ話も何もしなかつた。

僕は先に寝てしまったので、先生が何時頃書齋から出て来たか、知らなかつた。

これは隣人と通じているネコラツと、夫の不義を確信した妻との間に亀裂が走りつつある場面だが、夫妻がこの後どのような経過をたどるのが読者の興味を引くところであり、物語の伏線を張っている部分だといえる。本文の後に大ぶりのゴシック体で記されている【前篇終り】は、これが最後の掲載となることを予期していた編集者が書き加えたのかもしれない。百閒本人は、時事新報社解散の噂を以前から聞いてはいたが、社員が楽観的な憶測を口にしたこともあって、それが現実のものとなったことを知ったのは社屋が閉鎖され名実ともに『時事新報』が消滅した後だったようである（「再び作者の言葉」）。従って、ネコラツの不倫の顛末も含め、百閒が「後篇」をほかに書き継いで完成させるはずだという観測のもと、【前篇終り】の注記で小説が一時凍結されたとも考えられよう。

ところが実際には、そのようなルートはとられなかった。これまで述べてきたように、『居候匆匆』はこうした未完の「前篇」を小説内小説として括り込んだ、ある意味では別個の小説として日の目を見たのである。その際、小説「居候匆匆」の後に加えられたのが、左のように語りだされる「再び作者の言葉」だった。

初めの「作者の言葉」の中で、若しこの小説に締め括りがつかなくなつた時は、篇中の登場人物をみなごろしにするなどと、口から出まかせの事を云つたのが讖をなして、漸く三十六回まで書き進んだ昭和十一年の暮十二月二十四日に、明治以来五十五年の歴史を誇つた時事新報が沈没して、作中の人物だけでなく、作者自身までが波間に漂ふ様な羽目になつたのは、誠に意外の事であつた。

それから凡そ百五十日たつた今日、漸く水中から這ひ上がった様な気持で、更めて続稿に筆を執らうとして、先づ三十六回までの間に顔を出した作中人物の点呼を行つて見ると、遺憾な事には、その大部分は行方不明となつて居り、恐らくは藻屑と消えたものと思はれる。

このように「再び作者の言葉」とは、小説「居候匆匆」が未完である理由を説明したパートといえる。「作者の言葉」を踏まえて「登場人物をみなごろしにするなどと、口から出まかせの事を云つたのが讖をなして」小説連載が途絶したと述べているわけだが、これもやはり単行本のあとがきとしては違和感を覚える表現である。繰り返しになるが、『居候匆匆』は一冊の書物であり新聞の連載ではない。極言すれば、『時事新報』の担当編集者が実際に期待したように、未完の「前篇」に加筆して新聞小説の後半を完結させることもできたはずなのだ。単行本であるにもかかわらず物語を未完のまま放置し、それに対する著者の言い訳があとがきで行われるのが、『居候匆匆』という書物なのだろうか。

そのような消極的評価が妥当でないことは明らかだろう。というのも、すでに述べたように、『居候匆匆』においては、いわゆる私小説的内容を伴った物語は全体を構成する一部でしかない。未完の物語を取り囲む額縁もまた、作家の自作解説であるかに見えて、実は小説

の一部なのである。従って右の「再び作者の言葉」における釈明は、作家の発言として額面通り受け取るのではなく、小説内小説の書き手のせりふとして読み解くことが求められるだろう。前節で述べたように、中篇小説『居候勿々』の冒頭は「作者の言葉」であると同様、それに対応する「再び作者の言葉」も、『居候勿々』の結末だということになる。言い換えれば、「作者の言葉」と「再び作者の言葉」という二つのパートの呼応は、『居候勿々』の小説的戦略なのである。

その戦略とは、新聞小説の読書状況を再現することだと考えられる。すでに確認した通り、「作者の言葉」は小説連載の開始を予告するものであり、「再び作者の言葉」は連載が掲載媒体の都合で突如打ち切られてしまったことを述べている。小説『居候勿々』は当然のことながら、両者の間に挟まれている。全体を整理してみると、はじめに「作者の言葉」、次に小説『居候勿々」、そして「再び作者の言葉」が置かれて最後に「登場人物の其後」が添えられているという順序になる。いうまでもなくこれは一巻の目次にほかならないが、こうした構成が新聞小説「居候勿々」の読書状況を単行本の上で再演していることがわかるだろう。

従って「作者の言葉」は、そこで言及している小説があくまでも新聞に連載されたものなのだとは強調するための加筆箇所だといえる。内容としては一見、小説のメタ情報であり、単行本化の際に書き換えたいし削除されるべき文章であるかのように、実際には初出の状況を再現するために後付けされたのが、「作者の言葉」なのだといえる。その結果、『居候勿々』の読者には「作者」の説明付きで新聞小説「居候勿々」を読むという逆説的な読書体験が提供されることになる。

一方「再び作者の言葉」は、この前書きを擬した「作者の言葉」との対応によって、これまで語られてきた『新聞小説』が未完であり、『居候勿々』一巻は実のところその途絶した小説についての小説であったことを種明かしする役割を果たしている。前掲の通り、「再び作者の言葉」では、「私」の懸念が予期しない形で現実のものになってしまい、小説「居候勿々」が打ち切られた経緯が述べられている。

「作者」の再登場場面という位置付けからもわかるように、「再び作者の言葉」は、「作者の言葉」を踏まえていることを鮮明に打ち出したパートである。こうした「再び作者の言葉」が担う小説的戦略としての機能とは、「作者の言葉」によって形成された読書体験の構図を、改めて書物の形態に見合ったものに書き換えることにあるだろう。つまり、『居候勿々』は「居候勿々」という新聞小説を括弧入れた上で、そのテキストの不運について語った額縁小説であるという全体の構造が、「再び作者の言葉」に至ってはじめて明確化されることになる。同時に「作者の言葉」をめぐる当初の違和感も、戦略の内容が了解されることで完全に払拭されるはずである。

このように、『居候勿々』の小説末尾は、打ち切られた新聞小説における物語の続きではなく、掲載紙の廃刊で執筆活動に支障をきたした「作者」の語りとして付け加えられている。それは冒頭の加筆と一対をなすことによって、単行本の読者に仮想的に新聞小説を読ませた上で、最後にその読書体験自体を高次の物語階層で括り込むという『居候勿々』の小説的

戦略を担っていた。

こうした『居候勿々』の額縁構造の戦略性は、現実から完全に独立して完結した虚構世界としてのみあるかのようにふるまう小説のありかたとは対照的なものである。小説があくまでも商品として流通する印刷物の一種であり、ひとたびその経路が断たれてしまえば読者のもとには届かないという見落とされがちな事実を、『居候勿々』は小説の中で問題化している。新聞小説としての初出、その打ち切り、そして単行本へという経過があったからこそ可能な問題提起であり、それをノイズではなく方法として取り上げたところに、『居候勿々』の加筆の特質があるといえよう。

ところで『居候勿々』の巻末には、こうした「再び作者の言葉」の次に、「登場人物の其後」という第三の加筆箇所が配置されている。前者が小説「居候勿々」の額縁を形成する役割を果たしていたのに対して、後者は文字どおりの後日譚であり、新聞小説の物語世界から放り出されて「波間に漂」っていた登場人物たちのその後が語られるパートである。「作者」の語りによって小説「居候勿々」は閉じられたにもかかわらず、最後に再びその物語世界を見直すことで、『居候勿々』は結末において額縁小説の構造から抜け出していく。これまで検討してきた小説の戦略性からは蛇足のようにも見えるそのような場面は、一篇に何をもたらしているのだろうか。

「登場人物の其後」は、「再び作者の言葉」に引き続き「作者」の語りで進行し、「奥さん」の出産をはじめとして、小説「居候勿々」に張られた伏線の回収がなされる。そこで読者の注意を引くのは、「作者」の小説「居候勿々」との関係が当初とは変化している点である。

万成は再びネコラツ家に帰らなかつた。今はまたもとの様に新聞配達でもしてゐる事であらうと思ふ。(中略)

ネコラツは秘かに近隣の佳人と款を通ずる傍ら、西川小畑の輩を手先に使つて何か学内に事をたくらんでゐたらしいけれど、この小説の続いた限りでは、まだ何事も表に現はれてゐない。作者が筆を洗つて新稿にのぞむ機会があつたら、或はその成り行きを見届ける事が出来るかも知れない。

鳥雄はまだ声変わりもしない前から神経衰弱の様になつて、毎日めそめそと拗ねてばかりゐる。不意に夜中に起き出して、ネコラツ夫婦を驚かしたりしてゐる内に、段段かうじて来て、黙つて家を抜け出す様になつた。夜通しどこかを歩き廻つてゐる間には、猫の祟りで胸突坂あたりの川に落つこちるのではないかと作者は心配してゐる。

三門膾葜獣は沈没騒ぎの時海中に泳ぎ出した儘、何処へ行つたか解らない。つかまへてその後の模様を聞く事が出来ないのは残念である。

「新聞配達でもしている事であらう」、「成り行きを見届ける事ができるかも知れない」、「川に落つこちるのではないか」という予測・予想の語り口からは、「作者」が「書生に化



けて」一人称で語るといふ、当初の物語設定が失われていることがわかる。「作者」がネコラツの息子・鳥雄の行く末を「心配」したり、万成が教わるドイツ語教師の三門から「その後の模様を聞く事が出来ない」ことを残念がったりしている点からも、それは明白だろう。従って、小説「居候勿々」においては、「作者」が「化け」ることでみずからの小説の登場人物たちと同一の物語世界内への越境が筋立てられていたのに対し、その伏線の回収を行う「登場人物の其後」では、小説を書く場と書かれた小説の物語世界という、二つの物語階層をめぐる境界<sup>4</sup>そのものが消失していることになる。これは『居候勿々』冒頭と対応しており、小説の支配者としての「作者」がいなくなることで、「作者の言葉」において危惧された登場人物の暴走がなれば現実化している場面だといえる。

また小説「居候勿々」が語りだされた時点での、内田百閒(間)と同一視される「作者」が主人公であるという物語設定の消失は、「再び作者の言葉」の記述に対応している。すなわち、「作者」と主人公が明確にそれぞれ独立した一人の人物として書き換えられたことは、「作中の人物だけでなく、作者自身までが波間に漂ふ様な羽目になった」結果要請された、小説「居候勿々」の物語世界を閉じるための処理といえるだろう。しかしその際に「作者」は、「登場人物を塵殺にして、結末をつける」(「作者の言葉」)のではなく、小説を支配する立場を捨てて、書かれた存在に完全に移行する方法をとったのだ。というのは、右の「再び作者の言葉」が物語設定上や疑問の残る表現をとっていることからわかるように、主人公の不在が即、作者の不在となる契約を破棄しなければ、『居候勿々』全体を支える額縁構造に矛盾が生じてしまうからだろう。

このように、小説の構造が改めて組み直される「登場人物の其後」では、小説内小説の書き手という書きながら書かれる存在が、みずからの作り出した物語の世界に収斂される様子が筋立てられているといえよう。言い換えれば「登場人物の其後」とは、「作者の言葉」と「再び作者の言葉」について、その小説における額縁の機能を相対化しつつ、記述された内容をさらに一歩進めて、小説「居候勿々」における「作者」と主人公兼語り手の関係を見直していく加筆箇所なのだと考えられる。

### 三 『居候勿々』制作の方針——私小説性の回避

加筆作業の結果、『居候勿々』に付与された特質とは、活字メディアを通して流通するという小説の商品性が物語および小説家に与える影響を、当の小説の中で形象化して見せた点にあった。こうした問題提起は、新聞小説の冒頭に見られる通り連載開始の時点においても構想されていたが、まさに媒体の都合で発表の場自体が失われてしまったことで、十分な主題化がなされる前に挫かれてしまったといえる。翻っていえば、『居候勿々』制作に際しての加筆は、そのような当初のテーマに、実地に味わった経験も踏まえてより明確なビジョンのもとで再挑戦するという意義があったのではないだろうか。すでに述べたように、『時事新報』廃刊の日に掲載された最終回は、おそらく編集者の手で「前篇」に位置付けられ、「後篇」を待つ物語として区切られていたが、結局それが書かれることはなかった。これま



で検討してきた通り加筆作業の内容は、新聞小説「居候勿々」には手をつけず、その周囲に「作者」の言葉を張り巡らせるというものだったからである。言い換えれば、『居候勿々』制作において明確化されたのは、未完の物語にはそれ以上手を加えないことで、小説の書き手と読み手をつなぐ活字媒体の影響の大きさに光を当てるといって、メディア論的な意識に立ったビジョンだったということになる。

しかし本当に、新聞小説「居候勿々」を未完のまま別の小説の枠に組み入れる必要があったのだろうか。期待された「後篇」を書き足して物語を完結させた上で、「作者」の語りを用意することもできたのではないか。むしろ、全体の中核部分に当たる小説「居候勿々」が完結していたほうが、「作者」を署名者・内田百閒（間）と同一視する読者にとっては、『居候勿々』の商品的価値が高いということになりはしないか。にもかかわらず、右のような加筆がなされたという事実からは、同作がメディア論的な問題を提起するに当たり、未完の小説という形態を通じてこそ指し示すことのできる何かを含んでいたことが予想される。以下では、新聞小説に「後篇」が書き足された場合に想定される全体への読みの変化を検討することによって、『居候勿々』の加筆の背景を遡ってみたい。

すでに触れた通り、学生の万成を主人公兼語り手とする小説「居候勿々」の内容については、法政大学内部での教職員間の対立を発端として、最終的に野上豊一郎はじめ百閒を含む三十六名の辞職が決定した、一九三三年から翌年にかけてのいわゆる法政騒動に取材していることが指摘されている。さきに挙げた酒井英行の議論は、万成の下宿先の主人である吉井ネコラツが、森田草平と関口在男という百閒と鋭く対立した二人の教員の「モニタージュ写真」であることを明らかにしている。また、怠惰なドイツ語教師・三門オットセイが百閒のセルフ・パロディとして造型されていることは改めていうまでもない。吉井家に入りする怪しげな若者たちは、草平に取り入って教員のポストを得ようとする策動派の一派である。

こうした物語の構図が、人物の細部が変更されているとはいえ、法政騒動を想起させたであろうことは想像に難くない。というのも、この事件は、『居候勿々』の刊行およびそれに先立つ新聞小説の連載開始時点においては、いまだ世間の記憶に新しかったはずだからである。一九三四年のはじめに野上派の連袂辞職が明らかになった直後から、中心人物同士の応酬や周囲の文学者の裏話が当時の雑誌紙面を飾ったことはもちろん、百閒みずからもそのような話題を取り上げた随筆を発表している。例えば、「学校騒動記」（初出不詳、『続百鬼園随筆』一九三四年五月、三笠書房）では学内の殺伐とした様子がえがかれており、その続篇である「学校騒動余殃」（初出不詳、『無絃琴』一九三四年十月、中央公論社）は、策動派の先頭に立った草平の倫理性を問いただす内容である。このように、小説「居候勿々」が法政騒動を批判的に書いていると解釈されるのに十分な資料は、周辺に数多く存在していたといっている。

従って、未完の新聞小説に「後篇」が書き継がれていたとすればその物語は、万成が吉井家を訪ねる人物の正体に気づくのと前後して教職員の対立が表面化し、ネコラツの一派か

ら排撃された三門オットセイが大学を去るまでを描くものになったはずである。このような類推が成り立つのはむしろ、小説「居候勿々」がいわゆる私小説として読みうる構図のもとで人物を配置しているからにほかならない。言い換えれば、ここで推測したような内容の「後篇」として書き足した場合、その加筆作業が意味するものは、小説「居候勿々」が著者の経験に基づく私小説であることの裏書きだということになる。

このように小説「居候勿々」の基本的背景を踏まえて架空の完結篇を想定してみると、現行の『居候勿々』を制作する際に行われた加筆の方針は、その反転として可視化されてくるのではないだろうか。すなわち、初出テキストに対する、「後篇」を書き足さず未完の小説内小説として再定位するという扱いは、『居候勿々』が読者の好奇心を刺激する醜聞に材をとった私小説として読まれることを回避するための方策であると考えられる。これは前述のように「作者」が作中の登場人物として位置付けられている以上、百閒が私小説の著者となるのを嫌ったというよりは、「作者」を私小説の書き手にしないようになされた処置だろう。事実、現行の『居候勿々』では、私小説風の小説内小説が唐突に途切れて「再び作者の言葉」がその理由を解説するというルートをとることで、万成による物語への興味は逸らされ、『居候勿々』全体の構造への注目が促されている。

ではなぜ『居候勿々』の「作者」は、この一篇が私小説となることを回避しているのだろうか。その理由を一言でいえば、自意識に執着した態度を離れてなおかつ小説を制作するという筋書きのもとで、登場人物としての書き手の自律性を担保するためではないかと考えられる。小説の中に小説家が現れば、すなわちその小説の作者本人だと読み替える慣習が定着した読者と、そのような読解モードを利用して執筆する作家という関係に従う限り、作家の私生活をめぐる好奇心への対処抜きに小説を書くことは難しいからである。

しかしもちろん、作家と同一視される人物が小説の中に登場し、語っていく中で虚構内在としての自律性を獲得していくという筋書きは、安藤宏が「書く「私」や「小説家小説」と呼んで特徴づけている<sup>5)</sup>ように、『居候勿々』が書かれた一九三〇年代前後にきわだつて多く見られる。ところがこうしたモチーフはその性質上、いわゆる私小説における小説家の自意識の表れとして読まれることを予期したものである。そのような技法の使い手は多くの場合、実体験を物語に書き換えることから出発し、やがて小説を通してみずからの人生を演出していくことによって、破滅であれ調和であれ、現実と小説の世界の隔たりを埋めるべく努めている。

作者という立場へのこうしたアプローチによる問い返しの背景には、いわゆる私小説論争において久米正雄が強調した「芸術の基礎」としての「私」や、伊藤整によるその具体化といえる「内なる声による発想」の重視があった。その表れとして反復される自己批判と自己弁護が、「自己暴露の儀式」に作家のイデオロギーの左右を問わず欠かせない手続きだったことは、イルメラ・日地谷＝キルシュネライトが早く指摘した通りである。『居候勿々』が新聞小説「居候勿々」に加筆して発表されたのは、こうしたいわゆる私小説の流行期だったということになる。

一方でこれまで繰り返し述べてきた通り、『居候勿々』は新聞小説の連載打ち切りという執筆活動への打撃を原動力に変えて書かれた、「けがの功名」ともいうべき成立をもっている。新聞小説の物語を中心に置いて、その周囲に書き加えられた新たなパートが、小説の構造を変化させ、「作者」を現実の作家と切り離して物語内部に位置付け直していく筋書きをたどっていることは、『居候勿々』制作における物語手法発見の過程としても跡付けられるだろう。従って「作者」の存在は、加筆作業を通して新聞小説の段階から飛躍的に重要なものになっていったと考えられる。その契機は、作家が媒体の都合から守られていないという、百間が現実世界で味わった苦い経験にこそあった。

こうした『居候勿々』の成立を、右のような同時代的背景のもとで捉え直したとき、この一篇における私小説回避は、小説と書き手の関係に独自の解答を導くための選択であったといえるだろう。その解答とは、「私」を軸として小説を組み立てていくにあたっては、書き手が文字どおり括弧入れされた「作者」というキャラクターの表象性を徹底すべきだという立場だったのではないかと考えられる。

ここでいうキャラクターの表象性とは、小説の背景となっている現実の出来事を踏まえ、物語世界を機能させることができるような人物造型がなされているという意味である。いわゆる私小説についても、今日読むに耐えるテキストがこうした特徴を少なからず備えていることを踏まえれば、『居候勿々』が回避したものとは、実は下馬評的な好奇の目で小説が消費されてしまう危険だったともいえるかもしれない。

こうした「作者」というキャラクターの表象性について改めて確認すれば、『居候勿々』では、前述の「登場人物の其後」において明確化されているように、作家の物語世界に対する絶対的優越が否定されることはもちろん、虚実緋い交ぜの「小説家小説」の方法も退けられていた。つまり、『居候勿々』は、私小説的側面で読者の内容理解を助けるさまざまな参照項をもっていたにもかかわらず、その活用を拒んでいるのである。

もちろんその理由には、大学を辞職した後までこのトピックに関わりたくないという百間の心情もあったかもしれない。しかしその解釈は、先ほど述べた通り、百間みずからが法政騒動についてコメントしていることや、そもそも新聞小説の素材がその経験に基づいているという事実と矛盾する。従って、小説「居候勿々」はたしかに私小説的内容をもつが、『居候勿々』全体をもその枠組みに当てはめた理解の射程では、加筆の過程で組み直された小説構造がどのような問題を提起しているのかを見通すことはできない。むしろ、私小説的読み込みの可能な内容を「作者」の語るパートで囲い込むことによって小説内小説の階層に格下げし、「作者」の執筆プロットに物語の焦点を移動させていく『居候勿々』の構想からは、私小説的読み込みという読解態度そのものを言外に批判している気配さえある。言い換えれば、作中に現れる「作者」もしくは「私」の捉え方に転換を迫ることが、『居候勿々』のメディア論的な問題提起の基底にはあったのではないだろうか。

おわりに

以上、内田百間の小説『居候勿々』を取り上げ、新聞小説としての連載時にはなかった加筆部分に着目することで、一篇の特質を探り、それがどのように獲得されていたのか、その背景を明らかにすることを試みた。

『居候勿々』は、未完に終わった新聞小説「居候勿々」を、加筆した「作者」の語りで囲い込むことで小説内小説の形で甦らせており、全体としては額縁小説として完結しているという構造をもつ。本稿では、まず新聞小説と単行本の本文を比較することによって、小説の冒頭が後者では加筆された「作者の言葉」に移動していること、結末については、前者が物語の途中で打ち切られた状態であるのに対し、後者では「再び作者の言葉」が該当しており、続く「登場人物の其後」が後日譚として付け加えられていることを確認した。次にこうした比較を踏まえ、「作者の言葉」以下の加筆部分が加わることによって、『居候勿々』に新聞小説とはどのように異なる性格が付与されているのかを考察した。以上によって『居候勿々』の成立と性格を具体化し、最後に私小説の流行という同時代背景のもとで、一篇の全体的な性格付けを試みた。

検討の結果、『居候勿々』は、活字メディアを通して流通する商品という小説の属性に光を当て、それが物語および小説家に与える影響を、物語の一部として形象化した小説であることが明らかとなった。そのような主題の独自性は、未完に終わった新聞小説の物語を書き足して完結させるのではなく、その周囲に「作者」を名乗る登場人物の語りを配置することで全体を額縁小説の構造に組み直すという、特徴的な加筆作業によって獲得されたものである。

さらに、右の議論から明らかとなった小説の構造が提起している問題の背景を遡るために、加筆作業の内容が、どのような方針のもとで行われたのかという問題を新たに設定し、検討を行った。つまり、加筆作業が新聞小説「居候勿々」への内容的な書き足しではなく、未完の小説を囲い込む額縁の設置のために費やされている理由はどこにあるのかという疑問である。この問題を考えるにあたっては、未完の小説「居候勿々」がどのような内容であり、かりに書き足された場合に物語はいかなる経過をたどりうるのかを推測することで、現行のテキストが何を回避しているのかを考察した。

この考察において重視したのは、小説「居候勿々」が私小説として読みうる内容をもつという点である。先行研究ですでに指摘されているように、万成を主人公兼語り手とする物語は、人物の配置や構図がいわゆる法政騒動における人間関係を模したものであるといえる。百間が実際に経験したこの事件については、当時文壇の内外で多くの言及がなされ、百間も随筆の中で取り上げているため、物語の登場人物に擬せられた大学の関係者が誰であるかは、新聞小説の連載開始時点でも明らかだった。

従って、小説「居候勿々」を私小説として読むための材料はそろっており、こうした読解モードに基づけば、未完の物語がたどる筋書きもたやすく見通せるものであったといえる。しかし実際にはそのような加筆のルートは選択されず、山場となるはずの法政騒動の

場面も描かれなかった。このことから、未完の小説を書き足さずに小説内小説として再定位する加筆作業の際にとられた方針とは、私小説の回避にあったと考えられる。

最後に、そのような方針の基底にある問題意識を探るために、加筆の過程において回避されていることが明らかとなった、いわゆる私小説における作中人物としての作者の基本的性格を確認した上で、『居候匆匆』に登場する「作者」との比較を行った。その結果、『居候匆匆』においては、自意識への執着を離れて、なおかつ小説を制作するという筋書きのもとで登場人物としての書き手の自律性を担保することが問題意識として見出された。それは、私小説が読まれる際に見過ごされがちな、現実の作家と小説の「私」が異なる人物であること、言い換えれば、表象内存在としての「作者」の案出は、小説と書き手の関係を見直すための方策であったと考えられる。

とはいえこうした問題系は百間の執筆活動の中で、『居候匆匆』においてはじめて示されたものではない。実のところ「書く「私」と現実の作家を切り離そうとする動きは、『居候匆匆』の十年ほど前に書かれた「蜻蛉玉」(『百鬼園随筆』一九三三年十月、三笠書房)に、「私とは、文章上の私です。筆者自身の事ではありません」という宣言に見られた。ただこの時点では、随筆という枠組みのもとでの「私」と現実の作家を同一視する読解に反発が試みられていたのに対し、『旅順入城式』(一九三四年二月、岩波書店)に収められた同時期の小説には、そのようなテーマは見受けられない。従って、一九三〇年代前半までは随筆の領域で模索されていた、作家と文章をめぐる問題意識が、『居候匆匆』では、執筆活動における実体験を踏まえ、小説にフォーカスして具体的に問題化されたということになるだろう。『百鬼園随筆』以後、一九三〇年代後半にかけて百間のテキストにおいては、その書き手やメディア状況に関する言及がきわめて多く見られる。イメージの産物としての作家像を戦略として利用する私小説とは対照的に、現実の作家と表象内存在としての「作者」の切り離しを図ることで書かれた「私」の可能性を広げていく試みは、七人の「私」が一堂に会して話し合う「七体百鬼園」(『新青年』一九三九年九月)にやがて結実していくことになる。その地点に至るまでの「作者」の道のりを跡付けていく作業は、今後の課題としたい。

注

1 酒井英行「『居候匆匆』——法政騒動の百間と草平——」『内田百間——「百鬼」の愉楽——』二〇〇三年六月、沖積舎。

2 小山久二郎「私の百間先生と谷中安規画伯」『居候匆匆』一九八二年二月、六興出版。

3 平山三郎は全集解題において、百間が挿画担当の谷中安規に、執筆中の回のあらすじを説明し、希望する絵柄を指示したハガキを紹介している(「解題」『内田百間全集』一九七二年二月、講談社)。その多くは速達であり、執筆に苦心している様子を窺わせる。

4 ここでの境界とは、マリー・ローレルライオンが提出した、物語言説における「発語内の境界」と物語内容における「存在論的境界」の両概念(『可能世界・人工知能・物語理論』岩松正洋訳、二〇〇六年一月、水声社、二九七ページ)を指す。二〇世紀欧米の非リ

アリズム小説を研究する岩松正洋は右の提案を受けて、その越境行為である「境界侵犯」  
ないし「階層違犯」を、「虚構とはなにか、物語とはなにか、文字とは、ページとは、本  
とはなにかを問う」虚構物語の戦略として位置付けている（「道に沿って持ち歩く鏡」の  
たくらみ）『フィクション論への誘い——文学・歴史・遊び・人間』大浦康介編、二〇一  
三年一月、世界思想社）。

<sup>5</sup> 安藤宏『自意識の昭和文学』一九九四年三月、至文堂。

<sup>6</sup> イルメラ・日地谷IIキルシュネライト『私小説 自己暴露の儀式』三島憲一・山本尤・  
鈴木直・相澤啓一訳、一九九二年四月、平凡社。

## 第二部 百閒の戦争

——一九四〇年代のテーマ性——

#### 第四章 「東京日記」論

——「東京」を書き留める視角を手がかりとして——

はじめに

「東京日記」(『改造』一九三八年一月)は、「私」が東京で生活する中で遭遇する奇怪な現象を描いた、二十三の掌篇からなる小説である。三島由紀夫が絶賛したこと知られ、百閒の作品の中でも比較的広く読まれているものの一つといえる。

「東京日記」については先行研究も多く、主に都市論と表現の分析が行われてきた。前者の観点では西成彦を筆頭に、具体的な地名が作中に書き込まれていることに注目した川村二郎、「魔都」としての東京を見る鈴木貞美、「一」における巨大な鰻の上陸を取り上げて物語の「帝都」破壊という志向を読み取った丸川哲史、さらに一九三七年の日中戦争開戦など、不穏な社会情勢が比喩的に描かれているとする高橋みなみの論などがある。

後者の観点では、先に挙げた三島由紀夫が幻想を「リアル」に書く表現技術の高さを評価したほか、渡邊浩史は作品の「新しい小説」という同時代的位置を明らかにすることを試み、星野英樹があたかも映画の一場面のように感じられるという意味での「映像的表現」に着目している。

このように「東京日記」に対しては、物語の内容と言説の両面について一定の研究的蓄積を見ることができている。一方で作品の題名については右の先行研究においても、具体的な言及は見られない。そこで本稿では「東京日記」という題名に着目することによって、作品における「私」のありよう、ひいては語りの特徴を考察してみたい。

次節で述べるように〈東京日記〉という題名の作品は幕末から現代まで数多く作り出されてきた。それらの多くに共通するのが、語り手または主人公にとって「東京」が未知の街であり、一時滞在する場所であるという点である。対して百閒の「東京日記」は東京在住の「私」によって語られている。つまり〈東京日記〉の歴史的な性格に照らして、百閒の「東京日記」には題名と内容に齟齬があるといえる。

こうしたことを踏まえたうえで本稿では、これまで言及されてこなかった「東京日記」の側面に光を当て、百閒の執筆活動における位置づけを明らかにすることを目的として、題名から浮かび上がる読みの地平を確認した上でテキストの読解を試みる。具体的には前述の〈東京日記〉がどのような立場から書かれているのか、すなわち百閒の「東京日記」を読むにあたり機能しうる読解の前提とは何なのかを整理し、その前提が作品内容に照らしてどの程度機能しているのかを百閒のこれまでの執筆活動の特質を踏まえつつ考察する。

以上のように題名の分析を通じて「東京日記」の問題点を抽出し、その視点からこれまで先行研究において取り上げられてこなかった章を中心にテキストの読解を行う。さらにそれらのテキストが「東京日記」の内部で完結することなく前後の作品と強力なつながりを有



していることを指摘する。以上の手続きを通じて、「東京日記」が百間の執筆活動においてどのように位置づけられるのかを明らかにすることを試みる。

#### 一 先行研究の検討

「東京日記」に対しては、百間の作品のなかで比較的多く言及や研究がなされている。最も早いものは小林秀雄による時評である。小林は「東京日記」が物語としては「面白い」ことを認めつつ、その背後に作者の「率直な大事なもの」が見出せないとして批判した。

どうもかういふ作品は何といつていいか検討がつかない。好きかといはれれば言下に嫌ひだとは答へられるが。しかし面白い事は面白い。夢物語りを幾つも集めた様なもの、その悉くがエロチックである。面白いと思つて読み進むうち、途中で飽きて来た。水が一杯のみたい様ないやな気分になつた。どうしてだかわからない。この作家には何かしら率直な大事なものが欠けてゐる様な気がした。<sup>2</sup>

百間を諧謔と幻想の書き手とする今日的な作家像から見れば、小林の評言は単なる外的な読みともいえる。しかし後述するように作品の題名に「日記」とつくことで特定の読みの地平が導き出されることは否定できない。すなわち小林は「東京日記」に何らかの事実性を期待していたのではないか。内容が超現実的であっても、あるいは「私」の視点に都市をさまよう者の鬱屈といった「内面」が読み取れるようなものであれば、評価は異なっていたかもしれない。ただ実際には、「東京日記」は事実性や真実性を「大切なもの」に据えた作品とは評価しがたい。その結果、こうした批判がなされたものと考えられる。

一方、室生犀星は作品を高く評価した同時代人の一人である。犀星は「各章が別々の特異な感じの世界を表はしたもので、かういふ世界では今のところ日本では内田百間の独擅場」であり、同じ「感覚世界」の表現としての『冥途』と比較しても「手腕も冴え素材も自由に馳駆してゐる」として、百間が「衰弱しないで自分を育ててゐることの熱心さに注意したい」と述べている<sup>3</sup>。こうした評価からは、作風の大きな変化は見られないものの、作品の舞台が作家の故郷・岡山から、文壇の中心地である東京に移ったことで、犀星をはじめとした東京在住の読者にとってより受け入れられやすい内容になったことが読み取れる。なお、ここでは立ち入った比較は行われていないものの、『冥途』との比較は、後述するように「東京日記」の百間の執筆活動における位置付けに際して見逃せない点である。

また、三島由紀夫は同作が『現代の文学』に収載された際に解説を担当し、「柳検校の小閑」などととも「東京日記」を高く評価した。三島は小林のような作者の「大切なもの」を作中に読み取るうとはせず、「東京日記」において「現実と超現実の間の橋」が文章の技巧によって実現されていることを評価した。次に掲げるのは「二」への評言である。

「何となく落ちてくる滴に締めりがなく様で」という、故意にあいまいにされた、故意を持って回られた言葉づかいによって、われわれはもう百間のペースへ引き入れら

れてしまうのである。この一行は、一方から見ると、単なる現実の感覚的描写でもあり、他方から見ると、異常事の子兆のようでもあるから、この一行がいわば、現実と超現実の間の橋をなしているのである。(中略) お濠の中から白光りする水が一つの塊りになつて揺れ出す異常事を、テレビのニュースを見るように、如実に見てしまうのである。

4

こうした言辞は、三島が『遠野物語』の「炭取の回転」<sup>5</sup>に通じる表現技術を「東京日記」に読みとつたものと見ることができよう。げんに河野龍也は「東京日記」評価における三島の観点が「小説とは何か」での主張と一致していること、すなわち「異世界との接点を言葉でどう作るか」にあったことを指摘している<sup>6</sup>。しかし三島は単に『遠野物語』と同様の技術を見出しただけではなく、「文章家」の肩書をもって知られていた百間の作品であることに加え、百間が「写生」を一つの出発点とした<sup>7</sup>作家であることも踏まえていたのではないか。こうした書き手による描写に「現実らしさ」を追求する志向が読み取れるからこそ、『遠野物語』における幽霊の表現を好んだ三島の心をとらえたと考えられる。

以上のように同時代の文学者による言及は評価が分かれている。一方、九〇年代には主に記号論的都市論の立場から複数の論者が積極的な分析を試みてきた。その早い例である川村二郎は「東京日記」に具体的な地名が書き込まれていることに着目し、「東京の街めぐりの情景は、それらの具体的な地名を通じて、明瞭な輪郭を与えられている」からこそ内容の奇妙さが際立っているとし、現存する場所を枠組みとした幻想の物語という見取り図を描いている<sup>8</sup>。また鈴木貞美はこのような「東京」という場所で展開される幻想的な物語が、「魔都」として東京を描き出していると指摘した<sup>9</sup>。

これらの論を基本的に継承する吉川望は、「東京日記」の舞台を「日常的怪異空間としての東京」と位置付け、「東京日記」前後の百間による怪異への言及を参照しつつ「非合理への肩入れ」が作中にも見られ、「日常的に非合理をはらんだ豊かなモダン都市東京の姿が、愛着のうちに形象化されている」と述べている<sup>10</sup>。

こうした「東京」の幻想物語という見方に対し、丸川哲史は作品を「時代を盛る器」と見る立場から、「東京日記」が発表された一九三八年の社会情勢を踏まえて作中の「東京」がすなわち「帝都」にほかならないことを指摘した上で、「一」を分析することで「帝都」を破壊する物語を「東京日記」に見出した<sup>11</sup>。「東京日記」が「帝都」批判の物語であるという読みはこれまでになかった立場であり、ともすると百間が「モダン都市」に怪異の舞台を求めたという結論に終始しがちであった「東京日記」論に風穴を開けたといえる。

この丸川論を継承して高橋みなみは「東京日記」の内容を「帝都」に対する評価の比喩として読解し、一九三八年という発表年の時代上京をふまえつつ「帝国・日本解体の危機に直面している」ことへの「憂慮」を作品に読み取っている<sup>12</sup>。

また山田桃子は「帝都」の歴史性をテーマに「東京日記」を読み解き、「東京日記」は、文字通りの〈帝都〉(執筆注・傍点は原典による)を、〈帝国〉の時間的・空間的連続性の

中心としてではなく、過去と関わる断片的な形象が唐突に到来し、現在において異質な形で組み合わされている」都市として「東京」を語っていると述べている<sup>13</sup>。

このほか渡邊浩史は「東京日記」の表現に当時の文学形式をめぐる挑戦の影響を見ることができ、同作が当時の文学思潮に照らして「新しい小説」として位置付けられることを指摘し<sup>14</sup>、星野英樹は作中のオノマトペに着目した「修辞技法」の分析を試みている<sup>15</sup>。内容とりわけ都市表象を問題にする議論が大勢を占める中、文章表現を議論の中心に据える点で、三島由紀夫の評言を積極的に継承した論であるといえる。

このように「東京日記」に対する先行研究は表現と内容の両面をめぐってなされており、「モダン都市東京」を作品の舞台として活用したという見方と、「帝都」批判を読み取る見方が示されている。こうした「東京日記」論ではモダン都市発展のかたわら戦争の足音が身近に迫りつつある時代を生き延びた書き手として評価する契機が生み出されてきたといえよう。一方でこのようなテーマが「東京日記」を構成する篇の全てに必ずしも当てはまるとはいえないことには注意しなければならない。「帝都」批判として読む論で取り上げられているのは、当時の宮城に近い土地を舞台とする「一」や「四」、満州国からの留学生が登場する「十一」のように、比較的容易に「東京」の「帝都」的な要素を拾い上げることのできる章である。一読すれば明らかかなように「東京日記」にはそのようなテーマ性を読み取ることの難しい章が多く含まれている。「東京日記」全体を見渡すと、「帝都」のテーマは作品の一侧面にすぎないことがわかる。

そこで「東京日記」全体の性格づけを行うために、個々のテキスト分析から一旦離れ、一篇の構成に注目してみたい。前述のように「東京日記」は二十三の掌篇から構成され、それぞれが「東京」の各地を舞台としながらも一話ずつ完結している。上下からなる「十一」という例外を除いては、各話の間に関わりを見出すことの難しい掌篇の寄せ集めである。

そのような短い物語の集合を一篇にまとめているのが「東京日記」という題名といえる。互いに関わりの見出せないエピソードに共通するのが「私」という語り手兼主人公であり、その「私」が書いた「日記」という枠組みがこれら二十三篇を一つの作品たらしめる支持体なのである。

したがって「東京日記」を論じるにあたり題名に注目することは、作品の性格を把握するための有効な手がかりとなると考えられる。とりわけ耳慣れた響きである「東京日記」には、複数の先行する同一タイトルのテキスト（以降〈東京日記〉と表記する）が存在する。これらが生み出す読解の地平が「東京日記」の読みにも影響すると考えることは難しくない。こうした見通しのもと、次節では〈東京日記〉群に共通する特徴を検討した上で「東京日記」の成立を確認し、「東京日記」という題名が惹起する読みの前提を考察する。

## 二 〈東京日記〉の特質と「東京日記」の成立

「東京日記」という表題をもつテキストは幕末から現代まで数多く存在する。本節では百閒の「東京日記」がその題名から惹起する読みの地平を見定めるため、これまでに書かれて

きた種々の「東京日記」の性質を概観する。

「東京」という言葉が日本で用いられるようになったのは明治維新によってである。一八六八年、それまでの「江戸」が「東京」に改称され、一八七一年に東京府が置かれた。一八七八年に東京府は十五区六郡となり、一八八九年に内十五区が東京市とされた。一九三二年に二十区が新設され、一九四三年に東京府全域が東京都となった。一九四七年に東京二十三区が特別区として定められた<sup>16</sup>。また早い時期には「とうきょう」とも「とうけい」とも読まれ、時代によって「東京」という言葉の指す範囲も変化してきた。

こうした「東京」の変遷を踏まえたうえで、さまざまな書き手による「東京日記」を概観していきたい。まず、最も古い「東京日記」の一つとして、一八六九年写の宮島誠一郎「東京日記」が挙げられる。宮島誠一郎は当時米沢藩士で、明治維新前後での藩政改革に際して混乱する武家社会のために奔走し、東京に滞在していた<sup>17</sup>。表紙の小書きによれば一八六八年十二月下旬から翌二月中旬の記録である。

次に一九一〇年二月末から三月上旬の『東京朝日新聞』では、「米国観光客 エス、エス」の署名による連載「東京日記」が見られる。

また一九一一年には川端龍子『漫画東京日記』が新潮社より刊行されている。元々『国民新聞』で連載された「東京日記」は、都市化の進む東京府下の事件を映している。いわゆる三面記事のような内容に挿絵を加えることで、噂話に近い読み物としている。これらと宮島の「東京日記」との間に四十年以上の空白がある理由ははっきりしないものの、この頃から軽い読み物の題名として「東京日記」が見られるようになり、文学的な作品のそれを含め今日まで続いていく。

このように「東京日記」という題名をもつ作品には、百間の「東京日記」が発表された時点では「帝都復興」以後急速な発展を見た大都市の物珍しさを描くという視点が伴っていた。「エス、エス」の例に顕著な通り、いずれの「東京」も書き手にとって見慣れない風景や奇妙な出来事の起こる場であったことがわかる。

百間の「東京日記」もやはり、東京に住む「私」が語り手兼主人公となって東京の街をさまよひ、さまざまな体験をする。しかしこうした筋書きは実際の日記や出来事の記録として書かれた〈東京日記〉とは事実性の点で性質が異なる。一方で作中の「私」を読者に知られている作家・内田百間と重ね合わせて造型するという百間作品の常套手段を踏まえるならば、「上京者」<sup>18</sup>であるとはいえ東京に住んで数十年の経過している語り手に「外」から都市を見る目が備わっているのか疑わざるをえない。つまりこれまでに見た「外」からの目で書かれるという特徴にも合致しないと思われる。

これを解くカギとなるのが「東京日記」の成立である。保田和彦は「東京日記」がホテルで書かれたことと「非日常的な」作品の世界の間の関連を示唆している。

現在の東京ステーションホテルで内田百間が仕事をしたのは、この時期では確認しうるかぎり「鉄道館漫記」で触れられている「東京日記」の一度きりである。これは、日常の生活の空間とは異なった場所でのごく特別な事例と考えられる。このようにして、

日常生活と異なった都市のホテルの一室で執筆されたこの作品が、都市東京を舞台とした非日常的世界として創作されたことは興味深い。<sup>19</sup>

『百鬼園戦前・戦中日記』（慶応義塾大学出版会、二〇一九年）には、「東京日記」をめぐっては一九三七年十一月二十六日に『改造』の編集者と新年号の打ち合わせが行われ、百間は三十日から書き始めて十二月十六日に脱稿したとある。はじめは自宅で執筆していたものの、十二月四日に東京駅の東京鉄道ホテルを訪れ、「改造」の原稿がすむ迄、当分あるつもりで逗留することにした。つまり二週間弱の間、いわゆる缶詰めになって書いたのが「東京日記」ということになる。

これは翻つていえば、一種の旅客となつて執筆に取り組んだということにほかならない。現実的には自宅での執筆で生じうるさまざまな障害となる要素を排し、場合によっては制作側が書き手の所在を把握しておくために宿泊施設が執筆の場として利用されるが、それと同時にこうした「缶詰め」がすなわち自宅以外での滞在を伴うということは、日常生活を送る場を離れて執筆する時間が与えられるということでもある。言い換えれば宿泊客となつて執筆することには、書き手の視点を変える契機が多分に含まれていると考えられる。

とりわけ「東京日記」では、後述するように主人公兼語り手の「私」が「仕事の都合で」「東京駅の鉄道ホテル」に宿泊していたことが最終章「二十三」で明かされており、こうした「缶詰め」の効果を受けて、あたかも「魔都」であるような東京が「私」の前に展開していたことの理由が示唆されているといえる。つまり「東京日記」は、その成立において作者が旅客の立場に置かれていただけでなく、そのような作者と重ね合わせられる「私」が、旅人の目を獲得していたことを作中に書き込んでいると考えられる。

以上のような各種の〈東京日記〉の特徴と「東京日記」の成立を踏まえると、後者は前者の一時的な滞在中に書かれるものである点と、「東京」という都市の物珍しさを積極的に取り上げる点を継承した作品であるといえる。百間がホテルでの執筆を選択したことで「東京日記」が成立したわけだが、同時に「東京日記」以前から一貫して使用してきた「私」という方法の効果がここで発揮され、実際の作品中において語り手はその書かれた状況と同様に「東京」を非日常空間として受容している点は見逃せない。

こうした「東京日記」の題名から見えるテキストの性格を踏まえ、以後テキストの読解を行っていきたい。次節では先行研究で取り上げられてこなかった作品を中心に選択し、「帝都」などのキーワードによる「東京」観では捉えきれない場面について、新たな解釈の可能性を探ることを試みる。

### 三 「東京日記」以前の作品から見た「私」の性質

坂や集落、都市の出入り口などは境界のモチーフとして神話や昔話の中で機能してきた。百間のとりわけ初期作品集『冥途』においても、土手を中心とした境界のモチーフが怪異の起こる場として設定されていることはよく知られている。いうまでもなく近代都市の中に

もこうした境界は存在している。「東京日記」の随所に登場するのも、都市の中の境界である。

たとえば「五」は「私」が友人の妻を訪ね、そこで息を引き取った友人の姿を数年前の記憶のままに見るといふ物語だが、その舞台は「場末の二業地」である。夫を亡くした女性が生計を立てるために働き始めたため、「私」がこの場所を訪れることになったということがある。

この「場末の二業地」が具体的にどの土地を指しているのかはテキストから読み取ることができないが、他の章における「私」の行動範囲から推定して、一九二二年に東京都市計画区域が設定される以前の東京市の周縁部分、すなわち周囲の郡との境界にあたる地域ではないかと思われる。この種の産業の行われている地域ではあるが盛り場ではなく「場末」と表現されていることから、それ自体が中心を形成するに至らない解放の場と市街計画上の周縁という、二重の境界性が読み取れる<sup>20</sup>。

また「二十三」は、「私」が「仕事」のため滞在していた「鉄道ホテル」に程近い東京駅の「精養軒食堂」で、毎日同じ声を聞くことに気づき、ある日その声をはるか昔に亡くなった父に酷似していることを発見する物語である。前述のように、「東京日記」の成立には東京駅の「鉄道ホテル」という一時滞在の場が大きな役割を果たしていた。そこからもうかがわれるように、東京駅のような巨大な駅は「東京」という都市の入り口という意味でも、異なる地域から移動してきた人々が一時的に同じ場所に集まるといふ意味でも、境界の性質を強く持っているといえる。

さらに駅の食堂となれば「私」が本文中で語る通り「いつも大変な混雑」で、そのような人々が同じ店の、場合によっては同じ献立の食事をとるといふことになる。つまりここでは「東京」という異界で過ごすための一つの儀式として、東京駅でものを食べるという行為が位置付けられていると考えることができる。こうした場で死者の声を聞くという筋書きは、東京駅およびその食堂の境界性を生死の境界と重ね合わせたものだといえる。

このように「東京日記」の掉尾を飾る篇においても境界モチーフは重要な機能を果たしている。こうした「東京」で起こる怪異というテーマ設定は、やや作家論に傾いて見れば、実際に生活する中で他の地域には見られない規模で人々が行き交う都市であること、それゆえ「東京」が中央としての「帝都」というよりも無数の境界を含んだ異なる世界の集合体として百間の目に映じたことによるのではないだろうか。

こうした視線は「帝都」としての「東京」らしさ、すなわち統合性や一貫性を否定し、都市にモダニズム的な解釈を加えるものといえる。そのような視角は、前述の旅人の目というすべてが珍奇に映る立場で都市を見つめたところに生じたと考えられる。その結果「東京日記」における「東京」は、都市計画の思わぬ結果としての特色ある個々の地域の寄せ集めとして表象されることになった。それぞれ無関係な二十三の章篇からなる構成も、「東京日記」の都市解釈の一つといえよう。

しかしすべての篇がこうした古典的な境界モチーフと断片としての都市解釈のみによつ

て読み解けるわけではない。「十九」では「私」が「山王下の料亭」で「田舎の同じ学校を出た連中の同窓会」に出席して仲間と会話を交わすうちに、死んだはずの同級生がいることに気づくが、友人からは「僕等のクラスは不思議によく死んだ」のだから「外の連中だつて、おんなじ」だという返答しか得られず、自分の周囲の席以外は酔いが回るほどに「段段沈んで行く」という体験をする。物語の舞台である「山王下」は赤坂区を中心付近に位置し、「五」の場合のような場末でもない。にもかかわらず、「私」はここで怪異に出遭うのである。

ここで連想されるのが、「東京日記」以前の各作品における「私」の性質である。前述の通り「私」はしばしば境界の地で怪異に遭うが、一方で自宅での奇妙な体験も複数の作品に描かれる。これは『冥途』と『旅順入城式』を区別する一つの目安にもなると思われるが、前者では土手や坂、水辺へ出かけて行くことが必ずといっていいほど怪異の発端であるのが、後者に至ると怪異が「私」の家で起こり、あるいは「私」の家を訪問するという形式が現れてくる。いずれの作品集においても登場する「私」は、その匿名性の高さゆえに多くの作品に共通する存在であると読むことができる<sup>21</sup>以上、ここには「私」の性質の変化が読み取れるといえる。

たとえば『旅順入城式』収録作の中でも特に芥川龍之介との関連において広く読まれている「山高帽子」の冒頭は、「私」が自宅に一人でいる時間の猫の奇妙な振る舞いを語っている。また須田千里によってモーパッサン「オルラ」の影響が指摘されている<sup>22</sup>眠りと水の関わりを語る場面も、「私の寢床」すなわち自宅での出来事である。

こうした怪異のあり方を踏まえると、「十九」に対しては必ずしも都市論的な観点が有効ではなく、これまでの作品における「私」の性質を踏まえた読みが手がかりとなると考えられる。そこで次節では「十九」を、百間の執筆活動における位置付けという面から検討する。加えて本節で挙げた他の二篇についてもこうした読みの可能性が残されているということにも触れたい。

#### 四 百間の執筆活動における「東京日記」諸篇の位置付け

前述のように「十九」は、すでに世を去っているはずの同級生に同窓会で出会い、周りの友人に疑問を呈するも死者の出席が当然であるかのような返答のみを受け取るという物語である。

「だからさ、今のそらあの男は死んだのぢやなかつたかね」

「さうだよ、玉川上水の土左衛門ぢやないか」

「矢つ張りさうだろう、それがどうしてやつて来られるんだらう」

「あんな事を云つてるよ」

「何故」

「そんな事を云へば外の連中だつて、おんなじぢやないか。僕等のクラスは不思議によく死んだからね」

こうしたやりとりの後、変わらずに「私」と友人は酒を飲み「賑やかに話して」いたが、「外の席はお酒が廻る程、段段沈んで行く様であった」。言い換えれば「私のところ」は生者が酔って活気づいていたが、それ以外の席は死者が酒を飲んでいるのではないか、それゆえ酔っても賑やかになることはなかったのではないか、という「私」の評価が、この結末の一文に含まれているということになる。

結果的に死者の方が多く出席している同窓会に来てしまったという物語であるわけだが、「私」がそれに気づくのは、篇の最後で友人に確認することによってであった。こうした「私」は死者が同窓会に参加しているはずがないと思ひ込めない程度には認識があいまいであり、自分の判断には確固たる根拠がないと思ひ込んでいるかのようである。

そもそも「私」の知覚は物語の冒頭に「何となく物の影が曖昧で、道端の並樹も暗い様であった」とあるように明確でなく、料亭の灯りと障子の白さによって「気持がはつきり」するほどに揺らぎやすい状態にある。こうした中で初めての同窓会に出席したことで、かつての同級生に出会っても「だれがだれだか、即座には解らないだけでなく、その存在に疑念を持ちながら即断ができないという状況に置かれる。

その友達と頻りに盃のやり取りをして、愉快に話し合ったが、その友達から二三人先にある男の事がどうもはつきりしない。顔も思ひ出したし、さつき私が後から来た時も、その男と久闊を叙べ合つたのだが、その男は東京に出て来て、農科大学に通つてゐる内に、玉川上水におつこちて、死んだ筈である。

しかし、さつきからみんなと静かに話し合つてゐて、別に変つた様子もない。

「死んだ筈である」と思ひながらも「はつきりしない」という程度の違和感に留まり、「私」は自分で判断するに至らない。ここまでの物語について結末を踏まえつつ振り返って見れば、不気味なのは死者の同窓会に紛れ込んだことではなく、生きてゐるはずの自分と死者の間に境界を引けない「私」であるともいえる。

こうした「私」のあり方は、実のところ「東京日記」から十年以上を隔てた「贗作吾輩は猫である」(一九四九年一月―十一月『新潮』)に通じる。前者の「第五」では、主人公の五沙弥と高利貸の兼子金十郎の会話が展開された後、兼子がすでに死んでいたことが「お神さん」によって指摘される。

「兼子金十郎がやつて来た」

「まあ、あの金貸しの」

お神さんは云ひかけて、言葉を切つた。

「あら。ああいやだ」と違つた声で云つた。

「だいぶ前に死亡通知が来てたぢやありませんか」

「あつ」と云つて急に目を見開いた。「さう云へば、さうだ」

五沙弥の頬の皮が引つ釣り、血の気が失せて、頭から水を浴びた様な顔をした。



周知の通り、主人公五沙弥は漱石『吾輩は猫である』の苦沙弥と同様に、作家本人を重ね合わせて読ませるような造型がなされている。言い換えればここでの五沙弥とは百間の随筆的作品群における「私」に通じており、さらにそれらと明確なジャンル分けのしがたい小説的作品群の語り手「私」にもつながる存在なのである。

「第五」の結末でそのような五沙弥が恐怖を覚えるのも、「そうだった」とあるように兼子が死んでいたという事実をあらかじめ知っていたにもかかわらず、死者と隔てなく会話を交わしてしまった自分自身を発見したからだと考えられる。その意味で「十九」と『贗作吾輩は猫である』の「第五」は相似形の作品といえる。

なお、ここに見られるような死者との交感や百間の作品を「夢幻的」と評する際の一大要因となってきたが、その内容には「冥途」をはじめとしていくつかのパターンがあると見られる。その分類と分析はここでは措くが、「夢幻的」という評価の内実を明らかにするためにも、死者との会話は検討を要するモチーフであるといえよう。

ところで前述の「五」と「二十三」にも死者の存在が関わってくるが、前者は山田桃子の指摘する通り<sup>23</sup>「サラサーテの盤」(『新潮』一九四八年十一月)に、後者は「冥途」(『新小説』一九二二年一月)につながりを見ることができ、「サラサーテの盤」は亡くなった友人の妻と「私」の関わりを通じて死者の存在が生者を圧迫するさまを描いている。それは結末における、友人の妻が夫の所有していたレコードにある声を聞き取り「いえ。いえ」と「解らない言葉を拒む」という行動に表れている。

「二十三」の「冥途」との内容の酷似は明らかである。この場合は「五」「十九」と異なり、「二十三」が初期作「冥途」に近代都市のモチーフを組み込んだ変奏になっている。「冥途」が作家の郷里を彷彿とさせる「土手」を舞台としているのに対し、「二十三」は上京後の生活の場に含まれる境界の地で物語が展開する。「二十三」は両者の対照性と、舞台設定の相違が作家の生活の場の変化に対応していることを明確化しており、「冥途」を読む一つの手引きにもなっているといえよう。

このように『東京日記』の各章は、境界のモチーフに着目することで読み解けるだけでなく、百間の執筆活動を踏まえることで、特定のテーマが追求されていく中でのモチーフの淵源や変奏が提示されている様子を読み取ることができる作品であるといえる。

おわりに

以上、「東京日記」の題名への注目を出発点として、先行作品と成立を踏まえた全体的な性格づけと、二十三章のうち具体的な先行研究の行われていないと思われるものの中から三章を取り上げての検討を試みた。最後にこれまでの議論を振り返り、今回論じることのできなかった章や新たな観点による「東京日記」論の見直しを述べたい。

まず掌篇二十三章からなる一つの作品としての「東京日記」をめぐることは、同一の題名をもつテキストが複数あり、いずれも語り手に一定の立ち位置があること、その立ち位置とは「旅人の目」あるいは珍奇な出来事に積極的に着目して「東京」という都市を見つめようと

する視角であることを指摘した。

次にこうした〈東京日記〉群と同様に、百間の「東京日記」においてもそのような視角を成立させる契機が作品の成立に潜んでいたという見方を提起した。その契機とは百間が「東京日記」を東京駅の東京鉄道ホテルに滞在して執筆したことである。随筆的作品群における「私」は、すでに複数の指摘があるように作家本人と同一視するよう作中で誘導されている存在であり、同時に随筆的作品群と小説的作品群の区別がきわめてあいまいであるという百間の作品の特徴から、「東京日記」における「私」も作家本人と強く結びつけて解釈される。言い換えれば百間がホテルの一旅客として「東京日記」を執筆したことが、作中の「私」が〈東京日記〉の語り手の性質を規定していると考えられる。

このことは「二十三」において「私」が「鉄道ホテル」に「仕事」のため滞在していると述べている場面からも裏付けられる。つまり作中の「私」がホテルの客であることと、そのような物語を執筆している最中の百間が東京鉄道ホテルに滞在していたことの間には前述のような「東京日記」までに発表された、随筆を中心とした百間の作品における解釈の前提が機能している。「日記」という題名からもうこうした力学が読み取れる。いかに非現実的な出来事が起ころうとも形式上は「事実」を書くジャンルに則っているとの表明が、「私」を執筆中の百間と重ね合わせての解釈の正当性を補強しているといえる。

こうした見通しのもと、各章の検討は「五」「十九」「二十三」を対象として行った。「五」「二十三」については、怪異の背景に都市の中の境界のモチーフが書き込まれていること、またそのような手法は『冥途』の諸篇の舞台を「東京」に移したものにほかならないことを指摘した。

一方「十九」は境界モチーフでの読解が必ずしも有効ではないことから、テキストの内在批評から離れその後の百間の作品を見渡すことによつて、同作が死者との交感をめぐる物語の原型として位置付けられるという読解を試みた。さらにこうした観点を「五」と「二十三」にも適用し、それぞれ「サラサーテの盤」と「冥途」に通じるテーマが描かれていることを指摘した。

このように「東京日記」は全ての篇を一定の観点から評価することが難しいが、それだけに文学の舞台としての「東京」だけでなく百間の執筆活動の多彩さをのぞかせる作品となっているといえる。とはいえ本稿では二十三篇のうちわずか三篇を取り上げるとどまった。他の二十篇についても、さまざまな観点から取り上げることが可能なはずである。また「東京日記」以降の〈東京日記〉<sup>24</sup>から捉え返した作品の読みの可能性についても、本稿では触れることができなかつた。それぞれ論じる機会を設けたい。

注

<sup>1</sup> 現在流通する本文では「その一」のように章が表示されているが、初出では「一」とさされている。本稿では作品の年代を考慮する視点から初出の本文を用い、章番号も初出に従うこととする。

- 2 小林秀雄「文芸時評」『東京朝日新聞』一九三八年一月十日。
- 3 室生犀星「各人の持ち味」『一日も此君なかるべからず』一九四〇年、人文書院。
- 4 三島由紀夫「解説」『日本の文学 34』一九七〇年、中央公論社。
- 5 三島由紀夫『小説とは何か』一九七二年三月、新潮社。
- 6 河野龍也「異界の語り方 三島由紀夫による内田百閒論」『三島由紀夫研究』二〇二一年四月、鼎書房。
- 7 『文章世界』投稿時代の百閒は写生文の書き手として選者に高い評価を受けていた。
- 8 川村二郎「解説」内田百閒『東京日記他六篇』一九九二年、岩波書店。
- 9 鈴木貞美「魔界としてのモダン都市」『幻想文学』アトリエOTCA、二〇〇一年十一月。
- 10 吉川望「内田百閒「東京日記」論——日常的怪異空間としての東京——」『阪神近代文学研究』二〇〇八年六月、阪神近代文学会。
- 11 丸川哲史「帝都の人造怪物」『帝国の亡霊 日本文学の精神地図』二〇〇四年、青土社。
- 12 高橋みなみ「内田百閒「東京日記」論——「その十一」「その十五」における暴力性——」『論樹』二〇一一年十二月、論樹の会。
- 13 山田桃子「都市と歴史の断片をめぐって——「東京日記」「鼻」』内田百閒の研究』北海道大学、二〇一八年（博士論文）。
- 14 渡邊浩史「〈新しい小説〉としての表現技法——内田百閒「東京日記」論——」『國學院雑誌』二〇〇九年九月。
- 15 星野英樹「内田百閒「東京日記」の修辞学 サイレントモードの擬音」『淑徳大学人文学部研究論集』二〇二〇年三月。
- 16 「東京「都」」『世界大百科事典』JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com> 二〇二二年六月七日参照。
- 17 友田昌宏『戊辰雪冤…米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」』二〇〇九年、講談社。
- 18 とはいえ岡崎武志『上京する文学 春樹から漱石まで』（二〇一九年、筑摩書房）において文学作品の中に「上京者」によるバイアスのかかった江戸・東京発見という構図」が読み取られているように、「東京日記」も「冥途」との対称性を考慮した場合「私」に「上京者」ゆえの「発見」と無関係ではないと思われる。一方で吉川望前掲論文の指摘するとおり、「私」の数十年前に遡る上京と「仕事」での「鉄道ホテル」宿泊が作中で言及されていることから、「上京者の文学」という枠組みだけでは十全に論じられないと考えられる。
- 19 保田和彦「内田百閒の東京幻視——『東京日記』を中心に——」『龍谷大学大学院研究紀要』一九九三年三月。
- 20 西村亮彦らは、二業地・三業地の地勢を谷間・崖下、傾斜地のほか、海や河川の後背地や臨海部、川沿い、水路貫入の六タイプに分類している（西村亮彦・内藤廣・中井祐

「近代東京における花街の成立」『景観・デザイン研究講演集』No.4、二〇〇八年十二月、土木学会)。必ずしもこうした地勢が花街の成立に関わっているとはいえないケースもあるとしているが、これらの分類からも性における一種のハレの場が都市計画における境界や周縁に発展したことが読み取れる。初田亨はハレの場としての繁華街が縁日に始まり、やがて神社仏閣との結びつきを超えて巨大化していったことで形成された神楽坂のケースを示している(『繁華街の近代 都市・東京の消費空間』二〇〇四年、東京大学出版会、二二二ページ)。

<sup>21</sup> 百間の作品の多くが「私」による一人称語りをとっていることは、小説的作品群においては「私」の汎用化に貢献し、随筆的作品群においては「随筆らしさ」の演出に役立っている。両者のジャンル分けが困難であり、またとりわけ随筆的作品群は作品そのものそのような読みのモードに抗していることを踏まえると、一人称語りへのこだわりは「私」の機能の拡張にあったことがうかがえる。

<sup>22</sup> 須田千里「内田百間「山高帽子」の材源——モーパッサン「オルラ」・芥川龍之介「歯車」など——」『京都大学総合人間学部紀要』二〇〇三年。なお『冥途』における水辺の境界性との連続性を考慮すれば、コップの水という持ち運び可能でより小さい「水辺」へと怪異の契機が変容したともいえよう。一方で一九三九年の「南山寿」の削除された冒頭部分である「断章」では、水場が再び不思議な出来事の間として現れている。百間の作品を通時的に見た際の主題としての水をめぐっては漱石の影響とそこからの離反も認められると思われる。今後検討していきたい。

<sup>23</sup> 注11文献に同じ。

<sup>24</sup> たとえば『東京人』および『ウェブ平凡』(二〇二二 <https://webheibon.jp/tokyonikki/>)  
二〇二二年九月二十六日閲覧)における川上弘美の連載作品「東京日記」は百間の「東京日記」を明らかに受け継いでいる。また永井愛による戯曲『僕の東京日記』(一九九七年、而立書房)は「上京者」の文学であり(『東京日記』史の延長線上に位置づけることが十分可能である。このほか新聞雑誌、翻訳等での「東京日記」の語の使用実態などを踏まえれば、(『東京日記』がどのような立場から書かれるのが明確化され、それにより「東京日記」の現代における解釈が可能となると考えられる。

## 第五章 内田百閒の日本郵船時代

### ——台湾旅行を中心として——

はじめに

内田百閒は日本文学報国会への入会を拒んだ数少ない作家の一人として知られるが、にもかかわらず戦時下の一九四〇年代前半に旺盛な執筆活動を展開していたことはこれまで言及されてこなかった。日本文学報国会結成以前のいわゆるペン部隊にも加わらず、日中戦争から日本の敗戦までを通じて一度も従軍することのなかった百閒が、その間も広範囲にわたる雑誌・新聞で活動を継続できた理由の一つは、この作家が一九三九年四月、日本郵船株式会社に嘱託社員として入社したことにある。友人の辰野隆の斡旋による就職<sup>1</sup>で、業務は社内文書の文章指導というものだった<sup>2</sup>。

この日本郵船在職中に百閒は、日本が植民地としていた台湾へ赴き、当地の印象を旅行記として発表した。本稿では、この旅行を中心とした百閒の日本郵船時代の活動について、その特質を考察する。まず、次節で百閒の旅行をめぐる当時の状況を確認し、旅行記の記述をもとに、利用した航路・鉄路や観光した場所を日程順に整理する。次に旅程の特徴と旅行記の性格を検討したうえで、この時期の日本郵船嘱託社員としての他の活動を取り上げて、その特質を明らかにすることを試みる。また、これをもとに台湾旅行記を含む百閒の執筆活動が、当時の旅行ブームの背景にある植民地主義の浸透において果たした役割についても一考を加えたい。

### 一 台湾旅行の背景

百閒の台湾旅行は、のちの回想によれば、岡山中学の先輩で当時台南在住の中川蕃に誘われたことがきっかけとなって実現した。百閒ののちの回想によれば「郵船の嘱託になつてゐたから船はただで」、「会社から私一人用の一等船室を取つておいてくれた」ため、きわめて快適な船旅であったようである<sup>3</sup>。明治製糖株式会社の重役を務める中川は門司で百閒に合流し、現地での最初の三日間同行したのち、四日目からは秘書を派遣して付き添わせた<sup>4</sup>。四日目から六日目にかけて塩水港庁麻荳支庁（現台南市麻豆）の明治製糖に投宿し台南見物をしているのも、中川の厚意によるものだろう。日本郵船の嘱託という肩書のおかげで「船はただ」である以上、当時複数あった日本の植民地のいずれにも行くことができた百閒が台湾に向かったのは、友人が親身になって申し分のない旅行プランを用意してくれたからにほかならなかった。

一方、百閒も船旅や海を隔てた土地の風景に全く興味がなかったわけではない。百閒が日本郵船嘱託に着任してすぐに取り組んだのは、執務室に用意されていた「航路案内」を読みふけることだった。

……初めて日本郵船に当社した時、当てがはれた机の上に長方形の金網の籠が三つ並べてあった。その中の二つには既決未決の小さな木札がついてゐる。しかし私の決裁する書類が廻つて来るわけではない。籠の中に切符発売所の棚に列べてある様な各線の航路案内を積み重ねてくれた。新入りのおやちを一通り教育するつもりであつたかも知れない。又こちらでも初めの内はなんにも用事がなかつたから、毎日洋服を着用して物物しく出勤はするが、机に向かつて航路案内の小冊子を丹念に讀むのが一日の仕事であつた。沢山あるので二日や三日では読み切れない。まだ読まないのを未決の籠に積み、読み了はつたのを既決の籠の中に重ねる事にした。（「航路案内」<sup>5</sup>）

前述のように社内の文章指南役として入社した百間には、実際にそのような業務が回ってくることは少なく、勤務中「航路案内に読み耽つて到頭あらかた片付けてしま」うだけの時間があつた。しかしそれは「船会社に来たおつき合ひに讀んだわけではな」く、「知らぬ海や港や島島の記述が面白かつた」からであるという<sup>6</sup>。

このように、中川が台湾旅行を提案する以前から、日本郵船に就職したことによって百間の心中にも「異国」にして「日本」である「外地」への関心<sup>7</sup>が醸成されつつあつたといえる。いいかえれば、百間の台湾旅行は、本人の日本郵船入社と、友人からの個人的な提案の両方があつてこそ実現したことになる。次節からは、その台湾行きで百間がどのような旅程をたどつたのかを、旅行記と日記の記述をもとに明らかにしていきたい。

## 二 百間のたどつた旅程

当時の百間の日記には、一九三九年十一月九日に神戸港を出発し、十二日から二十日まで台湾に滞在したのち、二十三日に神戸港へ再び到着したことが記されている。また台湾旅行記の一つによれば「日台」間の往復には神戸基隆線（航路）を利用し、往路は当時の日本郵船が所有する大和丸、復路は同じく富士丸に乗船した<sup>8</sup>。日記に記された台湾旅行の概略は次のようなものである。

まず、十一月九日に神戸を出て十二日に基隆へ着き、十四日までは現地在住の知人を訪ねたり、日本郵船関係の宴会に出席したりして過ごした。十四日遅くに夜行列車で台南に向かい、十五日から十七日までの三日間を台南見物に充てている。十八日に台北へ戻って再び日本郵船関係の宴会に出席した。十九日に休息を挟み、二十日に基隆へ向かい日本郵船基隆支社で講話を行ったのち富士丸に乗船し、二十三日に神戸に到着した。持病の発作が繰り返した。こともあり、全体としては強いて観光地に出かけない日も多く余裕のある日程だが、三日間の台南見物では前述の明治製糖を根拠地としてさまざまな場所に向かつている。

こうした旅で百間が用いた交通手段の中心は、鉄道である。右に示したとおり、前半は基隆から台北、中三日間は台南周遊、後半に再び台南から台北、そして基隆の順で主に島の西側を移動したのが百間の台湾めぐりだといえる。『台湾鉄道旅行案内』を参照すると、以上のようなルートをとるためには、縦貫線と明治製糖線を利用することになる。旅行記に書き

込まれた自動車、バス等の利用状況を踏まえ、台湾における九日間の移動手段を整理すると、百間が以下のような旅程をたどったことがわかる。

《台湾での旅程》三点リーダは鉄道以外での移動を、括弧内は交通機関・手段を表す。地名・駅名等の表記は当時の資料による。以下の旅程の根拠となる一九四〇年代の台湾旅行に関するテキストは、本稿の末尾にまとめて記載した。

一九三九年十一月十二日

日本郵船株式会社大和丸下船―基隆駅―台北：吾妻旅館―(バス?)―草山：大屯ホテル

同十三日

大屯ホテル―(自動車)―吾妻旅館―台北市内散策―台湾拓殖株式会社―吾妻旅館―瓢亭

同十四日

吾妻旅館―蓬萊閣―吾妻旅館―台北駅(縦貫線夜行)

同十五日

(縦貫線夜行)―高雄駅：高雄市内散策―(潮州線)―溪州駅―(潮州線折り返し)―屏東駅：(自動車)：「蕃屋」

(先住民族住居。後述)―台南駅：台南市内散策―蕃子田

駅―(明治製糖線蕃子田線)―麻荳駅：明治製糖株式会社

同十六日

麻荳―(自動車)―台南市中散策：(自動車)：安平城―(自動車)―麻荳

同十七日

麻荳―(明治製糖線蕃子田線)(ガソリンカー故障のため、中途より自動車に振替輸送)―佳里農場―麻荳：明治製糖株式会社

製糖株式会社

同十八日

(縦貫線急行)―台北駅：吾妻旅館：梅屋敷

同十九日

吾妻旅館

同二十日

吾妻旅館：台北駅―(縦貫線)―基隆駅：日本郵船基隆支社：日本郵船株式会社富士丸乗船

こうした旅程を『台湾鉄道旅行案内』<sup>10</sup>と比較してみると、百間は必ずしも主要な観光地を回ろうとはしていない一方で、たとえば十五日のように縦貫線と潮州線(一九四一年に屏東線として全線開通。以下、一九三九年当時の名称である「潮州線」を表記に用いる)を利用してかなりの長距離を移動していることがわかる。

縦貫線については、十二日の基隆上陸から台北に向かう際にも乗車したことから、十四日から十五日にかけての夜行列車による台北―高雄間移動により、路線の大部分を「制覇」したことになる。また潮州線も始発駅の高雄から「台湾幹線のどん詰まり」すなわち終点である溪州まで乗車したうえで、復路で下車し観光するというように、路線をフル活用しての観光を行っている。

このように百間の台湾周遊の特徴は長距離移動にあり、旅程の大半を公共交通機関での移動に充て、車窓から「異国」の風景を眺める時間が重視されていることがわかる。こうし

た旅行のありかたは『台湾鉄道旅行』に「遊覧順序」として掲載されているような、一定のエリアにおいて複数の有名な観光地を回るものとは性格を異にしており、むしろ公共の交通機関を利用することそのものをエンターテインメントとして捉えている。それを文章化した一連の文章は、台湾旅行記であると同時に文字通りの「鉄道旅行」案内だといえるだろう。

### 三 利用路線の性格

私が台湾にみたのは九日間である。基隆に上陸した二三日後に夜行列車で台北を立つて台南に向かった。蕃仔田駅ではまだ暗かったが、台南駅に着いた時は明かるかった様に思ふ。初めの予定では台南で下車するつもりであつたけれど、ぢつとしてみれば汽車はまだ南の方へ行くのでその儘乗り続けて高雄へ行き、市中を一回りして更りについで鉄線道路の南端の溪州まで行つた。(中略) 帰途は屏東と台南に寄つて、夕方蕃仔田線に乗り、社線に乗り換へて麻荳の明治製糖の本社に帰つて来た。

(「基隆の結滞」)

前述のように百間は台湾旅行において、縦貫線と潮州線、そして明治製糖線番子田線を利用した。長距離移動に欠かせなかつたのは、島の西側を南北に走る縦貫線である。いいかえればおそらく最も長い時間乗車したのがこの路線ということになる。一方、高雄以南の周遊では潮州線(屏東線)が、明治製糖会社を旅の拠点としての農業地域観光では番子田線が主な移動の足になった。

まず、縦貫線とは、台湾を植民地化するにあたり当時の清が基隆から台北、そして新竹まで敷設した路線を、日清戦争後に日本が島の領有と同時に接收し、一九〇八年に高雄へと延伸・開通させた路線である<sup>1)</sup>。開通によつて「台湾西部では南北の往来が容易になり、人や物の動きが飛躍的に活発になった」<sup>2)</sup>ことから、植民地台湾における最も主要な路線の一つと位置づけられる。横路啓子は一九二九年の台湾、とりわけ台北の都市景観が「旅行者にエキゾチシズムを感じさせないほどに日本的であつた」<sup>3)</sup>ことの背景に「内地」からの移住者の増加と渡航ルートの充実による「日本人社会の形成」を挙げている<sup>4)</sup>が、そのような「近代化」と「日本化」に、清朝の支配下で達成されなかつた縦貫線の完全開通が大きく寄与したであろうことは想像に難くない。

こうした縦貫線のうち百間が台北から高雄まで乗車したのは、基隆と高雄間を結ぶ一日二往復計四本の急行のうちの夜行列車で、一・二等寝台には車内扇風機・読書灯・喫煙室が完備されていた<sup>5)</sup>。以上の特色を踏まえると、日記や随筆に詳細は記されていないが、縦貫線の夜行では、長距離ではあるもののその分移動時間を快適に過ごすための環境が提供されていたといえる。このような充実した旅客車両を整備することもまた「国力」をアピールする一形態であると同時に、「内地」からの旅行者を呼び込む一つの有効な手段となつていたと考えられる。



次に百間の利用した路線は、高雄駅で縦貫線から乗り換えた潮州線である。この路線は完成までに「淡水溪（現在の高屏溪）の長大な橋梁架設に手間取り工事進捗が遅れ」たという経緯<sup>15</sup>をもつだけあり、車窓からは台湾最大の流域面積を誇る高屏溪（当時の下淡水溪）を見下ろすことができた。この様子は百間の旅行記で言及されており、さらに列車が広大なバナナ畑沿いを走ってもいたと記されている<sup>16</sup>。つまりこの潮州線には、台湾南部の自然と産業が「異国情緒」を誘う風景として一望できるといふ特色があったことがわかる。「内地人」にとって先ほどの縦貫線が設備の「近代化」を通して台湾を「発展」させているといふ日本のアピールを代表するものとすれば、こちらの潮州線はそのようなフロンティアを求める植民地主義の心性を肯定し、なおかつ「近代以前」への郷愁に浸ることを許すローカル線だったといえるのではないだろうか。

そして最後に、潮州線を折り返し縦貫線に乗り継いだのち、番子田駅から乗り換えとなる明治製糖線番子田線は、その名前のとおり本来は台湾の特産品である砂糖黍を運搬するための貨物列車であった。他の製糖会社線では一九二〇年代から旅客列車を導入するところもあった<sup>17</sup>が、百間の台湾滞在時の番子田線では旅客の便乗が関係者に限って認められていたようである<sup>18</sup>。

こうした成り立ちから、番子田線の車体は小さく、砂糖黍畑の中を進む「自動車」と呼ばれるガソリンカーであった<sup>19</sup>。幹線である縦貫線の移動では見られない農業地域に足を伸ばしての観光は、本来は「砂糖の乗る汽車」<sup>20</sup>に便乗するという興味深さとも相性の良いものであったと考えられよう。いうまでもなくこの砂糖黍畑の収穫は、当時の明治製糖株式会社によって原材料化・製品化され、台湾を含む「外地」と「内地」で消費されることになった。前述のとおり百間は台南地域の周遊に際して、明治製糖重役である中川蕃の計らいで同社を拠点にしている。そのような旅程で利用した明治製糖番子田線から見える砂糖黍畑は、いかにも「台湾らしい」風景として百間の心に印象づけられたと思われる。

このように百間が台湾旅行で利用した鉄道路線は、それぞれに異なる性格をもっている。前述のように移動手段や移動時間の楽しみを重視するという旅の特色は、こうした長距離移動と複数路線の利用によって実現されているといえる。こうした台湾旅行の模様をえがいた一連の旅行記は、一九四〇年代における百間の執筆活動であるだけでなく、所属する日本郵船株式会社とそれが推し進める植民地主義のもとで、「外地」への旅行ブームを宣伝する役割を果たしてもいたといえるだろう。

ところで百間が移動そのものを旅の楽しみにしていたとはいえず、いわゆる観光地にまったく興味を持たなかったわけではない。次節では旅行記の中で取り上げられた当時の「観光地」に、百間がどのようなまなざしを向けていたかを検討することにした。

#### 四 先住民族に会う——「屏東の蕃屋」における「生蕃」

前述のように縦貫線夜行で台湾南部に向かった百間は、潮州線に乗り換えて終点までの景色を車窓から眺める旅程を選んだ。復路には、屏東駅から自動車で当時「蕃屋」と呼ばれ

た先住民族の住居に立ち寄り、その模様を「屏東の蕃屋」(『海運報国』一九四〇年四月)に書き記している。

片側に生垣のある裏町の様な所を自動車が走つて蕃屋の前に停まつた。目の下に見える位の低い屋根があつて、前面の片隅には暗い戸口が口を開けてゐる。この中に生蕃がゐるのだなと思つたが、しかしすぐ傍の樹蔭には縁台が据ゑてあり、又椅子テーブルも備へつけてある。そこは蕃屋の案内所であつて、硝子戸棚の中には清涼飲料水などが列べてある。

この「蕃屋」は、当時の台湾旅行にあつてごく一般的な行先であつた。百間が意外に感じたように「椅子テーブル」が備え付けられ、ソフトドリンクが用意されていたのもここが本来的な意味での先住民族住居とは異なり、「案内所」を設けた観光スポットになつていたからである。実際に『台湾鉄道旅行案内』の屏東駅の項目には「駅―飛行聯隊―台湾製糖会社工場―蕃屋、公園、阿緱神社」という「遊覧順序」が紹介され、「蕃屋」については「蕃人の家屋を其のまま移し建てたもので、彼等が下山した時の宿泊所に充てるとともに、彼等の風俗を紹介するものとして喜ばれてゐる」と記載されている<sup>21</sup>。そのような「彼らの風俗を紹介する」先住民住居の様子を、百間は次のように書いている。

反対の側に歩いて行くと、そこは壁際が一段高くなつてゐる。後から案内人がやつて来て、ここは身内の者が死んだ時に埋めておく所です。生蕃は死骸を家の外へ持ち出す事をしないと云つたので変な気持がした。(中略)

三方は壁で塗りつぶし、一側にしか窓はなかつた。この窓の明り下の右と左に座が張つてあつて、一方には老婦人がゐた様であつたけれど、何だかむくむくしてゐて、私ははつきり様子を見なかつた。もう一つの座の上にあるのは生蕃夫人である。鏡台を置き、化粧品ものつかつてゐた様である。その壁にいろいろのポスターがぶら下げられてゐるのは、装飾をこらしたものと思はれた。

百間が当時の侮蔑的な表現で「生蕃」と繰り返し呼んでゐることからもわかるように、この民族は本来、山地に住む人々である。具体的にはこの「屏東の蕃屋」の中で「マイチヨス酋長」と呼ばれる住居の主が「パイワン族に属し、その中のライバアン社の頭目」であることが記されている。台湾先住民族における「頭目」とは、清朝由来の呼称で平民に対する貴族を意味する<sup>22</sup>ことから、山中の集落である「ライバアン社」の代表者または主要な立場にある人物を移住させたのがこの「蕃屋」であるといえるだろう。

百間が「変な気持」や「一側にしか窓はなかつた」と違和感をもつて記しているように、パイワン族の死生観や住居の構造は「内地」のそれとは異なる点が少なくない。たとえば「死骸を家の外へ持ち出す事をしない」のは、台湾先住民族では屋内埋葬が一般的であることによるもので、社会人類学者の松澤員子によればパイワン族は山上を死者の行き先と捉える

一方で「祖霊はいつも子孫の身近にいても考え」ているという<sup>23</sup>。また窓が少ない理由は、先住民が生活の場としてきた山地の地形を生かして住居を建てていたことにある。すなわち「谷側を家屋の前面にして、斜面を家の壁として利用して」「家屋内を掘り下げた竪穴式住居」にすることが多かった<sup>24</sup>ため、一方向以上に風の抜ける窓を設ける日本家屋とは自然に異なる構造をもつことになったといえる。

しかしながらこうした民俗的背景にまでは分け入らず、単に「未開」性のあらわれとしてのみ住居を眺めるに過ぎなかったのが、百間の先住民との出会いのようである。それはいうまでもなく百間が当時の「内地人」の典型として、彼らを「生蕃」と呼んで見下し、理解できない「陋習」とらわれた人々としてとらえているからにほかならない。百間の好奇の目と無知にもとづいた「蕃屋」に対する反応は、当時の「内地人」の一般的なまなざしであるとも考えられよう<sup>25</sup>。

百間が訪ねた当時の屏東はすでに、清からの移住者が定着し、その後の日本の「理蕃」政策の名のもとに先住民の弾圧が繰り返されたことで、多くの先住民が帰順を強いられただった。こうした「蕃屋」の存在は、先住民に対し、政治的に弾圧を行うと同時に「内地人」が異国情緒を味わうための民俗的標本を提出させるという文化的な搾取があったことを如実に示している。

百間もそのような「蕃屋」の性質に若干の懸念をもったようである。それと同時に「内地人」が好奇の目で眺めるだけの場所ではなく、先住民も利用する施設であることを聞き、「内地人」の一方的な搾取ではないと安心を覚えている様子が見られる。

この蕃屋の生蕃は、後の山の中にある一族の酋長なのださうであるが、それが話し合ひで屏東の町中に降りて来て、この家の中に住んでゐる。さうして内地から来た旅行者に、山中の生蕃の生活を見せてくれる。私はさう云ふ事をすると山中の一族が腹を立てはしないかと思つたけれど、実際は生蕃が山から屏東へ買物に下りて来れば、大概この蕃屋に立ち寄つて、泊まつて行つたりするさうである。

もちろん先住民が利用するからといって「内地人」の興味本位の視線が正当化されるわけではない。こうした展示物としての異文化といえ、このときから三十年以上をさかのぼる「人類館事件」がまず思い浮かぶだろう。大阪での内国勸業博覧会に「展示」された「内地に近き異人種」<sup>26</sup>は、観客から好奇の視線を浴び、結果として沖縄県や清国の人々の抗議活動を引き起こすことになった。松田京子はこの「学術人類館」が一九一二年の東京・上野での拓殖博覧会にも引き継がれ、その際には日本が支配下に置いていた五つの地域のうちとりわけ「台湾館はメインパビリオン内で最大の陳列スペースをもち」「台湾の産業発展の状況というモチーフと、文明による「野蛮」の教化というモチーフは、巧みに組み合わせられて展示されていた」ことを指摘している<sup>27</sup>。

一方で「山中の一族が腹を立てはしないか」という百間の記述に一瞬現れる宗主国の人間として後ろめたさ、言い換えれば自分が差別する側に立っていることへの自覚と罪悪感は、

この作家が例えば「台湾館」に象徴される「文明による「野蛮」の教化」に対して、わずかながら躓きを覚えていたことを示唆するものといえよう。こうした視点は「屏東の蕃屋」発表当時の時勢を踏まえれば、文章中で安易に大きく取り上げられることは「帝国」への批判につながるため、危険を伴う。それでも「懸念」という形式で漏らされた植民地主義への疑問は、百間の心中に、台湾先住民に対する差別感情と相反しながら共存していた本音の一部とみていいだろう。

したがって松田の論旨に沿って「産業発展の状況」と「野蛮」の強化」という二つの「モチーフ」を念頭に百間の旅程を振り返ってみれば、前述の縦貫線を利用しての旅や、それ以前の台北での滞在期間は前者を、そしていまの「蕃屋」という一種の「展示コーナー」が後者の役割を果たしていることは明らかだろう。その限りでは、百間の台湾旅行そのものが全体としては「台湾館」の展示を越える体験ではなかったとも見ることができると同時に、右に述べたような「懸念」として表出された植民地主義への疑問もまた、台湾旅行でその実態を目の当たりにしてこそ百間に芽生えた感情であり、前述の「航路案内」を日本郵船の自室で読むだけでは知ることのなかった「帝国」に自らが含まれているという現実の自覚であった。

このように百間がこの「蕃屋」で学んだとみられるのは、こうした先住民族の住居が「話し合ひ」により平地に移築され、案内係をつけた観光スポットになっていたこと、背景にある、先住民族と「内地人」との一種の協力関係である。百間は先住民住居の周辺にいたマイチヨスの子供ムニに「穴明きの十銭を片手に三つ、片手に二つ、べて五十銭やった」あとで、両親である「マイチヨス氏とルスルス夫人は、写真に這入る報酬として一同十銭づつ貰ふ」ことを聞き、「私はムニ坊にお金をやり過ぎたか知らと、後で心配」する。

こうした記述からは、山中からの移住を受け入れるかわりに「内地人」がここに来て記念写真を撮影するたびに彼らからわずかな金銭を受け取り、また山中に住むおそらくはパイワン族を含む先住民の人々が宿泊費用を負担せずに平地へ行けるという条件で、この「蕃屋」といういわば展示施設が開設されることになったという経緯が伺われるだろう。取引の非対称性は明らかだが、先住民族側ではこの「話し合ひ」に応じることで自らの集落や部族の「内地人」への帰順を示し、弾圧を避けるという目的もあったかもしれない。

こうした背景を踏まえると、百間が出会った「生蕃」とは文字通りのそれではなく、先住民族が自らを家族や生活空間もろとも「展示品」にした「生蕃」の標本」であったといえるのではないだろうか。実際のところマイチヨスは「内気」な態度ながらも、百間と日本語で会話を交わしてもいた。そのような場所が旅行案内に記される程度に知られた観光地となっていたという事実は、日本の侵略に対する先住民族の反応が、帰順する「熟蕃」と抵抗する「生蕃」に単純に分けられるわけではなかったことを物語っている。

この点には前述のとおり百間もやや意識的であったと考えられる。「屏東の蕃屋」の結末部分において、この時に撮影された写真を見た百間は、冗談めかしながらも「マイチヨス酋長の引き締まった表情」に「顔のまはりが大きい計り」の自分を比較して「見られない醜態」

だと嘆いてみせる。もちろんそれによって引き起こされたという「酋長を崇拜する気持」については割り引いて捉えなければならぬが、先ほどの「懸念」と合わせてここにも、「文明による「教化」の必要性に対する百間の疑いを垣間見ることができよう<sup>28</sup>。

しかし一方でこの「蕃屋」が「内地人」のための展示施設であるだけでなく、先住民族の宿泊施設としても利用可能であると注釈的に述べていることの意味を考えてみれば、観光スポットとしての「蕃屋」が百間の眼には「平和的」な「理蕃」の結果として映ったのではないだろうか。そのような見方は、侵略者の側に立つ百間にとって自らの暴力性を意識せず、すむ方法でもあり、加えて「生蕃」に現金を与えることで彼らの経済を助けているとさえ考えることもできる方法だったといえよう。

このように百間の台湾旅行における先住民族との出会いは、すでにそれ自体が標本化され「内地人」用に整えられた旅行パッケージの一行程にすぎず、むしろそのような場所への訪問によって、「内地人」が植民地化した台湾において現地のとりにわけ先住民とも「平和的に」共存しているという印象を得ることになった。その記録である「屏東の蕃屋」という文章もまた、こうした「理蕃」政策の複雑な実態を伝えながらも、それを擁護することの正当性を読者に印象づけたと考えることができるだろう。

むろんこうした旅行記は、すでに述べたように百間が日本郵船の一社員でありながら著名な作家でもあったことによって影響力をもち、広く読まれることになったと考えられる。いいかえれば前述のように個人的なつと当時の職業的立場によって実現した台湾旅行は、これまで取り上げてきたような一連の旅行記を生み、それが当時の「内地」で発表されることで、観光的な興味において「内地人」を「外地」台湾へ惹きつける役割を果たしたのではないだろうか。

次節ではこうした百間の当時の作家活動について、日本郵船嘱託と作家という二つの立場をどのように結びつけて展開していたのかを、台湾旅行以外の主題をもつテキストにも目を向けながら考察していきたい。

## 五 日本郵船と百間

日本郵船入社当時の百間は『百鬼園随筆』（一九三三年十月、三笠書房）で当たりを取ってから十一冊もの随筆集・小説集・童話集を上梓し、「奇人」という作家像とともにその名がすでに広く浸透していた。こうした書き手が「会社員」になった話題性からか、当時の『アサヒグラフ』では郵船での勤務について書いた随筆が本人の写真とともに「随筆家として令名高い百鬼苑、内田百間先生は、この程、日本郵船に入社、五十一歳の新入社員となりました。仕事は会社の書類や社員の文章の添削、ザット作文の先生といふところです。写真は腰弁を食べる百間先生」とのキャプションを添えて掲載されている<sup>29</sup>。

また百間の入社と時を同じくして、日本郵船株式会社内に設置された郵船海運報国会の発行する雑誌『海運報国』が五月に創刊された。百間は与えられた執務室の六四三号室という番号にかけてこれを夢獅山房（むしさんぼう）と名付け、同誌の創刊から「夢獅山随筆」

と題した連載を開始した<sup>30</sup>。やはりこの年の五月に創刊された文藝春秋社の雑誌『大洋』とともに、百間は恰好のタイミングで新たな発表の場を得ていたのである。

一方日本郵船にとっても、百間を採用することは、旅客船を利用した植民地への旅行ブームを後押しする広告塔の獲得という点でメリットがあったと考えられる。げんにこの年の七月、日本郵船は所有する客船への試乗を百間に提案しており<sup>31</sup>、その横浜―神戸間周遊の経過を書いた複数の文章が九月には『海運報国』『中央公論』『改造』でそれぞれ発表されている。

そのうちの一つである『中央公論』に掲載された「波光漫筆」では、乗船する鎌倉丸について「総噸数は一万七千五百噸であつて」「日本の一番大きな船の一つださうである」と簡単に紹介した後で、甲板からは船が「大浪を切り分けて進んで行く」様子が眺められるのももちろん、船内では「大変な御馳走」が供され、また「天然色のトーキー映画」も上映されることを記している。

こうした記述からは、百間が単なる移動手段を越えたエンターテインメント性を船の魅力として打ち出していることがわかる。これは前述の台湾旅行でも、長距離での移動それ自体を旅行の楽しみと位置付けていることと通底する発想だといえよう。さらに、こうした特徴を随筆というジャンルの枠内で「ありのままに」書く<sup>32</sup>ことで、百間の旅行記や乗船体験記が、日本郵船にとって格好の宣伝になっていたと考えられる。

さらにこの時期には、制定間もない「海の記念日」のPRを兼ねたこうした客船上での座談会がたびたび催されてもいた。「海の記念日」は明治天皇が函館から船を利用して帰京した史実にもとづき、「海運報国を合言葉に時局の荒波を乗り切つて活躍する『日の丸商船隊』」（『朝日新聞』一九四一年四月二十五日）を顕彰する目的で逓信省が中心となり、七月二十日をその日として一九四一年に制定された<sup>33</sup>。

この「海の記念日」にあわせて朝日新聞社が開催した一九四一年七月十五―十六日の氷川丸船上座談会では、林芙美子や柳田国男をはじめとする「文化人」のほか、軍人を含む十六名の出席者に百間も「日本郵船顧問」の肩書で名を連ねている。この模様は朝日新聞紙上で「海ゆく座談会」として、同十八日から二十四日にかけて五回にわたり掲載された。このなかで百間は司会を務め、当日の出席者から「大東亜共栄圏を打ち樹てる大仕事」が「二千六百一年を更に遡つて御代の昔から与へられてゐた民族的の仕事」であるという表現や、「支那事変」に際して「海軍の手となり足となつて活動した商船関係産業を『海軍の相棒』と位置付け、発展の必要性を説く発言を引き出している。

また、これに先駆けてやはり日本郵船の所有する新田丸で催された船上座談会の内容は、「浮世はなれて海上閑談会」の見出しで『文藝春秋』一九四〇年六月号に掲載されている。同号ではヨーロッパにおける折からの戦火拡大を特集しており、真珠湾攻撃以前の日本にとしての客船で行く海が経済活動による「報国」を象徴するだけでなく、「浮世はなれ」た場所でもあったことが伺われる座談会だといえるだろう。それはこれまで述べてきたような、「異国情緒」を求めている植民地旅行の推進とも共鳴する海のイメージだったのではない

だろうか。

このように、船上座談会の出席者・司会者としてまさに適役であった百間は、こうした形でメディアへの露出を重ね、日本郵船をホームグラウンドに植民地主義の宣伝役を担っていたといえる。その宣伝の手法とは、一方で「大東亜共栄圏を打ち樹てる大仕事」という英雄的な物言いを座談会の司会として出席者から引き出すことにあり、他方では複雑化する政治情勢や国際社会の様相をいっとき忘れられる客船や、それが目指す自国の所有物としての「異郷」の風景に言及することにあつた。すでに述べた台湾旅行においても、個人的なコネクションが先に立っていたとはいえず、結果的にこれまで挙げてきた日本郵船囑託社員という肩書での宣伝活動の一端として、その記録が機能していることは確かだろう。

おわりに

以上、内田百間の日本郵船時代について、その活動の特質を考察してきた。はじめに百間の「外地」台湾への旅行をめぐる経緯を確認し、旅行記の記述をもとに、利用した航路・鉄路や観光した場所を日程順に整理し、旅行の特徴と旅行記の性格について検討した。その結果、ガイドブックをなぞるような観光では必ずしもない旅程のなか、台湾西部を縦断するために利用したそれぞれに異なる性格の三種類の路線からの風景が旅行記に書き込まれていることから、乗車時間をエンターテインメントとして捉える長距離移動の旅という点がこの旅の特質であることが明らかとなった<sup>3,4</sup>。

またこれに加えて、旅行記の中で特に訪問先として取り上げられている「蕃屋」と呼ばれた台湾の先住民居住について、百間がどのような目でそれを眺めたかを検討した。はじめに『台湾鉄道旅行案内』および旅行記の記述からこの「蕃屋」が実際には山地を生活の場とするパイワン族の一家族を平地に家屋ごと移住させたものであり、「内地人」を利用客に想定した一種の生体展示施設であったことを確認した。そのうえで、旅行記「屏東の蕃屋」において読み取れる百間の台湾に対する印象、すなわち台湾先住民との出会いが百間に植民地主義への疑問を芽生えさせたものの、先住民への見方も典型的な「文明化社会」から「未開社会」への好奇のまなざしを抜け出してはいないことを指摘した。そしてそのような視角での旅行記が当時の「内地」において、台湾先住民に対する差別感情への後ろめたさや侵略への罪悪感をわずかながら示唆しつつも、全体としては「理蕃」政策を正当化し、その暴力性を覆い隠そうと試みながら「外地」台湾へ「内地人」を惹きつける役割を果たしたという読解を行った。

次にこの時期の日本郵船囑託社員としての他の活動を取り上げて、その特質を考察した。まず、入社間もない頃には、広く知られた作家が五十歳を過ぎて「新入社員」となったという話題性に加え、新たに創刊された『海運報国』や『大洋』などの雑誌がうってつけの執筆活動の場になったことを確認した。具体的には、日本郵船が所有する客船に乗り込んでの座談会への出席を重ねていたことを取り上げ、「海の記念日」関連行事としての座談会における司会役を含む発言などをおして、まさに「海運による報国」を標榜する日本郵船の広告

塔の役割を担っていたことを、この時期の百間の活動の特質として位置付けた。

以上の検討から、百間の日本郵船時代とは、台湾旅行を最大のイベントとして、植民地への旅行やそれに連なる海運産業がいか「国家のために」重要な役割を果たしているか、また今後も果たしていくべきかを、随筆や座談会といった文章類によって当時の一般市民に広く知らせる活動に力を注いだ時期であったと考えられる。こうした「時局」向きの活動は、『百鬼園随筆』で知名度を上げ、小説よりは随筆によって読者を獲得していた百間ならではの訴求力をもっていたのではないだろうか。

なお、百間はこうした座談会の記録を「新田丸座談会覚書」(『海運報国』一九四〇年五月)や「氷川丸座談会覚書」(『海運報国』一九四〇年十月)などの随筆として発表している。これら「座談会覚書」の本身は、百間が郵船嘱託にして作家であるという立場から、社内で座談会出席者の人選について受けた相談内容について出版社へ顔をつないだことや、数人については候補に挙がっていたものの出席がかなわなかった<sup>3,5</sup>ことなどを記した、やや興味深い楽屋話といったところである。

むろん、座談会における会話はテキストとして流通することを前提とする以上、「覚書」はそこに掲載される予定の内容と重複してはならない。したがって記録されない出来事を点綴していくところが「覚書」の役割であるわけだが、むしろ日本郵船社員としての百間によるこうした「裏話」の発信によって、いかに多くの著名人が「海運報国を合言葉に」植民地と本国を結ぶビジネスに賛同していたかを印象づけることになったとも考えられよう。こうした日本郵船時代の諸テキストから読み取れるのは、百間が自身の執筆活動を、広く名前の知られた作家という立場と日本郵船嘱託社員という立場の両方を巧みに結び付けて展開していたということである。いいかえれば、一方では従来の執筆活動の延長線上にあるかのような旅行記や乗船体験の記録という多数の随筆を発表することで、作家としての活動を発展させ、他方ではそれが日本郵船の企業PRとなり、あるいは郵船所有の客船による「外地」旅行の宣伝ともなっていたということになる。

このように日本郵船時代の百間のテキストには、この作家が日本文学報国会への入会を拒んだという事実だけでは捉えきれない、随筆のフィールドに根差した植民地主義の推進という方法で「時局」に適応した履歴が刻まれている。これらの変遷をより詳細に跡付けていくことによって、百間に対する従来の作家像を大きく更新する必要性が明確に浮かび上がってくるだろう。今後の課題としたい。

注

1 『百鬼園 戦前・戦中日記 上』(以下『日記』と略記する)二〇一九年、慶応大学出版、二六六ページ。

2 『日記』二六九ページ。

3 「蕃さんと私」『毎日新聞』一九四九年十二月四日。

4 『日記』三三四～三三五ページ。



5 『アサヒグラフ』一九四二年六月二十四日。

6 注5に同じ。

7 戦前期の「航路案内」の記述について、荒山正彦は「日本の領域を、ツーリズムという実地経験で確認させる意図が込められている」ことを指摘している（「内地」と「外地」をめぐる海上ツーリズム『関西学院史学』二〇一〇年三月、関西学院大学史学会）。まず「航路案内」を通して台湾に触れた百間は、想像力を刺激する「日本の領域」に惹きつけられ、本稿で扱うようにやがてその実体験を記した一連の台湾旅行記によってこうした「意図」を結果的に再生産したことで、「内地」の読者の目を同様に「異国」的な「日本の領域」へと向かわせたといえよう。

8 「基隆の結滞」『大洋』一九四一年六月、執筆者未見。

9 注八に同じ。なお「一病息災」などの随筆で百間は、極端な頻脈の持病があったことを述べている。

10 台湾総督府交通局鉄道部『昭和九年度版 台湾鉄道旅行案内』水谷真紀編『台湾のモダニズム』二〇一二年、ゆまに書房。以下『台湾鉄道旅行案内』と略記する。

11 高西鳳『植民地の鉄道』二〇〇六年、日本経済評論社、六〇九ページ。

12 小牟田哲彦『大日本帝国の海外鉄道』二〇一五年、東京堂出版、二六ページ。

13 横路啓子「台北の日本人社会——近代都市台北の成り立ちと台湾鉄道ホテル」和田博文・黄翠娥編『へ異郷』としての大連・上海・台北』二〇一五年三月、勉誠出版。

14 注一〇文献、五六〜五八ページ。

15 注九文献、十三ページ。

16 「バナナの菓子」『スキー』一九四〇年三月。

17 注一〇文献、二八ページ。

18 「小さな列車」『スキー』一九四一年一月。明治製菓株式会社のPR誌である『スキー』は当時、チョコレートやキャラメルなどの菓子類のほかにその原材料である台湾産の砂糖の製品化までに関する情報を大きく取り上げており、登場人物が製糖工場を見学する漫画の連載も見える。したがってこの旅行記も、そのような砂糖の生産過程をテーマとした記事の一部として同誌の中には位置づけられるといえる。

19 注十五文献に同じ。また「砂糖黍」にも同様の記述が見える。当時、短距離で砂糖を運搬する製糖鉄道の多くがこうした「軽快なガソリンカー」を導入していた（注一〇文献、五一ページ）。

20 注十五文献に同じ。

21 『台湾鉄道旅行案内』一一四ページ。

22 住田イサミ『台湾先住民の刺繍と織物——階層制からみたパイワン群族』二〇〇二年一月、大修館書店、三三三ページ。

23 松澤員子「先住民の系統と居住地域」国立民族学博物館編『台湾先住民の文化——伝統と再生』一九九四年三月、国立民族学博物館。

<sup>24</sup> 注二十一文献に同じ。

<sup>25</sup> とはいえ大東和重が國分直一の台湾先住民族の調査活動について指摘しているように、かりにこうした先住民族への深い関心をもって彼らを知ろうとしたとしても、そこで支配―被支配の隔たりが消えるわけではない。先住民族への「内地人」の接近がこうした関係に一石を投じることは確かだとしても、「彼らの関係は明らかに対等ではなかった」のである（『台湾の歴史と文化 六つの時代が織りなす「美麗島」』二〇二〇年二月、中央公論新社、十七〜二十七ページ）。したがって百間がたとえば国分や、水谷真紀の指摘する「保護された旅行者にとって目に留めたとしても通り過ぎてしまうような風景」を「自ら掴みに行くことを選んだ」野上弥生子（「台湾のモダニズム」注9文献『台湾のモダニズム』九二〇ページ）のような態度で先住民族に関心を寄せたとすれば、百間の立場とも相まってそれはまた別の問題を引き起こすことになったと考えられる。

<sup>26</sup> 「場外の余興」『風俗画報』一九〇三年六月十日、三七ページ。

<sup>27</sup> 松田京子「人間の「展示」と植民地表象——一九一二年拓殖博覧会を中心に——」『帝国の思考 日本「帝国」と台湾原住民』二〇一四年三月、有志舎、一五八〜一六七ページ。

<sup>28</sup> こうした百間の植民地主義に対する批評性については、しかしながら同時に文明/非・文明の二項による対立と、「弱い」前者と「強い」後者という構造主義的な思考体系にとどまっていると見られることには注意しなければならない。

<sup>29</sup> 「腰弁の弁」『アサヒグラフ』一九三九年七月十二日。この頃こうした作家・文学者の「就職」は、大宅壮一や神西清など複数例があり「事変の余波で浮び上つたインテリ自由職業者の嘱託業」を批判的にとらえるむきもあった（「インテリの嘱託業」『読売新聞』一九三九年七月十三日夕刊）。

<sup>30</sup> 「夢獅山房」『海運報国』一九三九年七月、執筆者未見。

<sup>31</sup> 『日記』三〇一ページ。

<sup>32</sup> 書き手の実生活や感想を「ありのままに」書いているという了解のもとで読解されるテキストをめぐっては、一九二〇〜三〇年代におけるいわゆる私小説の流行を背景に、随筆と小説のジャンルの境界が大きく変動していたことが注意される。一九三三年刊行の『百鬼園随筆』の内容と構成からは、このことを百間が強く意識していたことが伺える。山田桃子「戦前期「随筆」の流行と内田百間——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」（『日本近代文学』二〇一九年十一月、日本近代文学会）および拙稿『『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——』（『国文学研究』二〇一九年六月、早稲田大学国文学会）を参照。

<sup>33</sup> 「海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う」（『国民の祝日に関する法律』第二条）ことを趣旨とする現在の「海の日」は実質的にこれを引き継いでいるといえる。

<sup>34</sup> このような移動そのものをエンターテインメント化する百間の旅行記は、『阿房列車』（一九五二年六月、三笠書房）に代表される「阿房列車」シリーズに引き継がれていくと考えられる。一度は焦土と化した日本列島の復興の模様を記していくという「阿房列車」の性

格が、植民地ツーリズムを支える台湾旅行記を起点に育まれたという点は、一九四五年を一つの区切りとして百閒の執筆活動を跡づけるにあたり興味深い経過といえよう。

<sup>35</sup> 新田丸船上座談会について、正宗白鳥、谷崎潤一郎、菊池寛、小林一三の四名は「差支へが出来て不参」であったという。（「新田丸座談会覚書」）。

日本郵船時代の台湾旅行記および台湾関係文章一覧

題名	初出年月日	初出誌	言及されている台湾の地名など	初刊
蟻と砂糖	1939年8月	『スカーツ』	台湾の砂糖会社〔不詳〕	『船の夢』 1941年、那珂書店
大和丸	1940年1月	『大洋』	基隆、彭佳嶼	『船の夢』
バナナの菓子	1940年3月	『スカーツ』	下淡水溪、屏東、潮州	『船の夢』
屏東の蕃屋	1940年4月	『海運報国』	「蕃屋」〔先住民族住居〕、蔴荳	『船の夢』
小列車（注1）	1941年1月	『スカーツ』	蕃子田駅、明治製糖会社、蔴荳	『船の夢』
基隆の結滞	1941年6月	『大洋』	彭佳嶼、基隆、上屋〔台北〕、蕃子田、台南、高雄、溪州、下濁水溪、屏東、蔴荳、安平城、佳里農場	『船の夢』
神風機余録	1942年1月28日	『アサヒグラフ』	台北、台南、高雄、屏東、潮州、溪州、鵝鑾鼻	『沖の稲妻』 1942年、新潮社
迎暑	1942年7月22日	『アサヒグラフ』	基隆、台北、台南、屏東、北回帰線	『沖の稲妻』
砂糖黍	不明	不明	佳里農場	『船の夢』
時化	不明	不明	基隆、彭佳嶼	『船の夢』
波のうねうね	不明	不明	基隆	『沖の稲妻』
蓬莱島余談（注2）	不明	『百閒座談』か		『百閒座談』 1941年、三省堂

（注1）初出時の題名は「小さな列車」。

（注2）本来は杉山平助との対談で、『中央公論』1940年7月掲載予定だったが検閲により掲載不可となった。

『百閒座談』では百閒の発言のみを収録している。

## 第六章 「柳検校の小閑」論

——背景としての関東大震災——

はじめに

「柳検校の小閑」(『改造』一九四〇年五・六・八月)は、目の見えない箏曲家の主人公の視点によって、ある女性の弟子に恋心を抱いてから彼女を震災で失うまでをえがいた内田百閒の小説である。

この「柳検校の小閑」は、百閒の小説の中では「サラサーテの盤」(『新潮』一九四八年十一月)と並んで特に高い評価を得ている。目の見えない検校を主人公兼語り手とした聴覚・嗅覚・触覚に依拠する知覚の表現は、初出誌での連載開始当時すでに舟橋聖一が「気韻の高い、厳粛な作品として発展していくであろう期待を抱かせられる」と好意的に迎えていた<sup>1)</sup>。

しかしこの小説の評価を決定的に高めたのは、三島由紀夫による手放しの称賛だろう<sup>2)</sup>。三島は、「柳検校の小閑」が谷崎潤一郎『春琴抄』(一九三三年十二月、創元社)と「相頷顔している」と述べた上で、「すこぶる皮肉な、すこぶる微妙な、すこぶる暗示的な表現でしか、官能的な事柄を語らないのみか、もつとも哀切な感情をもつともそっけなく語って、凄い効果をあげている」ことを評価する。そして叙述の禁欲性に対して、細部の描写が「盲人の世界の感覚と心理にたいするおそるべき犀利な洞察力と感情移入」の技術のもとで「あからさまなほどりアルに積み重ねられてゆく」ことに賛辞を呈したのだった。

こうした観点は今日まで「柳検校の小閑」論の方向性を規定している。例えば野田康文は、日本近代文学における「ステレオタイプ化された盲者」を乗り越え「盲者の視覚性」を主題化した小説の一つとして「柳検校の小閑」を位置付ける<sup>3)</sup>。見えない人の「視界を〈闇〉や〈暗黒〉とし、視覚的なものから排除する表象」が多くの文学テキストによって再生産されてきたのに対し、『春琴抄』と七年後の「柳検校の小閑」では「中途失明の盲者の感覚世界、とりわけその視覚性」が扱われていることを重視する議論である。そして、両者の影響関係を指摘した福田博則の先行論<sup>4)</sup>を批判的に検討することで、長年にわたり多くの見えない人と関わってきた経験から「盲者の感覚世界についても知悉している自信」をもっていた百閒が、『春琴抄』の著者に「共感と対抗意識」を抱き、親友の箏曲家・宮城道雄からも刺激を受けて「柳検校の小閑」に着手したという成立史を想定している。

中途失明者の主人公による一人称語りの同作が、「盲者の視覚性」を形象化しているとい

う見解は画期的である。三島の評言にも表れるとおり、見える者にとっては視覚を除く「感覚の鋭さ」の表れに目を奪われがちであるだけに、主人公の視覚経験を議論の軸にした全体像の提出は、この小説の特質を理解する上で重要といえよう。

このように「柳検校の小閑」の知覚表現は、見えない人の視界を的確に把握することで成り立っている。一方、それを駆使して語られる物語はどのような背景のもとで成立しているのだろうか。酒井英行は「柳検校の小閑」の素材として、本稿でも扱う「千鳥の曲」と「長春香」「アデンコート」等の随筆を指摘しているが、「池上検校と女弟子という人物関係（外形的な）を借りて、かなり誇張し、変形した、百閒と長野初との関係様態を描いたのが「柳検校の小閑」ということになる」とモデル論に傾斜した解釈を示している<sup>5</sup>。確かに、「柳検校の小閑」の背景に百閒の実体験があるという指摘は妥当といえよう。しかし一方で、こうした外形と内容という二分法に拠る限りでは、経験のモザイクから物語が作り出されていることの意義を十分に提示することはできない。とりわけ、なぜ外形が「池上検校と女弟子」である必要があったのか、言い換えれば、なぜ「百閒と長野初との関係様態」を描くためにあえて中途失明者の主人公兼語り手を採用しなければならなかったのかという点は、表現とストーリーの接続性に目を配りながら検討すべき問題だろう。

こうした先行研究の様相からは、これまでの「柳検校の小閑」論では表現と内容のいずれかが取り上げられ、両者の関わりを論じる方向性が欠落していたことがわかる。そこで本稿では、小説の内容に注目し、その素材と思われるエピソードが扱われた百閒の随筆を検討することで、見えない人を主人公兼語り手とした「柳検校の小閑」の物語背景を遡ってみたい。

そのためにまず次節では、物語の基本的構図を確認した上で、対応する第一のエピソードを紹介する。次にそれを踏まえ、主人公と女性の弟子の関係という物語の中核に具体的な形を与えたと考えられる第二のエピソードを取り上げる。最後に、見えない主人公兼語り手による物語言説が、こうした物語内容とどのように関わっているのかを、小説の背景を踏まえて考察する。本稿の目的は、以上のような手続きによって「柳検校の小閑」を表現と内容の両面からより包括的に捉え直すことにある。

#### 一 物語全体の素材——池上検校と「女のお弟子」

前掲の解説の中で三島がこの小説のあらすじを「妻を失い弟子を失った検校の、老いらくの恋の物語」と要約しているとおり、物語の目的は、柳検校と三木さんの「すこぶる暗示的な」恋のゆくえを語ることにある。三木さんに稽古をつける場面がそのような恋心を募らせ

る主要な舞台であることはもちろんだが、検校の身边をめぐる挿話にも必ず三木さんに関する思考が現れることは、検校の「老いらくの恋」が思いのほか激しいものであることを物語っている。例えば松屋敷への出稽古の場面（第二章）で検校は、「長く外国にゐて英語ばかり使った所為か、声が何処となく荒れてゐる」英子さんと挨拶を交わしながら、「三木さんも英語の先生だが、それとこれとは違うのであらう」とその場にいない三木さんの声を思いついで出している。

また箏曲家どうしの会合（第四章）の際には、容体が悪化している伊進を検校が看取れるようにと三木さんが迎えに来たことを聞き、「三木さんが」と問い返した途端に自分の座が上がった様な気がした」感覚に襲われている。そしてこうした「老いらくの恋」は、三木さんが「軍港の町」で地震に遭遇しおそらくは焼死したことで断ち切られ、十七年後まで検校を苦しめるのである。このように、物語の全体が検校の三木さんへの思慕の念を中心に動いている。従って「柳検校の小閑」において最も基本的かつ重要な物語の構図は、琴の師匠と弟子という二人の男女の人物配置によってもたらされていることになる。

こうした基本的なストーリー・ラインは、前掲の酒井論が指摘しているとおり、百閒の経験に素材を求めることができる。百閒の随筆「千鳥の曲」にえがかれた、池上検校のエピソードである。なお、三島はこの小説の筋書きについて「百閒自身長年習っている琴の師匠宮城道雄氏をモデルとしたかと思われる」と述べているが、典拠のない類推にすぎず、宮城の随筆にも「柳検校の小閑」の物語を想起させるような記述は見当たらない。

「千鳥の曲」は、他四篇の随筆とともに「五段砧」の総題で、一九三五年十月の『改造』に掲載された。「半雲井」「残月」「秋風曲」「春琴抄」「千鳥の曲」（掲載順）という琴にまつわる随筆を五つ並べて「五段砧」というわけである。従って、『改造』では「柳検校の小閑」に先駆けて、小説の素材が公開されていたことにもなる。とはいえ「千鳥の曲」と「柳検校の小閑」の発表時期は五年もずれているため、初出誌の一致に著者の特別な目論見があるわけではないだろう。この間には「東京日記」（一九三八年一月）も同誌で発表されているのであり、二つの文章の初出誌の一致は、単に百閒が書き手として脂の乗り切った時期であったということに尽きる。重要なのは、「千鳥の曲」の内容が、三木さんを思わせる女性についての回想であるという点にある。

「千鳥の曲」の概略は、次のようなものである。百閒（私）は例年通り九月一日に被服廠跡の震災記念堂で追悼式典に参加していた。百閒には毎年ここで偲ぶ故人（後述）がいるが、今年は上京前に池上検校の稽古場で偶然出会った「女のお弟子」の姿を思い出す。その

女性の琴の音色は人並みであるものの、「その声が不思議に美しく、普通の箏唄を聞く様ではなかった」。彼女が稽古を終えた後、百間は池上検校から「今の人は（中略）今年の春から県立女学校の唱歌の先生になってゐる。つまり自分と同僚なのである。午前中の稽古には学校の生徒も来るから、先生と生徒と一緒にはいけないと思つて、午後来る様にさう云つた」のだと聞かされる。後に上京した百間は、関東大震災の混乱の中でその女性の消息を聞き、「横浜の伊勢佐木町に用達しに出かけて、到頭その人は帰つて来なかつた」ことを知つた。一方、池上検校はその数年前に郷里の町で亡くなつていた。

右の概略からは、池上検校のもとで百間が出会つた女性が、三木さんの原型になつていくことがわかる。主要要素は、この女性が池上検校にとつては琴の弟子であると同時に勤務校の同僚でもあるという関係と、関東大震災の犠牲者であるという二点である。前者の特徴については、三木さんが勤務校の生徒たちと稽古の時間が重ならないよう訪問日の選択に気を配っている様子に反映されている。後者については、伊勢佐木町で地震に遭つたことが百間の耳に入った消息として提示されているが、これはいうまでもなく小説中に「軍港の町」という固有名詞を避けた表現で語られる三木さんの最期に一致している。

また、女性の「声が不思議に美し」という特徴も、三木さんが「残月」を稽古する場面（第六章）に継承されている。このシーンでは、三木さんによる「残月」の前歌を通して、検校は見えていた頃の記憶とも異なる幻想的な映像を思い浮かべる。その「映像」とは、前掲の野田論が指摘している「盲者の視覚性」の表現にほかならない。日常生活の場面では聴覚と触覚の表現が多用されているだけに、こうした稽古のシークエンスは、検校の感覚世界を揺さぶる三木さんの歌声が「普通の箏唄を聞く様ではな」い印象を残すものであることを示唆する箇所だといえよう。

さらにこうした三木さんの声は、検校の視点のもとで語られる小説において、おそらく百間が実際に聞いた「女のお弟子」の歌声をこえて神秘的な色彩を与えられている。というのも、元のエピソードをそのまま踏襲すれば三木さんは「唱歌の先生」のはずだが、小説では「英語の先生」に書き換えられているからである。教科指導で歌う必要がある音楽教師の声が美しいのは当然かもしれないが、英語教師がそうである場合、それは元から優れた声の持ち主である可能性がより高いことになる。こうした実体験と小説の間にある相違は、ロンドン帰りの英子さんとの比較（第二章）に加えて、三木さんの歌声の美しさを鍛錬の結果ではなく天性の才能として描出することにもつながる。

つまり検校にとって三木さんの声とは、「英語ばかり使つた所為」で荒れるものでもなけ



れば、「唱歌の先生」のように日常的に鍛え続けることで美しく保たれるものでもない。外的要因の影響を受けず、むしろ聞く者に影響を与える声として、検校は三木さんの声を捉えているということになる。むしろそれは声だけでなく、三木さん本人に対する検校の恋心の内実を映し出しているのである。

このように、「千鳥の曲」における池上検校のエピソードは、検校と女の弟子および後者の死という人物の配置の点で、「柳検校の小閑」の原型となっているといえる。柳検校の恋を物語の中心に据えたことで、三木さんの存在感を強めるための細部の書き換えがなされているが、この二人の関係が小説のベースになっているとみていいだろう。

ところで、随筆との照合で明らかなおと、「柳検校の小閑」においては登場人物の名前を除く固有名詞がほとんど見られないが、この小説も「千鳥の曲」同様、関東大震災に深く関わっている。前述のとおり「千鳥の曲」では「被服廠跡の震災記念堂」と明確に語られているため、文章の中心的话题が関東大震災にあることがわかる。

一方、小説においては結末近くによく「大地震」(第十章)と表現されるのみである。ただ、その地震から十七年経過しているという小説中の言葉によって、「柳検校の小閑」が発表された一九四〇年から逆算すれば、九章までの物語が一九二三年の出来事であったことは容易に導き出せる。従って「柳検校の小閑」とは、関東大震災を背景にした物語である。

その上で固有名詞が消し去られている理由があるとすれば、それは第一に、短絡的なモデル探しの読解を拒むためだと考えられる。五年前に発表した随筆の内容と直接に結び付けた小説の読解によって、かつて師事した池上検校に「女のお弟子」との関係において好奇の目が注がれてしまう事態は、百間が当然避けなければならなかったはずである。

とはいえ、ごく短い随筆を五つ並べた「五段砧」の内の一章と、その五年後の連載小説とを関連付けて穿鑿する『改造』の読者が当時どれだけいたのだろうか。「柳検校の小閑」は、小説家を主人公に据えているわけでもなければ、文壇の醜聞に取材しているわけでもない。そのような小説が、モデル探しを拒むただけに作中で固有名詞を排除しているのだとしたら、それは行き過ぎた予防線というものだろう。従ってここには、もう一つの理由を想定する余地があると考えられる。それは、「柳検校の小閑」が池上検校とその弟子の女性という二人の関係に、百間が想像の翼を広げただけの小説ではないということだ。以下では、「柳検校の小閑」のもう一つの素材といえる、百間とその「女のお弟子」との関係を取り上げることにしたい。

## 二 女性を教えるということ——長野初と百間

長野初さんは、初め野上白川氏の御紹介で、私の許に独逸語を習ひに来た。目白の日本女子大学校を出て、その当時帝大が初めて設けた女子聴講制度の、最初の聴講生の一人として帝大文科の社会学科に通つてゐた。女子大学では英文科の出身なので、独逸語を知らないから、大学の講義を聴くのに困ると云ふので、私に教はりに来たのである。私はその頃は陸軍士官学校と海軍機関学校と法政大学との先生を兼ねて、勤務時間は多くて忙がしかつたけれど、家に帰れば法政大学の学生が訪ねて来るのをお伴にして、活写真を見て廻つたり、一緒に麦酒を飲んで騒いだりしてゐた時分だから、長野一人を教へてやる時間を繰合はせる位の事は何でもなかつた。のみならず、私は自分の教師としての経験から、語学の初歩をゆつくりやつてゐては、いつ迄たつても埒は明かない、当分のうちは毎日来る事、決して差支を拵へて休んではいけない、時間ははつきりした約束は出来ないから、早くから来て、待つてゐて貰ひたいと申し渡した。

一九二〇年代前半には公私の大学・専門学校で女性の聴講を許可する動きが相次いだが、長野初はその最も早い時期の聴講生の一人である。右の「長春香」(『若草』一九三五年一月)における記述によれば、彼女は百間のもとに通い始めてから「二三年後」に結婚して訪問が途絶え、それから間もなく関東大震災が起こつたという。東京帝大が女子聴講生制度の運用を開始したのが一九二〇年九月十三日のことである。から、長野が実際にドイツ語を教わりに来ていたのは、おそらく一九二〇年から二十一年の間の一年弱の短い期間だったと見られる。彼女は震災で命を落としたため、東京市内の再建が進み市民の生活が平常に復してからも、再び百間を訪れることはなかつた。こうした長野との師弟関係と彼女の死は百間に強烈な印象を与え、以下で扱う「長春香」「アヂンコート」をはじめとして、繰り返し追懐の文章を書かせている。

いうまでもなく長野は、当時の女性として望みうる最高の教育を受けたのであり、学習意欲と能力の両方において群を抜いていた。「長春香」において百間は、「覚えないう前に解らうとする料簡は生意気である」との教育観によつて課した暗記重視の「復習と予習と宿題」を、彼女が毎回こなしてきたことを回想する。そのような優秀な生徒である長野を、百間は「勉強家で、素質もよく、私の方で意外に思ふ位進歩が速かつた」と評している。

また一方で、長野がきわめて礼儀正しく落ち着いた性格での持ち主であったことも、「長春香」には印象深く語られている。そもそも、朝が遅いために「時間ははつきりした約束は

出来ない」にもかかわらず「休んではいけない」などと申し渡す教師の教えを真面目に受けるといっただけでも、間に立った野上夫妻への遠慮があるにせよ、誠実かつ寛大な生徒でなければ続けられないことだろう。それに加えて、晩年の回想である「アヂンコート」(『小説新潮』一九六二年十一月)によれば、彼女は月謝を受け取らない百閒に対して、自宅での晩餐に招いたり、郷里の特産品を贈ったりと気を遣って貰ったらしい。

このように、長野は百閒にとって申し分のない生徒だった。彼女の百閒への関わり方が、少年時代からすでに職業軍人としての姿勢を叩き込まれている陸軍士官・海軍機関学校の生徒たちや、学校の敷地を一步出ればほとんど友人のような法政大学の男子学生たちとの付き合いの中にはない要素を備えていたことは明らかだろう。とはいえもちろん、百閒は長野を性的な欲望の対象として捉えているわけではない。むしろ、若い女性が三十代半ばの文士に教えを乞うという構図から二人の関係を周囲が邪推することに、百閒は戸惑っていた様子さえある。

例えば同じ「アヂンコート」の中では、「昔の高等学校以来の旧友」が百閒の「綺麗な女弟子」に興味をもち、「キスクらゐはしたらう」「手は握つたか」などと下世話な想像を働かせている様子がえがかれている。この友人は、質問への百閒の否定に対して「綺麗な女が手近かにゐて、そんな筈がない」と決めつけて疑り続けていたが、一方では、女性として熟知り顔に長野の心中を推し量る者もいたようである。その女性すなわち「お初さんの先生」とは、長野を百閒に紹介した野上豊一郎の妻、弥生子にほかならない。百閒の書くところによれば、弥江子の見立ては次のようなものだったらしい。

曰く。お初さんは内田さんに惚れてるんだわ。うちへ来て、かう云つた。あんな我儘で得手勝手で、始末の悪い方つてありませんわ。御自分の思つた通りの順序でなければ何事も承知なさらないんですもの。お家の方がよくお世話出来ると思ひます。私だつたら真つ平御免ですわ。

そんな事を云ふところを見ると、お初さんは惚れてゐるんだ。さうでなければもつと違つた感じ方をするものよ、と小説家の起ち場で観察したと云ふ。しかしその話がなぜ私に伝はつたかの経路はわからない。お初さん自身がそんな事を私に云ふわけではないから。

「アヂンコート」における旧友と弥江子の二つのエピソードからわかることは、若い女性への自宅における個人教授という構図から、周囲が二人の関係を男女間の恋愛に置き換え

て解釈しようとしていた状況である。特に後者における「小説家の起ち場」というものの思い込みの強さには驚くばかりだが、仮にこうした推測が事実であったとしても、弥生子の思考の前提に、百閒と長野の師弟関係を男女関係の枠に当てはめようとする好奇心が働いていたこともまた否定できないだろう。それは、文中でぼかされている、弥生子の「観察」を百閒に伝えた人物についても同様である。このように、百閒の長野との付き合い方と周囲の理解との間には、大きなギャップがあった。

ところで前掲の酒井論は、「アデンコート」におけるこれら二つのエピソードが実際には存在せず、百閒と長野の間にあり得た「恋愛感情を前景化させるために」創作された場面であると推測している<sup>7</sup>。著者が「晩年に及び、空想上の恋を楽しんでいるのだと思う」というのがその理由だが、同じ一篇の結末近くで百閒（「私」）が被服廠跡に向かい、戦時下における金属供出のため市民の宝飾品に目を光らせる若者を見て「大事な思ひ出をこはされてしまふ」と嘆いていることを踏まえると、右のような周囲の邪推が、あえて過去の記憶に付け加えられた架空の場面だとは考えにくい。やはり好奇心から出る周囲の冷やかしは実際にあつたのであり、それに構わず師弟関係を保ち続けた記憶も、「アデンコート」における「大事な思ひ出」の内実に含まれているということではないだろうか。

なお百閒は、長野が「美人」であつたと「長春香」「アデンコート」の両方で書いているが、これも友人や野上弥生子の推測とは異なる次元のものと思られる。特に「アデンコート」では「私の好きな顔立ちではないが」と但し書きをつけた上での記述であり、「何よりも大変利口であつた」と述べていることから、彼女の容貌を当時の一般的な基準に照らして「美人」であると認識していたのにすぎないというのが妥当な解釈だろう。もちろん外見への賛辞を女性への評価とはき違えているくらいはあるわけだが、自宅を頻繁に訪れる「綺麗な女弟子」との関係に注がれる好奇の目や、彼女が自分に思いを寄せているという噂に取り巻かれながらも、百閒にとつての長野とは、当時の周囲が考えたような対象ではなかった可能性が高い。

しかし繰り返し述べれば、関東大震災で命を落とした長野が、それゆえ百閒にとつて印象深い弟子となったことに疑いの余地はない。「長春香」の記述によれば震災直後の百閒は、行方不明の彼女を探すために長野家の焼け跡に立ち、また名前を書いた幟を持って近隣を歩き回ったという。そして「焼け跡と、死屍のなほ累累としてゐる被服廠を見て、長野の死んだ事を信じた」にもかかわらず、それから十二年を経てもなお震災の話を経験した長野から聞いたような気がするという「記憶の迷ひを払ひのけ」なければならぬほどに、心の底では彼女

の死を認めることができずにいるのである。

死者へのこうした割り切れない感情は「アデンコート」において、「生きてゐる間は、実にそつけなく付き合つたが、ゐなくなると一生懸命に探し、ゐないときめた後は又いつ迄もその思ひ出に取り縋らうとする」と的確に言語化されているが、それは震災の記憶が「三十九年の昔話」になつたからこそその客観視だろう。この境地に至るまでも百間は、毎年九月一日には長野を悼んでいたのであり、短いつきあいながらも生涯忘れることのできない弟子として彼女を記憶にとどめていたといえる。

こうした長野初と百間の関係は、長野の生前、二人に注がれた周囲の目も含め、「柳検校の小閑」における三木さんと検校の関係に生かされていると考えられる。とはいえ、小説ではすでに述べたとおり検校が三木さんに思いを寄せているため、長野―百間と三木さん―検校の関係が等号で結び付けられるというわけではない。いわば、前掲の池上検校と「女のお弟子」を基本的なストーリー・ラインとしながら、師弟間の恋という物語上の構図については、百間が長野との関係をめぐる周囲の憶測から着想して具体化した結果が、「柳検校の小閑」なのではないだろうか。

前述のとおり、池上検校は震災前に亡くなっているため、「女のお弟子」が伊勢佐木町で火災に遭つたことは知りようもない。一方で百間は、みずからも被災しながら、長野の行方を追つて焼け跡をさまよひ、その死を長い間受け入れられずにいた。つまり「柳検校の小閑」の三木さんとは、背景となるエピソードからいえば二人の女性が材料となつて作り出された人物なのである。酒井論では、池上検校のエピソードは「外形的な」人物関係であり、百間の長野との思い出を誇張変形して物語化するための器だとされていたが、両者は必ずしも明確な主従関係にはない。むしろ彼女と主人公の関係を中心に進む「柳検校の小閑」の物語は、「千鳥の曲」における池上検校の弟子の記憶に、「長春香」等に語られた長野初の思い出が接ぎ木されて成立している。と見るのが妥当だろう。

このように「柳検校の小閑」の背景には、百間が池上検校の稽古場で出会つた「女のお弟子」と、長野初という、ともに関東大震災で命を落とした二人の女性に関するエピソードがあるといえる。別個の随筆に取り上げられていた震災にまつわる二つの記憶が、女性への個人教授という当時としてはやや例外的な状況の点で結び付けられて生成されたのが、関東大震災を扱つた「柳検校の小閑」の物語なのである。従つて三木さんが二人の実在の女性をもとにしたキャラクターであるだけでなく、対応する検校もまた池上検校と百間という二人の「師」を材料とした主人公であると考えられる。

ところで、改めて確認すれば「柳検校の小閑」とは、見えない主人公が語る小説であった。そのような物語言説の特徴は、こうした震災を扱う物語内容とどのように関わっているのだろうか。次節では、これまで取り上げてきた小説の成立背景を踏まえた上で、物語内容と物語言説の関係を考察することによって、「柳検校の小閑」の包括的な性格付けを試みることにしたい。

### 三 検校という主人公

さきに述べたとおり、「柳検校の小閑」の主人公兼語り手は中途失明者であり、小説の記述から推測すれば、三木さんと対面して稽古をつける検校に、周囲にある物の色や形を目で見て認識する力はまったく残っていないと思われる。こうした状況にある主人公の語りが見える読者を驚かせるような知覚のありかたを表出していることは、前述のとおり三島の評言に加えて、野田論の詳細なテキスト分析が指摘している。以下では、そのような主人公像および表現上の特徴と、これまで取り上げてきた物語の背景を関連付けてみたい。具体的には、物語のクライマックスといえる十章において、見えない語り手が死者の記憶をどのように叙述するのかを検討した上で、前掲の背景となるエピソードを含んだ随筆の記述とを比較することにより、小説の内容と言説の関係を考察していく。

十章は「三木さんの行つた後、蟬の鳴きしきつた晩はついこなひだの事のように思はれるが、それから既に十七年たつてゐる」と語り出されることからわかるように、三木さんと気軽な会話を交わして別れた最後の晩（九章）から十七年後の場面である。

三木さんが表が暗くなつたと云つて、あたふたと帰つた晩の翌翌日、自分がその当時の、人に云はれない憂悶を久久で打ち払つた様な気持で部屋の一角に坐つてゐた時、朝の内の大雨が急に霽れ上がった後の風が強く吹き抜けたと思つたら、自分はふらふらとして、坐つたなり前にのめりさうになつた。あわてて頭に手を当てようとすると、全身が船に揺られてゐる様にゆらゆらとした。同時に自分を取り巻く四方から非常な物音が起こつて、大地震だと云ふ事が解つた。

三木さんはそれぎり帰つて来なかつた。軍港の町は全焼したと云ふ話であつたから、どこか知らない町の隅で焼け死んだか、或は町中の大きな崖が崩れて、その下を通つてゐた人人は一人残らず埋もつてしまつたと云ふ話も聞いたから、三木さんもその中に這入つてゐるか、暫らくは今日帰るか明日帰るかと待つてゐるが、到頭その儘で歳月がた

つてしまった。

一九四〇年発表の「柳検校の小閑」から十七年を遡ると、右の「大地震」は関東大震災を指していると読み取れることはすでに述べた。三木さんが被災したと思われる「軍港の町」は、さきに「千鳥の曲」を参照して伊勢佐木町であろうと推測したが、一方で彼女がそこに向かった理由である縁談の後始末に関しては、「アヂンコート」に語られた長野初の台湾行きおよび郷里の帰省が重ね合わせられる。前者は「東京の学校を出てから台湾へ渡り、子供を産んでその子供が死んで、澎湖島の赤岩に見送られながら一人で帰って来た（中略）その婿さんを台湾へおいて、なぜ帰って来たのか」という百間にもはつきりとはわからない長野の結婚生活の破綻である。

これは三木さんが縁談を断るために地方へ出かけ、帰京して検校に「私お嫁になんか行きませんわ」と言い放つ場面（九章）を連想させる。後者は「関東大震災の年の春、彼女は郷里の地を訪ね、その時のお土産に天草の雲丹を持ち帰った。私の所へも雲丹を容れた土焼の壺を幾つかくれた」というものだが、これは三木さんが「お土産に水雲を買って参りますわ」と予告して軍港の町に出かける部分に対応しているといえよう。

ただ右の照応からも明らかなどおり、これらの長野に関するエピソードは、小説に取り込まれるにあたって前後関係が入れ替えられている。長野は百間のもとに通い始めた時点ですでに不幸な結婚生活に終止符を打っていたが、三木さんは縁談の段階で先方の申し出を拒否しており、それが軍港の町に出かけていく理由となっている。

また実際には百間が長野から受け取って不吉な予感の原因となった「お土産」は、物語の中では震災の発生によって検校に手渡されず、小説末尾の「今はつてだにおぼる夜の」という「残月」の歌詞の響きを増幅させる伏線に書き換えられている。このように、琴の師匠という主人公の職業は、「千鳥の曲」で語られる池上検校のエピソードから着想されているが、物語の細部では百間本人の経験とも絡まっているものであり、これら二つの背景をもつ「柳検校の小閑」全体を「残月」の調べに乗せて語るための物語設定であることがわかるだろう。

検校という主人公の職業は、こうした小説の背景を有機的に統合する役割を果たしているが、その一方で、見えないということに由来する語りの特徴は、逆説的なことに池上検校よりは百間のエピソードを小説に取り込む際に効果を発揮している。十章における検校の「迷ひ」と、「長春香」末尾での百間の「迷ひ」を対照することで、その具体的な取り込みの様態を検討してみたい。左に、「長春香」と「柳検校の小閑」十章から、それぞれ「迷

ひ」をめぐる叙述を引用する。

月日のたつた今、うつかり考へてみると、寺島さんの家の跡取りの人が、一人だけ向島に出かけてみると、地震が来たので、わざわざ火災の中に戻つて来て、床の間のある座敷で焼け死んだと云ふ話を、私は長野から聞いた様な気がする。それで一家全滅したので、家の焼跡にお寺を建てて、殆ど死んでしまった町内の人達の供養をする事になりましたと長野が話した様にまざまざと思ふ事があるけれども、勿論そんな筈はない。私は年年その小さなお寺の前に起つて、どうかするとそんな風に間違つて来る記憶の迷ひを払ひのけ、自分の勘違ひを思ひ直して、薄暗い奥にもつてゐる蠟燭の焰を眺めてゐる間に、慌ててその前を立ち去るのである。

〔「長春香」〕

自分の家の庭に柴折戸がある。そんな所から三木さんが這入つて来る筈がないのであるが、当時はぼんやり端居してゐる時、何度でも三木さんがそこから来たと思つた。余りに真実な氣持がするので、口の中で小さな声を出して、そこに来てゐる三木さんに話しかけた事もあつた。後で自分の迷ひに気がとがめ、同時にさう云ふ心持になるのが苦しくて堪らないから、それを迷ひとするには当たらないと考へつめた事もある。うつつにその人がゐるとしても、その人の姿も顔も見事出来ないのであるから、ゐない人を見るつもりになつても同じ事ではないか。又夢の中で三木さんや伊進にしばしば邂逅する。夢はうつつの迷ひにも増して自分にはうれしかった。さめた後にその人はゐない。又ゐても見えないのではないか。

〔「柳検校の小閑」〕

百間と検校の「迷ひ」とはともに、震災で命を落としたはずの親しい人がまだ生きているように感じることを意味している。それは「長春香」では、長野が震災発生時の自宅近くの様子を語るという「記憶の迷ひ」であり、「柳検校の小閑」の場合は、三木さんが軍港の町から帰つて来て検校と会話を交わすという夢のような「うつつの迷ひ」である。

このように死者を生きているものとして捉えるという点が両者の「迷ひ」には共通しているわけだが、かたやそれが「記憶」の中で起こるのか「うつつ」に幻視されるのかは、両者の間で大きく異なる。いうまでもなくこの違いは、「迷ひ」に陥っている主体が見えるか見えないかに由来する。つまり目の前に相手がいるということを確認する手立てが目視であ



る場合と、声を出さなくとも近くの物音や気配でわかる場合とは、「いる」と思うための認識の仕方に違いがあるということになる。

そのような違いは具体的には、「長春香」の百閒が、長野の訪問はないとわかっている代わりに自らの記憶を改竄するのに対して、「柳検校の小閑」の検校は、誰もいないという目の前の現実を、三木さんが柴折戸から入ってくるかのように読み替えることができるという差を生んでいる。言い換えれば、「長春香」における百閒の「迷ひ」は、長野の姿を目にすることができないという理由で「払ひのけ」られなければならないが、検校はそもそも三木さんの顔を見たことはなく、これからも「その人の姿も顔も見事出来ないのであるから、ゐない人を見るつもりになつても同じ事ではないか」と「迷ひ」を正当化する余地をもっているのである。こうした比較のもとで「長春香」から「柳検校の小閑」への軌跡をたどるとすれば、そこには死者を「つもり」によって蘇らせるといふ、「迷ひ」の肯定があるといえるだろう。現実的には三木さんが帰って来ることはあり得ないとしても、「ゐても見えない」検校には彼女を「目の前」に呼び出すことができるのである<sup>10</sup>。

従つて検校という主人公の身体的特性は、関東大震災の生存者が死者をどのように弔いうるかという普遍的な問題を提起するための物語装置といえるのではないだろうか。この物語世界において、小説の外で実際に多くの被災者がおぼえたであろう身近な人の死を受け入れられないという感覚を検校もまた「十七年」のあいだ抱き続けている。言い換えれば検校とは、いち被災者であると同時に、特徴的な視覚性を想像力の源とした死生観の形象化でもある。このように野田論の指摘する「盲者の視覚性」とは、谷崎への共感と対抗意識による表現の実験であるばかりでなく、「柳検校の小閑」を執筆するにあたり関東大震災といふ大きなテーマに百閒がいかに取り組んだかを示す特質でもあるといえるだろう。

おわりに

以上、「柳検校の小閑」の物語背景を踏まえた上で言説の特徴と関連付け、この小説をより包括的に捉え直すことを目的として、関東大震災と「女の弟子」という二つのモチーフが扱われた百閒の随筆との関連を中心に考察してきた。本稿の手続きを改めて確認すると、次のようである。

はじめに物語の基本的構図を確認した上で、対応する二つのエピソードを紹介した。第一のエピソードは随筆「千鳥の曲」に語られている、池上検校と関東大震災で命を落とした「女のお弟子」にまつわるものである。これは琴の稽古という物語の基本的な舞台と人物配置、

および三木さんの死因の点で小説に素材を提供したと考えられる。第二のエピソードは第一の背景よりも小説の細部に関わるもので、百閒と長野初の師弟関係である。「長春香」および「アヂンコート」を手掛かりとして、やはり関東大震災で亡くなった長野が、百閒に忘れてほしい弟子となったことと、彼女の生前に周囲が二人を男女関係の枠に当てはめて好奇の目を向けていたことを取り上げ、これらの要素が三木さんと検校の関係に反映されているのではないかという見解を示した。

最後に以上の物語背景を踏まえ、見えない主人公兼語り手による物語言説が、こうした物語内容に何をもたらしているのかを考察した。この考察においては特に、小説のクライマックスといえる十章の記述と、「長春香」末尾の比較対照を通して、見える／見えないの違いが、目の前にいない死者と生前同様に会話を交わすという「迷ひ」の否定／肯定に対応していることを指摘した。そして、検校という主人公は被災者であると同時に、特徴的な視覚性を想像力の源とした死生観の形象化でもあるという結論を導いた。こうした方法によって、「柳検校の小閑」を表現と内容の両面からより包括的に捉え直すことを試みた。

以上の検討から明らかになったことは、次の三つである。まず、「柳検校の小閑」の物語が、関東大震災と「女の弟子」にまつわる百閒の二つの体験を背景としていること。次にそれら二つのエピソードが、池上検校と百閒、検校の「女のお弟子」と長野初をそれぞれ重ね合わせる形で統合され、実際の時間軸が入れ替えられることで、柳検校が関東大震災で三木さんを失うという物語の最も重要な筋書きが作り出されていること。最後に、こうした背景をもつ物語における「盲者の視覚性」が、すでに指摘されていた技術的な実験の痕跡であるだけでなく、関東大震災を背景とするという物語内容上の要請を満たすためのツールとしても欠かせない役割を担っていること。このように、表現技術の高さにおいて評価されてきた「柳検校の小閑」は、実のところ著者の記憶への対峙によって生成された物語であるといえる。見えない人の視覚を的確に把握した語りには確かに注目せざるを得ない一方で、そのような語りが採用されている理由は、物語の内容的背景にあるのである。この点を確認することなしに「柳検校の小閑」を論じることはできない。

なお、本稿では小説の背景に議論の焦点を当てたため、近代日本にとっての関東大震災という大きな問題系で扱われてしかるべき、都市景観の変容と知覚の関係を取り上げることではできなかった。百閒におけるこうしたテーマに関しては、「柳検校の小閑」の二年前に発表された「東京日記」(『改造』一九三八年一月)において最も具体的に描出されている。例えば鈴木貞美は丸ビルが消える「その四」に、「魔都」としての東京の姿を読み取った<sup>11</sup>。

また丸川哲史も、「その一」における日比谷濠端の巨大な鰻が建て直された東京つまり「帝都」を破壊するために現れたと論じ、同作に帝国主義への批評性を見出している<sup>12</sup>。一九三九年の日本郵船入社後には植民地への旅行記や座談会に積極的だった<sup>13</sup>。百閒にそのような思想を見出すことはまず不可能だろうが、「東京日記」全二十二篇にわたって怪異の場として描かれる東京市内が、百閒から見ても人工物で満たされ知覚を作り替える力をたたえた場所であったことは確かだろう。げんに篇中で市街を破壊しようような巨大な生物が登場するのは「その一」のみであり、「その十」では富士山が噴火しても住民は全く動じず、やがて「私」もそれに順応していく様子が語られている。

なお丸川論が結果的に百閒を反戦作家であるかのように描き出す従来の作家論をなぞっていることについては、「東京日記」の時期の言動のみならず、「柳検校の小閑」から見ても疑問の余地がある。本論で繰り返し述べてきたように「柳検校の小閑」では関東大震災とそれのおよそ十七年のちが語られているわけだが、それはとりもなおさず「帝都復興」から「戦時」へという帝国日本の歩みとともに経過した時間である。テキストのこうした同時代言説としての付置については、今後さらに検討を加えていきたい。

注

1 舟橋聖一「既成作家の寥々たる作品 文芸時評(4)」『読売新聞』一九四〇年五月四日付朝刊。

2 三島由紀夫「解説」谷崎潤一郎ほか編『日本の文学 34』一九七〇年、中央公論社。

3 野田康文「内田百閒・盲目の〈闇〉と視覚性、あるいは記憶の表象——『春琴抄』から『柳検校の小閑』へ——」『日本近代文学』第九十三集、二〇一五年十一月、日本近代文学会。

4 福田博則「『春琴抄』の周辺——内田百閒「柳検校の小閑」への影響を考える」『花園大学日本文学論究』第六号、二〇一三年十二月、花園大学日本文学会。

5 酒井英行『百閒 愛の歩み・文学の歩み』一九九五年、有精堂、一八四ページ。

6 一九二〇年九月十二日付の『読売新聞』朝刊では、「女子卅二名が愈よ明日から帝大に」と題して「入学する女子聴講生の氏名、本籍地出身学校研究志望の学科を列記」しており長野の名前も記されている。

7 注5文献に同じ。

8 従って三木さんが英語教師であるという点は、声に関する前述の理由のほかに、長野が英文科を卒業していることを踏まえての造型であるとも考えられる。

9 一方、引用文中の「夢の中で三木さんや伊進にしばしば邂逅する」という記述に関しては、中途失明者である検校が、見たことのない彼らの顔を夢の中で見るのかどうかは不明

である。百閒は多くの見えない知人との会話の中でその答えを知っていたのかもしれないが、見える読者の多くはこの一文に疑問を抱くのではないだろうか。保野孝弘・宮田洋の報告「視覚障害児・者の睡眠行動に関する研究」（『川崎医療福祉学会誌』Vol.6 No.2 一九九六年十二月、川崎医療福祉学会）によれば、視覚経験があれば見えなくなってしまう視覚的な夢を見るという。また伊藤亜紗はこれを踏まえ、見えない人が得る視覚以外の情報も「頭の中で像をむすぶときには、何らかの視覚的なイメージに変換される場合が多い」ことを指摘している（「見えない人は夢を「見る」か」『考えるメディア』二〇一五年十一月十三日、<https://media.style.co.jp/2015/11/4032/>、二〇一九年三月十八日参照）。従って、検校は夢の中で、視覚的に組み立てた彼らの姿を「見た」可能性もある。

<sup>10</sup> こうした死者への想像力は、日本を含む東アジアにおいて死者を呼び返す盂蘭盆会などの発想に加えて、世界各地での見えない人びとに独特の社会的地位が付与された背景とも共通の地盤にある。つまり小説における検校の役割は、一方ではきわめて古典的な見えない人のものである。このように一見「実験的」な検校の語りの機能が、見えない人に対するステレオタイプの域を出ないことは注意すべきであろう。

<sup>11</sup> 鈴木貞美「魔都としてのモダン都市」『幻想文学』62、二〇〇一年十一月、アトリエCTA。

<sup>12</sup> 丸川哲史「帝都の人造怪物」『帝国の亡霊——日本文学の精神地図』二〇〇四年、青土社。

<sup>13</sup> 『船の夢』（一九四一年、那珂書店）および『沖の稲妻』（一九四二年、新潮社）は、台湾への旅行記を多く収める。また百閒は「海ゆく座談会」という東京朝日新聞紙上での連載に参加して「共栄圏」への期待を語っていた（『東京朝日新聞』一九四一年七月十八、二十四日朝刊）。

### 第三部 再び語りの方へ

——一九五〇年代における執筆再開の周辺——

## 第七章 『新方丈記』論

——『東京焼尽』との比較を手がかりとして——

はじめに

『東京焼尽』（一九五五年四月、講談社）は内田百間の著作の中でもとりわけ広く親しまれ、日記文学としても歴史資料としても評価を得てきた。しかし一方で、同書と内容の重複を多く含む随筆集『新方丈記』（一九四七年二月、新潮社）にはそのような言及はほとんどなされていない。『新方丈記』は百間にとって一九四五年の日本の敗戦以後初めての著作であり、個人全集の編集を担った平山三郎によって『東京焼尽』と同一期間の日記に基づいていることが明らかにされている<sup>1)</sup>。

こうした同一期間の日記に基づく著作が十年足らずの間に二点も刊行された背景には、各書籍の出版年から明らかのように、敗戦に連合国軍総司令部（GHQ/SCAP）による占領、特に国内刊行物への事前検閲がある。右の平山三郎が全集解題において「敵機」は「米機」と書きかへてあるなど『新方丈記』諸篇の字句には検閲に対する細かな配慮が払はれてゐる」と述べているように、占領下に日記を公刊するに際しての削除変更が『新方丈記』の制作にあたっては行われている。

また、『東京焼尽』の内容は、先の大戦前後について現在までに公刊された百間の日記である『百鬼園戦前戦中日記』（慶応大学出版会、二〇一九年五月）と『百鬼園戦後日記』（一九八二年三月・四月、小沢書店）各上下巻のいずれにも収録されず、『東京焼尽』に該当する期間の記述は同書に譲ると注記されている。原日記資料を確認する必要があるのはもちろんだが、こうした出版編集の状況ならびに後述する山田桃子による原日記資料の調査の報告内容（後述）にかんがみて、基本的にこれを日本文そのものと見ることに大きな問題はないと考えられる。

以上のような各資料の性質を踏まえて本稿では、百間の著作の中でこれまでほとんど取り上げられてこなかった『新方丈記』の再評価を目的として、作家がどのように占領期の検閲に対処したかを『東京焼尽』との異同を確認することで明らかにしていきたい<sup>2)</sup>。ここで検閲への対処とは、単に自己検閲による記録内容の矮小化のみを意味するのではなく、削除変更箇所の前後からこそ本来書かれていた内容を浮かび上がらせようとする試みをも含めている。次節で各書の構成を概観したうえで、以上のような『東京焼尽』の照明による『新

方丈記』の性格付けを行っていく。あわせて『東京焼尽』を論じる射程を新たに提出することも目指したい。

一 『新方丈記』、『東京焼尽』、そして日記

百閒は先の大戦において日本郵船会社に職を得たことで従軍・徴用を免れ、同時に日々出版社するため、日本列島内の都市部への空襲が激化してからも東京にとどまり続けた<sup>3</sup>。やがて一九四五年五月二十六日のいわゆる山の手大空襲により自宅を焼失し、以後の三年間にわたりわずか三畳の小屋での起居を余儀なくされた。『新方丈記』はこの当時鴨長明を愛読した百閒が、方丈にも満たない仮寓で書いた作品集である。

この『新方丈記』と『東京焼尽』は、ともに日本の敗戦前後の百閒の日記に基づいている。平山三郎によれば実際の日記は「大判の分厚い大学ノオト」に記され、表記は両著作のいずれとも異なり「すべてカタカナで、しかも句読点なし、改行もまつたくない文章がノオトをびつしり埋めてある」<sup>4</sup>といい、戦中という成立時期もあいまって一種鬼気迫る記録資料であることがうかがわれる。これに続いて平山は「戦中の日記をそのままにしたのは『東京焼尽』で」「戦中の日録、昭和十九年一月一日に始まり敗戦の二十年八月二十一日で終わる」と説明している。

しかしながら百閒関係資料の調査研究に携わる岡山県郷土文化財団の万城あきによれば『東京焼尽』については、『新方丈記』のみならず同財団の所蔵する原日記との間にも八月二十一日の記述を中心に異同があるという<sup>5</sup>。日記資料を調査した山田桃子は、原日記と『東京焼尽』の異同について、自筆原稿と文字起こし原稿があり、また総枚数が平山三郎の説明とは異なる可能性があるなど「関連資料は複雑」であるとしながらも、新旧の個人全集における大幅な改稿はないとの平山の説明には「ある程度信憑性があると見られる」と述べている。

執筆者は同資料については未確認であり、今後調査を進めることでより正確な加筆修正の過程を把握したい。現下の状況においては所蔵機関での資料調査が困難であることから、ここでは『東京焼尽』と原日記が必ずしも同一の本文ではないことを認めたくうえで、便宜上『東京焼尽』の本文を基本的に「戦中の日記」の本文として考察を進める。

『新方丈記』こうした『東京焼尽』ないし「戦中の日記」から特に東京への空襲によって自宅を焼け出されてから近隣の区画で仮住まいを始める場面までがおもに抜粋され、全四篇に編み直されている。これに日記形式をとらない数十の掌編からなる「椎の葉陰」が加わ

り一卷を構成しているが、ここでは日記の記述により直接的に基づいているという理由から右の四篇を取り上げる。これらを『東京焼尽』と照合すると、各編の扱う期間・日付は次のようになる。

「灰塵」……一九四五年五月二十四日～二十六日

「土手の東雲」……同五月二十六日～三十日

「仰願寺蠟燭」……同五月三十一日、七月二十三日～二十五日

「餓鬼道日記」……同七月十三日～八月十七日

「灰塵」と「土手の東雲」の日付からわかるように、両者は連続した内容をもつ。具体的には一九四五年五月二十六日の未明に城西エリアへの激しい空襲で自宅を失い、四谷方面へと逃れた前後の出来事が描かれている。続く「仰願寺蠟燭」の冒頭までが一連の内容となつているが、ここでは日記の抜粋という形式によつて七月下旬の三日間が合わせて収められている。最後の「餓鬼道日記」は七月から八月にかけての約一ヶ月、つまり日本の敗戦の前後一ヶ月における百間の生活を取り扱っている。

そしてこれら『東京焼尽』と『新方丈記』両方の材料が、前掲の平山による解題の通り、百間の日記のうち一九四四年から一九四五年八月にかけての部分だということになる。前述のように、便宜上『東京焼尽』を日記そのものと見ることによって、『新方丈記』の制作過程において百間がいわばどのような自己検閲の眼をもつて自身の日記に対したかを明らかにしていきたい。そのために次節ではまず、戦後まもなくの日記を参照しながら自己検閲の眼を百間がいかに獲得していったかを検討する。

## 二 占領期の執筆再開

占領下で執筆を再開するにあたり、百間は検閲に対して「差しさはり無きや否やを予め確かめ」るために直接当局へ問い合わせる方法をとった。一九四六年十月三十日の百間の日記には、次のような記述がある。百間は戦時下の日記を公刊するにあたり当時の検閲担当部局に、問題となる内容がないかどうかを尋ねた。

……放送局の亜米利加進駐軍司令部民間情報及教育部へ庄野と共に歩いて行き、凡そ用を弁じて、歩いて本社に帰る。昨日欄記載〔執筆者注・二十九日の項に「十月十六日欄記載の文芸春秋社から出す本の事に就き明日米軍司令部のその係へ一緒に行って貰ふ約束をした」とあるのを指す〕の件なり。



ここで百閒が「亜米利加進駐軍司令部民間情報及教育部」と呼んでいる民間情報教育局（CIE）は、「日本人の「頭の切替え」および「再教育」を任務として「日本国民の思想と文化の様式に密接な関係をもった諸問題」に取り組む機関とされた<sup>7</sup>。山本武利が「日本人から見て、CCDは非公然、日本人メディア関係者には半公然の機関、そしてCIEは公然の機関であった」<sup>8</sup>と述べるように、戦時下の複数の役職をすでに解かれた百閒にとって検閲に関わる「窓口」はCIEであったということになる。このとき「凡そ用を弁じ」たと記していることから、執筆の基準が概ね理解できたものと考えられる。むろん検閲に関わる内部文書を目にしたとは考えられないが、口頭での会話により、多少の情報は得られたのだろう。

ともあれ一九四五年度の敗戦から一年も立たずに、しかも元「敵国」の占領下でこうした日記を出版しようと計画したこと自体、果敢といえる。しかしそのためには、日記そのままの発表は占領軍にとって問題があり不可能であること、言い換えれば修正が必須であることも百閒は理解していた。修正や削除が場合によっては広範囲にわたって求められる可能性をも折り込み済みで、日記公刊の計画を進めようとしていたのである。

なお、この計画は百閒自身の筆が進まなかったこともあって滞り、出版元も当初から変更されたが、その間に占領軍が東京を去ったため、結果的に検閲への配慮は不要となった。こうして書籍化された日記がすなわち『東京焼尽』である。一方『新方丈記』はこれに先駆けて雑誌に発表された数篇を、基本的に朱筆を入れることなく収めている。言い換えれば百閒が日記出版のために問い合わせた内容は、結果として『新方丈記』の諸篇を執筆する際に生かされたと考えられる。

実際に『新方丈記』に収められた「灰塵」その他の雑誌における初出を確認すると、当時の検閲官は前に挙げた四篇のいずれにもコメントをつけていない。どれも戦時下の生活や空襲体験を記録として記した文章であることを考えれば、これらの背後には細心の注意を払った執筆の過程が浮かび上がってくる。つまりこうした作品の内容は、明らかにデリケートな題材を取り上げながら、当時の検閲にうまく「適応」した筆によって占領下に発表されるに至ったと思われる。

ここで先ほどの平山の「検閲に対する細かな配慮」という指摘を思い出せば、こうした「適応」がすなわち百閒による自身の日記、ひいては記憶への「朱入れ」であったことは言うまでもない。したがって繰り返しになるが、百閒は占領軍への問い合わせの結果を本来の目的である「昭和十九年一月一日に始まり敗戦の二十年八月二十一日で終つてゐる」「戦中の日

録」の代わりに、一九四五年五月末から八月中旬という、百閒にとって戦争の影響が生活上の困難としておそらくは最も強く現れた二ヶ月半の記録に対して用いたのである。

このように百閒の敗戦後の執筆活動は、当時の多くの文学者がそうであったようにGHQ/SCAPによる新たな政治体制に規定されるところが大きかった。しかし一方でこの時期に戦中の空襲体験や逼迫する生活の記録を公にするとは、検閲への配慮を抜きには進められないとはいえ、現在進行形で強く否定されている「大日本帝国臣民」で会った戦中の自らの思考を追体験することにほかならない。それは反省、改心、忘却、抑圧、あるいは正当化という反応のどれでもなく、ひたすら再読し、当時の検閲官の心理で朱を入れるべき箇所を推しはかるという「精読」の時間だったのではないだろうか。

ではこうした状況のもと自らの日記に向き合うなかで、百閒は具体的にどのような「精読」を行なったのかを、次節から本文の比較により考察していく。

### 三 本文の比較(1) 空襲とその被害に関する記述の削除と書き換え

前述のとおり百閒は一九四五年五月二十六日のいわゆる山の手大空襲で自宅を焼失した。『新方丈記』の中でこの空襲を書いたのが冒頭の「灰塵」である。ここで注目すべきは、『東京焼尽』には明記されている爆撃機の進路や攻撃の時刻が『新方丈記』では削除されていることである。以下では『東京焼尽』と「灰塵」の本文を比較し、「灰塵」における削除(角つき括弧による囲み箇所)、表記の変更(二重括弧による囲み箇所)、加筆(傍線箇所)を引用文の中で示す。

執筆者注・【角つき括弧】は削除、《二重括弧》は表記の変更、傍線は加筆を示す。以下同じ。

すぐに向うの西南の【方角の】空《は↓が》薄赤くなつたが、それよりも今夜は段段に頭の上を通る《敵機↓米機》の数が多くなる様であつた。《火燄↓火焰》を吐いて落ちて行くのは一つ見ただけである。焼夷弾が身近かに落ち出した。【B 29の大きな姿が土手の向う、四谷牛込の方からこちらへ今迄嘗つて見た事もない低空で飛んで来る。機体や翼の裏側が下で燃えてゐる町の像の色をうつし赤く染まつて、ゐもりの腹の様である。もういけないと思ひながら見守つてゐるこちらの真上にかぶさつて来て頭の上を飛び過ぎる。どかんどかんと云ふ投弾の響が続け様に聞こえる。】お隣りの《宮田↓何田》の引つ越した後の表の防空壕《に、↓が》空いてゐる。《宮田↓何田》の後へ来る事になつてゐる町内の《川崎↓何崎》の娘さんが丁度家にゐたらしく【】その娘さんと家内と自分と三人にて幾度もその防空壕に出たり這入つたりした。

右は一九四五年五月二十六日の未明に爆撃機が飛来し、百閒が家族や近隣の住民とともに空襲から逃れようとしている最中の場面である。まず主な変更は『東京焼尽』で「敵機」とある箇所が「灰塵」では「米機」とされ、同じく「宮田」は「何田」というように実名を伏せている点である。前者は前述の全集解題で平山三郎が述べる通り検閲主体であるアメリカ軍を意識した書き換えであり、後者は占領下で自らの作品によって知人に累が及ぶことを避けるための策であることがうかがわれる。

次に網掛けで示した削除箇所は「四谷牛込から」という爆撃機の進路を示す内容と「低空で飛んで」来て「あもりの腹の様」に街を焼き、思わずそれを眺める間にも再び低空飛行で「真上にかぶさつて」爆弾の投下を継続していたという攻撃内容の記述である。こうした臨場感のある描写が空襲被害の深刻さを思い出させ、アメリカ軍に対する当時の読者の敵愾心を呼び起こしうることは想像に難くない。またこうした心情面で「問題となる」記述を除いても、地名や攻撃の程度を具体的に記している点で軍事的に機微な情報、キログでいえば Criticism of United States (アメリカ合衆国の批判) や、Premature Disclosure (時期尚早な情報公開) が含まれているといえる。

続いて夜明けまで四谷方面へと逃げ続け、変わり果てた市街の様子を記した同日の項の末尾は、次に示すように多くの部分が削除されている。

到頭夜が明けはなれた。明かるくなつた辺りを見廻すと本当の景色ではない様な気がする。土手の前の道をひどい怪我人を幾人も一緒に《載せた↓積んだ》救急自動車や消防自動車や荷物自動車が《いくつもいくつも↓引つ切りなしに》通つた。【又近所の道傍でも見た。大変な負傷者だと思つてゐたら死人も非常な数に上ほつたさうであつて特に町内や近所にも怪我人や死人が多いのを聞き、無事にすんだのが全く難有いと思ふ。五番町の死者は八人とか九人とかだと云つた。後で聞くとその場で死んだ人が十四人ださうである。市ヶ谷の橋の下には死人が百人もゐると云ふ話を聞いた。ここいらではそんな事はないだらうと考へてゐたのだが、敵の攻撃が烈しかつたのと風の為にそんな事になつたのであらう。】四谷駅の燕の雛はどうしたかと思ふ。

ここで削除されているのは先ほどの苛烈な攻撃の結果、多数の死者が出たことを地区別の人数で示した部分である。これもまた前述の軍事的に機微な情報となりうると同時に、近隣や隣接する地区における死者を数え上げること、空襲の非人道性を描き出す箇所であるといえる。

このように削除や変更がなされた箇所とその内容をキログと照らし合わせつつ検討すると、なぜこうした処理が行われたかはおのずと了解される。一方でとりわけ削除箇所については、これを実際にならないものとして読んでみると、つまり内容の円滑な進行という点で『新方丈記』の記述を『東京焼尽』と比較すると、前者は少なからずぎこちない文章になつているように思われる。

例えば本節のはじめに挙げた引用文は「灰塵」では「焼夷弾が身近かに落ち出した。お隣の何田の引越した後の防空壕が空いている」、そこへ避難を繰り返したという文章になっている。また二番目の引用文は「灰塵」では「土手の前の道をひどい怪我人を幾人も一緒に積んだ救急自動車や消防自動車や荷物自動車や引つきりなしに通つた。四谷駅の燕の雛はどうしたかと思ふ」となっている。いずれの場合も意味は通じるが、『東京焼尽』と比較してみると、近くまで迫る焼夷弾から空家の防空壕へと、また怪我人を運ぶ車から四谷駅の燕へと、視点の転換が唐突に行われていることがわかる。

第一の引用文は『東京焼尽』では焼夷弾による身の危険を感じると爆撃機の姿が現れ、街が焼かれつつあることに気づいて防空壕に入るという流れがある。同じく第二の引用文も、怪我人が運ばれるのを見ながら、避難後に聞いた死者の人数を数え上げ、攻撃の苛烈さに加えて風向きが原因となり市ヶ谷周辺の被害が大きかったのだろうと分析した後、市ヶ谷に近い四谷駅の燕の雛は無事かと考える。こうした連想の順序が断ち切られていることで、『新方丈記』では視点の転換が唐突に行われているように見えると考えられる。

ただこうした検閲への配慮が生んだぎこちなさは、逆説的に削除箇所が存在とその位置、あるいは内容をも示唆してはいないだろうか。こうした浮き彫りの手法を百閒が意識していたかいなかを知るのは難しいが、そのような「作者の意図」を差し引いても、占領下の読書行為が不可視化された削除箇所とその内容を想像してなされる以上、連想によって話を転じていく随筆で知られる作家の文体の変化に、占領下における検閲への配慮を読み取ることは十分にあり得ただろう。

検閲による内容の変更を暗示するのは、場面の中断や論理の飛躍をもたらす削除だけではない。語句の書き換えにも注意すべき点がある。前掲の夜明けの場面では、引用文に示したように『東京焼尽』では「怪我人を載せた救急自動車や消防自動車や荷物自動車」とある箇所が、『新方丈記』では「ひどい怪我人を積んだ救急自動車や消防自動車や荷物自動車」（傍点執筆者）となっている。怪我の程度を「ひどい」と新たに形容していることには、本来この後に続いてきた犠牲者の多さを地域ごとに列挙した箇所の削除を補うためのせめてもの加筆と考えられる。

また『東京焼尽』では「怪我人を載せた」とある箇所が『新方丈記』では「怪我人を積んだ」に書き換えられている。この修正には、あたかも人ではなく「もの」のように動けなくなってしまうほど「ひどい怪我」を負わされたということ、言い換えれば先ほどの空襲場面に見られるように繰り返し爆弾が投下され、一般市民の居住地<sup>1)</sup>を焼き払ったことを非人道的な行いとして暗に批判する視点がうかがわれる。

このように『新方丈記』の空襲をめぐる記述については原日記からの多くの削除や書き換えがあると見られる。削除の内容は主に、アメリカ軍の攻撃内容を記して機微な情報に触れている可能性のあるもの、戦中の被害を具体的な数字などともに描き出すことでアメリカ軍への敵愾心を再び掻き立てると見られる可能性のあるものであった。

確かにこれらの削除は検閲への配慮を払っているように見えるが、一方で削除の仕方は文章の流れを断ち切るようになされており、かえってその周辺に削除箇所があること、ひいては見えない伏せ字を強要する検閲への批判<sup>1)</sup>を読者におわせる。そのような示唆は書き換えられた箇所によっても強められている。こうした改稿の跡からは、戦中の日記を刊行するために占領軍に問い合わせる「用を弁じて」得た執筆の方策が、唯々諾々と「細かな配慮」を払うだけではなかったことがわかるのである。

#### 四 本文の比較(2) 八月十五日の周辺をめぐる削除

「灰塵」の後、続く「土手の東雲」では広さ三畳の小屋を仮の住まいとすることになり、さらに「仰願寺蠟燭」において小屋での生活が語られる。四篇目の「餓鬼道日記」は前掲のとおり「仰願寺蠟燭」と一部内容が重複しながらも、とりわけ後半はいわゆる玉音放送の前後の日付が含まれており、戦中日記として読む読者にとっては最も重要な場面が描かれるかのように見える。

しかしながら実際には「餓鬼道日記」を『東京焼尽』と比較すると、大半の記述が削除されごくわずかな部分のみが残されていることがわかる。「餓鬼道日記」は一九四五年七月十三日から八月十七日の日記にもとづいており、『東京焼尽』の該当箇所を原稿用紙に換算すればおよそ八十七枚分の分量がある。しかし「餓鬼道日記」は約十四枚分にすぎない。これは個々の日付の項目が大きく削られていることにもよるが、最も大きな要因は八月九日から十六日までが完全に削除されていることにある。いうまでもなくこの間に百閒はラジオで日本の敗戦を知ったわけだが、「餓鬼道日記」にはそれが描かれていない。この一週間の空白を挟んで、テキストは以下のようにになっている。

八月八日水曜日【三十夜】立秋。【月夜を数へて三十夜と云ふ可きか否か解らないが今迄の例に従ひ仮りにさうしておくけれど、月齢は零と云ふ事になつてゐる様である。水曜不出社。】朝は雲濃く西の《方↓空》も大分かぶ【さ】つてゐたので或はお天気が変はと思つたが矢張り夏空の朝曇りであつた。間もなく快晴となりて暑し。今日は立秋なり。(中略)巢鴨の囚人の方が御馳走を食べてゐると云ふ事を、初めはたとへの様に云つてゐたが、いつの間にかそれが本眞になり【当然となり】当り前の話になつてしまつた。

八月十七日金曜日【九夜】。昨夜初めてこほろぎを聞いた。二三日前の晩に木鈴虫の聲がした様であつたが確かでない。方が焼野原になつたので今年は秋の虫も少いであらう。【昨夜】就褥して間もなく十一時半頃きな《くさ↓臭》いにほひがするので心配した。小屋の炊事場に残火があつてもあぶないし、《しやもじの所で↓母屋から》火を

出されては小屋は大変である。暫らく様子を見たが何でもない《、↓。》風の工合で大  
本営の書類を焼いてある煙が流れて来たのかも知れない。

日付を見れば重要な情報が抜け落ちていることがわかる。しかしながら八日の「今日は立  
秋なり」が十七日の「昨夜初めてこほろぎを聞いた」と呼応して、この間に大きな出来事は  
なかったかのように文章は一貫性を保っている。とはいえ当時の読者にとってこの空白の  
意味は容易に了解されたはずである以上、この滑らかな文章のつながりはかえって不自然  
であるといわざるをえない。また「大本営の書類を焼いてある煙」に関する一文は敗戦が決  
定しなければ書かれ得ないものであり、戦時下の「日常」が継続している様子とは整合性の  
取れない記述といえる。この不整合に残された手がかりが、検閲下での読者の理解を助け、  
削除箇所の内容を想像させると考えられる。一週間分の削除箇所の冒頭にあたる八月九日  
の項には次のような記述が見える。

【八月九日木曜日一夜。晴。午前六時四十五分警戒警報にて敵の機動部隊また本土に  
近づき東北地方に艦上機を放つて攻撃を加へてゐる由を報ず。七時三十五分解除。又午  
前八時十五分警戒警報。B 29 一機なれども去る六日の朝七時五十分B 29 二機が広島  
に侵入して原子爆弾を投じたる為瞬時にして広島市の大半が潰滅した惨事あり。その  
後だから一機の侵入にても甚だ警戒す。九時解除。(中略)露西亜が英米及び支那に加  
担して日本に宣戦せり。】

前掲のように百閒は自宅を焼失する前、近隣の空襲警報の時刻や進路を記録していた。自  
宅を失い、小屋での暮らしを開始してからは、同一敷地内の他の家族と共同で使用するラジ  
オが重要な情報源となっていく。そのため空襲をめぐる記述は自らの周辺だけでなく、ラジ  
オで報じられる全国の警報と爆撃機の位置までも含まれるようになっていく。

九日には東北地方で航空母艦による部隊の接近と攻撃がなされているとの報道を聞いた  
のち、自宅周辺でも警戒警報が鳴ったことを記し、爆撃機一機に対する警報ながら、広島市  
において原爆が投下され市街が壊滅した後であることから「甚だ警戒す」と述べている。こ  
れもまた前述の空襲に関する情報と同じく、攻撃の内容の記録であると同時に戦時下の敵  
愾心を再び喚起し、アメリカ軍の批判につながるとされる可能性の高い記述といえよう。

次に八月十五日の記述については、「天皇陛下」がラジオ放送を行うにあたり「上衣」を  
身につけ支度を整え「御声」を聞くという表現からも読み取れるように、キーログの Divine  
Descent Nation Propaganda (皇統国家のプロパガンダ)や Glorification of Feudal Ideals (封  
建制度の称揚)に抵触すると思われる。「万世一系」の現人神として天皇を仰ぎ、国家の

決定をその口から聞くことで感情が強く揺さぶられる様子が問題視されるであろうことがうかがわれる。

【昨夜より今日正午重大放送ありとの予告あり。今朝の放送は天皇陛下が詔書を放送せられると予告した。誠に破天荒の事なり。午まへしやもじ小屋に來りてラヂオを聞きに来る様案内してくれた。正午少し前、上衣を羽織り家内と初めて母屋の二階に上がりてラヂオの前に坐る。天皇陛下の御声は録音であつたが戦争終結の詔書なり。熱涙滂沱として止まず。どう云ふ涙かと云ふ事を自分で考へる事が出来ない。】

これは「八月十五日の涙」の題で後年に発表された文章とほぼ同一であり、昭和史の一場面としてよく知られる箇所だが、この削除部分からは百閒が敗戦を知って自らの感情を制御できなくなるほど大きな衝撃を受けたことがわかる。つまり前述の八月八日と十七日を接続する「立秋」と「こほろぎ」の一貫性が、敗戦の衝撃と動揺を覆い隠すために、自然の風物を心にかける装いの性格を帯びていることがここにも読み取れるのである。

また翌十六日には「今日辺りから日本の新しき日が始まると思ふ」とも記しているが、これもやはり削除されている。敗戦直後の「国体護持」をめぐる内閣交代劇からも明らかのように、「日本の新しき日が始まる」との見方を公にすることは、敗戦国の混乱に拍車をかける危険な言論ととらえられる可能性があつたといえる。

このように『新方丈記』においては戦中日記として最も読者の関心をとらえるであろう一九四五年八月十五日とその前後が削除され、敗戦の場面は不可視化されている。それが検閲への配慮によるものであることは論をまたないが、一方で明らかに重要な場面が含まれない戦中日記としての不自然さをもたらしていることも確かである。言い換えれば空襲場面の削除と同様、前後の文脈に不整合が生じるほどの削除を行うことで削除個所の存在を際立たせ、なおかつその内容までも想起させるという手法がとられていると考えられる。

『新方丈記』では削除された八月十五日の記述から明らかなように、百閒にとって敗戦は「天皇陛下」の声によって感情を大きく揺さぶられる経験だった。そのような権力主体と政治制度の変革の時期に、情報統制の圧力のもとで書いている、あるいは書くことを禁じられているという事情を繰り返し暗示しながら戦中の悲惨な体験を描き出したことに『新方丈記』の特色があるといえよう。

おわりに

本章では占領期に刊行された『新方丈記』の性格を検閲への対処という面から明らかにす

ることを試みた。はじめに『新方丈記』の成り立ちとして、百閒が戦中につけていた日記に基づいていること、占領期の検閲に対応するため削除や書き換えが随所に見られることを指摘した。そして実際の日記とは異同があるものの、大幅な改稿はなされていないとされる『東京焼尽』と、こうした『新方丈記』を比較することで後者の執筆時に百閒が試みた検閲への対処の様相が垣間見えるのではないかという仮説を提示した。

次に敗戦直後の日記から、百閒が戦中日記を刊行するにあたり当時の検閲担当部局に赴いて問い合わせを行ったことを確認し、作品の発表に際しての注意点に関する情報を入力したと思われると述べた。この前提をもとに実際の本文を『東京焼尽』と比較し、削除変更箇所の特徴を検討した。

ここでは『新方丈記』のうち「灰塵」と「餓鬼道日記」について『東京焼尽』の該当箇所との比較をおこなった。「灰塵」と「餓鬼道日記」では、百閒が空襲を逃れ、自宅を焼け出されてから敗戦を迎えるまでが描かれる。とりわけ空襲とそれがもたらした被害に関する記述を多く含む「灰塵」を『東京焼尽』と比較することで、キーログに問題となる表現として記載されているようなアメリカ軍の敵視や攻撃の非人道性を表す言葉が「灰塵」では削除されていることが明らかとなった。

またいわゆる玉音放送がなされた日である一九四五年八月十五日とその前後の記述について、「餓鬼道日記」と『東京焼尽』の比較を行った。その結果「餓鬼道日記」では八月十五日だけでなく前後あわせて約一週間分が削除されており、「敗戦の瞬間」が書かれていないことがわかった。

こうした日記との比較による『新方丈記』の削除変更箇所からは、平山三郎が述べるような「検閲に対する細かな配慮」と、これに反して検閲の存在を読者に向けて告発していく態度の両方が読み取れる。占領下で作品を発表する以上、新たに設けられた基準に沿わなければならないのは確かである。しかし一方で『新方丈記』の随所に見られる文脈の破綻やつなりの悪さは、伏せ字ではなく削除を強制する「見えない検閲」の存在を浮き彫りにするのである。

ただ本章では『新方丈記』における削除変更箇所のごく一部しか取り上げることができなかった。また原日記資料の本文を確認し活用することが難しいため、便宜上『東京焼尽』を用いて日記との比較に替えた。これらの点を乗り越えた議論については今後の課題とした。  
い。



注

<sup>1</sup>平山三郎「解題」『内田百閒全集』第五卷、一九七二年六月、講談社。

<sup>2</sup>日記とその自己検閲した文章がともに刊行されている作家として永井荷風が挙げられる。

一九四七年の『罹災日録』（扶桑書房）と一九六三～四年の岩波書店版荷風全集所収『断腸亭日乗』の本文校異については岸川俊太郎「永井荷風と占領期〈検閲〉——『罹災日録』を視座として——」（『日本近代文学』二〇〇九年五月、日本近代文学会）および寺杣雅人「永井荷風『断腸亭日乗』管見——昭和二十年夏、岡山の八十日——」（『尾道文学談話会会報』二〇一八年二月・二〇一九年二月・二〇二〇年二月、尾道大学芸術文化学部日本文学科）にくわしむ。

<sup>3</sup>注<sup>2</sup>に挙げた永井荷風が偏奇館焼失ののちやがて岡山市内での疎開生活を記録し、百閒が空襲を経ても東京を離れなかったことは興味深い対照である。百閒は岡山大空襲の報に接して「記憶の中の岡山は亜米利加もB 29 も焼く事は出来ない」（『東京焼尽』一九四五年七月二十一日の項）と記しているが、この時に荷風は岡山で疎開先の住居を焼失した。

<sup>4</sup>平山三郎「百鬼園戦後日記 おぼえ書」『百鬼園戦後日記』上巻、一九八二年三月、小沢書店。

<sup>5</sup>「災厄の記憶主題に 没後50年内田百閒の多面性」『静岡新聞』二〇二一年八月十七日。

<sup>6</sup>山田桃子『内田百閒の研究』五九ページ、二〇一八年、北海道大学（博士論文）。

<sup>7</sup>民間情報教育局編『民間情報・教育部門における占領の使命と成果』連合軍総司令部

『日本占領の使命と成果』共同通信社訳、一九五〇年一月、板垣書店、二七三～二七四ページ。

<sup>8</sup>山本武利「CCD、CIEの確執——ピクトリアルメディア検閲をめぐって」『占領期雑誌大系 文学編IV 第四巻』二〇一〇年五月、岩波書店。なお、引用に際してはコンマを読点に改めた。

<sup>9</sup>キーログの項目はゴードン W. プランゲ文庫ブログ「検閲・民間検閲局文書」二〇一三年七月二十一日 <https://prangecollection.jp.wordpress.com/2013/07/21/imposing-censorship-sample-documents-検閲-ccd/>（二〇二二年三月二日閲覧）による。引用した各

項目は、一九四六年六月時点のものである。括弧内の訳文は執筆者による。以下同じ。

<sup>10</sup>実際には百閒の住んでいた地域は必ずしも「一般的」な住宅地であったとはいえない。『東京焼尽』には隣家が住人の疎開後に軍需大臣官邸に転用されたことや、焼け出された百閒が一時的に身を寄せた小屋が元は男爵家の使用人の居住スペースであったことが記されている。

<sup>11</sup>いうまでもなく百閒は内務省による検閲の実施期間に多数の作品を発表しており、初出

において少々の伏せ字が含まれる文章もある。また平山三郎によれば植民地台湾をテーマとした杉山平助との対談「蓬莱島余談」は『中央公論』掲載予定であったが「事前検閲を通らなかつたため未掲載。廃稿を著者の発言のみ生かして」一九四一年刊行の『百閒座談』に収めたという（平山三郎「解題」『内田百閒全集』一九七二年、講談社）。こうした戦前戦中の検閲から受けるテキストへの影響については、百閒は取り立てて問題としていないように思われる。

## 第八章 『贗作吾輩は猫である』論

——会話文の発展と百閒の戦争——

はじめに

『贗作吾輩は猫である』は一九四九年一月から十一月まで『小説新潮』で連載され、翌年に新潮社より単行本が刊行された。百閒にとって連載小説の執筆は、掲載媒体の廃刊により途絶した「居候勿々」(『時事新報』一九三六年十一月十日～十二月二十五日)以来であった。

軽妙な会話を中心に展開する物語は、漱石『猫』のすぐれた「贗作」として評価が高い。「サラサーテの盤」(『新潮』一九四八年十一月)および『阿房列車』シリーズ(一九五二～六年)とともに百閒の一九四五年以降の執筆活動を代表するテキストといえる。

しかしながら、これまでの百閒研究において「贗作吾輩は猫である」への検討はほとんど行われていない。その一因は、百閒のテキストへの検討が『冥途』(一九二二年、稲門堂書店)と『旅順入城式』(一九三四年、岩波書店)に集中していることだが、それにもまして「贗作」という題名のゆえに、単に漱石の『吾輩は猫である』(一九〇五年十月～一九〇七年五月、大倉書店・服部書店)へのオマージュあるいはパロディとしてのみ受け止められてきたことに大きな要因がある。げんに今日まで「贗猫」の特徴は、本家『猫』と比較して社会批評の側面が小さく、いわゆる低回趣味をより高度に徹底している点に求められてきた。

そこで本研究では、現在のこうした過小評価ともいえる見方を更新すべく、このテキストが百閒の執筆活動においてどのように位置づけられるのかを考察する。具体的には、一九四五年以前の百閒の執筆活動とその主題、ならびに一九四五年から「贗猫」執筆当時にかけての随筆類における記述を踏まえ、たうえて、「贗猫」の会話文を中心とした語りの構造と、連載当時の世相が色濃く反映された内容を分析する。

こうした手続きにより、「贗猫」が形式においては一九三〇年代以来の「方法としての一人称」の追究で得られた効果から、会話文の手法を引き継いでいること、内容においては作家・内田百閒の一九四五年をまたいだ思想的なゆらぎが書き込まれていること、そして前者の構造が後者のような物語内容を成り立たせていることを明らかにする。これにより、このテキストを本家『猫』から独立させて再評価することを試みる。

『贗作吾輩は猫である』に対する読解は、発表当時から現在まで漱石『猫』との比較が中心であり続けてきた。その最も早い例の一つである伊藤整の論評は「水ガメに落ちて死んだと漱石が書いているあの英語教師苦沙弥の猫が、実は死にきらず、この戦後に現れて、ドイツ語教師五沙弥先生の宅に住み込む話である」とのあらずじ説明に続いて登場人物を簡潔に紹介しているが、やはり常に『猫』を参照項としている。

……苦沙弥家に集った寒月、独仙、迷亭などという風流人のかわりに、五沙弥家には、鰐果蘭哉とか飛田里風呂とか出田羅迷とか狗爵舎とか風船画伯とかいう風流人が出没して、借金について、シャンパンについて、共産主義について、また「金を貯める文士蛆田百蔵」氏について清談を交わすのである。

六十歳の内田氏のユーモアは「年端も行かぬ親父」なる四十歳ごろの漱石のユーモアよりも洗練されており、文章や作為の無駄も少い。同時に若さから来る毒々しき、怒りが内に潜み、または昇華されていて捕捉し難い。能狂言のようなその芸は、一種芳醇な酒の味に似ている。<sup>1</sup>

伊藤整は同作が河出市民文庫に収録された際にも解説を掲載している。ここでは『贗作吾輩は猫である』を『百鬼園隨筆』（一九三三年、三笠書房）と同系統の「笑いの文学」と規定し、「百閒には漱石のような社会批評性が少く、そのかわりに感覚的な洗練性が特に強いことを指摘した上で「文章は漱石に較べて一層細緻であり、当代の名文家の一人と言われ」と述べている<sup>2</sup>。

清水良典も同様に『贗作吾輩は猫である』冒頭の「贗造精神」となる場面を引用しつつ、創造か、偽造か、変造か、などの言葉を登場人物たちが挙げていく中に「作者の「贗典」執筆に徹するスタンスが開陳されている」としている。そしてその「贗典」の特質を『猫』に対する評言である「低回趣味」や「余裕派」の徹底すなわち「遊民」のデイグニティーにあると結論づけている<sup>3</sup>。

このように『贗作吾輩は猫である』を評価するにあたっては、比較対照としての『猫』あるいは漱石の文章との性格的技術的差異の計測が焦点となっている。一方、同様の基準でテキストを評しながらも「百閒の全作中で、最も見るべき所のない一篇だと思う」と述べるのは川村二郎である。川村は「無内容な閑人たちの談話」は「どこで始まってどこで終わろうと」

退屈せずに読めるが、「模作、贋作であることがやはり気にかか」り始めると、同じく「無内容」な『猫』との関係に煩わしさを感じるという。

これがもしパロディーなのであれば、印象は当然異ってくる。現実を夢に変えるとか、有を無に変えるとか、反転の試みが効果をあげていけば、それなりに新鮮な感じで受け取ることができる。しかしこの場合は、原作が無内容であると同じ程度に贋作も、贋作である以上当然のことながら、無内容である。無が無に移行しただけである。しかも原作は、無内容なりに歴史的な作品として存在している。建前として有である。その有の影が贋作の無に落ちているのが、興醒めとはいわぬまでも、何か煩しいのである<sup>4</sup>。

ここで川村が繰り返す「無内容」という言葉は、際立ったあらずじが存在しないことを批判的に指しているものと思われる。『猫』が当時の同時代的トピックをふんだんに取り入れ、その結果社会批評性を多分に帯びていることはいうまでもない。また本章と次章で述べるように『贋作吾輩は猫である』も多面的な読解を要求するテキストである。従って「無内容」とは個々の会話の内容に対してではなく、小説全体が一つのテーマを訴えているという構造にはなっていないことへの不満であろう。しかしながらそのような「無内容」こそが、百間の目指していた小説の姿であった可能性がある。次節では『贋作吾輩は猫である』に着手する以前の百間の『猫』評価とともに、同作の執筆に至るまでの作品の変遷を概観する。

## 二 『漱石物語』における会話文の重視

『漱石物語』上巻は一九四六年に三笠書房より刊行された漱石作品のダイジェスト版である。著者名に「物語」とつけたダイジェスト作品には古く正宗白鳥『マアテルリンク物語』（一九〇三年、富山房）や徳田秋江『シルレル物語』（同）などを収録した『通俗世界文学』シリーズがあり、タイトルはこの形式に倣ったものだろう。上巻の全体は「坊ちゃん」「草枕」「野分」「虞美人草」「坑夫」「吾輩は猫である」からなり、百間がこれらの主要な中篇と長篇を短く編集した上で各篇の末尾に解説を付している。その巻末に収められた『吾輩は猫である』の解説は次のようである。

全篇は十一回に分かれ、その一回一回がそれぞれ独立した形で書かれてるものであつて、漱石自身もこの作は尾頭の心元なき海鼠のやうな文章であるから、何日何所で切れて、消えてなくなつても、少しも差支ないと言つてゐる通り、全篇を通じて首尾一貫し

た筋といふものは別に取り立て、見出すことは出来ないばかりでなく、一回一回の独立したのも、その内容は「筋」ではなく、作者の（猫の）意見や批評や観察である。（中略）従つて此の作の真価は、どうしても「物語」化された読物で味はふことは不可能であるので、此処ではその第十一回のうちから最も漱石の真面目を發揮してゐると思はれる箇所をアレンジして示しておいた。<sup>5</sup>

ここで『猫』上篇の序文を引用しながら「物語」化された読物」と百閒が述べているのは、長編作品を全体のあらすじがわかるよう短縮した文章を指すと考えられる。全体のあらすじが把握できる、つまり前掲の川村二郎の述べる「無内容」ではない表現によつては、『猫』の「真価」を味わうことはできないというのである。このように百閒にとつて「吾輩は猫である」の魅力は、「物語」的な筋書きが存在しない点、とりわけ会話が脱線することで物語の筋書きに縛られずさまざま話題がつきつきに現れては変遷していく点にあった。

現に「漱石の真面目を發揮してゐると思はれる箇所をアレンジ」した『猫』の内容は、最終章の「太平の逸民」たちの会話が展開する場面を取り上げている。その「アレンジ」の方法の特徴は、地の文を切り詰めて会話文の割合を増やすことである。

例えば『猫』「第十二」冒頭で「吾輩」が碁盤を眺めて「碁を發明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらはれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせまこましい人間の性質を代表して居る」と考え、「人間とは強ひて苦痛を求めるものである」と思考する場面があるが、『漱石物語』ではこれらの哲学的な叙述を全て削除し、続く段落における「呑気なる迷亭君と、禅機ある独仙君」との対局が「苦しくなるのは当たり前である」との論評だけを残している。

こうした編集は後半についても同様で、『漱石物語』では「太平の逸民」の会話場面のみが抜粋されており、『猫』の結末である「吾輩」が「呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする」などと述懐してから水甕に落ちていくまでの場面は取り上げられていない。

以上のような『漱石物語』の解説文と編集の特徴からわかるのは、百閒が『猫』について哲学的な思惟や文明批評を論じる語り手の叙述よりも、作中で「寄席」に喩えられているとおり落語のように登場人物が入れ替わり意表をつく相槌や連想によつて展開する会話文の形式に作品の価値を見出していたということである。

同時に一九四六年という『漱石物語』の刊行年を踏まえれば、『贗作吾輩は猫である』執筆時にこの時の『猫』編集の経験が意識され、作品の語り口に影響を与えたとしても不思議

ではない。言い換えれば『漱石物語』の作業は『猫』の「アレンジ」つまり一種の変造であり、実際の執筆に至る以前の『贗作吾輩は猫である』の構想を具体化する助けになったのではないだろうか。このように『猫』の会話を前面に押し出した『漱石物語』制作の背景が『贗作吾輩は猫である』の成立には関わっていると考えられる。次節ではこうした会話文の重視が百間のこれまでの作品や社会の一員としての体験とどのように関わるかを検討する。

### 三 一九三〇年代の作品に見る会話の機能

一九四〇年代前半における百間の活動は日本郵船株式会社嘱託社員としての側面が強く、随筆を通じた植民地主義の推進と宣伝が主であった。しかし日本郵船への入社以前に目を転じると、一九三〇年代の百間はオルターエゴの時代にあったといえる。

一九三三年刊行の『百鬼園随筆』は折からの随筆ブームに乗っただけでなく、三部構成の後半に進むにつれ当時の私小説流行を意識した構想を前面に押し出している。山田桃子が指摘する通り、これらの随筆と私小説の流行は、ジャンルの境界線を引き直す試みが絶えずなされていたことを示している<sup>10</sup>。その試みは、随筆と私小説に共通してしばしば見られる一人称を通して、また作家本人と自然に解釈されるような名づけと造形がなされた登場人物を用いることを通してなされていた。

たとえばレイチェル・デイニツトが『百鬼園随筆』の作者に似た「百鬼園先生」などの登場人物が百間のオルターエゴにあたることを指摘している。ように、「ひゃっけん」と「ひゃつきえん」、あるいはルビで示される「ひゃくけん」は、その発音から同一人物であることが匂わされ、さらに作家本人であるとの解釈を誘発するような名前がつけられている。こうした名づけは、鈴木登美が私小説の定義として挙げた「読みのモード」を作者側に引き寄せて操作しようとする試みといえる。このような誘導としての「読みのモード」から作り出されたオルターエゴが、百間の一九三〇年代には主要なテーマであったと考えられるのである。

大谷哲は一九三〇年代の随筆についてこうした百間のオルターエゴを逐一指摘している<sup>10</sup>。百間がさまざまな経験を回想した随筆の読者は、似た内容を自身の体験として口にする「百鬼園先生」や「志道山人」などが作品に登場するたび、彼らを百間の分身と理解することになる。こうした登場人物たちが一堂に会するのが一九三九年の「七体百鬼園」である。

「七体百鬼園」が要求する読解の前提は、やや複雑である。まず作品に署名された「内田

「百間」があらゆる登場人物の原型にあること、つまり各人は「私」の生活の変化に従って名乗られた名前である点を理解することである。次に、それぞれの名前に固有の嗜好や性格が付与されることで七人の登場人物が立ち上がり、会合を催すに至ったという経緯を踏まえなければならぬ。最後にこれらの名前の発生と人物の登場はすべて署名者「百間」の手になるものであり、各人の異なりはすべて「百間」が自身のさまざまな側面を誇張して作り出した戯れであるという演技性を了解する必要がある。

実際に『新青年』における初出では「百鬼園内田百間先生の人格七体に分裂す。七体百鬼園、一堂に会し、奇々妙々なる座談会を催さんとす。怪、また快！」というコピーが本文の前に付されている<sup>1)</sup>。これに続いて語り手「私」によってもそれぞれの「人格」について自身の来歴に絡めた説明が加えられ、「名は者の初也」という発想のもと会合が構想される。

「七体百鬼園」に登場する「私の名前」たちは、それぞれが独立した人格をもっているかのように会話を交わすが、全員が「署名の百間」という「私」に由来することは明示されている。また意見の対立に際しても論点が食い違うことはなく、いわば同じ発想のもと異なる志向をもつに過ぎないことが示され、淵源としての「私」の存在はむしろ補強されているといえる。

哈叭入道 『私はシュークリームの皮が好きだ』

志道山人 『それは逆の話です。シュークリームは皮を捨てて中のクリームだけ食ふのですよ』

土手之都 『尤も蜜柑は中を食つて、金柑は皮を食ふから一概には言はれないが、シュークリームの皮はをかしい』

哈叭入道 『可笑しくはない。一番うまい所だけ食つておけばいいものだ。ハムエッグなども、あれは卵にハムの風味を移す料理であるから、食する時には、ハムを摘み出して捨ててしまふ』

このように「七体百鬼園」における会話の機能は、署名者である内田百間つまり「私」に似せて作られた複数のキャラクターが出会う場所で、彼らの細かな相違とその理論の屈折の仕方から浮かび上がる発想の類似を提示することにあつたと考えられる。さらに「七体百鬼園」の「百鬼園先生」をはじめとした「私の名前」全員が同作以前に発表された随筆で触れられていることから、こうした会話は「私」がこれまでの執筆活動を振り返りつつ描き出した結果であるともいえるのである。



#### 四 作中の登場人物と随筆に語られた内容の一致

ところで『浮雲』について「作家苦心談」で二葉亭四迷が述べているように、登場人物同士の間話は政治体制の変革など時代の転換を描く作品において異なる思想や立場を描き分けるために用いられることがある。

『贗作吾輩は猫である』の場合、前掲の伊藤整が紹介している「風流人」たちにそれぞれの思想や立場があり、時としてそれらの摩擦が人物同士のすれ違いとして表され、あるいは物語の中心人物である五沙弥にぶつけられることになる。つまり『贗作吾輩は猫である』に多くの登場人物が現れる背景には、敗戦から数年を経たばかりの混沌とした思想状況を映し出そうとする試みが読み取れるのである。ただ後述するように、その試みは作者である百閒自らに対して向けられてもいた。

その代表的な例が「第四」に登場する鰐果蘭哉といえる。蘭哉は共産党員の文学青年で、五沙弥との会話では文学の芸術性と思想性をめぐって議論を繰り広げるが、一方でプロレタリア文学の作品の登場人物さながら工場に勤務しているため、経済的困窮によって「会費」が払えず共産党を除籍となっている。

「……自分ながら、矢つ張り本物ではないと云ふ気がするのです。僕は主として文学から、と申しましてもイデオロギイのない文学は近代の文学ではありませんでせう。それを追究した苦しまぎれの結果なのです」

五沙弥入道は黙つて鰐頭の黴の所を見詰めている。聴いてゐるのか、外の事を考えてゐるのか解らない。

「僕はかう思ふのです。コミニズムは単なる論理的可能性だ。しかし社会主義は兎も角歴史的に現実的可能性のある事ですから、その実現が今日の問題だ。これを解決してから先の事はどうか解りませんが、無論コミニズムは一つの力として理論的に役立つのですが、以上の事を切り離して文学は考えられない、とかう思ふのです」

「君は自分の考へる事に筋道が立つてゐるのかわらないが、聞いては上げるけれど、丸でわからんよ」

五沙弥の相槌からも読み取れるように、生真面目な文学論を展開する蘭哉は「政治と文学」論争や主体性論争<sup>1,2</sup>に代表される敗戦直後の文学者たちの戯画化された姿といえる。『猫』の苦沙弥に漱石が重ね合わせられてきたように、かりに五沙弥を百閒の自画像ととらえれ

ば、敗戦直後の若い文学者による歴史の反省が冷笑の対象となっていることは、当時の文学界に対する作者の視線そのものと考えられることもできるだろう。あるいは占領期に発表されたことを踏まえれば、すでに始まりつつあったアメリカ合衆国の「逆コース」へのおもねりとも見ることさえ可能であるかもしれない。

とはいえこうした「笑い」のあり方は、観念的な言語を駆使して政治と文学をめぐる議論を戦わせる若者たちを外部から貶めようとするものでは必ずしもない。というのも蘭哉の表象は、敗戦後間もない時期に一度は共産党入党を決意した百閒本人の姿にもつながるからである。

共産党の本部は市ヶ谷合羽坂から薬王寺の通へ出る道の右側の裏筋にあつて、長火鉢の傍で野坂氏が私に応対した。徳田球一さんはひぢ枕でうたたねをして大きな軒をかいてゐるが、火鉢の方に足を曲げてこちらに頭を向けてゐる脳天の辺りは新聞で見るところではなく大変な禿である。私は入会しようと思つて来たのだが、それには書類がある。……一旦入会すると云つたけれど、少し先に延期したいと思ふ。来年の春頃まで待つてくれと云ひたいのだが、向うでは待つても待たないもなく、そんな事を歯牙にかけない風なので困る。入会に気遅れがしたわけは一体にこの頃は共産党の風当りがひどい様だがそれはいいとしてしかしさうするといつかは家宅搜索を受ける事を覚悟しなければならぬだらう（後略）

結局のところ入党には至らなかつたものの、この行動に至るまでに相当複雑な心情の変化があつたであろうことは容易に推察される。百閒の支部訪問は「共産党の風当りがひどい」頃であり、おそらくは先に述べた「逆コース」の波が現に広がりつつあつた時期になされたと思われる。

従来、戦中の百閒の行動といえれば日本文学報国会への入会を拒んだことが挙げられ、「反骨の作家」との評価の根拠とされてきたが、実際には日本郵船会社の囑託として植民地台湾に向かい、前線への徴用を逃れながら「新版図」の拡大を鼓舞する動きに加わつていた<sup>13</sup>。そしていわゆる玉音放送に接して「天皇陛下の御声」に涙を流す体験を経て、その後戦争責任を問われることもなく執筆活動を再開していったのが敗戦直後の百閒である<sup>14</sup>。

文学論争に加わる形ではなくとも、何らかの転換あるいは反省を百閒が望んだ結果、共産党支部の訪問につながつたと考えることは不可能ではない。もし実現していれば、百閒の執筆活動は例えば作品を通じたイズムの喧伝へと変じ、作家としての評価も大きく異なつて

いただろう。言い換えれば敗戦直後の若い文学者たちの「反省」の様子だけでなく、百間の共産党入党後の姿として、蘭哉は描かれていると考えられる。

このように蘭哉が戯画化された共産党員として造型され、百間の敗戦直後のあり得た姿を映し出しているのに対し、物語全体の中心人物である五沙弥は戦中の百間の行動を浮き彫りにしている。「第三」で五沙弥は秩父宮の乗船について述べている。

「秩父ノ宮様が洋行せられたんだ。大分前の話だよ。あちらで健康をそこねられて、亜米利加を通つてお帰りになつた。晚香坡から郵船の船に乗つて、あの航路には氷川丸、日枝丸、平安丸と云ふみんな頭にHのつく船が三ばいあつたが、その中のどれかなんだ」  
(中略)「僕も今考へてゐるんだ。なぜ秩父ノ宮様の話なんかしたか知ら」

ここで注目されるのは、五沙弥がひとしきり話した後「なぜ秩父ノ宮様の話なんかしたか」自分でもわからないと述べている点である。「郵船の船」のエピソードは実際には、百間が後年の随筆「上だけ」(『読売新聞』一九六〇年一月十三日朝刊)で記すところによれば、日本郵船株式会社に入社して聞いた話である。

前述のように百間は戦中、徴用を逃れるために日本郵船株式会社の嘱託となり、そこで郵船の客船を利用した植民地台湾への旅行記を発表していた。つまり五沙弥の語る内容は、随筆を通じて植民地ツーリズムを推進していた頃の百間が聞き知った内容である。ならば五沙弥にも同様の経歴があるということになるが、その点については右に述べたような発言によってあいまいにされている。しかしこうした背景は、十年前の百間の執筆活動を知る読者には容易に了解されるだろう。

また「なぜ秩父ノ宮様の話なんかしたか」という理由をもう一つ挙げれば、この皇族が百間にとって近しい存在であったからといえる。「秩父宮殿下に上るの書」(『小説新潮』一九五〇年一月)で言及されるように、秩父宮は百間が陸軍士官学校に勤務していた頃、同校に通学しており校内で顔を合わせたこともあった。

茂木謙之介が指摘するように、「秩父宮殿下に上るの書」において秩父宮には「可愛らしい」という形容が繰り返しなされている<sup>15</sup>。茂木はこの作品を「〈フィクション〉としての読みを要請するテキスト」としているが、実体験を交えつつ示される、二十歳近く年下の皇族を「可愛らしい」と思う感情を明治生まれの作家と強いて切り離す必要はないように思われる。つまり百間にとって秩父宮が「敬うべき」皇族であったと同時に、だからこそ必ずしも厳格ではない私生活を知ること特に「可愛らしい」子供として印象付けられていたので

はないだろうか。

このように五沙弥が秩父宮の話を背景には、百間の戦前戦中の職業が日本の軍隊と結びつき、かつ一方ではその大戦時の総帥たる昭和天皇の弟に対して強い愛着を覚えていたことが浮かび上がる。五沙弥が自分の出した話題の背景を見出せないのは、こうした先の大戦にまつわる百間の協力的な姿勢を覆い隠すものといえよう。その意味では一見、いくぶん自己弁護的な人物造型ともいえる。

しかしながら、単に作家本人の戦中の言動を占領期という時期にあって覆い隠すためならば、本来的にこの話題を作中に書き込む必要はない。言い換えれば「なぜ秩父ノ宮様の話なんかしたか」わからないながらもその話をするという点にこそ、五沙弥の役割があると考えられる。つまりここで物語は、その背景にある作者の戦中の行動を告発しながら、作者に重ね合わせられる五沙弥にエピソードの根拠を見失わせることで、百間のいわば文学者としての戦争責任を問う機能を有しているのではないだろうか<sup>16</sup>。

以上のように『贗作吾輩は猫である』には百間が戦前・戦中・戦後を振り返り自身の姿を戯画的に表した登場人物が描かれる。とりわけ本節で取り上げた鰐果蘭哉と五沙弥の性質については、一九四九年、または一九五〇年という『贗作吾輩は猫である』の連載、単行本化の年代を踏まえての読みが要請されるが、ここでは当時を同時代人として生きた百間の社会との関わりの変遷を示すにとどめ、先行テキストから得られる「読みのモード」に基づいて形成される、「かつての私」をキャラクター化して互いに会話させるという手法が「七体百鬼園」から十年を隔てながらなおかつ発展していることを指摘しておきたい。

おわりに

以上、『贗作吾輩は猫である』の会話形式について、百間の執筆活動において、とりわけ一九三〇年代以来の語りをめぐる試みの文脈においてどのように位置づけられるのかを考察した。具体的には、「七体百鬼園」を中心とした一九三〇年代における百間の執筆活動とその主題、ならびに一九四五年から「贗猫」執筆当時にかけての随筆類における記述を踏まえたうえで、「贗猫」の会話文の構造と内容の性格づけを試みた。

こうした視点のもと「贗猫」を読み解くと、この作品は形式においては一九三〇年代以来の「方法としての一人称」の追究で得られた効果から、会話文の手法を引き継いでいると考

えられる。また内容においては作家・内田百閒の一九四五年をまたいだ思想的なゆらぎが書き込まれており、前者の構造がこうした物語内容を成り立たせていた。言い換えれば「読みモード」の作者側での操作が『贗作吾輩は猫である』にも見られ、テキストを本家『猫』から独立させて再評価する鍵となっていると考えられる。

なお、前節で述べたような登場人物の性格は、敗戦前後の百閒が自らを振り返った姿だけでなく、ときには『冥途』以来の作品における一種のこだわりを振り返り映し出す場合も見られる。たとえば次の場面を、高橋英夫が「胸苦しきの文学」と指摘した<sup>17</sup>『冥途』における「息苦し」い、「からだだが石の様にな」というフレーズの頻出を連想せずに読むことは難しい。

「それなのです。それで僕は息苦しくて」／「君の述懐はもういい。話すと云ふものは、いい加減の所で、埒をあげて結末をつけるものだ」／「いかにも」と風船画伯が口を出して、五沙弥の顔をまじまじと見てゐる。(中略)「しいん、として」／「さつきから、さうだよ」／「時がたつにつれて、段段しいんとして」／「もう解つた」／「僕は、からだだが石の様になりました」／「石にでも、蒟蒻にでもなりなさい。僕はもう君の相手になるのはいやだ」

このように『贗作吾輩は猫である』における会話文は、「かつての私」に属するキャラクターが長く続くせりふを語り、相手が不熱心な相槌を打つというパターンのもとで戯画化されるといふ形式が少なくない。こうした会話文のあり方をやや作家論に傾きつつ言い換えれば、『贗作吾輩は猫である』以前の作品や百閒その人の行動を振り返り、過去のものに換えようという力学が働いている。

なお、本稿ではテキストの言説を形式面から考察したため、占領期の作品という観点からの『贗作吾輩は猫である』の分析はできなかった。前章で『新方丈記』における検閲への「配慮」について述べたように、占領下における百閒の執筆活動にはその前後にはない特質があるものと思われる。こうした考察は今後の課題としたい。

注

- 1 伊藤整「贗作吾輩は猫である」『東京新聞』一九五〇年五月十五日。
- 2 伊藤整「作品解説 贗作吾輩は猫である」『贗作吾輩は猫である』一九五一年、河出書房。
- 3 清水良典「『遊民』のデイグニティー」『贗作吾輩は猫である』二〇一六年、筑摩書房。

- 4 川村二郎「贗造の物語」『内田百閒論』一九八三年、福武書店、一六七ページ。
- 5 内田百閒『漱石物語』上巻、一九四六年、三笠書房。
- 6 拙論「内田百閒の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」『早稲田大学文学研究科紀要』二〇二一年三月。
- 7 山田桃子「戦前期『随筆』の流行と内田百閒——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」『日本近代文学』二〇一九年十一月、日本近代文学会。
- 8 DiNitto, Rachel Uchida Hyakken: A Critique of Modernity and Militarism in Prewar Japan; 2008, Harvard University Asia Center, p.90.
- 9 拙論『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——『国文学研究』二〇一九年六月、早稲田大学国文学会。
- 10 大谷哲「内田百閒「七体百鬼園」——言語の不透明性と透明な文章——」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』二〇二二年三月、二松学舎大学東アジア学術総合研究所。
- 11 「七体百鬼園」『新青年』一九三九年九月。
- 12 『贗作吾輩は猫である』作中には「猫の主体性」について話し合うため会合に出かける猫の姿も描かれる。
- 13 注6に同じ。
- 14 百閒と同世代で戦中の執筆活動に関して敗戦後、共産党の指弾を受けた作家に獅子文六が挙げられる。獅子文六も百閒と同様に徴用は拒みながら、本名の岩田豊雄として『海軍』を發表し国威発揚の役割を担った。この出来事を含む戦中の活動については自伝的小説『娘と私』（一九五五・五六年、主婦の友社）に詳しい。
- 15 茂木謙之介「あっちゃん」の戦争責任——内田百閒「秩父宮殿下に上るの書」における皇族表象の批評性——『文芸研究——文芸・言語・思想——』二〇一九年三月、日本文芸研究会。
- 16 前述のように百閒は共産党入党に至らなかったものの、ここでの五沙弥の話法が百閒による自己批判の文脈を帯びていることは注目される。後年の「日本男児全学連」における団体行動の批判を踏まえると、これまで政治性のなさが強調されてきた百閒の作家像に更新の必要があることが浮かび上がる。
- 17 高橋英夫「胸苦しきの文学」『夢幻系列 漱石・龍之介・百閒』一九八九年、小沢書店。

## 第九章 『贗作吾輩は猫である』論

——上演される言葉への志向——

はじめに

前章で検討したように『贗作吾輩は猫である』（『小説新潮』一九四九年一月～十一月）には会話文が多用され、一九三〇年代以来の一人称語りをめぐる主題を敗戦後という社会情勢の変化のもとで発展させた形式が見られた。同時にこうした会話形式はテキストに演劇的な性格を付与しており、登場人物に異なる思想の代表という立場だけでなく、互いに言葉を交わすことで話頭を次々と転じ場面の進行を行う原動力の役割をも演じさせている。

一方で会話の内容にも舞踊の詞章や演劇のせりふのような「上演される言葉」の引用が見られる。本稿ではテキストの中でもそれが際立っている「第三」を取り上げ、そのような言葉の出現を確認しながら、複数の出典を縋いませることでテキスト自体と典拠の両方に新たな読みの地平を開いていく機能をせりふが担っていることを指摘する。

『贗作吾輩は猫である』「第三」は「吾輩」の飼い主である五沙弥の自宅における、教師時代の学生たちとの宴会の場面である。登場人物は五沙弥のほかに疎影堂、蒙西、出田羅迷ら「老学生」に、途中から後輩である佐原満照が加わる。

「第三」は、学生時代に上演したドイツ語劇を回想しながら「おお、なつかしき学び舎の栄よ（O alte Burschenherrlichkeit）」を歌う場面から始まり、やがて会話に茶々を入れる疎影堂のせりふによって歌舞伎や落語の、頭部の形状にこだわる五沙弥によって狂歌の、青年期を追懐しながら酒を飲んで狂態を演じるのみの老境に疲れを覚える蒙西によって禅画の引用がなされていく。このように引用が登場人物のせりふに乗せて描かれることによって、各人の造形が示されると同時に、人物同士の言葉のやり取りを通じて複数の典拠がつきあわせられることになる。

本稿ではこうした「第三」の典拠を具体的に指摘し、複数の典拠がどのような方法でつきあわせられているのかを考察する。その上で先行作品の縋いませがテキストにいかなる性格を付与し、また先行作品にどのような新たな読みの地平を開いているのかを検討する。こうした手続きを通して、『贗作吾輩は猫である』の性格の一端を明らかにすることを試みる。あわせてこうした手法が『贗作吾輩は猫である』以降に戯曲的な形式へと発展していくことにも触れたい。

『贗作吾輩は猫である』のタイトルが示すように、この作品は夏目漱石『吾輩は猫である』を踏まえた物語が展開する。伊藤整はあらずじを次のようにまとめ、発端と登場人物について『猫』との間の対応関係を指摘している。

この作品は、水ガメに落ちて死んだと漱石が書いているあの英語教師苦沙弥の猫が、実は死にきらず、この戦後に現れて、ドイツ語教師五沙弥先生の宅に住み込む話である。そして苦沙弥家に集った寒月、独仙、迷亭などという風流人のかわりに、五沙弥家には、鰐果蘭哉とか飛田里風呂とか出田羅迷とか狗爵舎とか風船画伯とかいう風流人が出没して、借金について、シャンパンについて、共産主義について、また「金を貯める文士 蛆田百蔵」氏について清談を交わすのである。

伊藤整は主に「第一」「第二」の登場人物を「風流人」として『猫』の登場人物と対応させている。一方ここで言及されない「第三」においても、これら「太平の逸民」と作中の人物が対応している様子が見られる。この対応には『猫』の「第十一」のほか、物語内で言及される『ファウスト』の一場面の登場人物とも照応が見られる。

ここで『贗作吾輩は猫である』「第三」の登場人物を改めて確認しておく、五人は元教師とその教え子たち四人という構成である。まず元ドイツ語教師で「吾輩」の飼主である五沙弥、次に一見意味のない歌などを口ずさんで会話に割り込む疎影堂、冒頭と結末で「お、なつかしき字び舎の栄よ」を歌いながら「寒山詩」(爛冷まし)を手に青年時代と現在の状況の懸隔を嘆く蒙西、「吾輩」の耳を裏返したり尻尾を引っ張ったりしながら会話に参加する出田羅迷、そして途中から登場するのが、三人の学生よりも年若の佐原満照、サラマンドアと呼ばれる後輩である。この五人と「吾輩」が「第三」の登場人物である。

前章で述べたように百閒は、『贗作吾輩は猫である』執筆以前に『吾輩は猫である』に関して『漱石物語』(一九四六年、三笠書房)の制作を行った。その解説において、百閒は『猫』の「真価」を「吾輩」の哲学的あるいは文明批評的な叙述よりも「太平の逸民」による話題がめまぐるしく移り変わる会話文の描写に見出していたと考えられる。同書で掲載されたのは『猫』の最終章「第十一」で、なおかつ「吾輩」の叙述を大きく削ぎ落とす編集がなされていた。

「吾輩」が水甕に落ちて溺死する結末場面を除くと、「第十一」を構成するのはほぼ「太



平の逸民」の会話のみになる。「吾輩」を除けばその登場人物は珍野苦沙弥、越智東風、八木独仙、迷亭、寒月の五人である。『贗作吾輩は猫である』『第三』の登場人物も「吾輩」を除いて五人であり、各人の性格を踏まえれば「第十一」の登場人物との間に対応関係を見出すことができる。苦沙弥は五沙弥に当たるほか、ややピントの外れた相槌を打つ東風は疎影堂、禅の世界に仙境を追い求める独仙が蒙西、諧謔に満ちた迷亭は出田羅迷、一つの話題にこだわり続けて煙たがられる寒月を佐原満照と当てはめることができる。

このように『贗作吾輩は猫である』『第三』は『猫』『第十一』を一つの参考に書かれていることがわかる。登場人物に対応が見られることから推測されるように、「第十一」では術学的なせりふを伴った宴の狂騒と、その後に残る悲哀が語り手「吾輩」の目に映っていたが、「第三」においてもよく似た場面が展開する。前章で述べたように百間は『猫』の真骨頂を「第十一」の会話文に見出していたとみられることから、同様の舞台と登場人物の構成をもつ「第三」が「第十一」を強く意識して書かれたと考えることができよう。

これら師弟による「第十一」と「第三」のいずれも登場人物たちの会話の中には多くの先行作品が引用されていることは一読して明らかだが、注目すべきは「第三」の場合、複数の引用作品を結びつけて新たな読みの可能性を提示する場として物語世界が機能していることである。その点で登場人物には前述の『猫』だけでなくゲーテ『ファウスト』の一場面も踏まえられていることを指摘しておきたい。

『ファウスト』の登場人物との対応については、「ギル カイネル トリンケン（誰も飲まんのか）、カイネル ラッヘン（誰も笑はんのか）、さあ、さあ、更めてプロウジツトだ」という出田のせりふに続き、登場人物たちが「蚤の唄」を歌っていることが手がかりとなる。これは第一部第五場「ライプチヒなるアウエルバッハの酒場」の劇中歌であり、「第三」では一九四六年に刊行された阿部次郎による訳文を用いたことが括弧書きで注記される。

阿部次郎は『ファウスト』の註において、「ライプチヒなるアウエルバッハの酒場」が実在し「一六三〇年頃以来、学生の躁宴とファウストの酒樽乗を描いた壁画がある」ことを指摘した上で、登場人物について次のように解説している。

学生語として初年生を意味する Frosch の未だ世間を知らぬ無鉄砲、その一級上であることを暗示する Brander (Brandfuchs) の多少控目を加えた元氣……「天辺の禿げた太鼓ッ腹」の Siebel が更に両者を越えた年長者として、失恋に挫折しながらも底の方に荒っばさを蔵するメフィストとの応酬、最年長の Altmayer（「初稿」には Alten とな

つてゐる)の弱気と愚図と卑しきなどは明瞭に区別することが出来る。奇術の酒に対する四者の態度から見てもそれ／＼の個性は紛れぬものがある。併し銘々思ひきつて不作法な中にも隠れたるタクトを心得てゐることは、歌によってフロツシユとブランドーとの喧嘩をそらすジーベル、喧嘩に耳を塞がうとしながら、すぐに折れてアア！ タラ ララ ダー！ と調子を合せるアルトマイヤーの態度などによって、開幕匆匆既に感知することが出来るのである。<sup>1</sup>

作中に阿部次郎訳との注記がある以上、百閒が一九四六年刊の阿部訳『ファウスト』を読んだことに疑いの余地はない。「ライプツヒなるアウエルバッハの酒場」は「第三」において学校に属していた時代から数十年を経た教師と学生の物語に読み替えられているといえる。

ここではフロツシユが五沙弥、疎影堂がジーベル、蒙西がブランドー、出田羅迷がアルトマイヤーに当たり、そして途中から登場する点と怪物の名前で呼ばれる点で佐原はメフィストフェレスに擬せられると考えられる<sup>2</sup>。最も年下のフロツシユが、実際には最年長と思しき五沙弥に当てはまる点については、「吾輩」が説明するように昔の学生たちが会社で働いているのに対し五沙弥の職業がはっきりしないことから、年齢よりも「世間を知らぬ無鉄砲」の性質を重視したためであろうか。

このように「第三」の登場人物は、『猫』だけでなく『ファウスト』も踏まえて構成されている。五人のキャラクターの配置は「第三」の読みに奥行きをもたらずだけでなく、『猫』と『ファウスト』の類似点を暗示し<sup>3</sup>、それぞれの作品に対する新しい読みを示してもいるといえよう。とはいえ「第三」の物語はこれら二作品の引用にとどまらない。次節では「第三」において引用されている作品名を指摘した上で、その内容がどのようにさらなる作品の引用を呼び込み一場面を作り上げているのかを考察したい。

## 二 「第三」における引用作品(2) ドイツ文学と日本文芸

前章で触れたように『贋作吾輩は猫である』における会話は異なる思想の衝突を描く機能を担っていた。こうした機能は社会情勢を取り上げた場面では政治体制の変革などによる時代の転換を表すが、会話の中心がより身近な内容である場合には『吾輩は猫である』において「吾輩」が「寄席」にたとえたことに見られるような近世文芸、とりわけ粋と諧謔を旨とする文芸の表現に近づいていく。つまり地の文は登場人物の風体や動作を示すにとど

まり、せりふがテキストの大半を占めることになる。そして物語の枠組みとなる引用作品に加えて、せりふの中では近世文芸作品の引用が場の原動力として働いていく。

「第三」は清水良典が指摘するように「先生」と教え子が友愛と信頼関係で結ばれた時代」の再現であり<sup>4</sup>、若い教師と学生としてドイツ語劇を通じて親睦を深めた思い出が話題の中心となっている。実際に百閒は法政大学独文科時代、学生を率いてドイツ語による演劇を上演した。その中には前述の『ファウスト』も含まれている<sup>5</sup>。

「第三」は疎影堂の「けんげん、こほり。けんげん、こほり」という掛け声で幕を開ける。

これは歌舞伎『菅原伝授手習鑑』加茂堤の段で三好清行（清貫）が進むべき方角を占う際に唱えるまじないと同じものである<sup>6</sup>。この言葉は凶事を避けるためのまじないとして『続群書類従』に見え<sup>7</sup>、古くは『易経』の一句「乾、元亨利貞」に遡ることができる<sup>8</sup>。冒頭から近世文芸の引用によって歴史的に意味が積み重ねられてきた言葉が示され、「第三」の場面を読むにあたっては近世文芸の想起が要請されることが暗示される。これに続いて全員が声を合わせるのは、マイヤー・フェルスター『アルト・ハイデルベルグ』第五幕第五景の劇中歌「おお、なつかしき学び舎の栄よ」である<sup>9</sup>。

「けんげん、こほり。けんげん、こほり」

「疎影堂の馬鹿、よせ」

O alte Burschenherrlichkeit,

wohin bist du entschwunden?

Nie kehrtst du wieder, goldne Zeit,

so froh und ungebunden!

Vergebens spähe ich umher,

ich finde deine Spur nicht mehr.

O jerum, jerum, jerum,

O quae mutatio rerum!

「オウ アルテ ブルシエン ヘルリヒカイト（あの少年の春は）ゾウヒン ビスト

ヅウ ゲシュウンテン（どこへ消えて行つたのか）

ニイ ケエルスト ヅウ ゴイデル、ゴルドネ ツアイト（もう帰つては来ない）」

歌詞の一部についてのみ「あの少年の春は／どこへ消えて行つたのか／もう帰つては来ない」という訳詞が付されている。『アルト・ハイデルベルグ』は男女の出会いと別れを身

分制度のもとで描く物語だが、ここでは男の物思いを代弁する劇中での意味よりも、過ぎ去った青春時代への懐古という「第三」全体のあらすじを説明する挿入歌として機能していることがわかる。

このように「第三」では、冒頭場面で大まかな内容とそれに付随する言語の運用、いわゆる近代小説流の世界と趣向が示される。言い換えれば「第三」の特徴である、作品の題名に掲げる『吾輩は猫である』の他にも複数の作品が土台や枠組みとなり、他方各登場人物のせりふにおいては物語の色彩を決定する引用が随所になされるテキストであることが冒頭場面に表れているといえる。つまり一から物語世界を創作することよりも、先行作品の組み合わせから新たなテキストを構成することに重きが置かれていることが読み取れるのである。

こうした冒頭場面から登場人物たちの間で『アルト・ハイデルベルク』に加えて「チエホフの独逸語訳」を上演した<sup>10</sup>ことへの言及がなされ、ひとしきり学生時代の思い出が語られる。この会話の中では、長台詞を忘れ舞台に立ち尽くす姿を揶揄する際に「第三」の土台となる先行作品の世界が同様に悲恋を扱った日本の伝説と接ぎ木される様子を見ることができる。

「全くひどい目に会ったね。僕はファウストの長い独白で、舞台の上に立ち竦んでしまった」と出田君が指の先で吾輩の耳を裏返しながら云ふと、五沙弥入道が面白さうに膝を乗り出した。

「出田のファウストは珍怪の極みだったね。ガウンの様な物を著てき、頻りに袖ばかり振つて、領巾振る山のファウストみたいだったぜ。いやに長い顔をしてさ」

『ファウスト』第一部で主人公は町娘グレートヒエンと恋に落ちるが、ファウストは彼女の家族を殺しグレートヒエン自身も悲劇的な結末を辿る。一方「領巾振る山」も同じく引き裂かれる恋人同士の物語である佐用姫伝説を導く言葉である。佐用姫伝説は各地の口碑以外にも早くは『万葉集』に、下つては『太平記』のほか周知の物語として歌舞伎や川柳に見える。もちろん領巾を振るのは男性ではないため、ここでの『ファウスト』と佐用姫伝説の接続には男女の役割を入れ替えることで意表をつく洒落の工夫があることも注目される。

このように物語の枠組みと色彩をそれぞれ近代ドイツ、近世以前の日本と一見接点のない時代背景・場所で成立した物語から採りながら、両者を物語世界の内部で結びつける手法は随所に見られ、「第三」を特徴づける語り口といえる。酔いが回るにつれて学生時代に戻ったかのようになっていく面々が五沙弥に「鼠の歌」を歌おうと提案し、猫である「吾輩」

が歌に合わせて「猫ぢや猫ぢやを踊るつもり」なのではないかとからかう場面もやはり、こうした組み合わせの妙を原動力とした一幕であるといえよう。さらにこの手法は、宴の場にも結末を与える際にも役割を果たしている。

「寒山詩つて、どんなお酒です」と出田が真面目な顔をして聞いた。

「爛ぎましたよ」

「なあんだ」（中略）

蒙西が寒山詩の杯を持つて立ち上がり、絞り出す様な声で歌ひ出した。

「オウ アルテ ブルシエンヘルリヒカイト（あの少年の春は）

ヅウヒン ビスト ヅウ ゲシユウンデン（どこへ消えて行つたか）」

ここで何気ない洒落のように扱われる「寒山詩」は、冒頭で歌われた「おおなつかしき学び舎の栄」がリフレインされることで近世文人画・詩の世界に通じる遁世への憧れを暗示する小道具となる。寒山拾得の物語は古くから代表的な画題であるだけでなく、森鷗外や芥川龍之介によってもその飄逸な人物像が一つの理想として描かれてきた。「吾輩」がはじめに述べているように元学生たちは、今となっては会社の重役を務めている。つまり「寒山詩」を手に「おおなつかしき学び舎の栄」を歌うという構図は、これまで狂態を演じてきた元学生たちの宴が終わりを告げ、懐古や遁世趣味に閉じこもるのを許さない現実に引き戻されていくであろうことを示唆しているのである。

このように「第三」における引用は『ファウスト』と『アルト・ハイデルベルク』を物語の枠組みとして用いながら、それらの解釈にあたって日本の文芸作品が用いられ、両者の類似点や連想による関連付けが新たな読解の地平を開いていた。次節ではこうした引用作品のうち、必ずしも物語の枠組みとは深く関わらない一方で印象的な場面を作り出している歌の形式をとるものに着目し、その役割を考察する。

### 三 「第三」における歌の機能

「第三」における『アルト・ハイデルベルク』の劇中歌の引用は、物語の枠組みを形成する役割を果たしていた。一方で場面の中での役割は趣向の範囲にとどまりながらも、引用された作品そのものが『贗作吾輩は猫である』以前に他の文芸に摂取され広まったことで、連想による読解に奥行きを与えている場合もある。ここでは「かんかんのう」を踊る場面を取

り上げてその役割を検討してみたい。

冒頭で「けんげんこほり」を唱えた疎影堂は、前述のように周囲の話題とは一見関係のない言葉で会話に割り込む。当初ははねつけられていたその試みが成功するのが「かんかんのう」の場面である。

「おれは、かんかんのうを知ってるぜ」と疎影堂が乗り出した。「先生、踊って見ませうか」

「踊らなくてもいい。君の様な図体で踊った根太が抜ける」

「僕は静かに軽く踊って、かんかんのうを舞ひ納めよう」

「いらぬよ。一体、かんかんのうは死んだ者が踊るのぢやないかい」

「そんな事があるもんですか。かんかんのうの元は、渡来の九連環でさあ。長屋のらくだが死んだから、大家さんの台所へかついで行つて、かんかんのうを踊らせようと云ふのは落語の話で、あの駱駝は芝居でもやりましたね。菊五郎か吉右衛門ではなかつたかな。僕は芝居は見なかつたけれど、かんかんのうの踊は知つてゐる。何、生きてたつて結構踊れまさあ。一つやつて見ませうか」

疎影堂が詳しく説明しているように「かんかんのう」の歌謡はもと中国より渡つてきたとされる。近世後期の随筆『甲子夜話』には「かんく踊と云て、小児の戯舞するありて、都下に周遍す。其章唐音を伝へたりと云ことなり」とあり、「かんく」のふぎうのれんす。きうはきうれんす」とその詞も紹介されている<sup>1)</sup>。そして「かんかんのう」といえば落語『らくだ』をすなわち連想するように、日本では死体を使って踊らせるものというイメージが定着している。疎影堂が最後に述べている「菊五郎か吉右衛門」で演じられたという記憶は、『らくだ』に基づく一九二八年初演の歌舞伎『眠駱駝物語』を指していると思われる。この公演では「かんかんのう」を死体に踊らせる際に歌う役割である紙屑買久六を初世中村吉右衛門が演じた<sup>2)</sup>。「第三」では疎影堂が踊りと歌を一手に引き受けて「かんかんのう」で場を盛り上げようとする。

ここで注目されるのは、「かんかんのうの元は、渡来の九連環」という説明と「生きてたつて結構踊れまさあ」というせりふからわかるように、「かんかんのう」には「第三」に至る以前に複数の文芸の場で引用が重ねられてきたことが踏まえられている点である。「かんかんのう」は『甲子夜話』に従えば、「看看也」で始まる清楽「九連環」の詞章を日本語母語話者の耳で聞き、その音を写した歌詞がやがて変化して振付を伴つたという成り立ちをも

つことになる。さらにこの「かんかん踊」が死体に踊らせるという形で落語に取り入れられ、歌舞伎化された際にも用いられた。「かんかんのう」はこの変遷すべてを踏まえたうえで「第三」の中で言及されているといえる。

「九連環」の歌詞は、知恵の輪の一種である九連環が自分では解けないので（「双手拿来解不开」）解いてくれる人はいないか、いればその人と結婚したい（「誰人也解奴的九連環：奴就与他做夫妻」<sup>13</sup>）という内容である。前出の悲恋のモチーフとは異なり、身近な遊びに仮託して結婚相手を求める歌であることがわかる。

こうした歌詞は近代までに、中国の音楽を学ぶための教本には収められる一方で、「かんかん踊」においては内容が顧みられることはなくなり、日本語にはあまり見られない音の面白さだけが楽しめるようになったものと思われる。田辺尚雄は「九連環」の歌詞について、「文字や意味は判らなくとも、その口調とアクセントが面白いので自然と覚えてしまう」と述べ、これが花街周辺で替え歌にされたものに「滑稽な道化踊を工夫」したのが「カンカン踊り」だとしている<sup>14</sup>。

このように「かんかんのう」は民間の玩具に材を取った音楽が中国から輸入され、歌詞の意味が失われた歌謡と踊りとなって芸能の中に引用されたものであって、これが「第三」においてさらに引かれているということになる。重層的な引用と流用の諸相を説明するのが、疎影堂のせりふというわけである。

先に述べた「第三」の物語の枠組みを思い起こせば、こうした「かんかんのう」の引用は「九連環」にはじまり近世の「芸」の場に展開した歌と踊りの歴史を凝縮した上で、会話文からなる点で戯曲的ともいえる「第三」の場面に、さらなる身体性、もしくは演芸性を付加するものといえよう。前述の枠組みを定める引用が骨とすれば、ここでの引用は文字通り場面の血肉として機能しているといえる。

ここでとられた手法はやがて、百間の住む現実の社会と歌やせりふのような「上演される言葉」を中心とした日本近世文芸の関連付けへと発展していく。次節ではこうした形式の発展を意義づける予備考察として、速記による作品集に記された百間の文章観を確認していきたい。

#### 四 「文章に依らない」語りの試み

『贗作吾輩は猫である』「第三」では、さまざまな先行作品を引用し、ときにないまぜる

ことで物語が成立していた。とりわけ「かんかんのう」をめぐる一幕では、「九連環」に始まり『らくだ』に至るまでの文芸史が振り返られ、言葉の響きの面白さと踊りの付随という「かんかんのう」の歴史に重ね合わせられるように、「第三」の文章における会話文と歌の挿入を通じた身体性の追求が示唆されていた。

このように叙述を極力排除した「第三」は、これまで見たように会話文が中心となることであたかも戯曲のような性格を獲得している。言い換えれば「第三」には会話文の多用という形で「話し言葉」への志向がうかがわれるということになるが、『贗作吾輩は猫である』と同時期に発表された作品には、話し言葉が同様に重要な文章技術として位置付けられている。

その一例として『百鬼園夜話』（一九四九年、湖山社）が挙げられる。巻頭の「口上」によれば実際には「戦前」に語った内容の速記であり、「戦争中筐底に蔵した稿を披き」刊行したものという。実際に一九四一年の日記によれば速記原稿は三月末から四月に作成され、五月以降百閒が校正に着手していた。一九四一年の『百閒座談』（三省堂）に続く予定であった『百鬼園夜話』については、日記に題名と版元の変更に加えて百閒自身の作業の滞りも記されており、企画が難航したことで刊行されなかったものと思われる<sup>15</sup>。ともあれ戦火から守り抜いた原稿によって一九四九年に改めて刊行したのが『百鬼園夜話』ということになる。

その「口上」には思考と筆記の間で失われるものを可能な限り拾い上げていく試みへの希望が語られている。ここで百閒は二十点余の作品集をものしてきたこれまでの執筆活動を顧みて「初めの中は読者にも、文章の内容を面白がられた様で、自分として多少不愉快である」と述べている。そして内容を重視した読みを否定する立場を明確にした上で「最近の物に僕は多少その希望や考へを現はしてゐると思ふ」と、著作においてそのような読みを排除するための実践を行なっていることを明かしている。

ここで百閒の述べる「最近の物」として想起されるのは、例えば一九三九年発表の「七体百鬼園」（『新青年』）であろう。七人の登場人物たちが一堂に会し、とりとめのない話を展開して帰っていくという物語の内容そのものに意味のある筋書きを見出すことは難しい。しかしこの七人が作者の使い分けてきた「私の名前」に人格を与えた存在であることをあらかじめ告げる冒頭と、七人が消えて原稿用紙を前にした作者だけが残されているという結末の場面を踏まえれば、「七体百鬼園」が登場人物の語る内容や行動という意味での物語内容よりも、先行テキストにおいて「読みのモード」を操作してきた「私の名前」が集合する



ことで読解における先入観が攪乱されるという物語言説上の効果、いわば表現の技巧を全面に押し出した文章であることがわかる。『百鬼園夜話』の「口上」でも、こうした「内容読解」の排除と文章表現そのもの——百閒はこれを「人間の天から与えられた特別な賜物」と呼んでいる——に対する注目を目的として「文章に依らない」「独り言」という形式をとったことが説明される。

僕は錬磨の道標として二十幾冊の本を書いて来たのだが、この度ふとした話し合ひから、急にこの「百鬼園夜話」と申す一冊の本、僕の文章に依らない本を出す事になった。

文章に依らない本は、前著の「百閒座談」とこの本と二冊だけである。前著は人との対談を後で綴り合はしたのが大部分であるのに反し、この「百鬼園夜話」は全巻僕の独り言である。文字を綴った文章に依らず、言葉の儘を速記に取った独り言である。(中略)

この方法に依る著作は、どうかすると読者にとつて、僕の苦心した表現や、骨身を削る思ひをした文章より、却つて僕が裸になつた感じを与へるかもしれない。

ここで注意されるのは、「自分の文章に依らない」「独り言」には、これまで工夫をこらしてきた自分の文章よりも「裸になつた感じを与える」、つまり読者に書き手の「ありのままの姿」を伝える力があるのではないかと述べている点である。

ところで文章において「ありのまま」といえば、随筆や日記を小説と区別する際にしばしば用いられてきた観点の一つであるが、百閒はそのような意味での「ありのまま」に対してはむしろ懐疑的であつた<sup>16</sup>。「口上」の論旨に沿っていえば、文章の内容が読者にとって「作者のありのままの姿に見える」という事実らしさの装飾に警戒してきたことは、前述の「七体百鬼園」からも読み取れる。

それでは内容ではなく言説における「裸になつた感じ」とは何を指すのか。ここで先ほどの引用における「言葉の儘を速記に取つた独り言」という表現を想起すれば、それは執筆中も校正中も著者と編集者の手で繰り返し返しなされる推敲の結果としての「文章」からの離脱ということになる。言い換えれば「口上」で表明されているのは、「書き言葉」の訓練を重ねた書き手による「話し言葉」の表現の可能性の見直しであり、文芸の歴史上繰り返し議論されてきた、「言葉の儘」をめぐる諸問題への百閒なりの一つの回答であると考えられる。

例えば「話したまま書く」という意味での「言葉の儘」としては、言文一致における話し言葉の役割がある。に言及した文章として第一に挙げられるのは、二葉亭四迷「余が言文一致の由来」(『文章世界』一九〇六年五月)であろう。文体に迷った二葉亭が坪内逍遙の助言

を得てまず試みたのは、「円朝の落語通りに書いて見」ることであった。そのような文言文一致の試みがなされた『浮雲』に先んじて、落語の世界でもまた近世の咄本とは記録性の点で一線を画す速記本の刊行が行われ、「話すように書く」および「話したままに書く」ことの要請は高まっていた。

こうした明治二十年代の問題意識を百閒が同時代人として意識したとは考えられないが、右の「余が言文一致の由来」のような回想を少年投稿家であった百閒が読んでいたとしても不思議ではない。またこうしたごく初期の問題の次には、「観たままに書く」という「写生」概念の提唱がある。これについては百閒の中学時代の習作群<sup>17</sup>から、とりわけ写生文の執筆に対する強い意識を知ることができる。やはりここでも、思考を文章に写す際に発生する情報の過不足を最小化することへの志向がうかがわれる。

そして作家として名を知られるようになった一九三〇年代前後には、随筆と私小説の流行の中で作家の実生活と結びつけて作品内容を理解しようとする読者の「読みのモード」に直面することになった。これに対する百閒の反発と受容の結果は前述の「七体百鬼園」に見える通りである。ここでは内容が作者の「ありのまま」であるか否かを読み目の焦点とするのではなく、「私の名前」を集めて会話させるという言説上の方法論を「面白がられ」たいという「希望や考へ」が表出されていた。

さらに一九四〇年代には戦中の日本郵船株式会社における活動<sup>18</sup>と敗戦直後の日録発表を経て、『百鬼園夜話』と『贗作吾輩は猫である』が刊行された。注意すべきは前述の『百鬼園夜話』の刊行経緯であるが、企画の発足および原稿作成と刊行の間に敗戦という大きな出来事があったことを踏まえると、そこにはむしろ『百鬼園夜話』の「口上」で述べられていた「希望や考へ」、すなわち「言葉の儘」をめぐる問題意識がいまだに有効であったことが伺われるのではないか。言い換えれば『百鬼園夜話』の刊行経緯と「口上」には、一九三〇年代から一九四〇年代、そして後述する一九五〇年代への問題意識の接続を見ることができのではないだろうか。

このように百閒の執筆活動は、「どのように書くか」から始まり「どのように読まれるべきか」が一貫して問題化されてきたといえる。むしろ同世代および新感覚派に代表される一世代下の作家たちに共通する意識であり、百閒の試みはその一つにすぎない。とはいえそのような小説技法について議論を交わし合う仲間をもたなかった<sup>19</sup>からこそ、その試みが一過性に終わらず長期間にわたる試行錯誤となって執筆活動の全体を形成している点には注目していいものと思われる。

ここで再び『贗作吾輩は猫である』「第三」を振り返ると、その特色は会話文が一篇の大半を占めていることにあった。『百鬼園夜話』が「速記に取った独り言」であることを思い起こせば、一九四〇年代の初頭と末に「書き言葉」という意味での「文章に依らない」文章、つまり「話し言葉」への志向があったことがわかる。次節ではこうした志向が一九五〇年以降、上演される言葉への接近を伴いながら発展していったことを確認していきたい。

##### 五 上演される言葉への志向

『贗作吾輩は猫である』「第三」では会話文が場面の大半を占め、また引用されるさまざまな先行作品の中でも演劇における劇中歌が一行空き・字下げという形式で際立っていた。とりわけ「らくだ」については劇中で歌い踊られる「かんかんのう」について詳細な来歴が言及され、歌詞の音の響きの面白さに注目される中で内容が顧みられなくなり、やがて落語と歌舞伎に取り入れられて本来の「九連環」とは大きく異なる読みの地平が開かれていったことが語られていた。

こうした「第三」における「らくだ」の機能を先ほどの『百鬼園夜話』における百間の文章観を踏まえてあらためてまとめれば、場面全体の末尾に配されたこの作品は引用が作り出す新たな読みの諸相を実例とともに要約し、なおかつそのような引用が「文章を離れ」た話し言葉、特に上演される言葉に収斂していく様相を示すことよって、「第三」全体の試みを作品内部で雛形化していることにあるといえる。ここで提示された話し言葉の重視は『贗作吾輩は猫である』以降、「上演される言葉」とその範囲をより明確にして展開されていく。

その一つが「とほぼえ」（『小説新潮』一九五〇年十二月）である。「とほぼえ」は、暮れの帰り道で「私」が氷屋の店主と会話を交わすうち、やがて自身が墓地の方角からやってきた「死神」であるらしいことが明らかになっていく物語である。物語の内容そのものは「四ツ辻」で人と別れ「だらだら坂」を上っていった先が「私」とおそらくは生きている人間との接触の場となり、「私」がそこではじめて自己の姿を目にするというあらすじで、境界のモチーフが多用されるなど『冥途』（一九二二年、稲門堂書店）の諸篇に酷似しているといっている。

たとえば『冥途』所収の「道連」では、「私」が道連れの人と話しながら歩いていくうちに彼が「生まれないですんでしまった」兄であることを告白する。結末は「私」が道連れを

「兄さん」と呼んで抱きつこうとしたとたんに「今まで私と並んで歩いてみた道連が、急にいなくなってしまった。それと同時に、私は自分のからだだが俄に重くなつて、最早一足も動かれなかつた」というものである。ここでは会話を通じて生まれなかつた兄をもつ「私」の姿が顕されていき、同時に分身としての「道連」を恐れつつ求める自己のありようが精神分析的な色彩をもつて「私」の心の内として叙述される。

これに対して「とほぼえ」の特色は、『贗作吾輩は猫である』「第三」と同様に大半が「私」と店主の会話文からなることにある。会話の中で「私」の「本当の」姿が明らかになってくるといふ点では「道連」と共通するが、「とほぼえ」には「道連」のような明確な「落ち」が欠けている。むしろ店主から「墓地から来たんでせう」と推測が重ねられることで「私」が自らを「死神」だと思ひ込んでいくのみで、「道連」の結末に見られる超自然的な現象が「私」に降りかかることはない。

「お客さん、本当にどこへ帰るのです」

「家へ帰るのさ」

「家と云ふのは、どこです」

亭主がにじり寄る様な、しかし逃げ腰に構へた様な曖昧な様子で顔を前に出した。

「本当を云ふと、お客さんは、この前の道を来られましたな。この道の先の方に家は有りやしません」

「さあ、もう帰るよ」

「墓地から来たんでせうが」

頭から水をかぶつた様な気がした。

「さうだよ」

「さうら、矢つ張りさうだ」

二人の会話の中で「私」について最も核心に迫る言及がなされるのは右の場面である。店主はこの返答を聞き、「死神」からのラムネ代の支払いを拒否して「私」を追い払う。結末の一文は「気がついたら、来る時の四ツ辻を通り越して、その先の墓地を歩いてゐる」というものだが、前掲の「道連」の結末と比較すると、この叙述が前段の会話文の内容を「私」が知らず知らずのうちに反復していることを述べるにとどまり、「私」の「本当の」姿をクライマックスで明らかにするという形式とは一線を画している様子がわかる。

このように「とほぼえ」を類似の筋書きをもつ「道連」と比較しつつ読むことで、同作で

は語り手「私」の叙述よりも、複数人の会話文を用いた場面から、進行中の物語を浮かび上がらせる効果が重く用いられている。『贗作吾輩は猫である』「第三」での会話文が先行作品を引用し関連付ける機能を担っていたことを踏まえると、執筆時期についてなお調査を要するものの、発表時期のおよそ一年下る「とほぼえ」では会話文の役割が「私」のありようをめぐる「核心」に近づこうとしていく点で、よりストーリーに根差したものになっているといえる。

こうした会話文の発展は小説として発表された作品にとどまらない。その一例が一九五一年より百閒を主筆として刊行された雑誌『べんがら』の巻末に毎号掲載された「Bengala 帝国出納省告示第三八号ノ八」と題する文章である。百閒の作品がジャンル横断的であることは繰り返し述べられてきたが、とりわけ敗戦後の作品には「とほぼえ」のように会話文を利用したレーゼ・ドラマ風のものが目立つ。その中で「Bengala 帝国出納省告示第三八号ノ八」は、告示を読み上げる「Bengala 帝国」の官僚を仮構し、「1」から始まる通し番号がふられたせりふによって進行する。

- 43 ソノ心事ノ高潔ナル。
- 44 ソノ著想ノ斬新ナル。
- 45 ソノ計算ノ緻密ナル。
- 46 以つて亀鑑となすに足る、
- 47 誠に惜しみて余りある人が、生きてゐるのです。
- 48 尊敬する他に道はない。
- 49 人をうやまふのが道德の始まりで、物をほしがるのが泥坊の始まりです。
- 50 皆さん一斉に起立して下さい。
- 51 敬礼<sup>20</sup>。

「Bengala 帝国出納省告示第三八号ノ八」は『べんがら』の編集後記兼購読案内であるが、戯曲仕立ての構成が一般的な雑誌購読案内とは異なり、右のようにしばしば趣旨を述べるまでに脱線が見られる。ここでは会話文の枠をはみ出して、割り当てられたせりふを読み上げていく多数の「官僚」が登場することによって一篇が戯曲のような趣を呈している。この作品にはト書きがないためたとえばレーゼ・ドラマと呼ぶには不完全であるが、その内容に相当する場面や人物の造型は題名に書き込まれた「Bengala 帝国出納省告示」という言葉から伺い知れる。

言い換えれば会話を定点として『贗作吾輩は猫である』以来の変遷を眺めると、作中に挿入される人物の会話がやがて作品そのものを構成するようになり、それに従って文章の形式も会話を中心とした小説・随筆から、レーゼ・ドラマ風のジャンルの枠組みを超えたものへと変化していくことになる。このように百間の作品は『贗作吾輩は猫である』を重要な転換点として、一九五〇年前後を「上演される言葉」の追求に充てていくのである。

おわりに

以上、本稿では『贗作吾輩は猫である』に会話文が多用されていることと、その会話の内容においても演劇や落語といった「上演される言葉」への注目が見られることを手がかりとして、同作の分析を行った。具体的には「第三」を取り上げ、登場人物たちによって語られるそのような言葉の出典を確認しながら、複数の出典を網いませることでテキスト自体と典拠の両方に新たな読みの地平を開いていくせりふの機能を明らかにすることを試みた。

まず『贗作吾輩は猫である』「第三」における先行作品の引用をその役割によって二つに大別し、それぞれの出典を明らかにした。第一の役割は、登場人物の造型と構成ならびに場面設定を規定するもので、タイトルから明らかな夏目漱石『吾輩は猫である』のほか、ゲーテ『ファウスト』から「ライブチツヒなるアウエルバッハの酒場」が出典となっていることを指摘した。

第二の役割は、会話の中に現れて複数の先行作品を導き、「第三」の構造が志向する身体性の獲得を「かんかんのう」の歴史を例として提示するものである。その事例をめぐっては、登場人物の口から「かんかんのう」が中国の「九連環」に由来し、近世日本において言葉の意味ではなく響きの面白さに注目した受容によって歌い踊られる「かんかん踊」へと変容したこと、さらにこの「かんかん踊」が落語次いで歌舞伎に入って「死人」の踊りとして知られるようになったことが語られる。

こうした先行作品の網いませは物語内容に奥行きを与えるだけでなく、作品の構造を具体化して見せ、また先行作品に他の作品と紐付けての新たな読みの地平を開くものといえる。以上の手続きを通して、『贗作吾輩は猫である』の性格づけを行った。さらにこうした手法が『贗作吾輩は猫である』以降に戯曲的な形式へと発展していくことに触れ、百間の作品において一九五〇年前後が「上演される言葉」の追求の時期であったと結論づけた。

なお、本稿では『贗作吾輩は猫である』の中から「第三」の読解を試みたため、他の章に

については論じることができなかった。会話文の使用を加速させていく同作の続編も含め、多角的な視点からの分析を今後の課題としたい。

注

1 阿部次郎「註」ゲーテ『ファウスト 第一部』阿部次郎訳、一九四七年、国立書院。ゲーテ『ファウスト 第一部』阿部次郎訳、一九四七年、国立書院。

2 ここでファウストに該当する人物が人間の中に設定されていないことは注意が必要である。『ファウスト』と比較したときの「第三」の中空ともいえる構造は、阿部次郎の解説を参照しながらの執筆の中で書き落としたものとも、手法としてのパロディにおいて意図的に未完成の物語場面を構成したとも考えられる。

3 『猫』の執筆に際して漱石が『ファウスト』を参考にしたとの研究は管見の限り見当たらない。ただ漱石は書簡などで『ファウスト』に言及していることから、百閒にとっては帝国大学独文科で学ぶ以外にも同作の評価に触れる機会があった可能性がある。

4 清水良典「『遊民』のデイグニティー」『贋作吾輩は猫である』二〇一六年、筑摩書房。

5 内山保「ゾルフ大使」『二分停車 増補版』一九九六年、私家版。内山保は法政大学時代、教員である百閒宅で住み込みの書生として身辺の世話をを行った。「ゾルフ大使」には法政大学予科の学生によって『ファウスト』から「ライブチツヒなるアウエルバッハの酒場」が上演されたことが記されている。

6 この掛け声は刊行された歌舞伎台本の多くでは「よろしく」、「占いなどする」とされており具体的な記載はなく、役者の間で口伝されるものと思われる。現場で使用されたとみられる手書きの訂正台本『菅原伝授手習鑑』（松竹株式会社、作成年不詳。早稲田大学演劇博物館蔵、資料番号ロー5-3997）には「けんげんこうり」のせりふがある。

7 「吉日考秘伝」『続群書類従』第三十一輯下雑部。

8 鈴木由次郎『全釈漢文大系第九卷 易経』上（一九七四年、集英社）を参照。同書では「乾は、元いに亨るも貞しきに利し」と訓んで「正しい道を固く守って変わらなければ、終わりを全うすることができてよろしい」の意に解く。

9 日本では『アルト・ハイデルベルグ』として一九三七年に三浦吉兵衛の翻訳で郁文館書店より対訳本が刊行されている。

10 本文中で言及される登場人物の名前から、この「チエホフの独逸語訳」は「熊」と「結婚申込み」であったことがわかる。両者は百閒と交流の深い米川正夫による『チエーホフ戯曲全集』上巻（一九二六年、岩波書店）に収められている。

<sup>11</sup> 松浦静山『甲子夜話1』巻之九、中村幸彦、中野三敏校訂、一九七七年、平凡社、一六〇～一六一ページ

<sup>12</sup> 永平和雄「眼駱駝物語　ねむるがらくだものがたり」『新版歌舞伎事典』二〇一一年、平凡社。

<sup>13</sup> 歌詞は中井新六編『月琴楽譜』（一八七七年、群仙堂）によった。

<sup>14</sup> 田辺尚雄「九連環とカンカン踊り」『明治音楽物語』一九六五年、青蛙房。

<sup>15</sup> 『百鬼園戦前・戦中日記』（二〇一九年、慶應義塾大学出版会）一九四一年三月・四月・五月の項を参照。

<sup>16</sup> 山田桃子「戦前期「随筆」の流行と内田百閒——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」（『日本近代文学』二〇一九年十一月、日本近代文学会）および拙論「『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——」（『国文学研究』二〇一九年六月、早稲田大学国文学会）。

<sup>17</sup> 「乞食」をはじめとする一連の投稿文は、『続百鬼園随筆』（一九三四年、三笠書房）に「文章世界入選文」として収録されている。一九〇七年三月の『文章世界』に掲載された為藤五郎「本誌投書家の文章」では、「内田氏は「ホト、ギス」派の写生文学を標榜して顕れたるもの」と評されている。

<sup>18</sup> 百閒が戦時中に徴用を逃れつつ植民地主義の推進に一役買っていたことは拙論「内田百閒の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」（『早稲田大学院文学研究科紀要』二〇二一年三月）で論じた。

<sup>19</sup> 百閒の参加または主宰していた同人誌には『東炎』と『べんがら』があるが、前者は本来句誌であるため、小説家で同人が構成される雑誌のような小説論が交わされることはない。後者は「俳句と随筆の雑誌」と銘打たれており、百閒主宰の同人誌として検討の余地が大いにあるものの、やはり議論の場という性質は薄い。

<sup>20</sup> 「Bengala 帝国出納省告示第三八号ノ八」『べんがら』初出未確認。



## 結論

はじめに

以上、内田百閒の執筆活動を跡づける試みとして、一九三〇年代から一九五〇年代の作品を主な対象に、発表当時の文芸的および社会的思潮ならびに事象との関連において分析を行ってきた。分析に際しては個別の作品の性格を明らかにするだけでなく、前後に発表された作品との関わりのあるようにについても考察することを心がけた。本章ではこれまでの考察を振り返りながら、今後の百閒研究に向けてどのような視点を提出することができたのか、また何が課題として残ったのかを述べることにする。

ここで全体の構成を改めて確認すると、次のようである。まず「序論」では、本論文の目的ならびに各章の目論見を述べた。次に第一部では一九三〇年代の作品を取り上げ、文芸ジャンルや小説内小説などの主に「語り」をめぐるテーマについて分析を行った。第二部では一九四〇年代の作品を対象に、戦争を背景とした作品のテーマ性の特徴を検討した。第三部では一九五〇年代の作品について、敗戦直後に執筆活動を再開してから再び「語り」への関心に傾いていくまでを追った。

こうした議論を通じて明らかとなったのは、一九三〇年代から一九五〇年代にかけての百閒の作品が、執筆活動の本格化の時期にあつては、書くことや語ることへのメタ的な認識をめぐって展開を見せ、その関心がやがて「時局」への適応に取って代わられたのち、戦後に至って「語り」の方へ傾斜しながら再び発展を見せたという変貌の様相である。三十年の間にはおよそ十年周期でテーマの交替が見られ、これに伴って作品の性格も大きく変化してきたといえる。

本論文の結論は以上のように要約される。より詳細な議論の過程を振り返るために、次節では各章の達成と課題について述べる。

### 各章における達成と課題

「序論」では本研究の目的と背景、各章の概要を述べた。本研究の目的は、発表当時の同時代背景を踏まえることで浮かび上がる読みの可能性を探り、百閒の一九三〇年代から一九五〇年代における執筆活動全体の見取り図を描くことである。その背景には作中における「百鬼園先生」をはじめとした作家の自己演出を無批判に受け止める読みによって作家像が形成されてきたこと、そしてその結果、内田百閒という作家が文学史の中に明確に位置付

けられないことにより、学術研究が遅れてきた歴史がある。先行研究の検討により以上の傾向を確認し、近年そのような作家像の補強という作業からより分析的な再評価へと議論の方向が変化していることを指摘した上で、本研究の構成を述べた。

第一部「ジャンル横断的作品における語りの諸相——一九三〇年代の諸篇——」では、一九二〇年代から三〇年代にかけて執筆された作品を取り上げ、書くことおよび発表することならびに読まれることに対する作中での自己言及的記述を中心に検討を行った。

第一章「『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——」では、『百鬼園随筆』（一九三三年、三笠書房）にジャンル論的な観点からの照明を当てた。作品集全体の構成を検討することにより、『冥途』（一九二二年、稲門堂書店）を経て本格的に活動を開始した一九二〇年代から一九三〇年代前半の百間の作品がどのような問題系を背景としているのかを明らかにするため、作品集全体の構成から同作を評価することを試みた。『百鬼園随筆』は、「随筆」の語を冠した作品集でありながら、各篇における「ごっこ遊び」を通じその分類概念の名称について回る「日本文学」的価値判断を相対化しようとしてもいたことが明らかとなった。これ以降「読みのモード」操作を通じた分類概念の問い返しが十年ほどかけて発展し、随筆と小説を分ける規範意識への批評がなされたことを指摘した。

第一章ではこれまで指摘されてこなかった作品集全体の構成からの考察を行ったことで、『百鬼園随筆』の個々の作品に通底する問題意識を浮かび上がらせた。しかしながら、「読みのモード」の探索というテーマについてここで上げた一九三〇年代後半の作品は本研究で取り上げることができず、見通しを示すにとどまった。これらの作品群については別稿を期したい。

第二章「『昇天』論——信仰と福音をめぐって——」では、「昇天」（『中央公論』一九三三年二月）におけるキリスト教の信仰の主題について、物語の背景となった実在のキリスト教会・キリスト者、同様の主題を取り上げた点で先行する「白子」、そして両者を踏まえた上でのテキストの読解を通じて検討を行った。まず物語の背景のモデルについて調査を行った。物語の主な舞台である「耶蘇の病院」は当時結核の専門院であった救世軍杉並療養所を、「院長さん」も同じくその初代所長である松田三弥を参考とした登場人物と見られることが明らかとなった。このことから、二〇世紀にプロテスタントの間で提唱された社会的福音の実践としてのキリスト教会やキリスト者の事業が書き込まれていることを指摘した。その上で舞台背景の似通う「白子」を取り上げ、先行研究を踏まえた主題の検討を行ない、神

の存在については「白子」も「昇天」も神の恵みとは無関係に見える超自然的な現象が根拠に挙げられていたものの、後者では教義に対する評価が述べられ、キリスト教の福音によって救いがもたらされる可能性にも言及されているという見方を示した。以上の手続きを通じて、「昇天」をキリスト教の信仰の入り口である福音を信じるか否かという選択がどのようになされ得るかを描いた物語として位置づけた。

第二章では百間の作品としてはテーマが明確にされている「昇天」を取り上げ、物語の主題に沿った理解を試みた。無思想の作家としてしばしば評価される百間が、ここで宗教や信仰に向き合っていることや、複数の文献を参照して書いたであろう痕跡が認められることは注目される。ただ、二章の論旨の範囲では「語り」について十分に取り上げることができなかった。ここで若干の補足を行えば、「昇天」は複数の短い場面を組み合わせて構成されており、時制の工夫により単線的な時間経過に必ずしも従わない叙述も見られる。こうした手法は『旅順入城式』序文で百間が述べている「短章」を「物語ノ体」に飛翔させる過程を見ることができ、叙法でもあり、『百鬼園随筆』とは異なるベクトルで「語り」を追究していることが伺われる。ここから浮き彫りになるのは百間のモダニズムからの影響や、さらにさかのぼって学生時代のメーテルリンク受容のありようといった課題である。これらについてはさらに調査と考察を要する。

第三章『居候勿々』論——新聞小説から単行本へ——では、『居候勿々』(一九三七年、小山書店)を取り上げ、新聞小説としての連載時にはなかった加筆部分に着目することで一篇の特質を探り、それがどのように獲得されていたのか、その背景を明らかにすることを試みた。まず『居候勿々』が未完に終わった新聞小説「居候勿々」を、加筆した「作者」の語りで囲い込むことで小説内小説の形で甦らせており、全体としては額縁小説として完結しているという構造をもつことを示した。次に新聞小説と単行本の本文を比較することによって、小説の冒頭が後者では加筆された「作者の言葉」に移動していること、結末については、前者が物語の途中で打ち切られた状態であるのに対し、後者では「再び作者の言葉」が該当しており、続く「登場人物の其後」が後日譚として付け加えられていることを確認した。こうした比較を踏まえ、「作者の言葉」以下の加筆部分が加わることによって、『居候勿々』に新聞小説とはどのように異なる性格が付与されているのかを考察した。

第三章では以上の手続きによって『居候勿々』の成立と性格を具体化し、最後に私小説の流行という同時代背景のもとで、一篇の全体的な性格付けを試みた。二つの〈居候勿々〉の比較からは、作品の執筆と発表にはモノとしての雑誌や書籍が必要であり、さらにそれらは

経済活動のもとで流通せざるを得ないという当然ながら存在する書物の外的な要素が浮かび上がる。同作は読者の物語への没入を許さず、「語り」を通じて物語の外部を意識させる形式になっている点に虚構論的主題を見ることができるところで『居候勿々』は一読して明らかなおり一九三〇年代のいわゆる法政騒動を題材にしている。第三章の議論の射程では深く立ち入らなかつた物語の内容については別に論じる機会を設けたい。

第二部「百間の戦争——一九四〇年代のテーマ性——」では、一九三〇年代後半から一九四〇年代の執筆活動に照明を当てることを試みた。特に日本郵船への就職に注目して、時代の風潮を受け止め、さらに再生産することで展開されていく執筆活動の様相について検討を加えた。

第四章「『東京日記』論——『東京』を書き留める視角を手がかりとして——」では、〈東京日記〉という題名の作品が幕末から現代まで数多く作り出されてきたことと、それらの〈東京日記〉と百間の「東京日記」の差異を確認した上で、題名から浮かび上がる読みの地平を踏まえたテキストの読解を試みた。具体的には、まず「東京日記」以前の〈東京日記〉群がどのような立場から書かれているのか、すなわち百間の「東京日記」を読むにあたり機能しうる読解の前提とは何なのかを整理し、その前提が実際に機能しているのかを、百間のこれまでの執筆活動の特質を踏まえて考察した。次に、こうした題名の分析を通じて「東京日記」の問題点を抽出し、その視点からこれまで先行研究において取り上げられてこなかった章を中心にテキストの読解を行なった。さらにそれらのテキストが「東京日記」の内部で完結することなく前後の作品と強力なつながりを有していることを指摘した。

以上の手続きを通じて、第四章では「東京日記」が先行する〈東京日記〉群に見られる「東京」を一時的な滞在場所として、また珍奇な出来事の発生する場所として眺める視点を抽出して構成されていることを明らかにした。また、百間として了解可能な存在として造形されている語り手「私」が「日記」と題して諸々の出来事を語っていく形式もそれを補強していることを指摘した。一方個々の篇については三篇を取り上げて検討を行った。その結果、各篇の筋立ては「東京日記」を十年以上さかのぼる初期作品を焼き直したものであったり、「東京日記」よりも十年近く後に書かれた作品の原型を示すものであったりと、「東京日記」が百間の執筆活動における回顧と萌芽の入り混じった作品であることが示された。とはいえ二十三篇にわたる「東京日記」のすべてを取り上げて検討してはいないため、こうした性格のほかにもさまざまな側面をもっていることが推測される。また同作の戦争との関わりについては触れることができなかった。ここで若干補足すれば、作中に「防空演習」が書き込

まれているなど日常生活に入り込んだ戦争の影を見ることが出来る。こうしたテーマでの読解も不可能ではないと考えられる。「東京日記」への検討は今後も続けていく必要がある。

第五章「内田百閒の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」では、日本文学報国会への入会を拒んだ数少ない作家の一人として知られる百閒が、にもかかわらず戦時下の一九四〇年代前半に旺盛な執筆活動を展開していたことに注目して、その執筆活動の一端を整理・紹介した。日中戦争開戦から日本の敗戦までを通じて一度も従軍することのなかった百閒が、その間も広範囲にわたる雑誌・新聞で活動を継続できた理由の一つに、一九三九年四月に日本郵船株式会社に嘱託社員として入社したことがあることを指摘した。この日本郵船在職中に百閒は、日本が植民地としていた台湾へ赴き、当地の印象を旅行記として発表した。第四章ではこの旅行を中心とした百閒の日本郵船時代の活動について整理し、その特質を考察した。まず、百閒の旅行をめぐる当時の状況を確認し、旅行記の記述をもとに、利用した航路・鉄道や観光した場所を日程順に整理した。次に旅程の特徴と旅行記の性格を検討したうえで、この時期の日本郵船嘱託社員としての他の活動について検討を加えた。また、これをもとに台湾旅行記を含む百閒の執筆活動が、当時の旅行ブームの背景にある植民地主義の浸透において一定の役割を果たしたことを指摘した。

第五章ではこれまで取り上げられることの少なかった百閒と戦争の関わりについて一考を加えた。百閒の戦争に対する態度は、日本文学報国会に入会しなかったというエピソードのみで語られ勝ちであったが、日本郵船時代の活動と作品を調査することにより、むしろ植民地主義の広告塔となっていたという実態が明らかになった。第五章で取り上げた作品の多くは雑誌『海運報国』に掲載されたが、この雑誌における百閒作品の位置づけについては考察を加えることができなかった。同誌の調査とともに検討の余地を残している。

第六章「柳検校の小閑」論——背景としての関東大震災——」では、百閒作品の中で比較的議論の対象となってきた本作において、先行論が表現と内容のいずれかを取り上げ、両者の関わりを論じる方向性を欠いてきたことを踏まえて、小説の内容に注目し、その素材と思われるエピソードが扱われた百閒の随筆を検討することで、見えない人を主人公兼語り手とした「柳検校の小閑」の物語背景を明らかにした。まず物語の基本的構図を確認した上で、対応する第一のエピソード「千鳥の曲」を紹介した。次にそれを踏まえ、主人公と女性の弟子の関係という物語の中核に具体的な形を与えたと考えられる第二のエピソード「長春香」を取り上げた。最後に、見えない主人公兼語り手による物語言説が、こうした物語内容とどのように関わっているのかを、小説の背景を踏まえて考察した。

第六章では、以上のような手続きによって「柳検校の小閑」を表現と内容の両面からより包括的に捉え直すことを試みた。同作は視覚障害者当事者の研究者によるすぐれた語りの分析があるが、物語の内容の背景についての分析はこれまで行なわれてこなかった。百間の作品には同一テーマの明らかな焼き直しも多い中で、第六章では随筆に書かれたエピソードが複数組み合わせられて一篇の小説を生み出している様相に光を当てた。一方で第二部の主題である百間の戦争との関わりについては若干触れるにとどまった。ここで補足すれば、関東大震災を振り返る物語が戦時下の一九四一年当時に発表されたということには、一定の「意義」があったと考えられる。すなわち「柳検校の小閑」は、震災と「帝都復興」が物語に流れる時間である点で、東京近郊の読者に共通する被害と団結の記憶を想起させる内容であるといえるのである。このことは一見戦争と無関係な同作が、関東大震災という公共性のあるテーマを書き込むことで「時局」にかなった物語であることを示している。こうした同時代への適応を物語に読み取る試みは、一九四〇年代の諸篇に対して有効なものと思われる。別に機会を設けたい。

第三部「再び語りの方へ——一九五〇年代における執筆再開の周辺——」では、第二部で紹介した戦時下の執筆活動の後、日本の敗戦を経験した百間がどのように執筆を再開していったかを考察した。とりわけ敗戦直後の一九四〇年代後半から一九五〇年代前半の作品に焦点を当てることによって、これまでの書くことをめぐる多様な試行が、敗戦の経験を語ることにいかに統合されているかを論じた。

第七章「『新方丈記』論——『東京焼尽』との比較を手がかりとして——」では、百間の著作の中でこれまでほとんど取り上げられてこなかった『新方丈記』の再評価を目的として、作家がどのように占領期の検閲に対処したかを『東京焼尽』との異同を確認することで考察した。『新方丈記』は百間にとって一九四五年の日本の敗戦以後初めての著作であり、平山三郎によって『東京焼尽』と同一期間の日記に基づいていることが明らかにされている。ここでは検閲への対処が、単に自己検閲による記録内容の矮小化のみを意味するのではなく、削除変更箇所の前後からこそ本来書かれていた内容を浮かび上がらせようとするものでもあると考えた。第七章では『新方丈記』と『東京焼尽』それぞれの構成を概観しつつ、『東京焼尽』の照明による『新方丈記』の性格付けを行った。

第七章では『新方丈記』と『東京焼尽』の異同を明らかにすることで、前者における占領下の検閲への百間の対処のありようを示した。なお、異同の全部は巻末の「資料」に収めた。第七章では部分的に異同を取り上げ、そこから見える占領下の検閲への反感を指摘したが、

ここで検討しなかった異同についても検討の余地がある。また、作品化される前の公刊されていない日記については調査を行っていない。現時点で同資料は利用の制限があるものの、将来的には内容の公開が可能になるものと考えられる。こうした日記の調査も今後視野に入れていきたい。

第八章 『『贗作吾輩は猫である』論——会話文の発展と百間の戦争——』では、作品の大半を覆う会話文に着目し、それが一九三〇年代以来の語りをめぐる試みの文脈においてどのように位置づけられるのかを考察した。「七体百鬼園」を中心とした一九三〇年代における百間の執筆活動とその主題、ならびに一九四五年から「贗猫」執筆当時にかけての随筆類における記述を踏まえ、「贗猫」の会話文の構造と内容の性格づけを試みた。こうした手続きを通じて、同作が形式においては一九三〇年代以来の「方法としての一人称」の追究で得られた効果から会話文の手法を引き継いでいると考えられること、また内容においては作家・内田百間の一九四五年をまたいだ思想的なゆらぎが書き込まれており、前者の構造がこうした物語内容を成り立たせていることを指摘した。その上で「読みのモード」の作者側での操作が『贗作吾輩は猫である』にも見られることを明らかにした。

第八章では『贗作吾輩は猫である』の会話文と登場人物の特色に注目し、「七体百鬼園」で行われたオルターエゴの集合が戦争というより重みを伴ったテーマの下で再び試みられていることを指摘した。『贗作吾輩は猫である』は百間の作品の中では長篇と呼べる長さをもっていることから、ここでは物語全体の構造には触れず、場面ごとの特徴を明らかにした。そのため作品の全体的な性格づけは行っていない。こうした射程のもとでの漱石『吾輩は猫である』との詳細な比較については別稿を期したい。

第九章 『『贗作吾輩は猫である』論——上演される言葉への志向——』では、前章での考察を踏まえつつ、とりわけ全篇が会話文からなる「第三」を取り上げ、本作の手法と百間の執筆活動における位置付けの一端を明らかにすることを試みた。まず、前章で検討したように『贗作吾輩は猫である』には会話文が多用され、一九三〇年代以来の一人称語りをめぐる主題を敗戦後という社会情勢の変化のもとで発展させた形式が見られること、同時にこうした会話形式はテキストに演劇的な性格を付与しており、登場人物に異なる思想の代表という立場だけでなく、互いに言葉を交わすことで話題を次々と転じ場面の進行を行う原動力の役割をも演じさせていることを指摘した。次に会話の内容にも舞踊の詞章や演劇のせりふのような「上演される言葉」の引用が見られることに着目し、こうした言葉の出典を確認しながら、複数の出典を繙いませることでテキスト自体と典拠の両方に新たな読みの地

平を開いていく機能をせりふが担っていることを明らかにした。

第九章では前章に引き続き『贗作吾輩は猫である』を取り上げ、特に「第三」を対象として登場人物のせりふと物語の構造の出典を確認し、それがどのように変奏されているのかを考察した。ここでの指摘は『贗作吾輩は猫である』以降の『小説新潮』誌上における「百鬼園随筆」連載作品にも当てはまるものである。そこで古典芸能・文芸への関心が開花していく様相については言及することができなかった。「百鬼園随筆」連載作品の検討は別に機会を設けて論じたい。また、「第三」以外の各章についても検討の余地がある。

おわりに

以上、本研究では内田百間の一九三〇年代から一九五〇年代の作品を中心に取り上げ、百間の執筆活動の一端に光を当てた。従来の百間研究が一九二〇年代の初期作品を多く取り上げてきたのに対し、本研究では初期以降の作品を対象とすることにより、作家として地歩を固めた百間の活動について、発表当時の作品の同時代性や作家自身の同時代的ふるまいを明らかにすることを試みた。これまでほとんど論じられていないながら特徴のある作品をも対象に含めたことよって、有名作品の分析による作家像の点描にとどまらず、時代とともに変化する作品の特徴を線状的にとらえる試みは一定の達成を見たものと思われる。

一方で百間は多作であることから本研究が取りこぼした作品も数多い。たとえば第一章において一人称語りの問題を取り上げた以上、その変遷を詳細に追うことも可能であり必要であったが、そのような変容を示す作品群については検討を加えることができなかった。また、第九章において演劇への傾斜を示したが、前述のようにその特色は『小説新潮』上での「百鬼園随筆」連載によって前近代の日本の文芸への関心として花開いていく。このシリーズに対する議論は本研究では行っていない。さらに、作品だけでなくその発表の場である雑誌などの特色についても十分な検討がなされているとはいえない。とりわけ俳誌『東炎』は、百間の一九三〇年代をあとづける上で欠かせない存在であるが、本研究では雑誌の調査とともに掲載作品の分析に及ばなかった。

このように本研究では執筆活動のあとづけを試みたが、多くの課題を残している。百間に対する研究の余地は非常に広く、調査されるべき資料や分析されるべき作品が多数ある。これらに対する継続的な調査研究により、残された課題に取り組んでいく必要がある。



資料

凡例

- 網掛けは削除を示す。すなわち、『新方丈記』に見られ『東京焼尽』に見られない語句および文である。
- 傍線は加筆を示す。すなわち、『新方丈記』に見られず『東京焼尽』に見られる語句および文である。
- 枠囲み↓語句は訂正を示す。すなわち、矢印の前が『新方丈記』、後が『東京焼尽』に見られる語句である。

『新方丈記』収録の四篇と『東京焼尽』の異同

深夜の夢を警戒警報の警笛に破られて跳ね起きた。五月二十四日木曜日十二夜。昨夜は十時半就眠す。午前一時五分警戒警報にて目醒めたり。↓なり南方洋上に数目標ありと云ふ。身支度をして、そのつもりで居る。↓みると一時三十五分空襲警報鳴る↓が鳴った。忽ち南の空が赤くなつた。この間内大した警報↓空襲もなく余りこはい目に会つてゐないので、そんな筈はないと思ひながら安きを貪つてゐると↓むさぼつてゐたら何となく胸がつかへた↓問へた様な気がした。↓であつたが、今夜の空襲にて溜飲が下がつた↓下がる思ひなり。来襲敵機↓来襲機の数は凡そ二百五十なりし由にて、品川大森荏原は一円、その他渋谷目黒等に相当の被害があつたらしいが↓と云ふ事を後で聞いたがその場の火の手は四谷塩町左門町の方面↓方角を除きて余り近い所に火の手は無かつた様だが↓近からず、少し離れては牛込小石川の方角↓空も明かるく随分広い範囲が焼けたらしい。

こはかつたのは、いつもよりはずつと低く、三千米から四千米位を飛んでゐる敵機↓来襲機に、高射砲が実によく中たり、目撃しただけでも五つか六つかは火燄↓火燄のかたまりになつて墜落した。その儘火の玉になるのもあり、すぐに空中分解をしていくつかの燄↓燄に分かれて落ちるのもあつた。

いい気味でもあり綺麗でもあるが落ちる前に空をぐるぐる廻つてゐる内、頭の上からここへ落ちて来やしないかと云ふ事が心配であり、その心配のかたまりがある明かるく目に見えるだけ一層気味が悪い。火達磨になつてもすぐには落ちない。↓落ちないで大概上空を半周ぐらゐる↓位する間は燄↓燄の尾を引きながら飛んでゐる。その火の玉が近づくと真昼よりも明かるい↓明かるくなる。東の方から燃えながら飛んで来て私の方から家のうしろの空へ廻つた一機がある。高度が低いので屋根のうしろへ廻つたら↓這入つたら姿は見えずなくなつたが、その明かりで家の影が往來の地面へ白紙に墨で描いた程はつきりと往來に映つた。赤い火の色でなく白光りがしてゐる。家のうしろから出て土手の向うへ廻つたと思

ふと、下に向かつて二つか三つの大きな楕円形を描いて焰の線で空に描き、最後の円周の線をしやくられた様に伸ばしたと思つたら、大分南へ寄つた方↓方角のさう遠くない所へ落ちて行つた。↓、後で赤坂見附の幸楽へ落ちたのがあつたと云ふ話を聞いたが、或はその時の飛行機であつたかも知れない。

いくつも落ちた中に一つ燃えながら何時迄も落ちない飛行機↓のもあつた。初めに東南の筋向うの屋根の棟の間から赤い明かるい光が射したので照明弾か知らと思つた。ちつとしてゐる様に見えたのは、後から思ふ↓考へるとこちらへ向かつてまともに向かつて近づいてゐたのかも知れない↓のであらう。その内に動き出して次第に東へ廻り↓移り北へ廻つて家の棟のうしろを通り、西に↓へ出てまだ落ちずに南の方へ行つてしまつた。どこ迄飛んだか最後は見えなかつたが不思議である。後で市川の古日に聞けば、その火燄↓火焔の飛行機は市川の方↓空へも行つたさうである。

午前三時五十分空襲警報解除となる。今日もまた↓亦無事にすんだかとほつとした。その頃東南の遠くの空に、丁度さつき燃えながら飛び廻つた飛行機が初めにちつとしてゐた辺りで、大きな青い色がいつ迄もきらきら光つてゐるのが目についた。だれかが照明弾だらう↓だと云つたがすぐに明けの明星だと気がついた。間もなく東の空に美しい暁の色がさした。朝の明かりは東↓東天の一番下の端よりは少し離れた辺りに流れ始めると云ふ事初めて気がついた。尤もさう思つて疑はないのは以前に判然と意識しない経験があるのかも知れない。

警戒警報の解除は間もなく放送した事と思ふけれど、例の通り空襲中から停電してゐるので解らなかつた。外が明かるくなつてから内に這入つたが、座敷は真暗がりである。仰願寺蠟燭をともし、瓦斯も出ないから冷たい儘の御飯を食べて五時半寝なほす。十時過ぎ起きる。午下十二時三十五分警戒警報、同五十五分解除。配給のお酒東自慢五合↓半升あり。↓、朝飯の時コクテールグラスに冷やのまま↓儘で一杯飲んだ。甚だうまし。別に以前向う側の六番町にゐて今は強制疎開で九段上に移つてゐる貝原↓何原から配給分を譲つて貰ふ約束あり。べて一升になるから古日を招待する事にした。

午後遅く出社す。夕古日と一緒に帰る。四谷駅の軒の燕の雛は丁度かへつた計りのところらし↓らしい。親が餌を運ぶ時小さな嘴の先だけが巢の外れ↓縁から見える。今日は朝から日の色が赤茶けてゐたが夕方になつてもまだ↓未だ普通↓常の様ではない。電車の中の人の顔や、焼け跡の屏の崩れた後の煉瓦の柱などに映る夕日の色は矢張り茶色である。

帰つて見ると貝原↓何原の方の配給は明日になつた↓延びたとかにて、一升有るつもりのお酒が五合しかない。なほその上に朝食の時コクテールグラスに一杯お行儀の悪い事をしてゐるから家のだけでは古日と二人飲むには少し足りないだらう。焼け出されて近所に來てゐる家内の姉さん↓何城の許にて↓から二合借りて來させた。それで七合弱なり。古日との一献は実に↓甚だうまくて今日は後で御飯もたべて十時過ぎにすんだ↓済んだ。この日記は二十四日の分の最初より三行目の末尾からは今日五月二十七日の午後町内十四番

地つまりお隣りの軍需大臣官舎になった山口邸の庭の一隅にある三畳敷の小屋にて認めてゐる。今↓後になつて思ふと、右の古日との一献は市ヶ谷↓合羽坂から移つて以来九年住み馴れた五番町の家の最後の一献であつた。杯をおき箸をおいた後でゆつくりして古日が帰つて行つた。良い時候なので家内と共に表まで送つて出た。一杯機嫌の古日はそこで又ゆつくりして立ち話をしたり通りかかつた野良猫を↓に構つたりして帰つて行つた↓ゐる。

旧曆十二日の月が澄み渡り隣りの軍需大臣官邸の屏際の立ち樹の↓が樹冠が↓を夜空に食ひ込まして、はつきりとした輪郭を描いてゐる。長い列になつて連なつたこちらの端に私の家がある。向うの端から眺めて来た目で見ると私の家は実に小さい。敵の飛行機が如何に残虐であつても↓あばれてもこの小さな家をねらふ↓狙ふと云ふ事は有る↓あるまいと家内に話した↓私が云つた。家内は↓がさう云へばお隣りの立ち樹一本ですものねと云つた。

五月二十五日金曜日十三夜  
五月二十六日土曜日十四夜

昨夜は古日の帰つた後、十一時半頃就眠↓就褥した。午前零時忽ち警戒警報にて目がさめた。後続の数目標ありとの事で身支度をして待つてゐると、B 29 が一つ又は二つ宛で別別にやつて来て新潟の方へ抜け日本海に出たらしい。富士山の左側ばかり通つた様で、結局こちらには何の関係もない警報であつた。暫らくしてから、関東地区に警戒警報のサイレンが鳴つたのは誤りであつたと放送した。

朝から天気よし↓良し。午前八時警戒警報。B 29 一機にして東京には近づかず、同二十五分解除となる。午前十一時四十五分警戒警報、正午十二時空襲警報。B 29 二機の誘導によるP 51 六十機の編隊であつて飛行場の攻撃に行つたらしく東京の上空には来なかつた。午過十二時四十分空襲警報解除。午後一時警戒警報解除となる。午後出社す。本館係の高橋↓何橋君に頼んでおいたロッカーを部屋に入れて貰つた。家から持つて行つた著作本その他↓自著等を入れておく↓しまつて置くつもりなり↓也。

夕歸りて貝原↓何原の配給を譲つて貰つた。白鹿五合の内、昨日の二合を家内の姉さんの所に↓何城へ返した。後の三合にて一ぱいやつたが昨夜程おいしくない。酒の所為ではなく自分の調子によるらしい。左の顚顚の血管が怒張して、鏡を見ただけで気持が悪い。別に気分が悪いでもなく頭痛がするでもないが、神経を起こして二本でやめた。それからすぐ寝る。午後九時半なり。

すぐに寝ついたらし。家内は風呂に↓へ這入つた。自分は今日は這入らなかつた。家内の姉さん一家が来て立てたのである。忽ち警戒警報の音にて目がさめた。午後十時五分なり。未だ三十分しか眠つて↓寝てゐない。今晚の様な気分の時にはぐつすり眠りたいと思つたが仕方が無い↓ない。後続目標ありと云ふのですぐに起きた。家内は風呂から出たばかりである。十時二十三分空襲警報になつた。昨暁も玄関に置いてある持ち出しの荷物を↓は昨暁も表の往来に出したが、今夜もあぶなさうだから持ち出した。すぐに向うの西南の方角の空は↓が薄赤くなつたが、それよりも今夜は段段に頭の上を通る敵機↓米機の数が多くなる

様であった。火燄↓火焔を吐いて落ちて行くのは一つ見ただけである。焼夷弾が身近かに落ち出した。B 29の大きな姿が土手の向う、四谷牛込の方からこちらへ今迄嘗つて見た事もない低空で飛んで来る。機体や翼の裏側が下で燃えてゐる町の像の色をうつし赤く染まつて、ゐもりの腹の様である。もういけないと思ひながら見守つてゐるこちらの真上にかぶさつて来て頭の上を飛び過ぎる。どかんどかんと云ふ投弾の響が続け様に聞こえる。お隣りの宮田↓何田の引つ越した後の表の防空壕に、宮田↓が空いてゐる。何田の後へ来る事になつてゐる町内の川崎↓何崎の娘さんが丁度家にゐたらしく、その娘さんと家内と自分と三人にて幾度もその防空壕に出たり這入つたりした。そんな空襲の時防空壕へ這ひ込んだのは初めてである。どうも形勢があぶなさう↓迫つてゐる様だから覚悟をきめて、家内に八畳の床の間に置いてあつた目白の飼桶を表の荷物の傍に出させた。幾度もその前にしやがみ飼桶の小さな障子を開けて、かねてかう云ふ時の為↓用意に古日から借りてある持ち運び用の小さな袖籠に目白を移さうとするのだが、やりかけると真上の飛行機↓米機から投下する焼夷弾が近くに降つて来て、あわてて又飼桶の障子を閉めてその儘家内と往来の地べたに寝たり↓身を伏せたり隣りの防空壕に入つたり↓へ這り込んだりしなければならぬ。やつと隙を見て目白の籠に手を入れうまく↓、うまい工合に一度でつかまへる事が出来て、小さな袖籠に移した。

その後で玄関の駒と鶯↓ひわの飼桶も表に出した。袖籠は古日からは小さな鳥籠を二つ借りてある。もう一つの方に駒と鶯↓ひわを一緒に入れてもいいと考へたりしたが、結局目白だけしか手が廻らなかつた。持つて逃げてやる事が出来ないとすれば飼桶の戸や障子を外し、鳥籠の戸を開けていつでも外へ飛び出せる様にして置かうかとも思つたけれど、昔に読んだクオブヂスに羅馬の戦火を目がけて近郊の森の夜鳥が飛び込んで死んで仕舞ふ↓しまふ事が書いてあつた。焼けて仕舞ふとすれば↓どうせ焼かれるものならば何年も住み馴れた籠の中で死なせる様にしようと思へた。それにもう手が廻らなくなつた↓つけられないかつた。焼夷弾が前後左右に落ちて来ると云ふ経験を初めて味はつた。若しそれでも無事夜が明ける様になれば小鳥の飼桶を持つて行く者もゐないだらうから何かに気を取られてゐる事はいけないと判断した。願はくはこの往来に焔が流れる様な事がなければ、或は二羽共ここで無事に今夜を過ごすかも知れない。向うのまことちゃんの後の大谷↓何谷の家が見通しになつて、その裏に白色↓白光りの燄↓する焔が横流しに動いてゐるのが見えた。もう逃げなければいけないと考へた。ひどい風でそこに起つてゐられない位↓様である↓であつた。

初めに表の往来を土手の方へ行かうと思つたが家内が水島の裏へ抜けた方がよくはないかと云ふので、それもさうだと思ひ、裏の土手の道へ出た。二人共背中と両手に荷物が一ぱいなので、ただでさへ歩くのに困難である。その上風がひどく埃と灰と火の粉で思ふ様に歩けない↓足が前に出ない。裏の土手に沿つて二足三足市ヶ谷の方へ行きかけたが、盛んな火の手が有つて↓あつてあぶなさうだから思ひ止まつた。山口の軍需大臣官邸の裏の屏の陰

に荷物を下ろして一休みした。自分も苦しいが平生滅多にそんな事を云はない家内が苦しいから休みたいと云つた。

一息休んでゐる内↓間に一寸家の様子を裏から見ると云つて家内を一人置いて、水島の裏↓さつき出て来た裏口へ行つて見た。間近かに大きな火柱が立つてゐる。多分私の家だらうと思つたけれどはつきり見定める事は出来なかつた。

身持ちになつた又隣りの岡本↓何本の娘さんにはお婿を迎へて身持ちである。逃げ出して行くところに家内が会つて鏡を持つてゐるかと思ひたら、持つてゐないと云ふので自分の持つてゐたのを上げたと言つた。それ↓鏡をおなかに向けて持つてゐれば身持ちで火を見ても生まれる子供に痣が出来ないと云ふのださうである。家内がその時も私が今夜死んだらこの鏡は片身にして下さいと云つたさうだが、その時の事情ではそんな事を云つたのも大袈裟でない↓でもなかつたと思はれる。

家内↓もとの所へ戻つて来ると、だれかが、此処にゐると屏の中の官邸が燃え出した時旋風が起るかも知れないとおまはりさんが云つたと云ふ事を教へてくれたからあぶない↓危いと家内が云つた。全くうっかりして旋風の事は今迄↓まで少しも念頭になかつた。つまり焼け跡へ行く↓出るに限ると云ふ事になつて、↓考へたから目も開けられない向かひ風の中を歩き出し、屏の陰を離れて雙葉女学校の焼け跡の前の土手迄↓まで辿りついた。雙葉の囀りの中では焼け跡の広つぱに焼夷弾が幾つも落ちて狐火の様に燃えてゐた。土手の腹には家内の姉の一家もゐた。午前一時空襲警報解除のサイレンを土手の腹で聞いて、先づ先づ無事で過ごし得たのを家内と共に喜んだ。↓聞いた。

家の前には未だ行つて見ないけれど、↓が勿論焼けたのである。未練もあり心残りもあるけれど↓あるが仕方がない。兼ねて用意して置いた荷物を↓は大体持ち出して途中で失ふ事もなかつた。駒と鶺鴒↓ひわは可哀想な事をしたが、↓けれど若し小籠↓袖籠に移したとしても、もうこれ以上持てなかつたであらう。玄関迄↓まで出してあつた言海と字源と又後から追加してそこに置いて有つた英和と独和の字引↓字書類と東京市の地図とは持ち出す暇が無かつた↓なかつた。東京の地図は東京がこんなになつてゐる際、後で見ると特に惜しい事をした様に思はれる。しかしこれ等も若し雨下する焼夷弾の隙を見て包む事が出来たとしても矢つ張り持つて歩く事は出来なかつたに違ひない↓であらう。欲張つても家内と二人では荷物を運ぶのに背中が二枚と手が四本しかない。

この前のいつかの空襲の時、古日と麦酒酒六本の↓を半打飲んだ後居合はせて、形勢が切迫してから二階へ土足で上がつて下ろしてくれた十一歳の時の南山壽の書の額と、下の八畳の座敷に掛けて↓掲げてあつた漱石先生の偶坐為林泉の額は外した儘ずつと八畳の床の間に置いてあつたが、今夜いよいよとなつてから家内が玄関に出して来た。家内は頻りに額を持ち出さうと云ふのだが、持ち出しても持ち運ぶ事が出来ないし、兼ねて考へて置いた↓おいた通り切り取るには庖丁が手許にない。ポケットに一寸足らずの小さいナイフの有る事は気がついてゐたけれど、第一その時の形勢がもうそんな事をしてゐる暇が無い↓ない。

家内が若し↓もしその方に夢中になつて↓氣を取られてゐる時、身近かに弾が落ちたりすると大変である。漱石先生の筆蹟も自分の幼少の折の書も残念ではあるが諦めよう↓諦め様と決心した。頻りに家内が持ち出すと云ふのを許さなかつた。八畳の座敷にいつも懸けてあつた金峯老先生の雲龍の大字の軸も実に惜しかつたが、これはせめて写真があるから記念は残る。琴三面はどうにもならない。↓ならなかつた。中の一つは生田流本間の長磯である。しかし家内と二人きりでは既に手一ぱいである。座布団五枚を包んだ中に漱石先生の「春の発句よき短冊に書いてやりぬ」その他お米少少など挟み込んだ風呂敷包みは玄関に置いた儘出せないものと家内も観念してゐたが、丁度そこを平野力↓昔の学生の何野が自転車にて↓で通りかかつたので家内がそのうしろに座布団の包みを積んで行つてくれと頼んだ。平野↓何野が快く引き受けて、しかし止むを得なかつたら捨てますよと云つて載せてくれたので、それは助かつた。

私の家が↓の焼けたのは十二時前後、多分十二時より少し前ではないかと思ふ。未だ立ち退かぬ少し前に新坂上の朝日自動車と青木堂の四つ角↓四ツ角に焼夷弾のかたまりが落ちたらしく、こちらから見るとその辺りの往来一面が火の海になつた。後で聞くと朝日自動車の二階は瞬時に崩れ落ちたさうである。

空襲警報解除になつた後、火勢は愈猛烈になつた。お隣の山口邸今の官邸は空襲警報解除後に炎上した。大変な火の手であつた。官邸の大屋根の表を焰が流れる様に伝ひ出したのもそれからである。全体に火が廻つて炎上した時の焰の大きさは夢にも見た事がない。又町内や近所だけではなく、どちらを見ても大変な火の手である↓であつた。昨夜気分進まず飲み残した一合の酒を一升罫↓缶の儘持ち廻つた。これ丈↓だけはいくら手がふさがつても捨てて行くわけに行かない。逃げ廻る途中苦しくなるとポケットに入れて来たコップ↓小さな洋杯に家内について貰つて一ぱい↓一杯飲んだ。土手の腹の道ばたへ行つてからも時々飲み、朝↓最後に明かるくなつてからその小さなコップに一ぱい↓一杯半飲んでお仕舞になつた。昨夜は余りうまくなかつたが冷やで飲んだ残りの一合は世の中にこんなふうまい酒は無い↓があるかと思つた↓ふ位であつた。

家の焼けたのを確認したのは夜が明けてからである。その前に一二度行つて見ようとしたが、未だ近づけなかつた。家並は既に焼け落ちて燄↓焰は低くなつてゐるが、両側の電信柱が一本残らずみんな火の柱になつて美しく燃えてゐる。昔の銀座のネオンサインの様で絶景だと思つた↓あつた。警戒警報の解除はラヂオがないから解らない。今後共さうである。

その内に到頭夜が明けはなれた。明かるくなつた辺りを見廻すと本当の景色ではない様な気がする。土手の前の道をひどい怪我人を幾人も一緒に載せた↓積んだ救急自動車や消防自動車や荷物自動車がいくつもいくつも↓引つ切りなしに通つた。又近所の道傍でも見た。大変な負傷者だと思つてゐたら死人も非常な数に上ぼつたさうであつて特に町内や近所にも怪我人や死人が多いのを聞き、無事にすんだのが全く難有いと思ふ。五番町の死者は





で今日も亦その儘である。靴の中に足袋が靴の中で無理に詰まつてゐるから痛くて足が前  
に出ない様である。

雨は九段迄来る間に上がったが、日が照り出すと暑い。牛ヶ淵からお濠端を伝つて歩き、  
中央氣象台の前の和氣清磨の銅像の前↓下で又休んだ。それから大手町に出て段段郵船に  
近づくと向う↓、前の方から吹きつける南風に乗つて、新しい火事のはひのする青い色  
の煙が流れて来た。辺りには昨夜焼けたと思はれる所もないのに不思議だと思つてゐたら、  
和田倉門の凱旋道路に出て見ると東京駅が広い間口の全面に亘つて燃えてゐる。煉瓦の外  
郭はその儘あるけれど、窓からはみな↓皆煙を吐き、中には未だ赤い線の見えるのも↓焰  
を吹き出してゐるのもある。

郵船ビルの正面玄関の三つの入口の内、一つは閉まつてゐる。休みらしい↓の様である。  
這入つて見たら停電で中は薄暗い。エレベーターは勿論動いてゐないから重たい足を引き  
ずつて家内を上げまし乍ら↓はげましながら四階まで階段を上ぼつた↓昇つたが、中央の  
階段には窓が無い↓ないから真暗である。上から降りて来る人と擦れ違ふのにも難渋した。  
やつと四階の自分の部屋へ↓に辿りついて先づ一休みした。しかし洗面所へ行つて見ると  
水が出ない。水道の水は時間給水で今迄も出なかつたが、↓出ない事はあつたけれど手洗ひ  
の水も出ないのは停電の為である。停電では夕方になつたら部屋の中も廊下も真暗で↓真  
暗闇となりどうする事も出来ない。又水が無くては一日二日の仮りの宿りも出来ない。おま  
けに東京駅が焼けてゐるのでは省線電車がすぐには通じないだらう。色の配給物その他  
の關係で五番町には毎日聯絡をつけなければならぬが、その度に歩いて往復する事は出来  
ない。前から考へて置いた↓おいた事ではあるが↓けれど郵船の仮りの宿りは諦めなけれ  
ばならない。差し当たりの用を弁ずる丈のつもりで持つて来た荷物を更に軽くし、すぐにい  
らない物は部屋に残して置く事にして、荷物の中に入れてあつた林檎一つを家内と半分宛  
食べて、又歸る事にした。

来る時には未だ半分↓半道も歩かぬ内に足が前に出ない程苦しかつた。途中で家内がこ  
れで若し尋ねて行く家が行つて見たら焼けてゐたと云ふ様な事だつたら、もう歩いては歸  
れないと云つた。しかし矢つ張り歸らなければならぬ。今度は道を変へて九段へ出ずに竹  
橋を抜けて英国大使館の横から麹町四丁目の下の善国寺谷に出て右に↓へ行き坂を登つて  
歸る事にした。二三年前まで毎日行き歸りにタクシーに乗つてゐた当時、料金で↓を損をし  
ない様にメートルをよく見てゐたから郵船と家との間の道筋と、↓では何処を通るのが一  
番近いかは知つてゐる。竹橋を抜けるよりは九段の牛ヶ淵に出た方が少し近いのだが、歸り  
は九段坂を登る事になる↓登らなければならぬので竹橋を通る事にした。

郵船の部屋を出る時家内が、来る時に見たら航空局の玄関で水道の水が出てゐたから帰  
りに貰つて行きませうと云ふので、部屋に置いてある↓置いてあつた罎を持つて来た。大手  
町の近くの交番の前を通つたら警戒警報発令中の木札が懸かつてゐたので中の巡査に聞く  
と、三十分位前の発令だと云つた。さう云へば未だ部屋にゐた時遠くでサイレンと半鐘が鳴

つてゐた↓ゐる様な気がした。午後一時頃であつたと思ふ。それよりずっと午前↓の朝七時十五分に警戒警報は出てゐる。しかし↓ゐるが解除の時刻はわからない↓知らなかつた。航空局の玄関で水を貰ひ、竹橋内に入つて↓這入つてから一休みした。並樹の桜の下に桜の実が沢山落ちてゐる。昨夜の風で振り↓振るひ落とされたのであらう。家内が頻りにさくらんぼが落ちてゐる、さくらんぼが落ちてゐると云つた。大使館の横の坂を下りて少し行つた左手の所で、荷車に箆をかけた荷物を荷車に載せて曳き出さうと思つたら死人の様であつた。

天気が良くなつたので疲れてゐる上に暑くて弱つた。歩きながら家内に、かうして痛い足を引きずつてやつと家に帰つて↓帰ると玄関を開けて帰つたよと云ひ、上がり口に腰を下ろして汗を拭いて一休みする。その家が無くなつたのは困るね、と話した。郵船の部屋が駄目だとすれば一時の雨露を凌ぐにも屏の隅の小屋より外に行く所はない。

軍需大臣の官邸になる前にゐた山口さんは新潟に本邸がある由にてその方がこの五番町の屋敷よりも二倍も三倍も広大だと云ふ話を聞いた事がある。山口さんは夙くからそちらに引き上げて暫らく空いてゐた後を軍需省が出来てから官邸に借りたのである。山口さんの何番目かの娘さんが松木と云ふ男爵の所へお嫁に行き平河町の大きな家に住んでゐたが段段女中や書生を使つてゐる事が出来なくなつたので、そちらの家を畳んでもとの山口邸の執事のゐた邸内の屏際の家に松木一家が引越して来た。その後家内は松木男爵とも山口の娘の男爵夫人とも知り合ひである。男爵は三十幾つ位で二人とも未だ若い。豪家の山口のお嬢さんで若い男爵夫人となつた人が執事の家でもぢきに女中もゐなくなつて一人で小さな子供三人を育てながら家事から配給物を取りに行く外の用事までやつてゐると云つて何度も家内が感心して話した事がある。自分が一人で家にゐた夕方にその夫人が配給物の事で家に来た事がある。口の利き方が学生当時の浜地常勝に似てゐたので記憶に残つた。その夫人も世間が段段切迫するにつれて小さな子供を東京で育てる事も出来なくなつてから新潟へ行つてしまつた。男爵は技術院に勤めてゐるので東京に残つたが、男やもめである。今年の冬の寒い晩に郵船から帰つて未だ落ちつかずにある時、表の戸が開いて知らない女が這入つて来た。防空頭巾を目深に被つてゐるので顔はよく解らないが、おどおどしてゐる。息子が胸を痛めて警察病院に入院しているので今夕飯のおかずを拵へ温かいのを持つて行つてやらうと思つて表に出ると真暗がりの中で変な男が後をつけて来る。引返すと又その通りついて来る。気味が悪いからお邪魔だが一寸ここに居らせてくれと云つた。筋向うの六番町の河内と云ふのださうであつて家内は知つてゐると云つた。駒に餌を食べさせるので燈を見せる為、玄関の電気をつけておいたから、この辺りで家の前だけが明かるい。それで家を頼つたものと思ふ。大分後になつてその河内のゐる家が強制疎開で取りこはしになる事にきまつて行き所がなくなつてゐると云ふので家内が松木へ話して上げた。河内は主人は去年の二月とかになくなつて一番上が女の子で、それが正金銀行に勤務してゐる。下に男の子が三人ある由にてそれ丈の家族が松木の家に入れて貰ひ同時に男やもめの松木の世話をする。松木は縁故の学生を二人連れて来るさうだから大家内であるが、河内はそれで今ま

でゐた家を毀されても行き所が無いと云ふ心配はなくなり非常に喜んだ。昨夜の空襲で五番町は全部焼けてしまつたが、ただこの邸内の屏際の三軒だけが残つた。河内は強制疎開の立ち退きの時若し今のこの家が駄目だつたら六番町側の露地の奥の家が一軒空いてゐたので、そこへでも移らうかと思つたさうだが、その家には後に家内の姉の一家が這入つて今度焼け出された。河内は松木の方に來たので助かつた。その松木の家の屏の隅に三畳敷の小屋がある。尤も庭の隅の小屋は三畳敷きであるが一畳は低い棚の下になつてゐるから坐つたり寝たり出来るのは二畳である。天井も壁もないがトタンの屋根の裏側には葦簾が張つてあり、壁の代りに四方みんな座を打ちつけてある。二枚ある硝子窓のカーテンも座である。少し前まで爺やが住んでゐた小屋ださうである。

今日はその小屋に家の持ち出した荷物と家内の姉↓何城一家の荷物と四番町の青木と云ふ家↓何山の荷物とを入れ、又入り代はつてだれかがその狭い畳の上で休んでゐる。そんな所に一緒にはゐられないから家内と二人は郵船の部屋に移るつもりで出掛けたのだが又引き返して、やつと五番町の通まで歸つて來た。家内が焼ける前の並びの四軒目の隣の石橋の前の道傍で立ち話をして家内が立ち話しをし出したから先に歩いてゐると思つたら、後から追ひついて來て、石橋何橋さんの壕から出したのを↓だと云つて戴いたと云つて乾麴を一袋手渡ししてくれた。乾麴麴はかう云ふ時の配給食料の一つであつて後では町会からもくれたが、石橋さんで貰つたのを袋の中から一つ二つ摘まみ出して口に入れた時の味は忘れられない。火に追はれた挙げ句に夜通し起きてゐて、夜が明けてから丸ノ内迄↓まで歩いて往復したが、食べた物は朝早く土手の腹で貰つたお結び↓握り飯一つと郵船で食べた林檎半顆だけである。乾麴麴は本来うまい物ではないがその時道ばたで歩きながら食べた味は何とも云はれない程うまいと思つた↓は本当に頬つぺたが落ちさうであつた。官邸の屏を土手の方へ曲がらうとする所で、向うから來る小林博士に會つた。春夫ちゃんを連れてゐる。御無事でしたかと聞いたたら又焼け出されたと小林博士が云つた。富士見町の仮診察所は多分無事だと思ふ、今見に行くところだとの話なり。少し前に小林博士の奥さんが表を通りかかり家の玄関で一休みした時、家内に向かつて若しこのお家が焼ける様な事があつたら今の自分の所へ來いと云つて下さつた由。なほずつと前に小林博士からも今ある朝倉邸は広いから焼け出される様な事があつたら來ないかと云はれた記憶もある。千駄ヶ谷は近くもあるし、出足の便利もいから事に依つたらさうしようかと考へてゐたその朝倉邸が焼けてしまつた。大井もそんな時には方南の家にお父さんとお父さんの世話をする人だけゐるから一先づそこへ立退く事にしては如何と云つてくれた。方南の大井の家も立退所の一つに考へてゐたのだが後で聞くとそこも焼けたさうである。差し当り行く所は無い。小林博士と別かれて屏の隅の小屋に歸つた。

どこへも行く所がないので屏の隅の小屋に歸つた。夕方薄暗くなりかけて明かりの無い小屋に一人居残つてゐるところへ松木氏↓母屋のバロン何木さんが顔を出し、実は松木氏の顔は未だ知らなかつたのだがその時にわかつた。布団↓蒲団は有りやと尋ねてくれた。焼

いて仕舞つた↓しまったけれど幸ひ座布団が五枚助かつてゐるから、それをつなぎ合はせれば間に合ふと云ふと、ろくな**布団↓蒲団**ではないけれど、一組あいてゐるからお使ひ下さいと云つた。それでは家内が帰つたら**御願ひ↓お願ひ**申すかも知れないと答へておいた。間もなく薄暗い庭伝ひに若い男爵↓バロンが、質置く↓七億婆さんが質屋へ**布団↓蒲団**を運ぶ様な恰好で木綿**布団↓蒲団**上下二枚かついで来てくれた。

好意を難有く思ふ。四番町の青木↓何山は荷物を置いた**丈↓**だけで寝には来ないが、**家**内の姉↓何城の一家からは亭主だけが壕に寝て子供まで入れて女三人、家内の姉と養女とその女の子は小屋へが寝に来た。三畳の内使へる**二畳↓一畳**の上に五人寝た。昨夜は焼け出される前に三十分眠つただけで**燄↓焔**の風の中を逃げ廻り、今日はろくろく物を**食**べない上↓**食**べずに郵船まで歩いて往復↓暑い道を行き来して余り疲れ過ぎた。寝苦しくて寝つきが悪い↓よく寝られなかつた。午後十一時四十分頃警戒警報、午前零時四十五分解除。ラヂオは無いし↓ないし電気も来ないから今迄↓までの様に放送を聞く事は出来ないが、土手の穴にゐる兵隊が大きな声で情報を伝へるので解る。

五月二十七日日曜日十五夜。屏の隅の小屋で目がさめた。未だ寝不足ではあるが、しかし昨日の疲れは随分なほつてゐる。小屋の畳に坐り込み、落ちついてゐる。満更悪い気持でもない。午前十一時五分警戒警報。↓、解除はわからず。一日かかつて二三日来たまつて↓溜まつてゐた日記をつけた。しかし未だ一部分しか片づかない↓片附かない。今朝目をさました時、借り物の寝床の上で考へた事は、兼ねて↓かねて覚悟の通り家を焼かれたのであるが、一時の立ち退き場所としてゐた郵船の部屋は昨日の首尾にて役に立たず、↓。若しさう云ふ事があつたら来いと云つて貰つた小林博士の朝倉邸や大井のお父さんの許も同じく焼けて見ると、差し当たり行き所もない。又若し朝倉や大井が焼けなかつたとしても、そこに避難するのはほんの一時の間↓事であつて、今度の様に東京の大部分が片附いて仕舞つた↓しまつた。今日では、↓のではそこから更めて引き移つて落ちつくると云ふ所もないだらう。

田舎へ行くのは大変であり、行つても暮らせるか否か解らないし、第一、郵船その他の関係があつて東京を離れる事は今の儘では出来ない。防空壕を掘つてゐる人は壕生活と云ふ事を云つてゐるが、家には庭に覆ひの**無い↓**ない穴が掘つてある**丈↓**だけでそんな↓人の云ふ様な防空壕は無い↓ないし、又壕生活と云ふ事は↓もこれから梅雨になり↓入りその後に炎天が続く様になつては到底続け↓住んでゐられるものとは考へられない↓思へない。

土用蚯蚓の様に這ひ出す↓這ひ出して干からびるのが落ちであらう。こんな時にうろろろしないで、この屏際の爺やの小屋が借りられるものならここを庵として戦雲のをさまる**迄**↓まで安住したい。家内にその事を話して**松木氏↓何木さん**に頼めと云ふと、何処か落ちつき場所が見つかる迄は居らして下さいと云ふ事はさう云つて承諾して貰つたのだと云つた。それではこの上は落ちつき場所は↓を他に探さず、この小屋にて**落ち**ついてゐたい↓**落ち**つきたいから**御許**し↓**お許**しを願ひ度い↓願ひたいと云ふ事を更めて頼めと云つた。

わざわざ松木氏を呼び出してさう云ふのも如何かと思ふから今度会つたらその機会に頼ま

うと云ふので、さう云ふ事にした。家内がまだその挨拶をしない内、夕方暗くなりかけてから松木氏↓バロン何木庭より小屋の前に来り、この小屋で寝るのは御窮屈だらうから二階の一部屋を片附けたからそちらへ来て寝ては如何と云つてくれた。それで、寝るのはここで結構だがこの小屋を当分の間だけでなく戦雲のをさまる迄貸して戴けないか、↓。外に行く所もないし、又かうして坐つて見ると落ちついた気持がする、この小屋が気に入ったから。出来ればここに安住したいと云つたら、お気に召したら何卒お使い下さいと快諾せられて一安心した。小屋には電気が引いて無い。家内には↓が炊事するお勝手が無い↓。憚りに困る。後架が無い。この三件は追ひ追ひに分別をして解決しよう。焼け出されたけれど雨露を凌ぐいほりが出来たので、これからの明け暮れが楽しみである。午後唐助来。お酒を二合足らず持つて来た↓持参せり。以後唐助の出入りは美野の場合と同じく一一記さない。心覚えをする用事のある時だけ書く。

五月二十八日月曜日十六夜。不出社。小屋で二十八日の夜が明けた。午前十一時二十五分警戒警報。午下十二時十分空襲警報。小型機の来襲の由なり。小型機なら今迄の家では二階の下になる八畳の、窓から離れた奥の方に坐つておれば安心だと思つたが、この小屋では機関銃の弾は防げない。若し敵機↓米機が頭の上に来る様な事になると危ないから家内を伴なひもとの家の焼け跡の前へ行つた。岡本↓又隣りの何本の防空壕に入れて貰はうと考へた。丁度そこに主人が起つてゐたので頼むと一ぱいで這入れない、↓。荷物が入れてあるからと云つた↓云つてことわられた。それでは道傍↓道ばたの宮田↓何田の壕に這入る事にしようときめて、家内が中を少し片づけた↓片附けた。二十五日の晩に出たり這入つたりした穴の奥に焼けた木片などが沢山散らかつてゐる。しかし小型機はこちらには来らず、↓。その壕に這入る様な事もなく午後一時五分空襲警報解除となつた。

午後、古日焼け出されて以来初めて古日来。昨日一昨日古日が来てくれぬのでそんな筈はないからきつと市川の方にも被害があつたのだらうと思つた。人の話に省線電車は停まつてゐるけれど、お茶の水から千葉の間だけは動いてゐると云ふ事なので、それでは古日が来ないのは交通機関の故障の為でもない。或は古日の家が焼かれたとかその他何か解らない事があつたのではないかと心配してゐた。今日になつても聯絡がないのでつきりそんな事かと案じてゐたところである。何事もあつたのではないと聞き安心した。東京の被害がこれ程だとは知らなかつたので、二十五日の晩も初めの中は起きてゐたが中途からは寝てしまつた位で、私の家が焼けたとは思はなかつたと云ふ話であつた。私が焼け出されて小屋にゐるので、それを見て気疲れがしたと云つて横になつたりした。会社へ持つて来た自分のお弁当を置いて行くと云ふので貰つた。明日から色々不自由してゐる物を運んで来ると云つた。多田↓何田も見舞に来てくれた。

五月二十九日火曜日十七夜。不出社。今日は誕生日なり。午前零時三十分警戒警報、同五十分解除。午前六時三十分警戒警報、同八時十五分空襲警報。B 29 の大編隊の来襲なり。今日は松木邸内のこの小屋のある庭の防空壕に家内と二人で入れて貰つた。甚だ完備せる

防空壕なり。これからはここに入れて貰ふ事にすれば、表をうろうろする事もなく安心なり。壕の中に在りて時時爆弾の落下音を聞く。十時過ぎの話に、↓にて今までに侵入せるB 29は凡そ四百機にして、外にP 51も来てゐるとの事であつた。その一部は東京にも来たが主なる目標は横浜にあつたらしく、横浜は今迄↓まで不思議に大した空襲を受けて居らず取つて置ききの形であつたのを、今日一挙に片附けるつもりらし。横浜の火事の煙がこちら迄流れて来るか否か知らないが、東京の西南部にも被害があつた由にて、南から東へかけた空一ぱいに黒煙かぶさり、段段に高く昇つて行く太陽を追つて包む様にひろがつて来た。後の発表によれば来襲総敵機数はB 29 五百 P 51 百なりし由なり。午前十時五十分空襲警報解除となる。更に午後十二時三十分警戒警報、同一時頃解除。

午後古日来。差し当たり必要な物や食べ物や食の色と持つて来てくれた↓持参せり。お酒二合余もあり、↓少し濁つてゐるけれど未だ味は変はつてゐない。却つてうまい位であつた。冷やの儘にて飲む。計らずも誕生日のお祝が出来た。幸ひ唐助も傍に在り。家内、唐助、古日みんな一口宛でも飲んだからこれで今年の誕生祝ひを目出度すませる事が出来た↓すませたり。

省線電車は未だ↓まだ不通の様であるが、今日は朝から土手の下で頻りに汽笛の音が聞こえ、汽車の通るらしい音がする。いつもの荷物列車の響きとは違ふから多分電車の代りに運転してゐるのだらうと思つた。後で土手に上がつて見たら、頭と尻尾に汽罐車↓機関車を付けた汽車が走つてゐた。見附の橋まで行つて、丁度歩廊を離れかけた上り列車が発車の汽笛を鳴らし、ポツポツポ↓ぽぽぽと動き出すのを見て来た。駅の麴町口の軒の燕も無事だつた様である。夜は松木氏に誘はれて庭から座敷へ上がつて将棋をさした。

五月三十日水曜日十八夜。水曜日不出社。朝土手を散歩した。朝風がすがすがしく甚だ可なり。今日は省線電車が動いてゐる。時計を合はさうと思つて四谷駅へ行つて見たけれど↓が電気時計は止まつてゐた。ぶらぶら歩き乍ら↓歩きながら帰つて来る途中考へて見るに、焼け出された人人がさつぱりした、さつぱりしたと云ふのが頻りに新聞に出てゐるけれど、さつぱりしたと云ふ気持はその人人によつて幾らか違ふかも知れないと思ふ。しかし私は私の都合でさつぱりした事は確かである。二階の書齋の大机のまはりや、本箱の抽斗や、押入れの中や、茶の間の廊下の小さなテーブルの上や、その他↓其の他整理しなければならぬ片附けなければならぬと常常さう思ひながら、いつ迄たつてもどうにもならなかつた煩ひを、一挙に焼き払つてしまひ実にせいせいした気持である。昔雑司ヶ谷の盲学校の前の家にゐた当時から時時空想した一つの願ひがある。一つ↓同じ家に十年位住むと身辺に何かと片づかない↓片附かない物、割り切れないもの↓物がたまつて、何でも無い雑用の堆積が生活のもつと奥の方までふさいで任舞ふ様な↓しまふやうな事になる。明け暮れが億劫になり不愉快になり正体の解らぬ↓つかめない憂悶となる。大体一ヶ所に十年を過ごしたら別の所に家を借りる。空つぼのがらんどうの新宅↓新居に手ぶらで引つ越したい。今迄↓までの家にあつた物は身辺の諸道具は勿論、抽斗押入れ戸棚の中の物はみんなその儘にす

る。本箱や箆笥などの様な容れ物もその儘にする。新居に移つてから必要な物は必要の起こつた時に次ぎ次ぎに買つて行く。前の家は中身ごと焼き払ひたいが、それは近所の迷惑になるから屑屋でも空巢でも掻つ払ひでも来て勝手に持つて行くに任せる、↓行つて貰ふ。さう云ふ事が本当に実現したらいい氣持↓心持だらうと考へた。

今度の空襲で二十何年前の空想が稍実現した様である。わざわざ重たいのに持ち出した風呂敷包み等があるから、何もかも焼き捨てたと云ふわけには行かない、↓。又一たんさうして今迄↓までの物を棄てた上で別に新らしく買ひ調へると云ふ↓いふその方は何一つ叶はぬ今の情態では、持ち出した荷物位↓ぐらゐは我慢しなければならぬであらう。さうすれば先づこの位で自分の空想↓永年の願ひが実現したと云ふ事にする。せいせいし又さつぱりせざるを得んや。午後、まことちゃんのお父さんの蕨辨三郎さん、吉田の信さん見舞に来てくれた三四人の見舞客あり。この新居に既に訪問者ある也。大した事だが皆さん端近かよりお帰りを願ふ。ずつとお通り下さるわけに行かないのも亦可ならざらんや行かざる也。信さんの話では、五月十八日欄の末尾に記した文学報国会は未だ存続してゐる由。大政翼賛会の所謂傘下団体かと思つてゐたら、いつの間にか情報局の管下に移されてそこで余喘を保つてゐる由也。古日来。焼け出されて以来ちつともお金がいらないので取りのけておいた五十円美野に与ふ。正午十二時警戒警報出でたれども解除は知らず。

「灰塵」の中の目白に就いて。

空襲の焰の中から持つて逃げた目白はその一年前即ち十九年夏の土用の明ける時分に、近所の男の子が町内の土手の草の中から拾つて来た鳥である。

まだ小さな雛で目はあいてゐたが羽根もよく生え揃はず嘴には黄色が残つてゐて柔らかであつた。何番子かの遅い巢の中であんまり暑いから這ひ出したのが、羽根は利かず歩く事も出来ず、枝の巢から落ちたなりで干からびるところを拾はれたのである。

拾つて来た男の子が玩具にしてゐたらしいが、どうして育てたらしいのか解らないから私の家へ持つて来た。何を食べさせたかと聞いて見たら干しえびの小さいのをやつたと云ふのでびつくりしたが、しかし食べさせてもそんな物は咽喉を通らないから大丈夫かも知れない。野鳥の雛を育てた経験もあるし、特に目白の子の差し上げは度度やつたのでその土手の雛を育てて見る事にした。

拾つて来てから半日ぐらゐは経つてゐる様で大分弱つてゐたから、うまく育てられるかどうか心配であつたが段段に差してやる摺り餌を食べる様になつて、その内にきれいな糞をした。翌くる日はもう大丈夫と云ふ自信がついた。

それが大きくなつて一人前の小鳥になつたのである。東京の辺りへ渡つて来る目白には大島目白と云ふのが多く、図体が大きくて姿も締まりがよくない。土手の雛は珍らしく豊後目白と呼ぶ種類であつて形が甚だ小さい。又さうして育てた鳥は雌であつても、その儘一生飼つてやらねばならないが、幸ひに土手の子は雄であつて既に去年の焼ける前の春には玄開で高音を張つて鳴いてゐた。中に鈴の這入つた立派な節である。

焼け出されてから今の小屋に雨露を凌いで、もう一年に近い。その間目白は、いつも机の

傍の私から二尺と離れない所にゐる。小屋の中が狭いから、何でも置き場所をきめたら変へるのは容易でない。それでいつも同じ所にゐる。訪ねて来る人の中には目白が狭い籠の中で飛んでゐるのを見て可哀想だと考へる動物愛護家もゐる様である。小屋は畳二畳の上に私と家内とが住み、座のまはりに一ぱい色色の物を列べたり積み重ねたりしてゐる。目白は尺の籠に住んでゐるのだから私共より狭いと云ふ事はない。籠の中には餌猪口の外になんにも置いてないから辺りが片附いて広広としてゐる。私共はその狭苦しい小屋の中に目白の籠を置いてゐるのだが、目白の籠の中へ私共は這入つて行かないからその点でも目白の方が歩がいい。

毎日餌の出し入れの時、籠の戸を明け放しておいても決して出て来ない。目白には籠の外は物騒なのである。自分で籠の外へ飛び出し、又窓から空へ飛び立つて行けるものなら、空襲の夜は焔へ這入る危険があつたにしても、私共も目白も無事に夜が明けた土手の朝は目白を外に放して自然界へ帰らせるのが一番よかつたのだが、丸で外を知らない差し子にはそれが出来ない。捨てるつもりで無理に籠から追ひ出したら、生存競争の烈しい鳥の仲間で忽ち落伍して半日も生きてゐられないだらう。目白に恩にきせるのではないが、それが出来ないから何処までも連れて逃げたのである。

狭い小屋の中で、目白と三人暮らしと云ふ様な明け暮れが続くから、自然にお互の気持が通じる様である。こちらから目白に向かつて何か云ふ場合、勿論言葉が解る筈はないが、しかし反応する。家内がどこかへ行つた後、机の前で何かしてゐると目白はその傍で頻りに囀つてゐる。その内に私が立ち上がつて小屋の裏側の後架へでも出て行くと、目白はその気配を見て急に身体を細くし籠の中で落ちつかなくなる。小屋のうしろにゐる間ぢゆう、ちいちいと鋭い声で鳴き立てる。目白の仲間を呼ぶ時の鳴き声であつて、結局人を自分の仲間だと考へてゐる証拠である。戻つて来るとちりちりと短かく呼び掛け、羽根をゆるめて安心した様子をする。目白の様な鳴き鳥を余り馴れさせるのは小鳥飼ひの趣味として好くない事とされてゐるのだが、私の場合には住居の關係上止むを得ない。

机の蔭で目白が一心に囀つてゐる時、何の気もなしに一寸上から顔をのぞけると、はたと鳴き止んで、その途端に羽根の裏などを掻き始める。鳴いてゐるところを人が見たからと云つて、すぐにごどこかが痒くなるのは可笑しい。痒いのではなく、それは目白のてれかくしだと云ふ事がこちらに解る。昔漱石先生の許へ先生の本の校正の用事で、面会日でない日に行き玄関の前に起つと、鉤の手になつた書齋から謡の声が聞こえる。玄関のベルを押し奥の方でその音がしたと思ふと、謡の声が尻切れで止んでしまふ。書齋に通されると先生が六づかしい顔で座つてゐられたのを思ひ出す。

(以上「土手の東雲」)

五月三十一日木曜日十九夜。午頃平野力来。軽井沢へ行く由なり。今一時立ち退いてゐるのが牛込中町の少しばかり焼け残つた中の一軒だと云ふ話から宮城の事を聞いたら、確かに焼けたさうである。家族の安否を尋ねたいが中中行かれさうもない。検校は少し前から宇都宮の在に行つてゐるのでその方は安心なり。煙草が切れて困つてゐる。今迄でも配給だけ



では勿論足りなかつたが、なんにも無くなれば以前からの癖で相当に吸ひ残した部分があるのを缺で切つてためてあるのを吸つた。やにが戻つてゐるからまづいし衛生にも悪いと思ふけれど、それでも無きにまさる万万である。今はもうそんな物も無くなつたから、無いとなればどうする事も出来ない。お酒の無いのも実につらいけれどお酒はある時は愉快である。煙草は切れた後に手に入つたとしてもそれを吸つて陽気六日目になると云ふ事も無い。ただ無い時の憂鬱な気持ばかりが苦痛の正体である。古日にも頼んであるし美野にも唐助にもさう云つて命じてあるが、未だどうにもならない。

午過出社す。焼け出された朝の二十六日土曜日は出社とは云はれぬが会社まで行く事は行つた。二十八日月曜日、二十九日火曜日は不出社。昨日は水曜にて今日が罹災後初めての出社なり。行きは四谷駅から省線電車にてらくに行かれた。今迄は四谷駅と市ヶ谷駅とどちらに出ても丁度同じ位であつたから、行きは道が下りになる市ヶ谷より、帰りは急行電車の停まる四谷駅より帰る事にしてゐたけれど、この小屋は官邸の長い屏だけ四谷駅に寄つてゐるから、これからは行きも帰りも四谷駅である。今日も帰りはさうするつもりであつたが、夕方近く会社から東京駅へ出て見ると、焼けて屋根もなくなり足許は灰と砂で凸凹になつた歩廊に人が一ぱいつまり到底電車に乗れさうもないから諦めて歩いて帰る事にしようと思つたが、乗車口から這入つて中央口へ出る迄その人ごみを掻きわけるのに汗をかいた。焼けた後の東京駅の惨状は筆舌の尽くす所にあらず。廃墟は静まり落ちついてゐる筈だが、東京駅は未だ廃墟でもない。亡びつつある途中である。乗車口に巻き上がつてゐる埃は生ま生ましい。高い天井の跡から何か落ちて来さうで改札口を通るのもあぶない様である。やつと中央口から出たが、今頃の間には中央口は這入る丈の改札で、出る事は出来なかつた筈であるけれど、もうそんな事も構はなくなつた様である。外へ出て歩き出したのが五時二十分前であつた。天気が良いので夕日が暑いけれども立ち停まれば涼しき風わたる。大手町に出で電車道を行きて航空局の前へ曲がり濠端の清麿の銅像の所にて一休みす。それから竹橋は渡らず、牛ヶ淵に出で九段坂を登り靖国神社の横門の交番の前にて又一休みした。その傍の電柱がまだ燃えてゐる。上からお行儀よく燃えてゐると見えてもう三分の一足らず丁度人の背丈ぐらゐの高さの柱になつて、その上に燄をのせたり。一口坂の上から二七の通に出た。二七の大銀杏の下にて丁度五時五十分なり。今日は歩いて疲れて帰つても帰る所がある。小屋に帰りついたら六時なり。一時間十分かかつた間に二度休んだから、歩いた時間の正味は一時間なる可し。尤も途中で休まなかつたら歩く方がもつと暇がかかるかも知れないから休んだ時間を引き去つて計算するわけには行かない。二十六日の凡そ半分位の時間で帰つて来たらしい。距離は四料であるから私の足にはその位はかかるであらう。屏の前まで帰つて来るともう帰つたと云ふ気がする。電車で四谷駅に降りればいきなり屏の角にたどりつくわけだが、九段の方から歩いて帰ると長い屏の表通の長さだけ歩いて曲り角を曲がる。焼け出されてから六日目になる。夕方会社から歩いて帰つた。長い屏の曲がり角の近くやその前の土手の腹に夕方近くになると二三軒ので、焼け出された家族が道傍↓道ばたの晚餐を始めてゐる。二三日前から毎晩今時分になるとその辺りが賑やかになる。案外御馳走がある

様である。又みんな甚だ愉快さうである。旧稿の「竹梯庵の記」や「浮世風呂」を思ひ出す。しかし合羽坂下の竹梯庵の梯子の下の乞食や、雙葉女学校の前のごみ車に住んだ浮世風呂の拾ひ屋は今の自分達より遙かに豪華な食事を摂り、起居万端もつと快適であつたに違ひないのは羨ましい限りである。

小屋の我が家には家内がもとの家の焼け跡から掘り出して来た七輪にて昨日から炊事を始めてゐる。それ迄は市川の古日と方南の美野の所からの差し入れにて漸く飢ゑを凌いだ。これで先づ庖厨が出来た。追ひ追ひに使ひ易く便利に↓使ひ勝手をよくし設備を整へて行く事にする。行く行くは小屋と屏の間で行水も遣へる様にして、夏場の風呂の代りにする事も考へる。この小屋に落ちつくに就き最初に数へた三つの不便の内、↓うち炊事場の事↓件はこれですんだ事にする。

電気はもともと引いて無い↓ないのだから、先づソケットを探して手に入れ、母屋の方に電気がともる様になつたらコードでこちらへ引かして貰はうと思つた。今は空襲の直後で停電してゐるけれど、間もなく電気は来るものとぼんやり考へてゐたが、後になつてその見込も↓は全くない事が判明した。ぐるり一体がずつと焼け跡になり焼け跡が、どこまで↓迄も続いて電柱はみんな燃えてしまつた。針金も焼け切れて仕舞つてゐる所へ、ただこの屏際に偶然焼け残つた二三軒の為に新らしく電柱を樹てて電線を引き、その為に工夫が出勤して来ると云ふ事は今日の事情から常識では考へられぬ事である↓考へられない。母屋の間に電気の来る見込が無いとすれば、ソケットもコードもスタンドも不用である。夏の間に長い内永い間は夕方暗くなつたら↓なつてから成る可く早く寝る。その代り朝夕は明るくなつたら起きると云ふ風にして、夕方の寝る迄の間は今の内は蠟燭や仰願寺が未だあるからそれですまし↓済まし、無くなつたら又その時の分別にまかせる事にしよう。これで三つ↓三件の内の照明の問題もすんだ事にする。

第三の憚り↓後架は、今日家内がこしらへてゐた。小屋のうしろの屏陰に穴を掘り、その中へ焼け跡から持つて来たバケツを入れ、雨側に歩道の敷瓦を一枚宛置いて設備は完璧である。入口には焼けトタンが立て掛けてあるから外からは見えない。上には椎の大樹の枝がかぶさつてゐるので少し位の雨なら傘の代りにもなる。通風が良いから防臭剤も必要でなく、ゼンチレーションの筒を樹てる事もない。これでこの小屋の安住の条件がととのつた。夕方は初夏のさわやかな風吹きわたり↓渡り、それにつれて焼けた木の枝に残つてゐる枯れ葉が雨の様而降つて来る。トタンの屋根に落ちる音を聞いてゐると↓聞くと丸で床が吹きすさんでゐる様である。二十四日の夜、家は立ち木一本の大きさに過ぎないと云つて家内と眺めたが、その立ち木の列もみんな焼けて仕舞つた↓しまつたから譬へのもとにした物もなくなつたわけである。午前十時三十分警戒警報。十一時頃解除。午過十二時五十分警戒警報、午後一時二十分解除。(二十年五月三十一日木曜日)

七月二十三日月曜日十四夜。昨日はお午も晩も御飯粒なし。午につくつた配給粉の団子は屋の内に食べてしまつた。晩にはまた団子をこしらへた。それが手間取りて団子の晚餐遅く

なり寝たのは九時半なり。

昨夜は九時半就褥す。寝たかと思ふと十時二十五分警戒警報にて起こさる↓起こされた。支度をして表には出ず。大分時間がたつたからこの儘で寝ようかと云つてゐる内に蚤狩りにて遅くなり、もう支度を解いても大丈夫だらうと云つてゐる時二度目の警戒警報鳴る。午後十一時五十分也。それで又寝るのを延ばして蚤を追つ掛けたり↓追跡したり愚図愚図したりしてゐたら午前三時になつた。昼間ろくろく物を食はず、夜は警報と蚤にておちおち寝られず、よく身体がもつものだと思ふ。何故この頃こんなに蚤が多いかといぶかる。長梅雨の為方方の壕舎は蚤だらけになる由。それが道ばた等にていつの間にか取つついて来る↓  
くると云ふ事も考へられる。昨日は家内は↓が銭湯へ行つた。そのお土産もあるかも知れない。しかし昨日だけの事でなく、この何日か急に蚤が多くなつた様にて毎晩寝られない。小屋にはもう一匹もゐない筈であつた。一匹二匹或は二三匹ゐたと思ふ時は必ずみんな捕りつくしてしまふ。バロン松木↓母屋の許へこの頃新潟から浜地の様な声をする奥さんが帰つて来てゐる。しやもじがバロンをかまつてやらざういきなりな女の様にてろくろく掃除もしないらしいから、お勝手など豚小屋の様だと家内が気にしてゐたが、そこへバロネス帰来して頻りに掃除をしたり洗濯をしたりしてゐる。お座敷も大変な蚤にて、話してゐると顔にとまる、相手の顔に何か黒い物がついてゐるか↓のだらうと思ふと血ぶくれのした蚤なのですとバロネスが家内に談りたる由↓だと云ふ話なり。男爵家の蚤共掃き出されて↓掃き出された蚤共がお庭先を逍遙してゐるところへ小屋者が通りかかると↓通りかかれば四民平等の趣旨にしたがひ足の先から取つつく可し。↓のではないかと云ふ疑ひあり。いつも侵入路は脚からである。

夜中蚤に喰はれたり警報におどかされたりして起こされるのは寝不足になつて困る外に、もう一つ困る事↓ことがある。大事に使はなければならぬ仰願寺蠟燭がどんどん無くなつてしまふ。こなひだはもう愈途切れるかと思つたが、古日の骨折りにて会社の購買組合から三函手に入れる事を得たり↓が出来た。一函に二百三十何本入つて↓這入つてゐる。最初の二函はあつと云ふ間に使ひつくして↓尽くして仕舞つた。これではいけないと気づきて、二函目は予定を立てて使はうと思つた。使用初めは七月十四日なり。毎晩十本かせいぜい十五本ぐらゐで済ませたいと考へたが結局さうは行かなかつた。何かの都合で晩飯が遅くなり↓遅れてお膳の上が暗くなるともう予定通りに行かなくなる。その上一たん寝た後で又起きる様な事になればますます沢山使ふ。蚤狩りは時間の上で蠟燭を食ふ計りでなく、明かるくしなければ蚤を追跡する事が出来ないから一どきに二本も三本もとます。一晚に四十本宛使つた晩が二晩か三晩ある。そこ↓それで昨夜までの九日間に二函目の一函が無くなつた。あと↓後はもう一函しかない。その上の補充は恐らく六づかしかる可し。困つた事である。

昨日は宵から涼しくなり夜半は薄寒い位であつたが。今朝は二十一度F七十度にて昨日の夏らしい天気はどこへ行つたかと思ふ。朝から曇りて↓にて間もなく降り出す。梅雨が上

がったのかと思つたけれどさうでもないらしい。我が日本は天道様にも見離された様なり。

午前九時二十五分警戒警報。午まへ↓ひる前十一時五十分又警戒警報午過雨上がる。↓雨

上がり、薄寒さうな↓うそ寒き曇りにて外を歩くには都合よき天気なり↓也。

(七月二十三日月曜日)

出社する前に本郷の農学部動物学教室と京橋の中川さんとへ寄つて行きたいと思ふ。寝が足りないし御飯を食べてゐないからアンシユトレングクは避けようと思ふけれど気が向いた時に事は片附きたい。中川さんはこなひだ行つた時に何か食べる物を頼んで置いたのでそれを貰ひに行く也。動物学教室は、もとの近所の小森沢の娘さんの姉婿藍野君を訪ねて、いつぞやの様なキスキーを貰はんが為なり。なんにも食べる物が無い上にお酒の気もない。お酒の気だけでも有つたらいくらか楽しかる可しと思つたからである。もう一つ思ひ立つた用件はその序に一昨二十一日の欄に一寸記載した江戸川アパートの事を兎に角頼んでおかうと思ふのである。例の如く支度をしてゐる内に時間がたち、出かける前から先づ今日は中川さんはあきらめた。大学からすぐに会社へ廻るつもりにして省線神田駅迄出で須田町へ後戻りして市内電車にて一高跡の農学部へ行つた。藍野君に会ふ。藍野君とは初対面なり。キスキーを貰つて大いに難有い。自製のキスキーなり。又江戸川アパートの件も頼んでおいた。帰りは市内電車にて湯島二丁目まで来てそれから省線のお茶の水駅に出たが、出かけたのが遅かつたのでその時既に五時なり。乃ち郵船へ行くのもあきらめてお茶の水から帰つて来た。動物学教室産のキスキー甚だ可也。ふかし立ての団子を食べながらホツトキスキーにして飲んでゐると古日会社の帰りに来。大根や葱をくれる。請じ上げてキスキーと団子を以つて饗す。古日少廻りたる模様なり。たそがれになりて辞し去る。十時就眠。十一時警戒警報にて起こされた。身支度はしたが何事もなし。

七月二十四日火曜日十五夜。曇。朝十八度F六十五度。薄寒し。小屋の中の閉め切つたところにてこの温度なり。外はまだ何度か低かる可し。七月の二十四日ふと思ひ出せば天然自笑軒の河童忌の当日なり。土用の最中にて暑さの真盛りなり。家内は寒いと云つて真綿の這入つたちゃんちゃんこを著てゐる。昨夜は寝たと思ふと一時間で警報に起こされたが、その時一同きりにて後は朝まで無事であつた。十分寝られた筈であるが蚤の為に眠る事出来ず。↓夜中二匹、夜明けに一匹、就褥前に一匹べて四匹捕つた。蚤獵りの為真夜中ぢゆう殆んど起きてゐた。一先づ打切りて寝たる↓寝たのは三時半なり。これでは身体がもたぬと思ふ。朝起きる時の眠い事、目の中の熱い事お話しにならず。それが昨夜の蚤の為と思へば恨めしい。又仰願寺蠟燭の損害莫大なり。昨夜は先日の↓こなひだの三函の三函目を使ひ始め、先づ昨夜の分として十五本取り出し、外に二函目の分の残り十本ありたればこれを加へて二十五本とす。多少の余裕を見たるつもりなり。ところがこれで足りなくなり、後から又二十本追加し、夜半にそれでも未だ追つつかないから更に十本取り出した。昨夜一晚にて五十五本を要したるわけなり。午前八時三十分警戒警報。正午十二時又警戒警報。二度共米機の爆音も聞かず何事もなし。(七月二十四日火曜日)

午後出社前京橋の中川さんへ寄る。東京駅で降りて八重洲口から出て去る二十日の爆弾

落下の跡とその近所の被害の状況を見物してから行つた。こなひだ行つた時食べ物の事を頼んでおいたら澱粉米と云ふ物を貰つた。葛又は片栗の如きものなり。又下の売店にて齒磨粉を買つて貰ひ、歩いて出社す。夕帰る。お茶の水まで古日同車。

七月二十五日水曜日十六夜。朝から快晴にて少少夏らしくなつた。温度も昇り二十五度半に達す。水曜不出社。昨夜は警報鳴らず。しかし蚤はなほ横行す。寝る前に蚤狩りをして二匹捕つた。仰願寺蠟燭は今朝迄に六十本なり。誠にこれでは誠に困ると思ふ。朝の御飯の代りに昨日の澱粉米なるものを葛湯の様に試したり。甚だ可なり。当節の代用食とか代替品とか戦時食などと云ふ物の比にあらず。上等品なり。午前十一時警戒警報。B 29 の昔を聞き遠くの空に高射砲轟きたり。今日から松木河内山口藤田等↓門内母屋の方には電気がつからぬ。この小屋にはもともと引いてないのだからつかない。電気が来たのでラヂオが聞こえ出した。それに依り↓より午後一時五分前警戒解除となりたる事を知れり。今後情報を聞くには都合よくなつたと思ふけれど向うで開けたり閉めたりするのだから思ふ様に行かぬ事もある可く、又よく聞き取れなかつたりして却つていらいらするかも知れないと思ふ。二十二日の朝以来穀離れがまだ続いてゐる。いつありつけるか見当もなし。昨日は敵機↓米機二千西日本一帯に襲撃し、内B 29 四百機は大阪を、三百機は名古屋を爆撃したる由なり。夕古日会社の帰りに来。馬鈴薯を貰ふ。夕方薄暗くなりかけてから母屋のバロン松木↓何木小屋の前の洗面所の外にて何かしてゐると思つたらコードを引きて電燈を小屋に入れてくれた。実に難有い。焼け出されて以来二ヶ月目の電気燈也。これにてこの小屋の三つのなやみ、電気、お勝手、憚りの内の一つは解決せり。仰願寺蠟燭に心配する事もなくなつた。夜十時以後又は警報中にもす防空用の暗い電球も貸してくれた。暫らく振りの電気の明かりにてまだ起きてゐる。九時五十分警戒警報鳴り十時五分空襲警報となる。主に川崎の方を攻撃したるらし。南の方の空にて一機に高射砲命中し十六夜の月明の夜空に大きな長い火燄の筋となりて落ちて行くのが見えた。青い月明かりの所為か縞の色はいつぞや十余りも落ちたのを見た時の様に白光りせず真赤な火花が中空を走つてゐる様であつた。午前零時五分空襲警報解除、同十分警戒警報も解除となつた。誠に思ひも掛けぬ事にて実に難有い。焼け出されて以来六十日目の電気燈のあかり也。もう仰願寺蠟燭の心配もなし。

(七月二十五日水曜日)

(以上「仰願寺蠟燭」)

七月十三日金曜日四夜。朝はまだ雨、午近く上がる。夕方より快晴。脚はすつかりよし。午前十一時三十分警戒警報。午後新京の浜地来。暫らく話して一緒に出て出社す。浜地は郵便ビルのそばの康徳会館へ行くなり。会社にて古日から麦酒一本貰ひ甚だうれし。午後出社す。会社にて古日から麦酒一本貰つた。夕帰りて井戸水に冷やして飲む。この頃の麦酒はまづいなどと素人が申すなれど決して然らず。↓そんな事はない。たつた一本でも初めからの覚悟で飲んだからうまかつた。↓やれた。家の焼け跡の玄関の戸棚のあつた所と台所との二ヶ所に麦酒罐の王冠栓の焦げたのが小山の様に盛り上がつてゐたのを思ひ出した。

七月十四日土曜日五夜。朝から薄曇り、時々日射しあり。夕は雨模様。散髪。今日は古日

不出社なり。早く切り上げて交通公社嘱託辞任の挨拶に行つた。横田理事に会つて来るつもりであつたがゐなかつたから名刺を置いて歸つた。

午前八時四十五分、午十二時、警戒警報、二度共頭上にB 29の音を聞けり。こなひだ仙台の小宮豊隆さんから来書ありて、その中に古代希臘で運命と云つた事が今ではポリチツクスと云ふものになつたとナポレオンが云つたさうだが、今日の自分達に取つては運命とは亜米利加であり更にB 29であると云ふ事が書いてあつた。又今日の東京の経験を作品にしておいては如何との文面もあつた。小宮さんの所謂作品に代へるに日日この日記を書いてゐると云ふ事、又B 29は運命なりと云ふ事に就いて返事を書かうと思つてゐた。未だ書かぬ内に仙台の空襲となり小宮さんの安否も心掛かりである。宇都宮の近在に疎開してゐる宮城と喜代さんからも来書あり、二人に宛てて返事を書かうと思つてゐると宇都宮の空襲があつた。この方は市中にゐたのではないから大概安心だらうと思ふけれど、それでも気がかりである。何しろ空襲のこはい検校が嘸驚いた事であらうと思ふ。手紙を書かうと思つてゐる内にその町が無くなつてしまふ。日本もえらい事になつたと思ふ。仙台へも宇都宮へも問ひ合はせの手紙を出したいと思ふけれど暫らく日が経つてからでないといふ令先方が無事でも届かないらしいから控へてゐる。空襲のすぐ後に岡山の源ちゃんや真さんや木畑さんに出した見舞の葉書は著いたのか著かないのか未だに解らない。会社の和田さんがくれた手紙が返つて行つたと云ふ話だつたから立退先もはつきりしてゐるのに変だと云つたら丁度五月の二十五日に出したのださうである。小宮さんや宮城や喜代さんの安泰を祈るばかりである。

去年の夏八月、新らしく知人の所書覚帖を調べた。昭和九年十月合羽坂の当時著書寄贈先の覚帖に所書を記入したのを名宛帖に使つてゐたが、それから去年までに九年経過したので書き入れが乱雑になりその内整理しようと思ひながら中果さなかつた。去年の春頃からは特にさう思ひ出したが、又アドレス帖をきちんと整理すると間もなく死ぬと云ふ様な事を云ふ者もあつて、さう聞けばそんな気もするからまあよさうと思つたりした。到頭死ぬでもいいから片附けたいと云ふ氣になり八月に終つたのである。随分手間のかかる面倒臭い仕事であつたが漸く出来上がつてせいせいした。去年の暮からの空襲が今年に這入つてから段段に激しくなり初めは下町が焼かれてゐたが次第に山ノ手に及び、これでは知人の所書も折角綺麗に書きなほしておいたのだが随分書きかへなければならぬのが出来たと考へた。その内に東京と云ふものは丸で無くなり名宛帖も東京に限る限り去年の夏の労は無駄骨折りであつた。今度は地方の都会が片つ端から無くなり始めたので私の知人の所書はさうなる前までの記念帖と云ふより外に何の役にも立たなくなつた様である。

七月十五日日曜日六夜。朝は曇後雨。午上がり夕近く又雨。大分長い梅雨にてもう雨にあきたり。小屋のうしろの後架は風通しもよく家内がしよちゅうあけに行くので不潔でもなく野天の便所としては大樹の枝の屋根もあつて申し分ないが、雨が長く降り続いた後や大雨の時は雫が落ちる。又そこ迄行く足許にも困る。夜は高張提燈を持つて行つてそこに置くから差支ないが、警報発令中の時は閉口する。小便は混泥土の塀の根元に寄せた落葉の上

にする。大変工合がいい。田端の天然自笑軒には随分よく行つた。近年はお客をする時は大概天然自笑軒にしてゐたが、それよりずつと昔の大地震よりまだ何年も前であつたと思ふけれど天然自笑軒に砂便所があつた。座敷から離れた庭の一隅に小屋があつて下に砂が敷いてあつた。壺もなんにもなく砂の上に小便をする。音もせず跳ね返りもせず好い心持だと思つた事がある。木ノ葉の便所は之に準ずるものである。

一日日記を書いて暮らした。いよいよお米が無くなりかけてゐる。もうどうする事も出来ない様な世間の形勢である。夕古日来。ねだる様に云つて追加を頼んでおいた葡萄酒を麦酒罐↓罌に一本と、布佐から買つて来た餛飩粉五百匁持つて来てくれた。餛飩粉は非常に難有いと云つて家内頗るよろこべり。午前一時四十分警戒警報にて起きる。二時十分解除の兵隊の声が聞こえた。それからまた寝た。朝になつてからは午前七時五十分、午前九時十分、午過十二時二十分の三回各警戒警報出でたり。

七月十六日月曜日七夜。昨夜十一時四十五分警戒警報、今晚午前一時解除になつたらし。朝から曇にて一日かぶさつてゐた。午後東京駅から歩いて京橋の明治産業に中川さんを訪ね歩いて帰りに三立工業に寄つて見たが中村武志君は帰つた後であつた。それから出社す。古日のことづけに依ればその間に朝日新聞の津村から電話あり。電話に出たのは週刊朝日の橋本とかにて津村は今出張でゐないのだが私に会ひたいと云ふ事にて、原稿の用件かも知れないけれどそれなら週刊朝日にはその事で度度来た野津がゐる筈であり少し腑に落ちない。何の為に今こちらにゐない津村の名前を云つたのか解らぬが、その話を聞いてすぐに氣に掛かるのは津村は小宮さんの弟子である。仙台の空襲にて小宮さんに万一の事でもあつたのではないかと心配になつた。こちらから朝日に電話をかけて見たが要領を得ず、夕帰つてから後もその事がいつ迄も氣になつた。

午前八時三十分警戒警報。又午過十二時四十分警戒警報。敵の機動部隊から放つた艦上機はその後東北北海道を空襲してゐるが更に機動部隊が沿岸に近づき一昨十四日は釜石、昨十五日は室蘭に艦砲射撃を加へた。本土に対する本格の艦砲射撃はこれが初めてなる由、誠にえらい事になつて来たものと思ふ。

七月十七日火曜日八夜。昨夜は八時半に寝て十時四十分警戒警報にて起こされた。十一時二十分空襲警報鳴る。表へ出たが雨は降つてゐないけれど暗い雲がかぶさりて真暗闇なり。情報よく解らず。又随分長い空襲警報にて午前二時二十五分漸く解除となつた。その間家内下腹部が痛い云つて屈み込み心配した。少しをさまつたと云ふのでそれから団子を食べべて寝た。既に三時過ぎなり。それでぐつすり眠つてゐると忽ち又空襲警報で起こされた。夜が明けてゐた。午前五時三十分なり。いきなり空襲警報が鳴つた事と思つて起きたが、後で聞くとすぐその前に警戒警報も鳴りたる由なり。あんまりよく眠つてゐて自分も家内も知らなかつた。七時四十五分空襲警報解除となる。

朝来曇後雨となる。お米は昨日限りにて今日からは一粒も無し。朝は配給の代用粉に古日の持つて来てくれた餛飩粉と↓を混ぜたすゝなり。八幡丸の披露航海に九日乗つてゐた時など、ろくろく御飯は食べなかつた。麵麩すら余り食べるとおなかの邪魔になると思つ

たがそれとは少しわけが違ふ。これから何日間―幾日の間お米粒に離れるのか知らないが外に食べる物が無いので多少心細し。午後団子腹にて颯爽と出社す。雨大いに降り出す。夕帰る。東京駅には屋根がない。乗車口のホールに上から雨が降り灑いでゐるからみんな傘をさして改札口を通る。大正何年頃であつたか、前後のつながりが無いので年代は思ひ出せないが、大地震よりまだ何年前であつた事は確かである。何処かへ行くので時間表を見に来た様な気がする。今でも有る父譲りの紺がすりの単衣を着て高い足駄を穿き雨傘をさして乗車口に這入つて行つたら、五六歩歩いた時、だれかにひどく叱られた。だれが怒つたのかよく解らなかつたけれど、多分駅の人であつたらうと思ふ。傘をさしたなりで這入つて来る奴があるかと云ふのであつた。さう云はれて自分でも気がつき、成程これはいけなかつたと思つた。そんな事を思ひ出した。当時に思ひ合はせて情無い事計りである。

午後十一時四十五分、丁度蚤がゐる様で起きてゐた時警戒警報鳴る。支度だけして外には出でず。

七月十八日水曜日九夜。右の警戒警報にて暫らく起きてゐたが蚊が食ふから洋服を着たなりで蚊帳に這入り寝てゐようと云ふ事にした。その儘ぐつすり寝入つてゐる時警戒警報の音がした。お燈明皿にあかりをつけて置いたのだが燈心が引込んだかどうかしたと見えて消えかけてゐるので時計の針がよく見えないと家内が云つた。多分午前一時三十分だからと云ふ見当にしておいた。その儘又寝てしまひ、今朝は珍らしく八時近く迄寝坊した。

水曜不出社。朝雨上がる、後晴れ。昨暁の空襲警報は平塚沼津等に百九十機行きその他小田原茅ヶ崎辻堂等相模湾沿岸の中小都市を襲つたさうである。又別に桑名へ九十機、九州の大分へ六十機、右は何れもB 29なり。その外沖繩からは戦爆聯合にて毎日九州へ数百機宛来襲してゐる。正午十二時警戒警報。例刻の警報なれば一機なる可しと思つたが久し振りに遠くで高射砲の音と爆弾の響きがした。午過十二時三十五分空襲警報鳴る。身支度をして一たん外へ出てゐたが今日は昼間は大分暑かつたのと格別何も無ささうなので小屋に歸つた。随分長くかかり何時迄も解除にならぬので又機動部隊が近づいて艦上機を放つてゐるのであらうと思つたが、夕方家内が外で聞いて来たところによると戦爆聯合一千機にて横須賀を襲つたのださうである。午後四時四十分漸く空襲警報解除となつた。

七月十九日木曜日十夜。朝はすがすがしき晴れ也。昨夜は警報鳴らず。九時半に就眠して今暁三時半迄一眠りに眠りたり。小便に起きて後はうつらうつらしてゐたが結局五時前に起床す。今朝の新聞で見ると昨日午後の一機による横須賀空襲の話はうそであつて来襲機数は戦爆聯合の二百五十、矢張り機動部隊からの艦上機であつた。午前六時四十分警戒警報。後で唐助が来た時の話によればラヂオ放送を聞いて見ると間違ひだつたらしいとの事なり。唐助は麦酒一本買つて来てくれた。一本二十円との事なり。午前十一時五十分警戒警報、今度は高射砲の昔がした。午後省線電車にて飯田橋駅迄行きそれから市内電車にて新潮社へ行つて見た。ぐるりは焼野原なのに新潮社だけ無事に残つてゐた。佐藤俊夫氏を訪ねたが信州へ疎開して不在也。アドレスを聞いて帰り市内電車にて飯田橋駅に戻り省線電車にて午後出社す。今日は古日が会社へお米を五合持つて来てくれてゐた。誠に難有し。今日で



三日お米粒を食べない↓食べなかつた。自分よりは家内が騒ぐ。これで一寸一息抜く事が出来る。夕帰る。古日その補ひに配給の粉がいるとの事にて一緒に取りに来る筈であつたが切符の都合にてお茶の水迄同車して別かれ、後から市内電車にて来た。上がり口からぢきに帰つた。お天気は次第に曇りて夕は雨模様となる。

七月二十日金曜日十一夜。土用の入りなれども今朝の温度は二十度五分にして午近くなりてもやつと二十三度なり。朝から曇。一日鬱陶し。おなかの工合を又悪くした。逆戻りかと甚だ心配す。昨日あたりからその気配にて夜警報中に上廁したり。今朝はその後にてまた二度行きて二度目は下痢したり。雲行き面白からず。午後、からだにだるいけれど元氣を出して出かける。出社前に大日本航空の前田岩夫のところへ寄つて行かうと思ふ。こなひだ新京の浜地が来た時、あちらへ帰つたら新京には未だお酒の都合がつくからお酒を送つてくれると云つた、又高粱酒の一種にて白酒と云ふ強い支那酒あり。アルコール度は七十とか七十五とかなればそれを送るから薄めて飲めと云つた。送る為には成る可く濃厚なのが目方もかからず場所も取らず宜しいと云ふ話なり。あちらにてお酒や白酒は手に入れる事が出来るが、こちらへ送り居けるのに困るのであつて、その方法として満州航空に先生の知つた者があればと云ふ事から清水清兵衛に頼む事にきめた。清兵衛がだれ宛に送るかと云ふ事は清兵衛にまかせるとして兎に角満州航空の東京支社か大日本航空の中に何人か請取人がゐてそれから私に知らせると云ふ事にすれば便利であり簡単に事が運ぶと思ふと浜地が云ふので、前田岩夫に一言頼んで置かうと思つたのである。おなかの加減わるく、だるい身体に無理をさせてもさう云ふ用事はてきばきと片附ける。今日思ひ立つたから今日行く事にした。久し振りに四谷見附から日比谷の市内電車に乗り、辺りの焼け跡を今更ながらつくづく眺めて余りの荒涼たる景色に胸の中が気持が悪くなつた。生理的の不快を感じた。日比谷の角に大日本航空会社はあつたから、そのつもりで日比谷で降りたら空地になつてゐて跡形もなかつた。東京でどこかを尋ねるのに、もと通りあるつもりで出かける方が少し間が抜けてゐたかも知れない。どこに移つたかを調べるのも面倒になつたから、その用事は一先づあきらめた。

先月限りとなつた交通公社の事につき、世話になつた早川に挨拶したいと思ふけれど動坂の早川の家は多分駄目だらうと思はれるし、江古田の方に疎開したと云ふ話も聞いたが、そのアドレスを知らない。日本倶楽部に電話で聞いたけれど要領を得なかつたので、こなひだ中川さんの許から帰つて来る時、早川は都議會議員だから都庁に寄つて所書を聞いて行かうと思つて寄つたら門内はすつかり廃墟であつた。門衛に尋ねて大東亜会館へ移つてゐる事を教はつた。日比谷から先づ日本倶楽部へ寄つて見て、矢つ張りはつきりしないので大東亜会館へ行つた。動坂の家が安泰らしき由なり。それなら初めから一番簡単だつたのに、無事な所は既に無しと思ひ都庁や大日本航空はその前迄行つて見たら無かつた。大東亜会館から歩いて出社す。会社の医務室にておなかの薬を貰ふ。今迄は古日の名で貰つてゐたが、あんまり古日が貰ひ過ぎた様な事になつたので今日から本人出頭する事にせり。

夕早く帰る。帰り途甚だ身体だるし。四谷駅の段段を上がるにも難渋する程なり。帰りて

検温す。午後五時七度、六時同じく七度、八時半六度八分、十一時半六度二分。

昨夜は九時に就眠し、十時四十五分警戒警報にて起こされた。十一時空襲警報なり。午前二時空襲警報解除となる迄起きてゐたが初めの内だけ表に出てゐて後は小屋に帰つた。日立銚子その他に百五十機のB 29 が来襲して焼夷弾攻撃をした由なり。今朝午前七時十分警戒警報。いつ解除になつたか知らなかつたが八時半不意に頭の上にB 29 の音が強く響いたと思ふと又警戒警報にてそのサイレンの音が止むか止まぬかに何だかどしんと重たい物が身近かに落ちた様な昔がした。いつぞやの例もあり又ビラを撒いたのだらうと思つた。ピラの筒だか莢だかが金属で出来てゐて、それがどしんと落ちたのだらうと思つた。午後会社にて医務室の帰りに古日の部屋へ立寄つた時、古日が今朝は早速先生のお部屋も見廻つたが異状はなかつたと云ふので何の事かよく解らなかつたが、朝のどしんと云ふ音は爆弾であつて東京駅の向う側の八重洲口の近くに落ちたのださうである。その為に郵船の窓硝子の方方こはれ古日の隣りの部長の壁に懸かつてゐた電気時計は落ち、扉の金具もちぎれた様になつてこはれてゐる。云はれて気がついて見れば足許の床に壁の剥がれたかけらが散らばつてゐる。皆爆風の為である。郵船ビルは大分離れてゐるのにこの始末にて矢張りこはいものだと思ふ。先程日本倶楽部から大東亜会館へ行き、それから歩いて郵船へ来る途中、道ばたに硝子のかけらが方方に落ちてゐたが、この頃はそんな事はよくある事なので何事だらうとは思はなかつたけれど、後から考へればこれ亦今朝の爆風の置土産なのであつた。夕歸りに丸ビルの傍を通つたら朝の内未だ上げてなかつたらしい方方の大きな鉄の鎧戸が身持女のおなかの様に内側からふくれて外に食み出してゐる。厚みが五分ももつとある板硝子が破れて歩道に散つてゐる。人死にもあつた事と思ふ。

留守に千江来りお米を五合許り置いて行きたる由なり。昨日の古日の五合に続きこれでもた一息する事が出来る可し。

七月二十一日土曜日十二夜。夜半より降り始めて朝来雨なり。午頃から時化模様となる。昨夜は九時半に寝て十一時警戒警報で起きた。身支度はしたけれど何事もないらしく兵隊の情報放送の声も聞こえないから洋服を著たなりで蚊帳に這入つて寝ようかと云つてゐると、その警報は既に解除になつてゐた様で十一時四十分又新しく警戒警報が鳴つた。それで寝るのを延ばしたが結局この辺には何事もない様だから支度をした儘で寝てゐると三度目の警戒警報で又目がさめた。暗がりにて時計が見られなかつたが午前一時頃か或はそれより少し前かであつたと思ふ。後で蚤に喰はれて起き愚図愚図して三時過ぎてから改めて寝た。

十九日夜半から二十日の未明にかけて空襲を受けたのは日立銚子の外に福井がB 29 百二十機。尼ヶ崎同じく五十機。岡崎同八十機等であつた。地図の上で思ひ出しさうな町は大概無くなつた様である。どんな町にも感情があり由緒や歴史がある。今となつては仕方が無い事かも知れないが何人がこんな事にしたかと考へる。新聞の御用記事ではいろんな事を云ふけれど決して国民の所為ではない。

おなかの事を心配したが早く用心した為か本式の下痢は一回だけにてなほつた様である。

熱まで出かけたのに何事もなくすみさうにて先づ安心した。

午まへ十一時四十五分警戒警報にてB 29の音が頭の上にと迫った。昨日の事もあり気を配つてみたけれど何事もなかった。乞食の様な小屋暮らしの生活では寒いのと暗いのが一番困ると未だ寒かった時に考へたが、その外に雨が降るのも困る。今年の梅雨はいつ迄続くのか解らない。少少の雨ならまだいいが今日の様に風を伴なつた大降りでは憚りへ行くにも難渋する。薪がぬれて家内はお湯を沸かしたり御飯の用意をするのに困る。水を汲みに行くのも大変である。顔を洗ふ事も出来ない。しかし今の日本の有様ではもつと身辺の便利な所へ移り住むと云ふ事を考へるのも億劫である。焼け残つてゐる江戸川アパートの事も念頭には有るけれど更めて考へをきめると云ふ気にはまだなれない。

雨が小降りになつたら遅くからでも出社したいと思つたが、午後は段段ひどい雨となり時化降りにて特に四時頃から覆盆の大雨なり。小屋の硝子窓から見る庭一面池になつてしまつた。諦めて今日は不出社とす。今日の雨では表は歩けないが濡れ鼠になるのを覚悟すれば出られぬ事はない。又時と場合ではそのつもりで雨の中を歩いた事もあるけれど、今の小屋暮らしては二畳しかない所へ濡れて帰つて来たら、どうにも始末がつかない。大雨の日に自動車で電車の安全地帯に大勢人が立つてゐるのを見ながら帰つて来た事を思ひ出す。毎晩風呂に這入りそれから麦酒やお酒のそろつてゐるお膳に坐つた。雨中の自動車よりも風呂よりもお膳の事を思ひ出すのが一番苦痛である。

岡山は六月二十九日の午前二時頃B 29七十機の空襲を受けた。人死にが多かつたと云ふ話を聞いたが町は大体無くなつたのであらうと思ふ。源ちゃん真さんは未だ安否の返事が来ない。木畑先生のお家は無事だつたさうである。貞清さんから返事が来た。お城は焼けた。古日の生家の西中島の伏見屋は残つてゐるさうである。矢張り所所に焼け残りはあるものと思はれる。些とも顧ない郷里ではあるが敵に焼き払はれたと云ふ事になれば人並以上の感慨もある。しかしどうせしよつちゅう行つたり来たりする所でもないとすれば記憶の中の岡山は亜米利加もB 29も焼く事は出来ないのだから、自分の岡山は焼かれた後も前も同じ事であるかも知れない。今年の一月頃から不思議に網ノ浜の父の里の福岡の裏口が目に浮かんだ。雨風にさらされた南側の縁を下りると狭い庭の飛び石の先に裏木戸がある。木戸を開けて出たすぐ前に小川が流れてゐた。小川と木戸との間に道があつてその道に沿つた屏風に畳一畳敷位の菜園が木戸の右左にあつた様な気もするし、左側だけだつた様にも思はれる。菜園に葎が生えてゐた。木戸を出て左に行き右に曲がつて小川の小さな石橋を渡り少し行つて又左へ曲がつた所に鈴木木の健太郎の先祖のゐた鈴木木の屋敷がある。そこが父のものの家、或は本家又は生家であると思ふけれどその関係は今すぐには思ひ出せない。(後から記す。右は間違つてゐる。父の姉が福岡から鈴木木へ嫁したるなり。)鈴木木の屋敷におぢいさんがゐた様な気がする、背が高くて頤ひげを生やして家の前の庭に起つてこつちを向いてゐたと思ふ様な気がするだけで記憶をたどる何の順序も手がかりもない。自分が段段おぢいさんになり、だれか子供の記憶にそんな姿になつて残るかも知れないと云ふ事を鈴木のおぢいさんのあやふやな悌を思ひ出す度に考へる。岡山の事を思ふといつでもついて

出て来るのは荒手の大銀杏とハーレー彗星であるが、その外、夏の夕方真さんが来て栄さんあんたは這入つとるがなと云つて、六高入学の事を敦へてくれて一緒に官報を見に行つた。二本松の村役場や百間川の土手や旭川の鉄橋と百間川の鉄橋との間の辺りで伊藤博文が韓国統監だか朝鮮統監だかで赴任する時、特別列車の真中に樺色に塗つた統監専用の車をつないで行くのを学校から見送りに行つた時の事や、御後園裏のしんばく辺の春色や、木畑先生がなくなられた時岡山へ行つた帰りに岡山駅へ源ちゃんが送つて来てくれたその時見たのが暫らく振りだか初めてであつたか解らないが子供の時の記憶とは違つた岡山駅の歩廊の事や、平井の土手の下にあつたお祖母さんの里の事や、三幡港の蒸気船や、相生橋がかかつてから後の事であつたかと思ふ大川の西岸の橋の下に近い下流の砂地にしやがんでゐたら木綿針ぐらゐの真黒な小ひさな鰻の子が行列をつくつて水際に近い所を上手にのぼつて行つたその時の六月頃のすがすがしい水辺の景色をこの頃いつも思ひ出す。玉井宮の山の裏と峠の山との間の谷になつた所に田があつて少し奥の方へ行くと左側の峠の山の山裾にうちの藪があつた。一二度ついて行つた事があるその藪の事を時時ふと思ひ出す。家が貧乏して田地などを売る様になつた前に最初に手離したのはその藪である。何故かそんな事を知つてゐる。右の様な事は岡山が空襲で焼けて無くなつても思ひ出すには一向差聞ない。

七月二十二日日曜日十三夜。昨日のあらしは夕方からをさまり宵は霽れて十二夜の月が出てゐた。火がもせなかつたので御飯が遅くなり寝たのは十時を少し過ぎた。夜中警報は鳴らなかつたけれど蚤や蚊帳の中に這入つた蚊などに喰はれてよく眠れなかつた。

今日は朝から快晴なり。目がぎらぎらする様な日ざしなり。段段に温度昇り、午後は三十一度華氏の八十八度となる。今年最初の暑さなる可し。之に由つて見るに梅雨は昨日のあらしにて上がりたるか。方方の壕に雨水流れ込み今日は近所の往来に布団や著物や色色の包みなど一ぱいに干してある。道ばたでなく道の真中に筵を敷いて夜具をひろげたり。この頃は通行の妨害などと云ふ事は考へて見る者もなし。朝は足りないながら御飯があつたけれど畳からは再び団子計りなり。又何日か穀断ちが続く事なる可し。

午後家内は省線電車にて飯田橋駅近くの銭湯へ行つた。家内は五月二十五日の晩風呂に入りに出かけたところに警報が鳴つた。それ以来今日初めての入浴なり。自分はその晩風呂に這入らなかつたからもう幾日か前から今日迄垢をためてゐるわけ也。

五月二十五日の夜から既に二ヶ月に垂んとす。地上の銀に照らし出されたB 29の姿を見上げて、今度のはこつちへ来る、いや大丈夫だ、ああ向いたら心配はない、今度のも大丈夫だ、かう云ふ風に見上げて真上に見えても余程横にそれてゐると云ふ様な事をそれ迄に何十遍何百遍云つたり思つたりしたか知れない。二十五日の晩も初めの内はその通りの情況であつたが、間もなく合羽坂や矢来、安藤坂の方角から飛んで来ると思はれる敵機が次第に本当の頭の真上を通り出した。今晚は駄目だらうと云ふ覚悟を本当にさうなる少し前にきめた。焼夷弾が身近かに落下する様になつてからは随分低く降りて来てゐるらしい敵機を見上げて自分の身辺に危険が迫つた事は十分解つてゐるのであるが一方ではこれは実に大変な事であると云ふ事を一つの壮大な出来事として観察してゐると云ふ様なところもあつ

た。しかし大胆に落ちついてそんな事を考へたのではない。こはい事はこはかつた。燄の色に染め出されたB 29の機体の裏が大きなぬもりの腹の様に思はれた。二ヶ月たった今日でもその無気味な色と姿を目蓋の裏に見る事が出来る。

当路のだれかに聞いて見たいと思ふのは去年の十一月以前の警戒警戒の意味である。二日も三日も続くのは普通であつて一週間或はそれ以上に互つた事もあつた様である。尤もらしい事を云つて人民をおどかしてゐたが今から考へて見ると結局敵機の襲来を警戒すると云ふのはうそで人民にのぞむ技巧の1つであつたと思はれない。当路に説明を聞いて見度いなどと云ふのは野暮の骨頂でそんな事はさうにきまつてゐる、今まで事事しく覚えてゐる方が馬鹿だと云ふ事になりさうでもある。

午十二時十分前警戒警戒、例刻なり。暫らく振りの青空に白雲浮かべる間へ高射砲の轟音西空の北寄りから轟き始めて漸次左の方へ即ち西空を南方へ移つて行つた。B 29の爆音もそれにつれて遠ざかつて行つた様であつた。

七月二十三日月曜日十四夜。昨日はお昼も晩も御飯粒なし。午につくつた配給粉↓代用粉の団子は昼間の内に食べてしまつて↓しまつた。晩にはまた新しく団子をこしらへた。それが手間取りて団子の晚餐遅くなり寝たのは九時半なり。寝たかと思ふと十時二十五分に警戒にて起こされた↓起こさる。

支度をして表には出ず。大分時間がたつたからこの儘で寝ようかと云つてゐる内に蚤獵りにて遅くなり、もう支度を解いても大丈夫だらうと云つてゐる時二度目の警戒警戒鳴る。午後十一時五十分也。それで又寝るのを延ばして蚤を追つ掛けたり愚図愚図したりしてゐたら三時になつた。昼間ろくろく物を食べず夜は警戒と蚤にておちおち寝られずよく身体がもつものだと思ふ。何故この頃こんなに蚤が多いかといぶかる。長梅雨の為方方の壕は蚤だらけなる由。それが道ばた等にていつの間にか取つついて来ると云ふ事も考へられる。昨日は家内は銭湯へ行つた。そのお土産もあるか知れない。しかし昨日だけの事でなくこの何日か急に蚤が多くなつた様にて毎晩寝られない。小屋にはもう一匹もゐない筈であつた。一匹二匹或は二三匹ゐたと思ふ時は必ずみんな捕りつくしてしまふ。バロン松木の許へこの頃新潟から浜地の様な声をする奥さんが帰つて来てゐる。しやもじがバロンをかまつてやらず又いきなりな女の様にてろくろく掃除もしないから、お勝手など豚小屋の様だと家内が気にしてゐたが、そこへバロン帰来して頻りに掃除をしたり洗濯をしたりしてゐる。大変な蚤にて話してゐると顔にとまる、相手の顔に何か黒い物がついてゐるかと思ふと蚤なのですとバロンが家内に談りたる由なり。男爵家の蚤共掃き出されてお庭先を逍遙してゐるところへ小屋者が通りかかると四民平等の趣旨にしたがひ足の先から取つつかのではなにかと云ふ疑ひあり。いつも侵入路は脚からである。夜中蚤に喰はれたり警戒におどかされたりして起こされるのは寝不足になつて困る外に、もう一つ困る事がある。大事に使はなければならぬ仰願寺蠟燭がほとんど無くなつてしまふ。こなひだはもう愈途切れるかと思つたが古日の骨折りにて会社の購買から三函手に入れる事を得たり。一函に二百三十何本入つてゐる。最初の二函はあつと云ふ間に使ひつくして仕舞つた。これではいけない

と気づきて二函目は予定を立てて使はうと思つた。使用初めは七月十四日なり。毎晩十本ぐらゐで済ませたいと考へたが結局さうは行かなかつた。何かの都合で晩飯が遅くなりお膳の上が暗くなるともう予定通りに行かなくなる。その上一たん寝た後で又起きる様な事になればますます沢山使ふ。蚤狩りは時間の上で蠟燭を食ふ計りでなく明かるくしなれば蚤を追跡する事が出来ないから一どきに二本も三本もとます。一晚に四十本宛使つた晩が二晩か三晩ある。そこで昨夜までの九日間に二函が無くなつた。あとはもう一函しかない。その上の補充は恐らく六づかしかる可し。

昨日は宵から涼しくなり夜半は薄寒い位であつたが今朝は二十一度F七十度にて昨日の夏らしい天気はどこへ行つたかと思ふ。朝から曇りて間もなく降り出す。梅雨が上がったのかと思つたけれどさうでもないらしい。日本は天道様にも見離された様なり。午前九時二十五分警戒警報。午まへ十一時五十分又警戒警報。午過雨上がる。薄寒さうな曇りにて外を出歩くには都合よき天気なり。出社する前に本郷の農学部動物学教室と京橋の中川さんへ寄つて行きたいと思ふ。寝が足りないし御飯を食べてゐないからアンシユトレンジングは避けようと思ふけれど気が向いた時に事は片附けたい。中川さんはこなひだ行つた時に何か食べる物を頼んで置いたのでそれを貰ひに行く也。動物学教室は、もとの近所の小森沢の娘さんの姉婿藍野君を訪ねて、いづぞやの様なキスキーを貰はんが為なり。なんにも食べる物が無い上にお酒の気もない。お酒の気だけでも有つたらいくらか楽しめる可しと思つたからである。もう一つ思ひ立つた用件はその序に一昨二十一日の欄に一寸記載した江戸川アパートの事を兎に角頼んでおかうと思ふのである。例の如く支度をしてゐる内に時間がたち、出かける前から先づ今日は中川さんはあきらめた。大学からすぐに会社へ廻るつもりにして省線神田駅迄出で須田町へ後戻りして市内電車にて一高跡の農学部へ行つた。藍野君に会ふ。藍野君とは初対面なり。キスキーを貰つて大いに難有い。自製のキスキーなり。又江戸川アパートの件も頼んでおいた。帰りは市内電車にて湯島二丁目まで来てそれから省線のお茶の水駅に出たが、出かけたのが遅かつたのでその時既に五時なり。乃ち郵船へ行くのもあきらめてお茶の水から帰つて来た。動物学教室産のキスキー甚だ可也。今日は夕方ふかし立ての団子を食ひながらホットキスキー↓動物学教室から貰つて来た手製のキスキーを生水のハイボールにして飲んでゐると古日会社の帰りに来。大根や葱をくれる。請じ上げてキスキーと団子↓請じて上げ団子と、キスキーを以て饗す。古日少少廻りたる模様なり。たそがれになりて辞し去る。十時就眠。十一時警戒警報にて起こされた。身支度はした何事もなし。

七月二十四日火曜日十五夜。曇。朝十八度F六十五度也。薄寒し。小屋の中の閉め切つたところ↓所にてこの温度なり。↓なれば外はまだ何度か低かる可し。七月の二十四日はふと思ひ出せば天然自笑軒↓芥川龍之介の河童忌の当日なり。土用の最中にて暑さの真盛りなり↓也。家内は寒いと云つて真綿の這入つたちゃんちゃんこを着てゐる。昨夜は寝たと思ふと一時間で警報に起こされたが、その時一同きりにて後は朝まで無事であつた。十分寝られた筈であるが蚤の為に眠る事出来ず。夜中二匹夜明けに一匹就褥前に一匹べて四匹捕つ

た。蚤獵りの為真夜中ちゆう殆んど起きてゐた。一先づ打切りて寝たるは三時半なり。これでは身体がたまぬと思ふ。朝起きる時の眠い事、目の中の熱い事お話しにならず。それが昨夜の蚤の為と思へば恨めしい。又仰願寺の損害莫大なり。昨夜は先日の三函の三函目を使い始め、先づ昨夜の分として十五本取り出し外に二函目の分の残り十本ありたればこれを加へて二十五本とす。多少の余裕を見たるつもりなり。ところがこれで足りなくなりて後から又二十本追加し夜半にそれでも未だ追いつかないから更に十本取り出した。昨夜一晚にて五十五本を要したるわけなり。午前八時三十分警戒警報。正午十二時警戒警報。二度共爆昔も聞かず何事もなし。

午後出社前京橋の中川さんへ寄る。東京駅で降りて八重洲口から出て去る二十日の爆弾落下の跡とその近所の被害の状況を見物してから行つた。こなひだ行つた時食べる物の事を頼んでおいたら澱粉米と云ふ物を貰つた。葛又は片栗の如きものなり也。又下の売店にて歯磨粉を買つて貰ひ、歩いて出社す。夕帰る。お茶の水まで古日同車。

七月二十五日水曜日十六夜。朝から快晴にて少少夏らしくなつた。温度も昇り二十五度半に達す。水曜不出社。昨夜は警報鳴らず。しかし蚤はなほ横行す。寝る前に蚤獵りをして二匹捕つた。仰願寺は今朝迄に六十本なり。誠にこれでは困ると思ふ。朝の御飯の代りに昨日の澱粉米なるものを葛湯の様に試したり。甚だ可なり。当節の代用食とか代替品とか又は戦時食などと云ふ物の比にあらず。上等品なり。午前十一時警戒警報。B 29の音を聞き遠くの空に高射砲轟きたり。今日から松木河内山口藤田等母屋の方には電気がつくらし。この小屋にはもともと引いてないのだからつかない。電気が来たのでラヂオが聞こえ出した。それに依りて午後一時五分前解除となりたる事を知れり。今後情報を聞くには都合よくなつたと思ふけれど向うで開けたり閉めたりするのだから思ふ様に行かぬ事もある可く、又よく聞き取れなかつたりして却つていらいらするかも知れないと思ふ。

二十二日の朝以来の穀離れがまだ続いてゐる。いつあ↓有りつけるか見当もなし。昨日は敵機二千西日本一帯に來襲し内B 29 四百機は大阪を、三百機は名古屋を爆撃したる由なり。夕古日会社の歸りに來。馬鈴薯を貰ふ。薄暗くなりかけてからバロン松木小屋の前の洗面所の外にて何かしてゐると思つたらコードを引きて電燈を小屋に入れてくれた。実に難有い。焼け出されて以來二ヶ月目の電気燈也。これにてこの小屋の三つのなやみ、電気、お勝手、憚りの内の一つは解決せり。仰願寺蠟燭に心配する事もなくなつた。夜十時以後又は警報中にもす防空用の暗い電球も貸してくれた。暫らく振りの電気の明かりにてまだ起きてゐる。九時五十分警戒警報鳴り十時五十分空襲警報となる。主に川崎の方を攻撃したるらし。南の方の空にて一機に高射砲命中し十六夜の月明の夜空に大きな長い火祭の筋となりて落ちて行くのが見えた。青い月明かりの所為か緑の色はいつぞや十余りも落ちたのを見た時の様に白光りせず真赤な火花が中空を走つてゐる様であつた。午前零時五十分空襲警報解除、同十分警戒警報も解除となつた。

七月二十六日木曜日十七夜。晴。朝は二十一度、午下二十六度半漸くF八十度に垂んとす。午前七時五十分警戒警報、九時三十分解除。B 29 一つ宛はこちらへも來た様であるが主力

は九十九里浜から東北地方へ向かった模様なり。更に十時警戒警報鳴る。但しそれは間違ひであるとの事なり。かう云ふ時はラヂオが聞こえるので助かる。又十一時五分前にもう一度どこかさう遠くないサイレンが警戒警報を鳴らした。これ亦間違ひなる可しと判断して気にもせず。午過十二時二十五分警戒警報。今度は本ものにてB 29 一機なり。上空に爆音響き高射砲の音が盛んに聞こえた。

町会からの配給にて罹災者だけにと云ふ事にて蚊遣線香二袋四本くれた。昨夜の電気と云ひこの蚊遣と云ひ質に難有いが蚊遣はぢきに無くなる。大切に使用可し。焼ける前不自由になつてからでも一夏に何百巻か使つた事を思ふ。

午後出社す。夕帰る。御飯を食べない所為か歩くと身体がだるくて困る。行きがけに東京駅の前の広場の芝生にて胡瓜とどぜういんげんを売つてゐた↓売つてゐるのを見て咄嗟に買ふ氣になり胡瓜二くくり↓括り↓と隠元一把と買つた。隠元は十八本にて一円、胡瓜は二本一くくり↓括りにて二円べて五円の買物なり。そんな物を見た途端に何の躊躇もなく買ふ氣になつたのは余程青い物の成分が身体に欠乏してゐる↓乏しくなつてゐたものと思はれる。

七月二十七日金曜日十八夜。晴。昨夜十時五十分警戒警報。B 29 一機新潟へ行つた様である。外にB 24 下田附近をうろついたらし。十一時十分警戒警報解除。夕飯と云つても御飯はないが胡瓜や野菜汁にて団子を食べ終はつた後すぐ寝る氣もしない。どうせ又警報にて起こされると云ふ腹↓肚あればなり。今年の冬の寒い晩にもよくこんな事があつた。それで起きてゐると果して右の警報が鳴つたが、すんだ後もなほ愚図愚図して就褥せるは十二時なり。一つには一昨日の晩から電気がついた↓ともなる様になつたので起きてゐられるからでもある。氣をつけないと折角早寝の癖がついたのに又もとの通りの夜更かしに逆戻りす可し。

正午十二時警戒警報 同二十五分解除。午後四谷見附より市内電車にて放送協会へ寄り俵給を請取つて市内電車にて出社す昨日調度の高橋君に頼んでおいた電氣の傘を自分の係の社員にさう云つて調達しておいてくれた。小屋に電氣はついたが傘が無いので手許が暗くて困つてゐたところなり。人の好意と云ふものは難有きものなり。夕古日とお茶の水迄同車にて帰る。午後八時二十五分警戒警報 同五十五分解除。九時二十五分警戒警報 十時解除。七月二十八日土曜日十九夜。晴。午後遅く曇り始め段段雲濃くなる模様なり。午前八時警戒警報、同五十五分解除。一機なり。午前九時四十五分警戒警報、同五十分空襲警報。硫黄島のP 51 編隊の来襲なり。この辺りは何事もなし。正午前その警報発令中にB 29 一機常の如くやつて来た。高射砲の挨拶を受けながら南の方へ去る。午後一時五分空襲警報解除。同十五分警戒警報解除。

午後出社す。医務室へおなかの薬を貰ひに行つたら、この間は薬局だけであつたが今日は若いドクトルがゐたので序に血圧を調べて貰つた。一七二なり。五月十四日小林博士の検査は一九〇だつたので心配したが今日の数字は自分としては先づ普通なる可し。古日今日は来てゐない。夕帰る。



家内の姉の家の荷物がまだこの小屋にある。大きな風呂敷包二つ、葛籠一つ、ラヂオのセットを包んだ風呂敷包一つ也。ちぎ片づける、二三日内に持つて行くと云ひながらいつ迄もその儘にて棚に置いてあるので、その下に布団の出し入れをする度に家内はよく葛籠の角に額をぶつける。自分も一二度ぶつけた。邪魔だけれど仕方がないとあきらめてゐる。昨日郵船へ行つた留守にその姉が来て風呂敷がいるからと云つてラヂオを持つて帰つたさうである。一つでもそこらが片附くのはいいと思つたが今日になつて家内が云ふには風呂敷がいるからと云ふのでラヂオを持つて行くのはをかしい。きつとうちに電気がついたので心配になつて、ラヂオを使はれては大変だと云ふので取りに来たに違ひない。成る程云はれて初めて気がついて見ればそれに違ひない。妙なところに気を遣ふもの哉と呆れる計りなり。

大分前から眼鏡の度が合つてゐないと思つてゐたが、この頃は甚しくなつた。道で向うから来る人の顔など丸で解らない。相手が知つた者であればその歩き振りや身のこなし方で自然に判断すると云ふだけである。その位なら眼鏡をやめればいいとも考へるが永年の仕来りで外へ出る時は何の意味もなく眼鏡をかける。家で机の前やお膳の前で眼鏡をかけなくなつたのはもう何年も前からである。若い時からの近眼はその儘にて新たに老眼にもなつたのであらう。老眼鏡を用ゐなくても字を書いたり新聞を読んだり出来るだけで難有いと思はなければならぬ。しかし外へ出る時は不便である。眼科医を煩はす程の事もないが眼鏡屋へ行つて玉を取り換へる位はしなければならぬだらう。さう云ふ事が甚だ面倒でもあり第一どこもかしこも焼野原になつて眼鏡屋などと云ふものは何処にあるのか見当がつかない。

この頃は癪が悪く毎晩宵の口から夜半にかけて警報が何度も鳴つたり長く続いたりする。連続の寝不足を今日こそは補ひたいと思ふと又駄目になる。今夜もそんな事を考へてゐたら八時五十五分警戒警報にて十時二十分漸く解除になつた。九十九里浜、鹿島灘から東北へ大分行つた模様なり。

七月二十九日日曜日二十夜。昨夕は雨になるかと思つたがお天気は持ち直し、今朝は晴れであつた。梅雨は先日の時化降りの大雨で上がったのであらう。

今日は午まへの温度二十六度半F八十度にて、午後は一時頃二十九度F八十四度に昇つたけれど忽ち下がり二時半には二十七度強であつた。作物の為には悪いに違ひないが暑くないのは何しろ難有い。午後より薄曇りとなる。警報例に依りて甚だうるさし。先づ午前八時警戒警報、九時解除。次に九時二十分警戒警報、爆弾の落ちた音がした。解除は知らず。更に十時警戒警報、同三十五分解除。又正午五分前警戒警報、これは例刻の定期便と云ふ可きか。午過十二時三十五分解除。各一機又は一機宛の来襲なり。午後二時半頃ラヂオのブザーは鳴つてゐたけれど、この分は警報にはならなかつた。

午後家内本郷西片町の小森沢へ行く。小森沢は近所で焼かれて江戸川アパートに立ち退き今は西片町に移つてゐるなり。小森沢の娘さんの姉婿の藍野に江戸川アパートの事を頼んでおいたが、なほ念の為家内が頼みに行つた。帰つて来てから西片町に這入れる家があるが如何かと云はれたとの事にて一寸考へたけれど、西片町では郵船へ行くのにどうしても

市電を使はなければならない。市電と省線電車と乗り継ぐのは大変である。又辺り一帯に焼け残りの家が沢山あり過ぎる。何でも千軒位残つてゐると云ふ話なればそんな所にゐるとこれから後夜の警報の度にまた焼かれる前の様な気苦労をしなければならぬ。もとの家の焼け出される前の事を思ひ出しても億劫である。西片町に引越す事は断念してその話のことわり江戸川アパートをもう一度よく頼まうと云ふ事にきめた。江戸川アパートの建物は焼け野原に屹立して目立つからその内敵の爆弾攻撃の目標になるかも知れない。しかし狙つた所へは中中たるものではなさうである。又若し向うの狙つた所へ中たればそれこそ百年目である。狙つた目標を少し外れてそのまはりに落ちる事が多いとするとこの小屋の辺りは大本営に落とすつもりでの爆弾を頂戴しさうな所の様にも考へられる。西片町の様な所の焼夷弾攻撃は必至と思はなければならぬが、点々と残つてゐる建物に対する爆弾攻撃はそれ程必然なものか否か解らない様にも思はれる。何しろ江戸川アパートにはこの頃漸く気が向いて来たが西片町の話には気が向かない。それで近い内に又農学部へ行つて藍野君にその様に話して来るつもりなり。

一日小屋に坐つてゐて大分前から気に掛かり乍らたまつてゐた手紙葉書を書いてみんな片附けた。蚊遣りがあるから机の前に落ちついてゐる事が出来た。

七月三十日月曜日二十一夜。今日は一日敵機動部隊の艦上機による攻撃にて暮れた。朝小雨、間もなく霽れる。午前六時の濫度二十三度半。第一回午前五時五十五分警戒警報、六時空襲警報。ラデオの情報放送の間に昨夜敵は天竜川の川口に艦砲射撃を加へたと云つた。てつきり天竜川の鉄橋をねらつたものと思つたが後で判明したところによると浜松を砲撃したのであつた。八時十五分空襲警報解除。第二回午前九時空襲警報。十時十分空襲警報解除。同二十分警戒警報解除。第三回午前十一時警戒警報。同二十分空襲警報。午後二時十分空襲警報解除。同四十分警戒警報解除。

解除を待ちて家内と一緒に出かける。出社してすぐに昨日記載の件にて農学部へ廻つて来ようと思ふ。家内は明治産業に中川さんを訪ふ為なり。家内が明治産業へ行くのは初めてなり。二十二日の朝以来ずっと御飯の顔を見ず。既に仕方がない↓無い事と諦めて我慢してゐるが今度はその代用食も無くなりかけた。団子にする配給の粉は無くなり↓既になく中川さんに貰つた澱粉米ももうすぐに無くなる。後には大豆が何合か有るばかり↓計りなり。土曜日に中川さんに手紙にて澱粉米をもう一度貰ふ様に頼んでおいたが家内はその事に行くなり。東京駅まで同車し家内と別かれて昨日書いた手紙ハガキを出す為中央郵便局へ這入つて行つたら警防団が六尺棒を持つて入口を塞いでゐて変だから聞いて見ると空襲警報発令中だと云つた。些とも知らなかつたが電車が走つてゐる間に第四回の警報が鳴つたのであらう。それから会社へ行つて農学部行きはあきらめた。午後五時空襲警報解除、同二十分警戒警報解除。朝から再度警報は鳴つたが市中は何事もなかつた。古日とお茶の水迄同車にて帰る。家内は澱粉米をこなひだより少し多い位貰つて帰つてゐた。今日午頃土手の壕のお婆さんから息子さんの誕生日だと云ふのでのおこはを皿に盛つたのを家内が貰つて来た。但し小豆が無いからと云ふので紅で色をつけた赤飯なり。糯↓餅米なれども兎に角飯粒

と云ふ物の顔を見る↓にお目にかかるのは九日目なり。家内と二人で食べて何の変鱈も無し。

七月三十一日火曜日二十二夜。昨夜は寝たのは十時五十分であつたか九時五十分であつたかはつきり覚えてゐない。疲る前から眠くてぼんやりする様であつた。横になるとすぐに眠りにおち、どの位寝たかわからないが警報の音で目がさめた。その前にも一度警報が鳴つてゐるのを聞きながら眠り続けた様な気がするけれど、それは夢だかただそんな気がするのか判然しない。目がさめたのは十二時前である。飛行機の音がすると思ふ間もなく高射砲が鳴り出した。母屋のラヂオがよく聞こえないので情況が判断しにくい。その内に一番機と云ふ声が聞こえ、それでは一つではないのかと思つてゐると三番機と云ふのが聞こえた。又高射砲の音がしてどうも物騒だから起きてズボン穿いた。四番機五番機と云ふ様な事を云つてゐる。一機宛いくつも這入つて来たらしい。午前零時四十分頃警戒警報解除となつた様である。無理に起きたので頭痛し。午前一時半更めて寝る。

朝は曇後晴。午後出社す。散髪。早く切り上げて、本郷に廻り農学部を藍野を訪ふ。西片町の家の件江戸川アパートの件及び又藍野自製のキスキーを貰ひたき件の為なり。西片町の家はことわり江戸川アパートの事を更めて頼む。この前来た時より少し話の模様変りたる様にていつ迄待つても到底駄目な様な口振りなり。その内に段段もとへ戻り結局今留守になつてゐる他人名義の所ならきつとあるから頼んで来るとの事に落ちつき、その様にお願ひ申した。独身者の部屋ならあいてゐる由なれども五階六階だと云ふのでそれではエレジーターの使へない今日到底住めないと思ふ。キスキーも貰つたけれど、もう後はいけない様な口振りなり。この前は無くなれば又補充すると云つてくれたが、さうさうはいけないものと思はれ又事の道理正に然る可き事なり。歸りて味はふに味もこの前よりはそつけない不味にてちよいちよい飲む気になれず。或はこの方が長もちがしていいかも知れない。

午過十二時二十五分警戒警報。毎日の例刻なり。午後八時警戒警報。随分長く過ぎて十時三十分漸く解除となる。新潟へ行く途中の二機がこちらを通つたらし。新潟にはべて四機ゐた様である。更に十一時三十分警戒警報。今度は一機なり。郷里の伊勢へ行つたとかにて一両日前からバロンアブセントエンドしやもじシツクなる為ラヂオをちゃんちゃんと掛けないから情況解りにくし。

八月一日水曜日二十三夜。夏らしき朝ぐもり。間もなく雲切れて晴れた夏空となる。午後二時二十九度半F八十五度也。水曜不出社。

今日は不思議に朝から一度も警報鳴らず。午の例刻にも鳴らず。静かで結構なれども結構過ぎて無気味の様でもある。御飯抜きの夕飯を終はりて間もなく午後八時二十五分警戒警報鳴る。同五十五分空襲警報となり、それから午前二時四十五分の空襲警報解除まで五時間五十分に互る空襲にて、頭の上にこそ何事もなかつたが気疲れと連夜の寝不足の挙げ句表に起つてゐながら居睡りがつく程草臥れた。初めに第一波百五十機は鶴見に爆弾攻撃を加へた。それが終つてもうすんだかと思ふと第二波は各約百三十機で八王子立川と水戸を焼夷弾攻撃した。その他第一波の別の五十機は新潟方面に向かつて長岡を焼夷弾攻撃した由

である。又富山へも行つてゐる様で東部軍管区の四百数十機の外に東海軍管区の分も加へると総数六百機の来襲であつた由なり。空襲警報が鳴つてから家内と共に闇夜の表に出てゐたが空には星が輝き夜風がわたつて初めの内は外にあるのが苦にもならなかつたけれど、蚊がひどいので閉口した。間もなく鶴見川崎の見当の空の果てに爆弾の轟く響がして頻りに閃光がぴかぴかと明滅した。探照燈も暫らく振りに空を走つて敵機を捕捉したけれど一つも撃ち墜とせなかつた様である。その内に鶴見の方の空に真黒な煙がむくむくと上がり星空をゆるく東へ流れるのが見えた。段段に黒煙の層が大きくなつて大変な事だと思はれた。敵の攻撃が緩慢になり、もう大丈夫かと思ふ頃長い屏の先のもとの家の前あたりにはぼつかりと赤い色の明かりが見え出した。何だらうと思つたが解らない。まことちゃんの後の家で焼け出された大谷の壕舎の見当である。うつかりして蠟燭のあかりを洩らしてゐるのではないかと思ふ。屏の中の山口恒三郎さん土手の壕のお婆さんの倅さん二人は少しその方へ歩いて行つた。どうも大分遠い様だと云つた。自分はこの頃眼鏡の度は滅茶滅茶であり視力も弱つてゐるに違ひないから何をどう見違へるか解らないが、人にもそんな風に見えたのであらう。暫らくするとその明かりが少し高くなつた様だと云ひ出した。二十三夜の月の出だつたのである。次第に明かりの面が狭くなりその内に半月の姿がはつきりして来た。お月様に明かりが洩れてゐるぞと注意しても仕方なからん。鶴見川崎方面から騰がる黒けむりの塊りが次第に東へ流れて既に月の出る辺りまで達してゐる。風の工合なる可しその下辺の縁は真直な裁ち切つた様な線になつて、やつと青味を帯びて来た下弦半月がその黒煙の幕の中に尖がつた先から這入つて行つた。探照燈もすつかり消えて一先づすんだのかと思つたから一旦小屋へ帰つたが、又第二波の侵入にて今度は西の方にどろどろ、どしんどしんと云ふ音がし出したから又表へ出た。既に土手の向うの四谷の焼け跡のずつと先の空が赤く明かるい。鶴見川崎の方は暗いなりに盛んに煙を上げてゐるが、西の方の空は赤い。土手に登つて眺めると八王子と思はれる方角に大地震の時に見覺えた煙の入道雲が突き立つて赤く映えてゐる。大変な火事なのだらうと思ふ。その内に今度は赤い入道雲の右手に入道雲から一寸離れて赤い雲の段が出来た。高くはないが広く又非常に明かるい。立川に違ひないと思はれる。学生航空の当時の思ひ出が残つてゐる立川が今夜あの明かりの中で灰になつてしまふのかと思つた。うしろを見ると下弦の半月を呑み込んだ黒煙の雲が次第に大きくなりつつある。菜の花やではないが東の空は黒けむり西の空には火銀の入道雲にて戦争は想像にも描かなかつた景色を見せてくれる。余り長く続くので表に起つてゐる間にふらになつたのは既述の如し。午前三時二十五分警戒警報解除。警戒警報は丁度七時間目の解除なり。

八月二日木曜日二十四夜。晴。夏らしく暑し。午前十一時四十五分警戒警報。千江お米を少少持つて来。四合足らずなる由なれども先月二十二日以来の御飯がたけるので家内よるこぼ。午後出社す。古日がお酒を一升買つておいてくれた。百七十五円なり↓也。暫らく振りにて一献出来る。四谷駅を出て見れば晴れ渡つた夕空に鶴見の方から流れる煙が空の下の方を南から東に廻り北の方まで伸びてゐる。まだもとから煙が出てゐる模様なり。夕その

お酒を飲む。三合半位飲んだがゑひもせず夕一升さげて帰る。

八月三日金曜日二十五夜。晴暑し。午後二時半一二十度五分。

午前九時五十分警戒警報、十時二十五分空襲警報。P 51 編隊の来襲なり。一部は東京に侵入したらしく西北の空に砲声が轟いた。十一時三十五分空襲警報解除。午過十二時十分警戒警報解除となる。又午過十二時四十分警戒警報。これは定期便のB 29 一機なり。晴れた空の頭の上を通りビラを落とした様である。午後一時十分解除。

ぢきに帰る。夕方より昨日の酒にて古日と献酬の筈なれども一緒に帰つて来ては暑さも暑し小屋が一時に混雑して拾収す可からざる可し。乃ち先に帰り後から古日来。す。肴は配給の茄子二ケを焼いたのと千江の持つて来たトマトの残りと壕のお婆さん事菅野から貰つた呉汁↓つたごじると云ふ物と生葱のきざんだのを酢味噌にて食べ、それに味噌豆、澱粉米を供して不味の酒を案外おいしく飲みたり。一合計り↓許り残つた丈にて大体昨日と今晚で一升のお酒大体片づく。八月四日土曜日二十六夜。朝ぐもり、後晴。昨夜は一度も警報を聞かず朝まで続けて寝る事が出来た。一昨夜も然り。大騒ぎの後は敵も矢張り息抜きすると見えたり。今日も暑し。午まへ既に三十一度なり。しかし風ありて心地よき夏日和なり。焼けた後ですぐに思つたのは近年になつて丸善から買ったパナ帽と何年前に同じく丸善から買った日よけの青い蝙蝠傘とを郵船の帽子掛けに持つて行つて掛けておけばよかつたと云ふ事である。家内の様にあれもこれもと惜しがるわけではないが、その二品だけはすぐ後から思ひ出し度度繰り返して残念がった。この二三日漸く本当の夏らしい時候になつて会社の行きかへりが可成り暑い。青い蝙蝠傘とパナ帽の外に、この頃はカシミヤの黒い上著の事を頻りに思ひ出す。昭和四五年頃の夏、法政大学の講習会をやつてみた当時詔へて造らしたもので、自分の好みに依りポケットを少くしフロックコートにつける様な縫ひボタンをつけさせた。学校をやめてから忘れてみたが郵船へ行く様になつて夏に出して著て見たら、その時分はまだふとつてみたので上著が馬鹿に小さくて貧相に見えるから著るのはやめてくれと家内が云つた。去年の夏はもう痩せてみたから身に合ふだらうと云ふので又出して著て見たら些とも可笑しくなかつた。今年は身体がもつと小さくなつてゐるから、らくに著られて軽くて涼しかつたらうと未練らしく思ひ出す。唐助が浜松から貰つた冬の上著を著てゐるので三十度以上になると相当の我慢を要する。午前十一時五十分警戒警報、午過十二時二十分解除。B 29 一機にして東京の空へは来なかつた。午後一時三十分又警戒警報。さつきの一機がどこかぐるぐる廻つて戻つて来た様な情報であつた。暫らく様子を見た上で出社す。四谷駅の歩廊で解除になつた。一時五十分なり。夕早く帰る。夕早目に会社から帰る。今日は配給の麦酒三本あり。冷蔵庫や氷は叶はぬ事なれども汲み立ての井戸水に冷やして三本続け様に飲み大いにやれたり。それはよけれど↓然るところ半月に及ぶ穀断ちの後漸く今日の配給日まで漕ぎつけたと思つたら午後家内が近所の人人と請取りに行つて見ると配給所にお米が無いとかにて六日に延びた由なり。先日來既にお米を食べる食べないの問題でなく、代りの粉も中川さんから二度目に貰つた↓の澱粉米も大豆さへも無くなつてゐるところだから配給の日取りの狂ふは由敷大事也。この二日を如何に過ごすか

家内苦慮中なり。

八月五日日曜日二十七日夜。午前一時四十分警戒警報にて目をさまし一先づ起きたがこちらは大した事もなささうなので暫らくして寝かけると解除になつたらし。たしか午前二時二十分であつたと思ふけれどその時は既に眠くてよく覚えてゐない。朝ゆつくり疲て八時に起きた。こんな事は近頃珍らし。晴れて暑し。午後は三十二度五分、F九十度を越えたり。午前八時二十分警戒警報、九時二十分解除。又午前十一時二十分警戒警報、同三十五分空襲警報にてP 51の編隊来襲す。東京は何事もなし。午過十二時五十分空襲警報解除、午後一時警戒警報も解除となる。空襲警報解除の前中村武志君来、丸ノ内の本社へ行く途中待避の為四谷駅で電車を降ろされて来たとの事なり。上がり口で一服して帰る。家内本郷西片町の小森沢へ行つた。江戸川アパートの件なり。藍野留守にて何の話も云ひおきも無かつたとかにて今日は要領を得ずに帰り来る。お米の配給当実が延びた為一日二日のつなぎに困じ家内門内の山口から配給粉を二升借り来る。配給の豆にて返す約束の由なり。御飯抜きの夕飯遅くなりてまだ終らぬ内に午後九時五分警戒警報九時五十分空襲警報なり。敵機は前橋高崎渋川等を襲ひて焼夷弾攻撃を加へたる由にて遠い所だから火の手の薄明かりも見えなかつたが、二七の通の先の方角に青白い色の光ある様にて、何だらうと思つたらその内に霞ヶ浦へ照明弾を落としたとラヂオが云つたが霞ヶ浦はその方角に当たるにや。午前零時十五分空襲警報解除、同四十分警戒警報も解除となりて配給粉の団子と澱粉米の御飯の様な物とを食べて寝る。

八月六日月曜日二十八夜。

晴あつし↓晴れ暑し。

午前五時五十分警戒警報。

B 29 一機

なり。次いで午前七時三十五分警戒警報、同五十五分空襲警報にて又昨日の如くP 51編隊の来襲を報ず。終り頃西北の空に砲声を聞きたり。九時五十五分空襲警報解除、十時十分警戒警報も解除となる。

本当の夏らしき暑さになつたから今日から夏服に著かへる。きびら色にて真白ではないが、小型機の来襲にそなへて白い物は著るなど新聞などで頻りに云つてゐるので、当の小型機は構はぬとしても行人や電車の相客の目が五月蠅いから成る可くよさうと思つたけれど外に無いのだから止むを得ない。構はずに著て歩く事にせり。当の相手の事は構はぬけれど、こちらの側の仲間の目が五月蠅いから、口が八釜敷い↓八釜しいからと云ふ気兼ねは満洲事変日支↓日華事変以来の普通の感情なり。こんな事がどれ丈日本人を意気地無しにしたか解らない。

午後出社す。早目に帰る。夏らしく暑し。電車から降りて四谷駅の歩廊を渡る風に吹かれて暫らく涼むのはこの頃毎日の仕来りなり。今日もさうしてゐたら大きな顔の男が階段から下りて来た。普通の顔の何倍もある位大きい。相撲取りだと気がついたが、国民服を著てゲートルを巻いてゐる↓巻いた風態は常人と変はらない。ただ顔ばかり↓が無暗に大きくその顔が頬骨がやけに飛び出して目がくぼんで↓くぼみ厚いきたない唇が向うの方へ突き出てゐて、↓ゐる。大きいなりに貧弱である。この頃の食べ物で相撲取りがこんな顔になつたのだと云ふ事を考へて見たが、可笑しくも面白くもなかつた。留守に青木の弟来りし由。

今日は漸くお米の配給あり。但しお米は六疋にて大豆が十四疋になる由。しかもそのお米は↓の中に脱脂豆がうんと這入つてゐると云ひて家内こぼす。

八月七日火曜日二十九夜。午前零時四十五分警戒警報にて目を醒ます。ラヂオよく聴き取れず、又間抜けのサイレン何時迄も鳴り止まぬ為その音に妨げられてなほラヂオが聞こえなかつた。起きたけれど身支度はせず。小屋の上がり口から空を見たらサーチライト走り高射砲弾の炸裂する閃光頭上の空にぴかぴかと明滅せり。その時の一機が通り過ぎたのでもう済んだかと思ふと後から又一機真上を通りサーチライトの光を浴びながら東南の方へ遠ざかつて行つた。解除は知らず。

晴。朝ゆつくり寝て起きたら間もなく中村来。色色の物を持つて来てくれた。こなひだ蚊遣線香を頼んだので蚊帳がないと思つたらしく蚊帳を持つて来てくれた。今迄聞いたところによると、この頃の蚊帳は千円とか千五百円とかすると云ふ話なり。起きたばかりで未だ寝床がたたんでなかつたので片隅に寄せた蚊帳を見て、おや蚊帳はお有りでしたかと云つてその儘持つて来たのを片づけた。貰はずに済んだけれどその親切は誠に難有い。食べる物は馬鈴薯、唐茄子、隠元、長茄子、胡瓜、トマト等を重いのに沢山背負つて来た。先日来るくろく食べる物がなく又特に野菜類の成分が身内に欠乏してゐる様にて何か欲しいものだと思つたところへトマト胡瓜などの新鮮な色を見て目がさめる様であつた。その外渦巻の蚊遣線香は近日中に届けると云つて今日は太い棒状の線香をくれた。蚊遣が一番難有いかも知れない。又刻煙草二袋、これも二三日来切れてゐるので何とか手に入れたいと考へてゐたところである。それからキスキー一本足らず約三合。これ亦難有し。中村のゐる内に午前八時三十分警戒警報、九時解除。B 29 一機なり。中村去りて間もなく唐助来。胡瓜茄子トマト少少持つて来た。唐助のゐる内に午前十時三十分警戒警報、すぐ続いて空襲警報にて、今日も亦P 51 編隊の来襲なり。外へ出て電車に乗るのはあぶないのでその儘唐助もゐて遅い朝飯に仲間入りした。正午十二時空襲警報解除、午過十二時十分警戒警報解除。富士見町で焼け出されてもとの家の筋向ひに立ち退いてゐた姉妹の芸妓あり。その内の一人は私に扇子に揮毫して貰つたと云つてゐると云ふ事↓話を二三日前家内から聞いた。その元の芸妓午後来りて食用油が手に入ると知らしてくれた。小屋の前の庭で家内と立ち話をしたが、後で顔を出して挨拶をしたけれど↓したれど見覚えも↓がなく思ひ出せなかつた。油は一升一罐↓罐にて二百三十円との事也。家内は午後東郷小学校に移つてゐる区役所へ戦災援護金を請取りに行き三百五十円貰つて来たが意外に手間取り、尤もこの頃は何事でもさうであるけれど、遅くなつても是非出社したいと思つてゐたのは叶はず不本意の不出社とす。以つて油をねざる可し。

昨日四谷駅の歩廊でやせた相撲取りを見たが、自分の顔は髪を分ける時、爪楊枝↓爪楊子を使ふ時、その他しよつちゅう小さな円い鏡で見えてゐるけれど、鏡の大きさは大きな懐中時計位しかないから、頭の分け目や齒の間を見るには事を欠かないが、その度に顔が全体が映るわけではないので、自分の顔の憔悴の程度は解らない。郵船会社の手洗↓トレットでふと壁の鏡を見る時など自分ながら驚く事がある。この何日以来特に甚しい様である。昨日

も会社で洗面所の鏡の前を通りかけて、その中に映った自分の横顔に吃驚した。その帰りにやせた相撲取りを見て一層感じたかも知れない。何か食べなければいけないと思ひ乍ら↓思ふ。さう思ひながらどうにもならなかつたところへ中村君が色々今の自分に取って適切な物を持つて来てくれたし唐助も持つて来た。その上食用油が手に入つたので随分豊かな氣持になつた。一月ばかり前郵船で買ひそこねた油は百七十円位との事であつたが今では何でもすぐに高くなる。この頃の自分の身体には二百三十円が高いとも考へてゐられない様であるならない。

八月八日水曜日三十夜。立秋。月夜を数へて三十夜と云ふ可きか否か解らないが今迄の例に従ひ仮りにさうしておくけれど、月齢は零と云ふ事になつてゐる様である。水曜不出社。朝は雲濃く西の方↓空も大分かぶさつてゐたので或はお天気が変はと思つたが矢張り夏空の朝曇りであつた。間もなく快晴となり暑し。今日は立秋なり。立秋の日に郵船の大きな船に乗つて名古屋港に一日浮いてゐた事など思ひ出す。何丸であつたか、少し考へれば解るけれど、すぐには思ひ出せない↓その名前が出て来ない。

今日の朝飯は胡瓜トマト昆布の煮たのと生味噌をおかずにして、配給粉の油焼きの団子と昨日の御飯の残りなり。御飯は少し来かけてゐるので洗ひ飯にして家内が食べた。団子と御飯にはきなこ↓きな粉を掛ける↓振り掛けたり。昼は遅昼↓午にて茄子の油いため、味噌、きなこ↓きな粉に団子の残りと炊き立ての油御飯なり。先日中にくらべると大変な御馳走である。さう云ふ物を食べる時、がつがつしてやしないか↓してゐないかと思ふ。トマトの切れに噛みついてゐる時ふと氣がついて見ると猿が何か食べてゐる時の様な趣きが無いでもない。

去年の夏時分、食べ物がいよいよ窮屈になつた当時、頻りに巢鴨監獄の囚人の食事の事を思ひ出した。昭和五年か六年頃であつたと思ふ。所長が法政大学の古い出身者であつて、航空研究会↓学生航空の会長であつた↓をしてゐた自分に封し巢鴨監獄は近近府中のどこかの新築に移転するにつき↓就きその移転先の空中写真を撮つてくれないかとの依頼あり、↓。承知してその写真は写して渡したと思ふ。話の序に巢鴨監獄を見に来ないかとの誘引を受け、副会長の鄭審一氏↓鄭教授と一緒に出かけた時、丁度囚人の晩飯の時刻前となり、監守が今晚の囚人の食事を岡持の様な物に入れて所長室へ持つて来た。岡持は平つたいが、その時の容れ物は氷屋が誂へを届けて来る様な四角い背の高い、前に戸のついた手さげであつた様な記憶がある。所長がそれを開けて見て中の物を一箸づつ私と鄭さん↓鄭教授の前で食べた。毎日かうして所長が囚人の食事を先に試食せられるのだと監守が説明した様に思ふ。おかずが何であつたか覚えてゐないけれど、その時のこちらの腹加減もあつて案外うまさうだと思つた事を思ひ出す。去年の夏以来自分のお膳が貧相になつてから、ちよいちよいその時の囚人の食事を思ひ浮かべた。巢鴨の囚人の方が御馳走を食べてゐると云ふ事を、初めはたとへる様に云つてゐたが、いつの間にかそれが本當になり当然となり当り前の話になつてしまつた。勿論今の囚人の食べ物想像して比較するのではない。囚人のお膳に奇



せてそのかみを恋ひしたふだけの事である。

午後三時四十五分警戒警報。同五十五分空襲警報。こんな時間の空襲は初めてではないかと思ふ。西北の空に爆弾落下の音が続け様に聞こえた。五時十五分空襲警報解除、五時二十五分警戒警報解除となる。田無荻窪の方面の工場地帯の攻撃なりし由にて荻窪の中島飛行機製作所の唐助を案じたり。夕家内湯を沸かしバロン松木の盥を借りて行水を遣はして入れた。五月二十五日の空襲の晩は家の風呂がたつてゐて家内は這入つたのだが自分は這入らなかつた。それより何日か前に這入つてから以来凡そ二月半の垢を溜めてゐたわけである。冬と違ひ特にこの何日か暑くなつてからは氣持が悪くて弱つてゐた。胸や背に汗が出ても拭く事が出来ない。拭けば大変な垢がよれて方図がつかなくなるのが解つてゐるからその儘そつとして置く。飯田橋駅の近くの銭湯まで出かけるのは億劫である。きたない身体をシャツやずぼん下にそつと包んで我慢してゐた。取つておきの昔の花王石鹼ありて少い盥の湯でも大体八十日近い間の垢は落ちた様である。夜十一時十五分警戒警報、二目標が侵入したと云つた。十一時五十五分解除。

八月九日木曜日一夜。晴。午前六時四十五分警戒警報にて敵の機動部隊また本土に近づき東北地方に艦上機を放つて攻撃を加へてゐる由を報ず。七時三十五分解除。又午前八時十五分警戒警報。B 29 一機なれども去る六日の朝七時五十分B 29 二機が広島に侵入して原子爆弾を投じたる為瞬時にして広島市の大半が潰滅した惨事あり。その後だから一機の侵入にても甚だ警戒す。九時解除。唐助来。午後遅く出社す。家内は本郷西片町の小森沢へ江戸川アパートの事にて行つた。省線電車にて神田駅迄同車す。今日は古日会社に来て居らず。古日の机の上に先月中村に頼んでおいた渦巻の蚊遣線香一函あり。中村の使が届けてくれた由なり。一函五袋十本には二本足りないけれど昔の菊牡丹印の上等品なり。大いに難有い。平安をもたらず魔法の小函を持つて帰る様な氣がする。夕帰る。家内後から帰来。神田駅の近くに売つてゐたとて家内も蚊遣線香を買つて来た。太い棒状にて十本一把一円六十錢との事也。使つて見るに利き目あり。家内は三把買つて来たが明日もつと買ひ足しておかうと思ふ。菊牡丹計りではすぐに無くなる。露西亞が英米及び支那に加担して日本に宣戦せり。八月十日金曜日二夜。晴。午前六時十五分警戒警報、七時空襲警報。今日も艦上機の攻撃なり。昨日よりは東京に近く千葉方面に来てゐる様であつた。B 29 も一つ二つ来てゐたが、その内九時半頃になると今度はB 29 百機許りの編隊がやつて来て東京の東北方を攻撃した。爆弾の音が盛んに聞こえた。赤羽駅の附近の線路をも狙つた様である。十時五十分空襲警報解除、十一時十五分警戒警報解除。更に午前十一時五十分警戒警報にてB 29 一機の侵入を報ず。午過十二時十五分頃解除。又午後一時十五分警戒警報、今度は艦上機なり。二時四十分解除。午後遅く出社す。途中神田駅にて降りて昨日家内が蚊遣線香を買つた古本屋へ行き二十把買つた、三十二円也。古日は今日も来て居らず、間もなく帰る。四谷駅の階段にて家へ野菜や鮎などを持つて来てくれる古日に会ふ。古日と四谷駅を出かけた時警戒警報の警笛が鳴つてゐた。午後五時四十分なり。六時十分解除になつたがその直前東北の空に爆弾の落下音が聞こえた。その時のラヂオも一部に投弾したと報じた。古日はおなかの工合が

悪いと云ふのに色色の物を持つて来てくれた。今夕も行水を遣ふ。今日は簡単にすます。

八月十一日土曜日三夜。朝ぐもり、後晴。不出社。

午前一時二十分警戒警報、B 29 一機なり。二時三十分解除。午前十一時三十分警戒警報、B 29 一機なり、同五十五分解除。午過十二時二十分警戒警報、同五十五分解除。出社するつもりであつたが何となく気が進まぬのでよした。夕唐助来り先夜の八王子の空襲にて大井が焼夷弾の直撃を受け負傷したとの由を報ず。大井の間借りしてゐる農家は八王子の町から大分離れて居り中央線の駅もちがふと云ふ話であつたが、そんな離れた所の家まで焼かれて一物も出せなかつたらしい。入院してゐるさうであるが一命に別状ある程度ではない様である。又唐助は美野から聞いた話なりとて亜米利加は明十二日東京に原子爆弾を落とすと云つてゐる。この頃は敵の予告がその通り実現するのだから用心しなければならぬ。その話は美野が新聞記者から聞いた事にてその記者は十二日一日だけどこか東京を離れる切符を手に入れると云つてゐたが露西亞の参戦で戦争が終局に近づいたらしいから或は敵はその予告を実行しないかも知れない。しかしもしさう云ふ事になつたら自転車に乗つてどこか家並みを離れる方角へ一生懸命に走ると云ふ事にしてゐる由である。これは秘密にしなければならぬのだが、しかしお父さんの所にだけは知らさなければならぬから来たと云つた。明日もし警報が鳴つたら気をつけてくれと云つた。唐助のまだある内午後八時警戒警報鳴る。敵らしき目標が近づいたとか侵入したと云ふのだが、頻りに敵らしきを繰り返し、云ふ事が甚だ曖昧であつた。八時三十五分解除。更に午後十時十分頃警戒警報、同二十分空襲警報になつたが一機づつの六目標が各地をうろうろしたらしく東京の方へ近づいたのは一つもなかつた。十一時四十五分空襲警報解除。もう警戒警報も解除になるかと思つてゐると、その後から更に一目標 B 29 一機が洋上から京浜地区に近づいたとの事にて空襲警報になつた。午前零時十五分なり。一機の侵入にて空襲警報が鳴り響くなど甚だ物騒なり。零時三十五分空襲警報解除、同五十分警戒警報解除になつたがその後いつ迄も味方の飛行機が空を飛びて穏やかならず、中村に貰つた菊牡丹の蚊遣一卷を割愛して蚊帳をつらずにごろ寝をする事にした。

八月十二日日曜日四夜。朝ぐもりもなく朝から快晴なり。暑いけれど風あり温度はやつと F 九十度に達するか達しないかの程度なり。朝から昨日の唐助の話にて気を遣つたが先づ無事に午を過ぎ、又午後も無事にすんだ。夕五時前後ブザーの昔にて茨城栃木埼玉には警戒警報が出てゐる事を知つたけれど間もなく解除になつた。B 29 一機が宇都宮の辺りから南の方へ出て行つてしまつた様である。結局朝から十時頃就眠する迄一度も警報鳴らず。八月十三日月曜日五夜。晴。不出社。昨日は朝から寝る迄警報を聞かず、原子爆弾と露国の参戦による戦局の急転の為ではないかと思つた。又夜中一度も警報で起こされる事もなかつたが、今朝は早朝午前五時半警戒警報にて目をさますとすぐに空襲警報となり、十時五分一たん空襲警報解除となつたが更に午前十一時十五分又空襲警報にてそれから後はいつ迄も解除にならず、敵の艦上機の攻撃夕方に及びてもなほ続いてゐる。今日は幾度も市内へも侵入した模様である。砲声や爆弾の昔がさう遠くないあつちこつちで聞こえた。午頃には艦

上機の外にB 29が一機宛二機来た様である。母屋のラヂオが今日は聞かれないので甚だ気を遣ひ気勞れがした。しやもじの方のラヂオは鳴つてゐたのだがよく聞こえない。もつと聞こえる様にしてくれと頼むと調子が悪いのだとの事にて結局聞かれなくしてしまつた。バロン松木は不在にてそちらのラヂオは今日は鳴らない。一兩日前郷里の宇治山田から帰つて来たバロンの親戚の書生としやもじと仲悪く、その為のしやもじの意地悪と覺えたり。困るのはこちらであつて、やきもきすれども如何ともする能はず。バロンのラヂオのスイッチを入れて見ようとしたが反応なし。いぢくり廻してこはしてはならぬと考へあつさり諦めてバロンの帰來を待つ。午後バロン帰りてよく聞こえる様になつた。それで安心した。ただの空襲でなくB 29が這入つて来るといつ原子爆弾を落とすかも知れないと云ふ格別の不安あり。さう云ふ際にラヂオが聞かれないとなほ一層の不安を感じる。

夕五時頃ラヂオが駿河湾から侵入して富士川に沿ひ上ぼつて行く不明の爆音ありと云つた。間もなくB 29一機なりと云つた。そのつもりで用意してゐると忽ち東京の上空にやつて来たかと思ふ内に何か落とした様である。ビラかも知れない。その前から家内と松木の防空壕に這入つてゐたので落下昔は聞かなかつた。そのB 29が行つてしまつてからも未だ艦上機の攻撃は続いた。加之五時頃には敵の潜水艦が伊豆の下田を攻撃してゐると放送した。まだ明かるい近海の水面に浮かび上がつてそんな真似をしてもどうする事も出来ないであらうか、自烈たき限りなり。午後五時四十分漸く空襲警報解除となり、六時警戒警報も解除になつた。今日は一日空襲警報にて出られもしなかつたが事によると今日は出社はせぬと云ふつもりでもあつた。今日だけでなく雨三日外へ出るのはよさうかと思つてゐる。先づ物騒なればなり。又暑いのと食べ物関係とで身体が衰へてゐる様だから少し休養しようかと云ふ考へもあり。午後八時五分か十分前に警戒警報鳴る。その少し前から雨の音がし出した。暫らく振りの雨にて好い工合だと思ふ一方に若し雨雲のかぶつてゐる時空襲がある困ると云ふ取り越し苦勞もした、その時に警報が鳴り出した。松木は夕方前また出掛けたらしくその居室の座敷からは明かるい電氣が庭に射してゐていつ迄も消えない。松木の書生がゐないのではないかと思ふ。しやもじの倅があわてて廊下から行つて電氣を消した。その後又やつと午後から聞こえ出したラヂオが鳴らなくなつてしまつた。書生が小屋の前に来て聞こえなくなつてしまつたと云ふので電氣を消した時ラヂオの電流も行かなくなつたのではないかと聞いたが、さうではないらしくラヂオは明かるくなつてゐると云ふので、それでは素人には解らないから諦めようと云つた。バロンは明日でなければ帰らぬ由。晚又警報が出たら甚だ困ると思ふけれど仕方がない。その内にしやもじの所で人には決して聞こえない様にした自分のとこのラヂオで今の警報が間違ひであつたと云ふ放送を聞いたらしく、電氣を明かるくして一たん閉めた雨戸を開け出した。間違ひかと家内が二度も三度も尋ねたら倅が間違ひだと教へてくれた。

八月十四日火曜日六夜。曇稍涼し。午後二時過二十九度半F八十五度也。不出社。

昨夜間違ひのサイレンの後午後十一時四十五分本物鳴る。B 29一機なり。頭上に來たらしいので真暗闇の足許をさぐりながら小雨の中を家内と防空壕の入口まで行つた。午前零時

十五分警戒警報解除。更めて寝たが又警戒警報のサイレンにて目を醒ましたけれど疲労困憊して起きる能はず。午前二時二十分であつたと思ふ。

今朝は午前六時二十五分警戒警報にて目をさました。B 29 一機なり。家内は隣組の当番にて新聞を取りに行つてゐなかつた。又防空壕の入口迄行つた。この頃はB 29 の一機を特に警戒する様になつた。十一日の夜更けの如く一機の侵入に空襲警報を鳴らす情態なり。六時四十五分頃解除。又午前七時三十分警戒警報、同じくB 29 一機なり。八時前解除となる。その度に何か落とす音がするのはピラ撒きなる可し。今日はしやもじのラヂオが聞こえる。バロンの書生君は高森と申す齒科学校の学生にて今朝は試験だと云ふので早くから出かけて不在である。それでラヂオが大きな声をするのかも知れない。午前八時三十分又警戒警報、さつきから一時間目毎に鳴つてゐる。矢張りB 29 一機なれど今度のはこちらへは来なかつた。九時解除となる。

今日も不出社のつもりでゐたが朝から頭痛く行くつもりでも出かけられなかつたであらう。午後珍らしく午睡をした。よく眠つたらし。目がさめて一服してゐると警戒警報鳴る。午後二時二十分なり。いつもは幾つも鳴るサイレンが一つしか鳴らず。しかしそれと共にすぐ消防署の半鐘が鳴つたからそのつもりであると、いつ迄経つても何事もなくしやもじのラヂオも何とも云はぬらしい。間違ひだつたに相違ないが、只今のは間違ひであつたとラヂオが放送する程でもないほんのこの辺りだけの間違ひだつたのかも知れない。しかしその度に神経はつかふ也。

夕晴れる。新月土手の松に懸かりて夏の宵らしき涼風わたる。土手の兵隊は今日何処かへ引き上げて居なくなつてしまつたさうである。午後八時過、表に消防自動車の警笛の昔がしてゐると思つたが、その内堀の外にて火事だと云ふ声あり。家内が出て見て市ヶ谷本村町のもの土官学校跡の大本営のうしろの方に火の手が上がつてゐると云つた。薬王寺の辺りは焼けてゐないさうだから、そこいらに火事が起こつたのかも知れない。普通の火事はこの頃珍らしく、太平の趣がある。門まで出て見たら大分大きな火の手である。土手の壕のお婆さんの倅さんは火事を見に行つたとの事であつたが間もなく歸つて来て大本営の中だと云つた。左内坂から登つて大本営の屏のまはりを通つて来たのだから間違ひないが、中に火の手が見えてゐるのに裏側の門は閉まつてゐて馳けつけて来た消防自動車も門の前でぶうぶう鳴らしても開けないし、門番もゐるのだが案外平気な顔をしてゐたと云つた。その話を聞いて何か焼き捨ててゐるのではないかとも思はれた。九時半頃寝たが十一時に警戒警報にて起こされた。しやもじラヂオ小さくてよく聴き取れない。十二時前解除と云つたのかと思つたけれど、さうでなく午前零時三十分警戒警報が鳴り出した。ラヂオを聞くには開けたてに明かりが洩れぬ様小屋の電気を消し一外に出て庭に起たなければ解らない。平から六十目標、銚子から二十五目標侵入してゐると云つた様である。少数機宛で方を焼夷弾攻撃したらしい。未だ停戦と云ふ事にはならぬかも知れないが今になつて焼かれたり殺されたりする人は全く気の毒だと思ふ。午前三時空襲警報解除。同五分警戒警報も解除となり、それかち暗がり足をよごした様に思つたので足を洗つたり一服したりして寝た。既に四時

なり。もう大分日がつまつてゐるのに東天には青色の美しい明かりが射し始めてゐた。八月十五日水曜日七夜。朝曇り。午頃から晴。温度は三十一度半止まりにてF九十度には達せず。水曜不出社。午前五時三十分、さつき寝たばかりなのに警戒警報で起こされた。同四十五分空襲警報となつたが、しやもじラヂオが聴き取れぬ為情況わからず。家内が門内の藤田へ聞きに行つて艦上機の来襲なる事が解つた。大した数で来てゐるのではないらしいがよく解らぬ。その内に高森が学校へ出かけたと思ふと急にしやもじラヂオの声が大きくなつた。はつきり聞こえてほつとしたけれど、その意地悪には呆れる外なし。八時空襲警報解除となる。

昨夜より今日正午重大放送ありとの予告あり。今朝の放送は天皇陛下が詔書を放送せられると予告した。誠に破天荒の事なり。午まへしやもじ小屋に來りてラヂオを聞きに来る様案内してくれた。正午少し前、上衣を羽織り家内と初めて母屋の二階に上がりてラヂオの前に坐る。天皇陛下の御声は録音であつたが戦争終結の詔書なり。熱涙滂沱として止まず。どう云ふ涙かと云ふ事を自分で考へる事が出来ない。今日の新聞は右の放送後に配達せられる事になり時間が遅かつたので今曉の空襲の記事あり。来襲のB 29 は二百五十機にて福島新潟関東及び東北の各地に焼夷弾攻撃を加へ又昨日は大阪広島へも二百五十機が来襲してゐる。

夕古日来。土曜日以來出社しないので見に来てくれたのであらう。古日もこの何日来急に瘦せたり。古日と話してゐる時小屋の前の薄暗がりにバロン松木起ちポツダム宣言受諾の詔勅は下つたけれど陸軍に盲動の兆ありとの話をきく。こちらの戦闘機が出撃する事になれば向うも又大いにやつて来るに違ひないから若し警報が鳴つたら間違ひと思はずに矢張り防空壕に御這入りになる様にと注意してくれた。今日は唐助の誕生日也。

八月十六日水曜日八夜。今日辺りから日本の新しき日が始まると思ふ。そのつもりにて昨日の欄と今日の欄の間をあけた。朝曇。午まへから晴れた。昨夜八時半就寝。間で目はさめたが今朝は六時半に起床す。起きた後でよく寝たものと感心す。午前十時五分警戒警報、B 29 一機宛二機なり。初めに三機と放送したが内一つはB 24 であつたと訂正した。東京の空へは来らず。昨夕の松木男爵の話の様な事は何人も心配する処なれど幸ひにそんな事もないとすれば防空警報のサイレンを聞くのも大体これがお仕舞となるのではないかと思ふ。午前十一時解除となる。午、今は鎌倉に行つてゐるものと又隣りの岡本の御主人來り自作の胡瓜を三本くれた。この頃の胡瓜は音に食べた林檎バナナ水蜜桃葡萄等の水菓子から一切の野菜類は更なり清涼飲料の炭酸水ジンジャーエールやアイスクリームシヤベエ迄も含めた食べ物になつてゐる。毎日食べてゐるが途切れると困る。

午後出社す。行きがけに神田駅にて降りてこなひだの古本屋の蚊遣線香を又二十把買つた。後で使つて見ると今度のはこの前のは口が違ふらしい。目方が軽く煙を吸ふと咽喉が痛い。夕古日とお茶の水迄同車にて帰る。四谷駅に降りてからいつもの様に歩廊でゆつくり涼んでゐたら後から又古日が來た。お茶の水駅からの市川行の電車が大変な混雑にて乗れぬ故、四谷から乗つて行く為にここ迄來たとの事なり。それで一層腰を落ちつけてゆつくり

してゐると不意に小野貞が前に立つて挨拶した。思ひ掛けなかつたので初めは早稲田ホテルのおこうさんかと思つた。お貞さんは古日とも知り合ひなので三人で暫らく話した。段段お貞さんが饒舌になつたから歩廊の腰掛に残しておいて帰つた。古日も一緒に起ち上がつてお茶の水行の歩廊の方へ渡つた。

八月十七日金曜日九夜。昨夜初めてこほろぎを聞いた。二三日前の晩に木鈴虫の声がした様であつたが確かでない。方が焼野原になつたので今年は秋の虫も少いであらう。昨夜就褥して間もなく十一時半頃きなくさ↓臭いにほひがするので心配した。小屋の炊事場に残火があつてもあぶないし、しやもじの所で↓母屋から火を出されては小屋は大変である。暫らく様子を見たが何でもない、↓。風の工合で大本営の書類を焼いてゐる煙が流れて来たのかも知れない。

今日は朝から晴なり。午前十時四十分警戒警報、B 29 一機なり。午後出社す。頭上に聞き馴れた音がして遠ざかつた。もう危害は加へないだらうと云ふ気がする。十一時十分解除。午後家内を伴ひて出社す。家内は部屋の掃除の為なり。中野がゐなくなつてから古日が二度掃除してくれた事があるがそれも大分前の事にて、空襲がひどくなつてからは会社にゐる時間を少くする様にした為暗幕を下ろした儘の窓を昼間も開けず、埃やごみを成る可く見ない様にしてすませておいたが、近頃あんまりひどくなつたので家内に掃除に来てくれと云ふ事は大分前からさう云つてあつた。半月以来は今日こそと云ふ日が二度あつたけれど果たさず、到頭今日に及べる也。掃除は古日も手伝ふ。五月二十五日の焼け出される日に部屋に入れて貰つたロッカーはごみだらけの儘未だ使はずにゐたが、それも今日から使ふ事にして初めからの予定通り家から持つて行つた著作本その他を入れた。夕おそく帰る。古日お茶の水迄同車。電車の中の明かりが今迄より明かるい。高架線から見える焼け残つた所所の建物の窓に燈火が美しくともつてゐる。今日は焼け出されにお米と乾麵麴の特別配給あり。一緒に帰つて来た家内が一足遅れて頼んでおいた家へ寄つて貰つて来た。会社にゐる時から腹がへつて堪まらなかつた。以前は空腹は一つの快感であつたが今は苦痛である。肺病が空腹を気にする気持が諒解出来る様である。尤もこの頃の身体の工合は肺病やみと大して違はないかも知れない。昔京都の中島↓柿本の所へ遊びに行つて比叡山から坂本へ下りた。日吉神社の前を通つてヒエ神社と云つたら中島が成る程君は本当の読み方をする、僕等はヒヨシと云つてゐると云つたのを思ひ出した。琵琶湖の畔の茶店で休んだが、そこで中島↓柿本はあんこの沢山這入つた餡麵麴をいくつも食べた。その晩は中島↓柿本の家に帰れば明石鯛と猪鍋の御馳走が待つてゐるのであり又明石鯛もあつたかも知れない。出かける前から解つてゐたので楽しみにしてゐたのだが、丁度いい工合に腹がへつて来て帰つてから食べたなら嘔うまからうと思つてゐるのに、中島↓柿本はその大切な空腹を餡麵麴で台無しにしてゐる。よしなさいと云つたら、いやこの空腹感がいけないのだ、↓。腹がへつたと思ふとそれだけ身体が弱ると云つた。

そんな事をこの頃の自分の身体にあてはめて考へる。そんな気がする様である。今日も少し遅くなつた為になくぐつたりした様である。こなひだ内から元気がないのだが一層

衰弱↓憔悴した様な気がする。早速家内が請取つて帰つた配給の乾麩麩を二つ三つ食べた。動物園の鹿が食ふ様な物だと思ふけれど実にうまい。

しかし考へて見ると五月二十六日の夕方郵船から歩いて帰つた時家内が近所の石橋で貰つて来たこの前乾麩麩を食べた時程の味はない。腹のへり方がその時程でないからであらう。五月二十六日の夕方には自分も思はずすぐに乾麩麩を口に入れて歩き歩きのは焼け出された翌くる日の夕方、道傍で近所の人から貰つた袋の中から摘まみ出して歩きながらいくつ↓幾つか食べたから、人の事も云はれないが、この頃往来でも↓や電車の中でも↓何か食べてゐる者が多くなつたのは困つた事である。人前で若い女が一番不行儀な↓さう云ふ不行儀は若い女に特に多い様である。しかし男も食べてゐる。男でも女でも人前↓人前で何か食べてゐる顔はみんな猿に似てゐる様に思はれる。猿だと思つて見てゐると頬つぺたの動かし方から、口に食べ物を持つて行く手つきまでがそっくりそんな気がして来る。こちらが腹がへつてゐるから、見てゐてなほさらにがにがしい気がするに違ひない。犬になつて吠えついてやつたら虫がをさまるだらうと思つたりする。

(以上「餓鬼道日記」)

## 主要参考文献

はじめに

- 山田桃子「戦前期「随筆」の流行と内田百閒——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」『日本近代文学』、二〇一九年十一月、日本近代文学会。
- 伊藤整「解説」『昇天』一九四八年、新潮社。
- 芥川龍之介「点心」『新潮』一九二一年二月。
- 芥川龍之介「内田百閒氏」『文芸時報』一九二七年八月四日。
- 三島由紀夫「解説」『日本の文学 34』一九七〇年、中央公論社
- 高橋義孝「解説」『昭和文学全集 42』一九四九年、角川書店。
- 川村二郎『内田百閒論 無意味の涙』一九八三年、福武書店。
- 内村剛介「幻想は宿命——妄執の作家たち（10）内田百閒」『文藝』一九七五年六月。
- 川村二郎・色川武大「内田百閒の復活」『文学界』一九八五年三月。
- 酒井英行編『内田百閒 夢と笑い』一九八六年、有精堂。
- 森茂太郎「百閒漫歩——逢魔が時の文学——」『Scilla』二〇〇九年十二月、二〇一〇年十二月、二〇一一年十二月、二〇一二年十二月、二〇一三年十二月、二〇一四年十二月、二〇一五年十二月、二〇一七年十二月、二〇一八年十二月、二〇一九年十二月。
- 内田道雄「内田百閒」『日本近代文学大事典』日本近代文学館、小田切進編、一九七七年、講談社。
- 内田道雄「内田百閒」『明治・大正・昭和作家研究大辞典』作家研究大辞典編集部編、一九九二年九月、桜楓社。
- 内田道雄「内田百閒」『日本現代文学大事典 人名・事項篇』三好行雄、竹盛天雄、吉田瀬生、浅井清編、一九九四年六月、明治書院。
- 高橋義孝「内田百閒」『増補改訂新潮日本文学事典』新潮社辞典編集部編、一九八八年一月、新潮社。
- 東雅夫『日本幻想文学事典』二〇一三年十二月、筑摩書房。
- 内田道雄『内田百閒——『冥途』の周辺』一九九七年、翰林書房。
- 真杉秀樹『内田百閒の世界』一九九三年、教育出版センター。
- 酒井英行『内田百閒 〈百鬼〉の愉楽』二〇〇三年、沖積舎。
- 酒井英行『百閒 愛・文学の歩み』二〇〇三年、沖積舎。



- DiNitto, Rachel, Uchida Hyakken: a critique of modernity and militarism in prewar Japan' Harvard University Asia Center' Cambridge (Massachusetts) and London' 2008.
- 大谷哲『内田百閒論 他者と認識の原画』二〇一二年、新典社。
- 吉川望「内田百閒「東京日記」論——日常的怪異空間としての東京」『阪神近代文学研究』二〇〇八年六月。
- 吉川望「内田百閒「白子」論——信仰をめぐる〈内心の反駁〉——」『日本文芸研究』二〇一七年三月。
- 吉川望「習作期における内田百閒の文学意識——「俳諧派文学研究」検討(一)」『日本文芸研究』二〇二二年三月。
- 山田桃子「内田百閒作品と知覚の変容——「大尉殺し」(一九二七)」『層——映像と表現』二〇一一年三月。
- 山田桃子「知覚の変容と映画——内田百閒「旅順入城式」(一九二五)」『Juncture 超域的日本文化研究』二〇一一年三月。
- 山田桃子「戦前期「随筆」の流行と内田百閒——「百鬼園随筆」刊行前後の問題を中心に——」『日本近代文学』二〇一九年十一月。
- 西井弥生子「『旅順入城式』論——内田百閒の虚構意識」『青山語文』二〇〇八年三月。
- 西井弥生子「内田百閒の『漱石物語』——『吾輩は猫である』は要約可能か——」『青山語文』二〇二三年三月。
- 松原大介「内田百閒「山東京伝」における典拠——「京伝」・「小さい人」・「山蟻」をつなぐもの——」『日本文学』二〇二二年十二月。
- 松原大介「内田百閒「短夜」論——典拠と「神秘的な恐怖」を手掛かりに——」『日本近代文学』二〇二二年五月。
- 第一章「『百鬼園随筆』論——方法としての一人称から照射する「随筆」の範囲——」鈴木貞美『「日記」と「随筆」 ジャンル概念の日本史』、二〇一六年、臨川書店。
- 和田利夫「近代の随筆と随筆の「近代」 転換期における随筆流行現象と批評への希求」、日本文学協会編『日本文学講座7 日記・随筆・記録』、一九八九年、大修館書店。
- 酒井英行「『百鬼園随筆』の方法」『内田百閒——「百鬼」の愉楽——』、二〇〇三年、沖積舎。
- 相馬御風「現代随筆家の文章」、前本一男編『日本現代文章講座』鑑賞篇、一九三四年、厚生閣。

室生犀星「わが随筆観」、近藤一郎編『現代文章講座』第六卷、一九四〇年、三笠書房。  
萩原朔太郎「雑誌記事的命題」の内「随筆とは何ぞや」『新潮』、一九二八年十一月。  
久野豊彦「随筆の構成と技術」、前本一男編『日本現代文章講座』技術篇、一九三四年、厚生閣。

日比嘉高『自己表象』の文学史 自分を書く小説の登場』、二〇〇二年、翰林書房。

DiNitto, Rachel, Uchida Hyakken: a critique of modernity and militarism in prewar Japan' Harvard University Asia Center' Cambridge (Massachusetts) and London' 2008.

宇野浩二「甘き世の話——新浦島太郎物語——」『中央公論』、一九二〇年九月。

鈴木登美『語られた自己』大内和子・雲和子訳、二〇〇〇年、岩波書店。

安藤宏「私小説表現の仕組み」、私小説研究会編『私小説ハンドブック』、二〇一四年。

岩佐壮四郎〈雅号〉の終焉』『日本文学』、一九九六年十一月。

## 第二章「昇天」論——信仰と福音をめぐる——

正宗白鳥「昇天」並に「東は東」は可』『読売新聞』、一九三三年一月二十九日。

救世軍療養所「救世軍療養所一斑療養所と附属保養者コロニーの実況」『近代都市の衛生環境 東京編17（病院8）』、二〇〇九年、近現代資料刊行会。

真杉秀樹『内田百間の世界』、一九九三年、教育出版センター。

室田保夫「松田三弥——救世軍医師の足跡」『キリスト教社会福祉思想史の研究 「二国の良心」に生きた人々』、一九九四年、不二出版。

山室軍平「一基督者としての石井十次君（一）」『救世軍士官雑誌』、一九三三年五月。

「詩編」『聖書 新共同訳』、一九七八年、一九八八年、日本聖書協会。

ウオルタ・ラウシエンブツシュ『社会的福音の神学』友井慎訳、日本基督教興文協会、一九二五年。

山室軍平「各小隊は貧民伝道に参加せよ」『救世軍士官雑誌』、一九三二年五月。

山口徹『冥途』にさすらうことば』『日本近代文学』、二〇〇〇年五月、日本近代文学会。

内田道雄「『冥途』から「山高帽子」へ」『内田百間——『冥途』の周辺』、翰林書房、一九九七年。

夏目漱石「断片四A」『漱石全集』第十九卷、一九九五年、岩波書店。

吉川望「白子」論——信仰をめぐる〈内心の反駁〉』『日本文芸研究』、二〇一七年三月、関西学院大学日本文学会。

柳田國男『遠野物語』、一九一〇年。

一柳廣孝「千里眼と科学」『へこっくりさん』と〈千里眼〉・増補版』、二〇二一年、青弓社。  
「ルカによる福音書」『聖書 新共同訳』、一九七八年、一九八八年、日本聖書協会。  
「ヘブライ人への手紙」『聖書 新共同訳』、一九七八年、一九八八年、日本聖書協会。  
「コヘレトの言葉」『聖書 新共同訳』、一九七八年、一九八八年、日本聖書協会。

### 第三章 『居候勿々』論——新聞小説から単行本へ——

酒井英行『居候勿々』——法政騒動の百閒と草平——』『内田百閒——「百鬼」の愉楽——』、二〇〇三年六月、沖積舎。

小山久二郎「私の百閒先生と谷中安規画伯」『居候勿々』、一九八二年二月、六興出版。

平山三郎「解題」『内田百閒全集』、一九七二年二月、講談社。

マリイ・ロールライアン『可能世界・人工知能・物語理論』岩松正洋訳、二〇〇六年一月、水声社。

岩松正洋「道に沿って持ち歩く鏡」のたくらみ、大浦康介編『フィクション論への誘い——文学・歴史・遊び・人間』、二〇一三年一月、世界思想社。

安藤宏『自意識の昭和文学』、一九九四年三月、至文堂。

イルメラ・日地谷キルシュネライト『私小説 自己暴露の儀式』三島憲一・山本尤・鈴木直・相澤啓一訳、一九九二年四月、平凡社。

### 第四章 「東京日記」論——「東京」を書き留める視角を手がかりとして——

小林秀雄「文芸時評」『東京朝日新聞』、一九三八年一月十日。

室生犀星「各人の持ち味」『一日も此君なかるべからず』、一九四〇年、人文書院。

三島由紀夫〈内田百閒〉解説』『日本の文学 34』、一九七〇年、中央公論社。

河野龍也「異界の語り方 三島由紀夫による内田百閒論」『三島由紀夫研究』、二〇二一年四月、鼎書房。

川村二郎「解説」、内田百閒『東京日記他六篇』、一九九二年、岩波書店。

鈴木貞美「解題」『都会の幻想』、一九九〇年、平凡社。

吉川望「内田百閒「東京日記」論——日常的怪異空間としての東京——」『阪神近代文学研究』、二〇〇八年六月、阪神近代文学会。

丸川哲史「帝都の人造怪物」『帝国の亡霊 日本文学の精神地図』、二〇〇四年、青土社。

高橋みなみ「内田百閒「東京日記」論——「その十一」「その十五」における暴力性——」

『論樹』、二〇一一年十二月、論樹の会。

山田桃子「都市と歴史の断片をめぐる——「東京日記」「鼻」『内田百閒の研究』北海道

- 大学、二〇一八年（博士論文）。
- 渡邊浩史〈新しい小説〉としての表現技法——内田百閒「東京日記」論——『國學院雑誌』、二〇〇九年九月。
- 星野英樹「内田百閒「東京日記」の修辞学 サイレントモードの擬音」『淑徳大学人文学部研究論集』、二〇二〇年三月。
- 「東京[都]」『世界大百科事典』`JapanKnowledge` <https://japanknowledge.com>
- 友田昌宏『戊辰雪冤…米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」』、二〇〇九年、講談社。
- 鈴木貞美「魔都としてのモダン都市」『幻想文学』62、二〇〇一年十一月、アトリエOCTA。
- 丸川哲史「帝都の人造怪物」『帝国の亡霊——日本文学の精神地図』、二〇〇四年、青土社。
- 岡崎武志『上京する文学 春樹から漱石まで』、二〇一九年、筑摩書房。
- 保田和彦「内田百閒の東京幻視——『東京日記』を中心に——」『龍谷大学大学院研究紀要』、一九九三年三月。
- 西村亮彦・内藤廣・中井祐「近代東京における花街の成立」『景観・デザイン研究講演集』No.4、二〇〇八年十二月、土木学会
- 初田亨『繁華街の近代 都市・東京の消費空間』、二〇〇四年、東京大学出版会。
- 須田千里「内田百閒「山高帽子」の材源——モーパッサン「オルラ」・芥川龍之介「歯車」など——」『京都大学総合人間学部紀要』、二〇〇三年。
- 川上弘美「東京日記」『ウェブ平凡』、<https://webheibon.jp/tokyonikki>
- 永井愛『僕の東京日記』、一九九七年、而立書房。
- 第五章「内田百閒の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」
- 荒山正彦「内地」と「外地」をめぐる海上ツーリズム」『関西学院史学』、二〇一〇年三月、関西学院大学史学会。
- 台湾総督府交通局鉄道部『昭和九年度版 台湾鉄道旅行案内』、水谷真紀編『台湾のモダンズム』、二〇一二年、ゆまに書房。
- 高西鳳『植民地の鉄道』、二〇〇六年、日本経済評論社。
- 小牟田哲彦『大日本帝国の海外鉄道』、二〇一五年、東京堂出版。
- 横路啓子「台北の日本人社会——近代都市台北の成り立ちと台湾鉄道ホテル」和田博文・黄翠娥編『〈異郷〉としての大連・上海・台北』、二〇一五年三月、勉誠出版。
- 住田イサミ『台湾先住民族の刺繍と織物——階層制からみたパイワン群族』、二〇〇二年一月、大修館書店。

松澤員子「先住民の系統と居住地域」、国立民族学博物館編『台湾先住民の文化―伝統と再生―』、一九九四年三月、国立民族学博物館。

大東和重『台湾の歴史と文化 六つの時代が織りなす「美麗島」』、二〇二〇年二月、中央公論新社。

野上弥生子「台湾のモダニズム」水谷真紀編『台湾のモダニズム』、二〇一二年、ゆまに書房。

「場外の余興」『風俗画報』、一九〇三年六月十日、三七ページ。

松田京子「人間の「展示」と植民地表象——一九一二年拓殖博覧会を中心に——」『帝国の思考 日本「帝国」と台湾原住民』、二〇一四年三月、有志舎。

「インテリの囑託業」『読売新聞』、一九三九年七月十三日夕刊。

「海ゆく座談会」『東京朝日新聞』、一九四一年七月十八〜二十四日朝刊。

第六章「柳検校の小閑」論——背景としての関東大震災——」

舟橋聖一「既成作家の寥々たる作品 文芸時評(4)」『読売新聞』、一九四〇年五月四日付朝刊。

野田康文「内田百閒・盲目の〈闇〉と視覚性、あるいは記憶の表象——『春琴抄』から『柳検校の小閑』へ——」『日本近代文学』、二〇一五年十一月、日本近代文学会。

福田博則「春琴抄」の周辺——内田百閒「柳検校の小閑」への影響を考える」『花園大学日本文学論究』、二〇一三年十二月、花園大学日本文学会。

酒井英行『百閒 愛の歩み・文学の歩み』、一九九五年、有精堂。

「女子卅二名が愈よ明日から帝大に」『読売新聞』、一九二〇年九月十二日朝刊。

保野孝弘・宮田洋「視覚障害児・者の睡眠行動に関する研究」『川崎医療福祉学会誌』、一九九六年十二月、川崎医療福祉学会。

伊藤亜紗「見えない人は夢を「見る」か」『考えるメディア』、二〇一五年十一月十三日、<https://media.style.co.jp/2015/11/4032/> 二〇一九年三月十八日参照。

第七章「新方丈記」論——『東京焼尽』との比較を手がかりとして——」

平山三郎「解題」『内田百閒全集』第五卷、一九七二年六月、講談社。

岸川俊太郎「永井荷風と占領期〈検閲〉——『罹災日録』を視座として——」『日本近代文学』、二〇〇九年五月、日本近代文学会。

寺杣雅人「永井荷風『断腸亭日乗』管見―昭和二十年夏、岡山の八十日―」『尾道文学談話会会報』、二〇一八年二月・二〇一九年二月・二〇二〇年二月、尾道大学芸術文化学部日本

文学科。

平山三郎「百鬼園戦後日記 おぼえ書」「百鬼園戦後日記」、上巻、一九八二年三月、小沢書店。

「災厄の記憶主題に 没後50年内田百閒の多面性」『静岡新聞』、二〇二一年八月十七日。  
民間情報教育局編『民間情報・教育部門における占領の使命と成果』、連合軍総司令部『日本占領の使命と成果』共同通信社訳、一九五〇年一月、板垣書店、二七三〜二七四ページ。  
山本武利「CCD、CIEの確執——ピクトリアルメディア検閲をめぐる——」『占領期雑誌 大系 文学編IV 第四巻』、二〇一〇年五月、岩波書店。

ゴードン W. プランゲ文庫ブログ「検閲：民間検閲局文書」二〇一三年七月二十一日、  
<https://prangecollection.jp.wordpress.com/2013/07/21/imposing-censorship-sample-documents-ccd/>

第八章「『贗作吾輩は猫である』論——会話文の発展と百閒の戦争——」

伊藤整「贗作吾輩は猫である」『東京新聞』一九五〇年五月十五日。

伊藤整「作品解説 贗作吾輩は猫である」『贗作吾輩は猫である』一九五一年、河出書房。

清水良典「遊民」のデイグニティー」『贗作吾輩は猫である』二〇一六年、筑摩書房。

川村二郎「贗造の物語」『内田百閒論』一九八三年、福武書店。

大谷哲「内田百閒「七体百鬼園」——言語の不透明性と透明な文章——」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』二〇一二年三月、二松学舎大学東アジア学術総合研究所。  
獅子文六『娘と私』一九五五・五六年、主婦の友社。

茂木謙之介「あッちゃん」の戦争責任——内田百閒「秩父宮殿下に上るの書」における皇族表象の批評性——」『文芸研究——文芸・言語・思想——』二〇一九年三月、日本文芸研究会。

高橋英夫「胸苦しきの文学」『夢幻系列 漱石・龍之介・百閒』一九八九年、小沢書店。

第九章「『贗作吾輩は猫である』論——上演される言葉への志向——」

平山三郎「解題」『内田百閒全集』、一九七二年、講談社。

阿部次郎「註」、ゲート「ファウスト 第一部」阿部次郎訳、一九四七年、国立書院。

内山保「ゾルフ大使」『一分停車 増補版』、一九九六年、私家版。

竹田出雲、三好松洛、並木千柳『菅原伝授手習鑑』、松竹株式会社、早稲田大学演劇博物館蔵、資料番号ロー5-3997、作成年不詳。

塙保己一「吉日考秘伝」『続群書類従』、第三十一輯下雑部、JapanKnowledge、

<https://japanknowledge.com>

鈴木由次郎『全釈漢文大系第九卷 易経』上、一九七四年、集英社。  
マイイア・フェルスタア『アルト・ハイデルベルグ』、三浦吉兵衛訳、一九三七年、郁文館書店。

米川正夫『チエーホフ戯曲全集』上巻、一九二六年、岩波書店。

松浦静山『甲子夜話1』巻之九、中村幸彦、中野三敏校訂、一九七七年、平凡社。

永平和雄「眠駱駝物語 ねむるがらくだものがたり」『新版歌舞伎事典』、二〇一二年、平凡社。

中井新六編『月琴楽譜』、一八七七年、群仙堂。

田辺尚雄「九連環とカンカン踊り」『明治音楽物語』、一九六五年、青蛙房。

為藤五郎「本誌投書家の文章」『文章世界』、一九〇七年三月。

初出一覧

第一章 「『百鬼園隨筆』論——方法としての一人称から照射する「隨筆」の範囲——」

『国文学研究』二〇一九年六月。

第二章 「「昇天」論——信仰と福音をめぐる——」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇二二年三月。

第三章 「『居候勿々』論——新聞小説から単行本へ——」

書き下ろし

第四章 「『東京日記』論——「東京」を書き留める視角を手がかりとして——」

書き下ろし

第五章 「内田百閒の日本郵船時代——台湾旅行を中心として——」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇二一年三月。

第六章 「『柳検校の小閑』論——背景としての関東大震災——」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇二〇年三月。

第七章 「『新方丈記』論——『東京焼尽』との比較を手がかりとして——」

書き下ろし

第八章 「『贋作吾輩は猫である』論——会話文の発展と百閒の戦争——」

『文芸と批評』二〇二二年十一月。

第九章 「『贋作吾輩は猫である』論——上演される言葉への志向——」

書き下ろし